

【刑法施行法】 【刑務所】 【契約】

刑法施行法第六條の適用に就て	柚木 周平〔新聞〕四二一年 卷一 五二五號
刑法施行法第五條の解釋に就て	小崎 壽〔新報〕四三一九 六
舊刑法第一〇二條に該る刑法施行前の數罪の比照に就て	柚木 周平〔新聞〕四四二 一 五三九
刑法施行法第四條の反對の場合に於ける法の適用	素水 學人〔新聞〕四四二 一 五四三
刑法施行法第五條の解決に就て	小島孫三郎〔新聞〕四四二 一 五九五
刑法施行法適用に就て	錦江 學人〔新聞〕四四二 一 五三六
山内檢事に答ふ	遠藤 源六〔新聞〕四四二 一 五二一
【刑務所】 監獄を見よ	參照ニ委任。請負。審託。組合。雇傭。消費貸借。贈與。質貸借。賣買。和解。
【契約】	土方 寧〔法協〕四二七 二 三三四
契約に合意を要せざるの新説を駁す	磯谷幸次郎〔法協〕四三三 八 支
合意新論	岡野敬次郎〔法協〕四三三 八 支
原因と約因	小出柳太郎〔法協〕四四九 三
約因は契約の要素に非ず	

契約思想の發達	増島六一郎〔新報〕四五二 一八
實定契約と射伴契約との區別	喜多村桂一郎〔法協〕四二八 一三
片務契約と双務契約	戸水 寛人〔法政〕四三二 二 一〇
娼妓の自由廢業	長島鷲太郎〔辯協〕四三三 四 九六
娼妓契約の效力を論じて娼妓保護の方法に及ぶ	江木 東〔新報〕四三三 一〇 二二四
娼妓自由廢業の法理如何	長島鷲太郎〔法政〕四三三 四 九六
娼妓契約の效力	大場 茂馬〔新報〕四三三 一〇 二二六
娼妓の自由廢業問題	櫻井熊太郎〔新聞〕四三三 一 一八
契約の自由	土方 寧〔新報〕四三三 二 二二八
社會主義と契約自由の原則	小野 義一〔法協〕四三三 二 三三四
射伴契約の範圍	中山成太郎〔新聞〕四三三 一 一三八
契約の原因	富井 政章〔法協〕四三七 三 一
契約の原因	土方 寧〔法協〕四三三 八
ダンプ博士の責任免除の契約の効力論	高岡 應晋〔法協〕四三三 九
妻の契約は有效なりや否や	永沼 直方〔新報〕四三三 一 二五五
妻契約	平井彦三郎〔新聞〕四三三 一 二九二
契約の結合合成契約及び混合契約に關するエンネツ	件 房次郎〔京法〕四四一 三 三
チエール氏の新見解	中島 玉吉〔京法〕四四一 三 五
豫約論	

割賦拂契約を論ず	杉山直治郎〔志林〕四四二 三 八九
豫約論	吾孫子 勝〔志林〕四四二 三 八九
無因契約論	神戶寅次郎〔志林〕四四二 三 八九
契約上の罰及違約金に付き	吾孫子 勝〔國經〕大九二 二 六
混成契約種類及び解釋	三浦 信三〔法協〕大二三 四 六
送電契約論	坪根 久松〔評論〕大二三 一 四
混合契約論の研究	鎌道 文藝〔京法〕大二三 一 〇
要物契約の否定を主張する理由	石坂晋四郎〔新聞〕大五 一 〇〇七八
談合論	花井 卓藏〔辯協〕大六二 二 八二
契約の原因を論ず	梅原錦三郎〔法政〕大七一 五 九
契約及び其履行に及ぼせる戦争の効果	謝花 寛濟〔新聞〕大八 一 一五二五
出版契約論	末川 博〔法叢〕大〇 六 二六
混合契約の解説	石田文次郎〔國經〕大〇三 三 四
報償契約論	山家 卓〔新聞〕大〇 一 一八五三
報償契約の監理に就て	鬼武 義彦〔新聞〕大〇 一 一八六三
契約の自由	廣瀬 嘉雄〔法叢〕大二 一〇 六
法律と約束	松倉慶三郎〔辯協〕大二三 二 七
附合契約の觀念に就て	杉山直治郎〔法協〕大二三 四 二二
契約強制論	中村 武〔新報〕大二三 三 九
民法の基本問題としての契約の解釋	平野義太郎〔志林〕大二三 二 三

【契約】

契約の成立	富井 政章〔法協〕四二七 二 七九
書信電信に依る契約成立の時期	富井 政章〔法協〕四二七 二 七九
新民法の規定上隔地者間に於ける契約申込の效力及契約の成立を論じ第五二一條及び第五二六條の規定に及ぶ	岡本芳二郎〔新報〕四二九 六 六一
隔地者間に於ける契約の成立を論ず	小澤正太郎〔新報〕四二九 六 六一
民法は隔地者間の契約の成立に關して受信主義を採るや將た發信主義を採るや	仁井田益太郎〔明法〕四三四 一 一九
承諾期間を定めて隔地者に爲したる申込に對する承諾は其通知か申込者に到着する前に於ては之を取消すことを得るや否や	泉二 新熊〔法協〕四三四 一 九
廣告に就て	仁井田益太郎〔新報〕四三五 二 二
入札購買の性質	土方 寧〔新報〕四三五 二 二
或行爲に關する申込の承諾を履行し得る期間	東野 俊一〔法協〕四三三 二 六
契約の成立	土方 寧〔法協〕四三七 三 八

對話者間の契約を論ず
電話の法律關係
承諾の期間を定めずして隔
地者間に爲したる申込の
失効時期
身分上の評價に基く締約拒
絶を論ず
承諾の期間を定めて爲した
る契約の申込と期間内に
爲したるも期間後に達し
たる承諾
合致論
契約成立の經過中に於ける
當事者の死亡又は能力喪
失
承諾論
英法に於ける契約の成立
承諾の効力發生時期
對話者に對する申込の効力
交叉せる申込の効力
遅延したる承諾に関する民
法第五二三條の規定を評
論す
所謂交叉申込に就て

岩味 隆大〔新聞〕	四三二	一	二四八
高木 藏吉〔新聞〕	四四〇	一	二七九
立石 謙輔〔明學〕	四四一	一	二二
原 達〔法協〕	四四二	一	二六
西川 一男〔新報〕	四四三	二〇	七
神戸寅次郎〔志林〕	大九二	一〇	二二
末弘嚴太郎〔評論〕	大九三	三	二〇
神戸寅次郎〔志林〕	大九四	一	二二
宮本 英雄〔京法〕	大九五	二	二一
鳩山 秀夫〔新報〕	大九六	一	二二
鳩山 秀雄〔志林〕	大九七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大九八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大九九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一〇九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一一九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一二九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一三九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一四九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一五九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一六九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一七九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一八九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九〇	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九一	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九二	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九三	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九四	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九五	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九六	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九七	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九八	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大一九九	一	二二
磯谷幸次郎〔新報〕	大二〇〇	一	二二

懸賞廣告の性質	永並 豊吉〔商經〕	大二	一
承諾期間の定なき隔地者間 に於ける民事契約の申込 の承諾適格の存続期間に 就て	柳川 昌勝〔法曹〕	大二三	二
ミツタイス「要式口頭契約 の由來に就て」	田中 周友〔法叢〕	大四一	二五
民法第五二四條と第五二七 條との關係	岡村 玄治〔新報〕	大四五	四
契約の効力	岡野敬次郎〔法協〕	大四九	八
危険の負擔を論ず	江木 衷〔新報〕	大三八	五
三池礦山震災損害要債事件 法理的觀察	嘉山 幹一〔法政〕	大三三	二五
第三者に給付を爲すの契約 を論ず	岡松參太郎〔内外〕	大三五	一
信託行為に關する學說を批 評す	土方 寧〔法協〕	大三五	二〇
危険負擔問題	富井 政章〔法記〕	大三九	一六
雙務契約に於ける同時履行 の抗辯權と留置權	横田 秀雄〔志林〕	大四〇	九
雙務契約の性質	横田 秀雄〔志林〕	大四〇	九
第三者の利益の爲にする契 約	植月 愛明〔京法〕	大四〇	二
不動産の訴訟に關する三問			二六

題

第三者の爲めにする賃貸借 契約に就て	池田寅二郎〔法協〕	四四〇	二五	六
賣主か目的物の引渡前更に 第三者と賣買契約を爲し たる場合に於ける危険負 擔	松澤常四郎〔新聞〕	四四一	一	五三
解除條件附雙務契約の目的 か條件成否未定の間に滅 失したる場合の危険負擔 甲は乙に對して或事をなす べく乙は第三者に對して 或る事を爲すべき雙務契 約を締結したる場合に於 ける第三者と甲との關係 留置權、同時履行の抗辯權 及相殺權の異同	梅 謙次郎〔志林〕	四四二	一〇	三
所謂危険負擔に關する大阪 控訴院の判決を評す	西川 一男〔新報〕	四四二	一九	七
東鐵買収契約の効力を論ず	西川 一男〔新報〕	四四二	一九	八
東鐵買収契約の効力に關す る一疑點	鳩山 一郎〔辯協〕	四四三	一三	一三
分家の契約に關する大審院 の判例	杉山直次郎〔國經〕	四四四	二	二
	杉山直次郎〔新聞〕	四四四	一	七三
	横田 秀雄〔志林〕	四四四	一三	二

故意又は過失の責任を免か
るの特約

申込者の死亡若くは能力喪 失を知つて承諾したる場 合に於ける契約の効力	西川 一男〔新報〕	大九三	二	
當事者の一方か數人ある場 合と同時履行の抗辯	横田 秀雄〔新報〕	大九三	二	
契約不履行の抗辯を論ず	石坂音四郎〔新報〕	大九四	二五	七八
第三者の詐欺と其第三者の 益の爲めにする契約の効 力	乾 政彦〔志林〕	大九四	二七	三
解除條件付雙務契約に於け る危険負擔	石坂音四郎〔志林〕	大九五	一八	一
雙務契約に於ける給付不能 に基く損害賠償	石坂音四郎〔新報〕	大九五	二六	三七
雙務契約と履行不能	末弘嚴太郎〔法協〕	大九五	三四	三六
未成年者の契約及不法行為 に關する英國法	宮本 英雄〔京法〕	大九五	二	五
數個の雙務契約の存する場 合に於ける危険負擔を論 ず	鳩山 一郎〔辯協〕	大九六	二	一
雙務契約の當事者は如何な る場合に履行遲滞の責に 任するや	有賀 成可〔辯協〕	大九六	二	四

【契約】

同時履行の抗辯権と所謂履行提供の繼續
同時履行の抗辯権の性質を論し大審院判例に及ぶ
存続期間の定めなき不動産權設定契約の効力に論ず
同時履行抗辯権の適用に關する諸問題
同時履行の抗辯権に就て
契約法上競買及汽車時間表の性質を論ず
同時履行の抗辯
雙務契約に於ける危険負擔の原則に就て
同時履行論
同時履行抗辯と履行遅滞との關係
英法に於ける妻の契約上の能力
雙務契約不履行に因る損害賠償
繼續的債權的契約の特質と貸借及び雇傭
英法に於ける未成年者の契約

眞野 毅	〔法政〕	大六	一四	六
磯谷幸次郎	〔法記〕	大六	二七	七
杉本 藤一	〔新聞〕	大六	一三九	七
入江眞太郎	〔新報〕	大七	二六	一〇
横見 琪二	〔新聞〕	大七	一四七	一〇
磯谷幸次郎	〔法記〕	大八	二九	八
村上 恭一	〔新報〕	大九	三〇	二一
平野義太郎	〔志林〕	大〇	三三	一八
神戸寅次郎	〔法協〕	大〇	三九	一九
神戸寅次郎	〔法研〕	大二	一一	二二
峰岸 治三	〔法研〕	大二	一一	二二
大丸 巖	〔商叢〕	大二	一一	二二
平野義太郎	〔志林〕	大二	二五	一四

【契約】

狀回復の義務と不當利得債權讓渡契約の解除
契約解除の効力
不履行による契約解除後の損害賠償請求權に就て
取消權又は解除權の讓渡
契約申込の性質
契約の解除の第三者に對する効力
契約と差金授受
契約當事者は損害賠償請求を爲したる後に於ても尙契約を解除することを得るや
契約解除の物權的效力と物權契約の解除
契約解除と損害賠償
民法第五四五條第三項に規定せられたる損害賠償請求權の本質に關する石坂博士の所説に就て
解除權は時効によりて消滅するか
履行の時所一定せる雙務契約

西川 一男	〔新報〕	大元	二三	二〇
石坂音四郎	〔評論〕	大元	一一	一
鈴木英太郎	〔新聞〕	四四五	一一	七
西村 孝三	〔新聞〕	四五	一一	七
西川 一男	〔新報〕	大二	二三	一
石坂音四郎	〔京法〕	大三	九	六七
横田 秀雄	〔評論〕	大三	二	二三
川上定次郎	〔新聞〕	大四	一一	九三
眞野 毅	〔評論〕	大四	四	七
石坂音四郎	〔新報〕	大四	二五	一〇
石坂音四郎	〔新聞〕	大五	一一	一七
高木 藏吉	〔新聞〕	大五	一一	一七
岩井 尊文	〔新聞〕	大五	一一	一九

約と解除の方法
契約解除の當事者を論ず
契約解除による原狀回復義務の性質に關する矛盾したる大審院判例
第三者の爲めにする契約と相手方の債務不履行に因る解除
契約の解除と契約なかりし場合に得へかりし利益の償還
解除條件の成就に因る權利取得の性質
契約解除論
續契約解除論
契約解除と債務不履行に因る損害賠償豫定額請求の適否
民法第五四一條に就て
契約解除權留保論
委任及請負契約に於ける解除の特別規定と民法第五四一條との關係

冠木 精喜	〔法政〕	大三	三	六
堀部 靖雄	〔商濟〕	大五	六	一
古野 周藏	〔新聞〕	大五	一一	二二
池田寅二郎	〔法協〕	大六	二六	一〇
土方 寧	〔法協〕	大六	二二	八
竹田 省	〔辯協〕	大六	二二	二七
横田 秀雄	〔法記〕	大六	二八	九
飯島 喬平	〔明學〕	大六	二九	一
岡松參太郎	〔新報〕	大六	二九	三
西川 一男	〔新報〕	大六	二九	四
池田寅二郎	〔法協〕	大六	二九	二
齋藤 巖	〔新聞〕	大六	二九	七
喜頭 兵一	〔志林〕	大六	二九	七

約と解除の方法
契約解除の當事者を論ず
契約解除による原狀回復義務の性質に關する矛盾したる大審院判例
第三者の爲めにする契約と相手方の債務不履行に因る解除
契約の解除と契約なかりし場合に得へかりし利益の償還
解除條件の成就に因る權利取得の性質
契約解除論
續契約解除論
契約解除と債務不履行に因る損害賠償豫定額請求の適否
民法第五四一條に就て
契約解除權留保論
委任及請負契約に於ける解除の特別規定と民法第五四一條との關係

長島 毅	〔新報〕	大六	二七	三
近藤 民雄	〔辯協〕	大七	三三	四五
横見 琪二	〔新聞〕	大七	一一	三五
長島 毅	〔新報〕	大八	二九	五
長島 毅	〔新報〕	大八	二九	九
桑名富三郎	〔新聞〕	大八	一一	五〇
神戸寅次郎	〔三學〕	大九	二四	一六
神戸寅次郎	〔三學〕	大九	二四	一三
白旗 文一	〔新聞〕	大九	一一	五〇
石田文次郎	〔法叢〕	大〇	一五	六
小野村胤敏	〔法政〕	大〇	一八	二二
鬼澤藏之助	〔新報〕	大二	三三	一

【契約】 【計理學】 【ゲエテ】 【ケキユレ】 【ゲゼル】 【結婚】 【決算】

履行を爲さざる旨の意思を表明したる場合と契約の解除

- 契約の解除に就て 藥師寺志光〔新報〕大二年三卷九號
- 契約解除の新判例に就て 小池 隆一〔法研〕大二年三卷二二號
- 契約解除に關する諸問題 山崎 有信〔新聞〕大二年三卷二二號
- 合意上の契約解除 姉齒 松平〔臺法〕大二年三卷二二號
- 契約の一部取消 姉齒 松平〔臺法〕大二年三卷二二號
- 契約解除の効果たる損害賠償の性質を論ず 鳩山 秀夫〔法協〕大二年三卷二二號
- 民法第五四五條第一項但書を論ず 永井 壽吉〔法曹〕大二年三卷二二號
- 不履行に因る契約解除と合意に因る契約解除とは互に兩立すへからざる請求原因なるか 永井 壽吉〔新聞〕大二年三卷二二號
- 契約解除と告知 永井 壽吉〔法治〕大二年三卷二二號
- 契約解除の本質を論ず 永井 壽吉〔法曹〕大二年三卷二二號

【計理學】

會計學を見よ

【ゲエテ】

(Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832)

ゲーテの戯曲より國家を論ず

- 【ケキユレ】 (Friedrich August Kekule von Steudnitz, 1829-1896) 長井 長義〔財經〕大七年五六一號
- 【ゲゼル】 (Silvio Gesell, 1863-) 乾治〔三學〕大九年九號

【結婚】

婚姻を見よ

【決算】

參照會計。豫算。

- 會計検査院と帝國議會との關係 渡邊 昇〔國家〕大四年三九號
- 總決算に對する帝國議會審査權の範圍 岩波 一郎〔新報〕大七年四四號
- 帝國議會の決算審査權 洗山樓山人〔新報〕大八年八四號
- 豫算と決算 花井 卓藏〔新聞〕大三年一三三號

憲法と決算
決算に就て

【關席判決】

關席判決に對する故障申立を許し第二回口頭辯論に至り關席したる者に對し對審判決を與ふべきか將た關席判決を爲すべき乎

- 關席判決に就て 民事訴訟法第二五六條に就て 關席手續の沿革に付て 從參考人のみ出頭したる場合と關席判決 從參加人の訴訟行為と關席判決 被告關席の場合に於ける條件に付假執行の宣告 共同訴訟に於ける故障申立の印紙に就て 公示送達を以て關席判決を送達したる場合の故障期
- 花井 卓藏〔新報〕大四年一〇號
- 花井 卓藏〔辯協〕大四年一三三號
- 錦山 生〔新報〕大六年三三三號
- 高木金之助〔新報〕大三年九七號
- 中島 太六〔法政〕大三年五〇號
- 仁井田益太郎〔法政〕大三年一〇三號
- 池田繁太郎〔新聞〕大三年三九一號
- 高橋巳千治〔新聞〕大三年三九五號
- 平井彦三郎〔新聞〕大四年一四八號
- 猪股 洪清〔新聞〕大四年一五五〇號

問
民訴第二六三條の適用
訴訟手續の受継ありたりとの關席判決は中間判決なりや

- 外國に於て又は公の告示を以て爲す關席判決の送達と故障期間 菅原 春二〔新報〕大二年一〇號
- 關席判決の申立と判決を受くべき事項の申立 前田直之助〔新報〕大三年一四一號
- 關席判決手續に於ける管轄の調査 菅原 春二〔新報〕大四年一〇六號
- 民訴法第二六一條に依り關席判決を維持する場合と訴訟費用 前田直之助〔新報〕大五年一〇一號
- 原告の訴却下の關席判決は果して本案の判決乎 岡村 玄治〔志林〕大二年一〇八號

【ケツテレル】

ケツテレル僧正と其の「労働問題及び基督教」

(Wilhelm Emmanuel Freiherrn von Ketteler, 1811-1877) 高橋誠一郎〔三學〕大七年一一一號

【決算】 【關席判決】 【ケツテレル】

【決闘罪】

決闘罪論
決闘罪の規定に就て

花井 卓藏〔新報〕四〇 二七
花井 卓藏〔刑評〕四四 二二

【ケトレー】

(Lombert Adolphe Jacques Queteley, 1796-1874)

ケトレー氏小傳
アドルフ・ケトレーと犯罪統計論

〔統集〕四三〇 一 七

ケトレー氏の統計學に於ける位置
ケトレー氏の生國白耳義に就て

高野岩三郎〔法協〕四三八 三
新渡戸稻造〔統集〕四四三 一 三五

アドルフ・ケトレーと唯物論的見解

宮島 綱男〔統集〕六六一 三九

【ケネー】

(Francois Quesnay, 1696-1774)

フランソア・ケネーの經濟論

高橋誠一郎〔三學〕六六一

Tableau Economique (經濟表)の解説

三邊 金藏〔三學〕六七二 二〇

ケネーの經濟表と唯物史觀との交渉

榊田 民藏〔原雜〕六三 二

ケネー「經濟表の範式」に就て

三邊 金藏〔三學〕六五 二〇

ケネーとアダム・スミス

瀧本 誠一〔三學〕六五 二〇

【ケリー】

(Henry Charles Carey, 1793-1879)

米國經濟學史上のケリーとその著述

武藤 長藏〔長覺〕六三 四

【ケルゼン】

(Hans Kelsen, 1881-)

ケルゼン「國家機關の人格」

田村 徳治〔法叢〕六九 四 三四

ケルゼン「機關態と代理態」

田村 徳治〔法叢〕六二〇 五 一

ケルゼンの法律社會學的方法論

木村 龜二〔志林〕六二二 四 一一

ケルゼン「神と國家論」の梗概

飯塚 敏夫〔法政〕六三二 二 二三

ケルゼン「規範的體系」としての國家

黒田 覺〔法叢〕六三二 一 一四

ヴェンツェルの國家概念に對するケルゼンの批評を讀む

渡邊宗太郎〔法叢〕六三二 一 六

ケルゼンの權力分立論

堀 眞琴〔法研〕六二四 四 卷 三 號

ケルゼンのマルクス主義批評

平野 常治〔國經〕六二四 三 六

ケルゼンに於ける Staatslehre の地位

堀 眞琴〔國家〕六二四 三 九

Gott und Staat

Kelsen 〔早法〕六二四 四 一

【ゲルマン法】

ゲルマン法に於ける夫婦財産關係

近藤 英吉〔法叢〕六二五 一 五 六

【ケルレンベルガー】

(Eduard Kellenberger)

ケルレンベルガー氏の分配論

瀧 正雄〔京法〕六二八 八

【減價】

参照 會計學。原價計算。

日本電氣事業協會社固定資産減價償却の實狀

渡邊 鐵藏〔國家〕六三三 一 一〇

年金法に依る減價償却を論ず

三邊 金藏〔三學〕六五二 〇 六

減價償却金に關する會計問

三邊 金藏〔三學〕六五二 〇 六

題 減價償却及資産評價と所得課税

東 爽五郎〔會計〕六六一 一 一 二

減價 (Depreciation) に就て

北川 浩〔國經〕六六三 二

減價の記帳法に就いて

村崎 浪生〔會計〕六六一 一 五

年金法に依る減價償却に就て

中村 茂男〔會計〕六六一 一 六

池田實氏に答ふ

三邊 金藏〔三學〕六六一 一 七

減價と Obsolescence

村崎 浪生〔會計〕六六一 二

經濟學より見たる減價償却法

池田 實〔商經〕六六一 一 五 六

評價差益及減價償却金は所得なりや

小山 強次〔會計〕六七三 一

評價差益及び減價償却に就きて

五十川三竿〔會計〕六七三 二

減價償却法殊に年金法に就て

太田 哲三〔會計〕六七四 三

減價償却と評價に就きて

波部 義雄〔會計〕六八六 一

資本平資本財乎 (減價償却の問題)

太田 哲三〔會計〕六九七 四

Depreciation と Cool Value に就て

小玉正三郎〔會計〕六二〇 二 一

貸借對照表の眞實性より見たる間接法の減價償却

大崎 範一〔會計〕六二〇 八 五

【減償】 【限界効用】 【原價計算】

減償計算法	原口 亮平〔國經〕大〇三	三〇
減償問題考察	吉田 良三〔商研〕大〇一	一
物的減償線の検討	中村 茂男〔會計〕大一九	九
本邦稅務上の機械器具減償	山本 貞作〔會計〕大二〇	〇
償却の計算堪久年數表	山本 恭次郎〔商濟〕大二二	二
減償計算に就て	飯田 靜次郎〔商濟〕大二四	四
減償償却問題	岡田 誠一〔會計〕大二六	六
減償償却準備金に就いて	田中 保平〔商論〕大五一	一
原價計算に於ける減償償却	成實 清松〔商業〕大五三	三
に就て		
減償勘定に於ける問題及び		
或種の積分方程式に就いて		
【限界効用】	參照〓効用。	
全部効用に關する誤謬(附)	寺尾 隆一〔國家〕明四二五	二
限界効用論擴張論の一節	寺尾 隆一〔京法〕明四五七	二五
慾望の自變的本性を論じて	戸田 海市〔京法〕明四五七	二五
限界効用説を否認す	河上 肇〔國經〕大九二	二
經濟的價値と限界効用説	河上 肇〔國經〕大九二	二
限界効用説の根本的誤謬	河上 肇〔國經〕大九二	二
限界効用平均の法則其の説	河上 肇〔國經〕大九二	二
明其の適用及び其の修正		

ゴツセンの限界享樂均等法	山口正太郎〔國經〕大五二〇	二〇
則に就て	山崎覺太郎〔國家〕大五三〇	三〇
コンチチーとコリリチー	左右田善一郎〔國經〕大八二七	二七
貨幣論上の限界効用學説	坂西 由藏〔國經〕大八二	二
貨幣價値と限界利用説	三邊 金藏〔三學〕大九二四	二四
限界効用説難考	福定與四郎〔國家〕大〇三五	三五
貨幣の價値成立論上の限界	土方 成美〔經論〕大二一	二一
效用説	土方 成美〔經論〕大二一	二一
累進稅の根據と限界効用説	大森義太郎〔經論〕大二一	二一
限界効用説の經濟學上に於	土方 成美〔經論〕大二一	二一
ける意義	古屋 美貞〔同論〕大二三	二三
限界効力學説に對するシユ	岡崎 良藏〔商經〕大二三	二三
トルツマンの批評	鬼頭仁三郎〔商研〕大四五	四五
貨幣論上の限界効用説に就		
て高垣教授に答ふ		
限界効用説に對する疑義		
限界効用説及びマルクスの		
分配論に對する一批評		
限界効用學説と精神物理學		
的基礎法則		
【原價計算】	參照〓會計學。減償。	

原價計算法	田崎 慎治〔國經〕明四〇	二
製造品の物價と原價との關	田崎 慎治〔國經〕明四一	四
係に就て	東 夷五郎〔國經〕大四一八	一八
同業者の自衛策としての統	田中 實〔國經〕大六三三	三三
一的原價計算法の適用	松村 光三〔會計〕大六一	一
資本利子は企業上原價なり		
や		
銀行業の原價計算	岡田 市治〔會計〕大六一	一
原價計算に於ける不定費と	遠藤 素三〔會計〕大六二	二
見積割當定費との關係を	遠藤 素三〔會計〕大六二	二
述べて計算組織の一端に	吉田 良三〔會計〕大六二	二
及ぶ	吉田 良三〔會計〕大七三	三
原價計算と連系作業の作業	上野 道輔〔國家〕大八三	三
力測定法		
原價計算の様式と作業工程	遠藤 素三〔會計〕大六二	二
の調査方法	吉田 良三〔會計〕大六二	二
原價計算制度設定の要件	吉田 良三〔會計〕大七三	三
原價計算制度	上野 道輔〔國家〕大八三	三
原價計算と價格決定との關		
係		
鑛業會社の原價償却特に鑛	三木 良贊〔會計〕大八五	五
區の原價償却に就いて	吉田 良三〔國經〕大九二	二
企業と原價計算	森岡 操〔會計〕大〇九	九
原價の構成と間接費の配賦		

【原價計算】

銀行原價計算の研究	木村秀太郎〔銀研〕大二〇	一
活動寫真映畫製造原價會計	平井泰太郎〔國經〕大二〇	三
原價の構成と間接費の配賦	森岡 操〔會計〕大二〇	八
企業資本利子は原價として	田中 廣〔計理〕大二〇	一
計算せらるべきものなり	田中 廣〔計理〕大二〇	一
や		
近世工企業原價計算論	三木 良三〔會計〕大二二	二
石炭産出原價異動に就ての	岡本 眞一〔商事〕大二二	二
研究	中村 茂男〔經商〕大二二	二
原價計算の例解	石黒 武松〔會計〕大二二	二
原價償却の一問題	岡野 正平〔商經〕大二二	二
經營上より觀たる原價計算	廣崎 三郎〔會計〕大二二	二
會計學より見たる利息と原		
價との關係に就て		
造船業の原價計算	藤谷 園藏〔銀研〕大二三	三
銀行會計に於ける支出勘定	東 夷五郎〔會計〕大二三	三
と原價計算	吉田 良三〔商研〕大二二	二
製品原價計算法私案	藤城 敬二〔銀研〕大二三	三
製品原價計算上間接費の配	太田 哲三〔金融〕大二三	三
賦法を論ず		
銀行原價計算と經費の解剖		
銀行に於ける原價計算		
「銀行に於ける原價計算」		

【原價計算】 【權限爭議】 【健康保險】

に就て太田哲三氏の教を乞ふ

原價計算の處女地
販賣業に於ける原價計算法
私案

關聯生産物の原價計算を論ず

製造原價計算について
原價計算に於ける生産中心
點

銀行業に於ける原價計算
原價計算制度の得失

第四回萬國原價會議に於ける工場機械及裝備減價の討論

銀行預金の原價計算法に就て

原價計算と賣價政策
銀行經營上原價計算の應用に就て

獨逸銀行業に於ける原價計算問題

原價計算に於ける減價銷却に就て

木村秀太郎〔金融〕大二三 一 卷 甲 三 號

中村 茂馬〔會計〕大二三 二 卷 甲 二 號

東 庚五郎〔會計〕大二三 四 卷 一

菅谷 重市〔會計〕大二三 四 卷 二

渡邊 鐵藏〔經濟〕大二三 二 卷 三

菅谷 重平〔會計〕大二三 四 卷 四

陶山誠太郎〔商經〕大二三 一 卷 三 三

陶山誠太郎〔商經〕大二三 一 卷 三 五

中村 茂馬〔評論〕大二四 四 卷 一 一

末松 留男〔銀研〕大二四 九 卷 二

太田 哲三〔會計〕大二四 六 卷 二

相生 梅吉〔銀叢〕大二四 四 卷 六

申本友三郎〔銀研〕大二四 一〇 卷 四

田中 保平〔商論〕大二五 一 卷 一

銀行に於ける原價計算
原價計算と利子
銀行出張所原價計算の研究

【權限爭議】

權限裁判所の設置
權限爭議の制度
獨逸國權限爭議制度一般
權限裁判所に就て
爭議に就て

「弱體保險」の報告に就て
傷害及健康保險論
米國に於ける健康保險運動
健康保險法案要綱に就て
健康保險運動の基調
健康保險被保險者及び保險者に就て

健康保險法給付に就て
健康保險法に就て
健康保險法の實務的考察

【健康保險】

不須多樓主人〔新報〕明三二 八 卷 八 六

一木喜徳郎〔新報〕明三二 一〇 卷 二 〇

ナードヒル〔新報〕明三五 二 卷 二 〇

織田 萬〔内外〕明三六 一 卷 二 〇

公浦鎮次郎〔志林〕明三六 五 卷 五 二

小池幸太郎〔保評〕大二五 五 卷 一 一

惣崎 貞夫〔保雜〕大二三 一 卷 三 〇

園 乾治〔三學〕大二六 一 卷 一 一

森 莊三郎〔國家〕大二三 六 卷 三

園 乾治〔三學〕大二三 六 卷 三 六

森 莊三郎〔經濟〕大二一 一 卷 一

森 莊三郎〔經濟〕大二一 一 卷 二

森 莊三郎〔國家〕大二三 六 卷 二

林 癸未夫〔社政〕大二一 一 卷 三

三木 守〔銀研〕大二五 一〇 卷 一 七

長谷川安兵衛〔早商〕大二五 一 卷 二

竹田 英吉〔會計〕大二五 一 卷 五

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

參照||保險。

實施延期されたる健康保險
健康保險の療養給付問題

【減債基金】

減債基金制度を論ず

減債基金の眞價

減債基金法に就て

英國減債基金制管見

減債基金制度の今昔

減債基金の取扱

減債基金と鐵道資金

減債基金を全廢せよ

減債基金問題

減債基金論
Sinking Fund Assurance
を論ず

減債基金の理論と實際
減債基金の運用と塊集法の實行
國債額の膨脹と減債基金
企業財政より見たる減債基金

神戸 正雄〔時經〕大二三 一 卷 六 號

森 莊三郎〔國家〕大二三 三 卷 三 六

小川郷太郎〔京法〕明三九 一 卷 一 一 二

星野 勉三〔三學〕明四一 一 卷 一

桑田 熊藏〔日經〕明四一 三 卷 二 二

内池 廉吉〔國經〕大二三 一 卷 三 三

堀江 歸一〔三學〕大二三 八 卷 一

門脇 龍雄〔東經〕大二三 七 卷 一 〇

小川郷太郎〔經叢〕大四一 一 卷 一

豊川 良平〔新聞〕大四五 一 卷 二 八 八

河津 暹〔國家〕大六三 二 卷 一

小川郷太郎〔經叢〕大六四 二 卷 二

三浦 義道〔保雜〕大七一 二 卷 三 三

堀江 歸一〔三學〕大二三 七 卷 一 〇

清水文之輔〔東經〕大二八 五 卷 二 三 〇

破産に關する檢事の職權
檢事と上官の關係
檢事制度改正私議
アルフツドアマシユル氏の
檢事論を紹介す
檢事の民訴立會制度を廢すべし
檢事制度改正私議
獨逸國に於ける司法警察官
と檢事との實務取扱上の
關係及び檢事と司獄官と
の執務上の關係
檢事の和解
檢事局獨立の議
ツエルサイエ檢事局に於ける執務實見
裁判所に於ける判檢事の用語に就て
豫審廷檢事廷の取調に就て
檢事の監督を廢にせよ

【檢事】

參照||刑事訴訟。裁判所構成法。司法官。法官。

應 當 融〔法記〕明三五 二 卷 二 六 九

古賀 廉造〔法記〕明三五 二 卷 二 六 九

鳩山 和夫〔辯協〕明三五 四 卷 三 八

小野澤龍吉〔新報〕明三五 一〇 卷 一 〇 九

〔新報〕明四一 一 卷 一 八 七

新井要太郎〔辯協〕明四二 三 卷 二 九 九

天野 徳也〔刑評〕明四三 二 卷 二 三 三

岡田 庄作〔法記〕明四四 二 卷 二

笠原文太郎〔辯協〕明四五 一 卷 一 六 六

磯谷幸次郎〔新報〕大元 三 卷 一 〇

皆川 治廣〔法記〕大二三 五 卷 四

井本 常治〔新聞〕大二一 一 卷 八 九 二

磯部 四郎〔新聞〕大二三 一 卷 九 二 二

今村力三郎〔辯協〕大四一 九 卷 二 〇 三

【檢事】【檢證】【建設利息】【建築】

檢事制度改正論	島田 武夫〔辯協〕大五二〇
判檢事優遇論	石山 彌平〔辯協〕大六二九
檢事制度改正論	伊部 榮治〔新聞〕大九一
天誅事件に於ける檢事の論告に付て	三上 英雄〔新聞〕大九一七五
天誅事件の檢事の論告批評	梅原錦三郎〔新聞〕大九一七五
檢事局改造論	松谷與三郎〔新聞〕大二〇一七五
裁判所檢事局の分立を論ず	小室 春富〔新聞〕大二〇一八〇四
檢事を相手方とする私生子	山口 直〔辯協〕大二二八
認知的訴は不適法か	高山 和雄〔辯協〕大二二八
檢事人権蹂躪の背景	高山 和雄〔辯協〕大二二九
檢事の妥協	松南 健彦〔新報〕大二三五
檢事勾留の意義及效力	荒木 櫻洲〔新聞〕大四一三九五
判檢事對普通文官俸給令の制度比較論	
【檢】	【證】
【建設利息】	
建設利息に關する諸問題	佐藤 雄能〔東經〕大五五
三たび建設利息に就て	佐藤 雄能〔東經〕大五七

建設利息に關する定款規定の變更	佐藤 雄能〔東經〕大五七
建設利息管見	中村 茂男〔經商〕大一一二
建設利息に關する二三の疑問に付て	松本 丞治〔新報〕大二三四
【建築】	【住宅問題。都市。都市計畫。土地。】
家屋の構成と經濟狀態	下村 宏〔三學〕大四四
住宅問題と日本建築の將來	權田保之助〔國家〕大八三
都市と建築（講演）	内田 祥二〔法政〕大〇一八
英國の建築ギルド	松岡 尚義〔社政〕大一一
獨逸に於ける住宅建築に關する公共的施設	渡邊 鐵藏〔經論〕大一一
「近世畫家論」第二卷より	奥井復太郎〔三學〕大三一
「建築の七燈」に至る迄	春日井 薫〔銀研〕大三七
建築金融組合の研究	西山 榮次〔亞經〕大三八
支那の建築材料に就て	春日井 薫〔銀研〕大三六
建築金融論	今村慶太郎〔計理〕大三一
土地建物會社の計理學上の問題	小倉 庫次〔都問〕大二四
共同建築の法律的考察	武谷 成道〔銀研〕大二四
獨逸國に於ける建築金融制度	

不燃燒都市の建設と復興建築會社
土地及建物の金融に就て
佐野 利器〔都問〕大二四
都上 城三〔銀叢〕大二四

【ゲンツマー】(Erich Gensmer, 1893-)

ゲンツマーの強制貸借契約論
石井 昂〔法治〕大一一
參照會計。議會。行政。元老院。皇室典範。國務大臣。司法。臣民。樞密院。政治學。天皇。陪審制度。民主主義。

【憲法】

憲法	合川 正道〔國家〕三三
憲法の性質及修正	末岡 精一〔法協〕三七
大日本帝國憲法の解釋は蛇足にあらざれば亂階ならん	植村 俊平〔法協〕三七
帝國憲法の法理	穂積 八東〔國家〕三三
公法、國法、憲法と云ふ言語に就ての話	末岡 精一〔法協〕三七
國法談	江木 衷〔新報〕三八
本邦憲法制定の由來	伊藤 博文〔國家〕三〇
憲法上に於ける習慣法の地位	

【建築】【ゲンツマー】【憲法】

憲法の解釋に關する疑義數則
憲法と行政法
憲法論
帝國憲法變更の手續に關する疑義
河上法學士の「帝國憲法變更の手續に關する疑義」に就て
松浦法學士に答ふ
松浦法學士の疑義に就て鄙見を述べ
河上湯淺兩學士に答ふ
河上學士の憲法論に付て成立憲法に就て
國法學と財政學との關係
歐洲成文憲法の發達
我國憲法と普自憲法との比較

鐵史樓主人〔新報〕三二	九四
美濃部達吉〔國家〕三三	一三
劍西 學人〔新報〕三三	一五
秋山良三郎〔國家〕三五	一七
河上 肇〔國家〕三五	一八
松浦鎮次郎〔國家〕三五	一七
河上 肇〔國家〕三五	一八
湯淺 倉平〔國家〕三五	一八
松浦鎮次郎〔國家〕三五	一八
上杉 慎吉〔國家〕三五	一八
美濃部達吉〔法政〕三五	一七
岡 實〔志林〕三六	一五
美濃部達吉〔國家〕三六	一七
清水 澄〔新報〕三九	一六
齋藤 隆夫〔辯協〕三九	一〇
美濃部達吉〔國家〕四〇	三
美濃部達吉〔法協〕四〇	二六
算 克彦〔志林〕四〇	一〇

獨逸に於ける國法學の發達
統計研究により憲法に就て
皇室典範と憲法との關係
ギルケル教授憲法論
憲法の欠缺
憲法制度の由來
伊藤公の歐洲に於ける憲法
取調類末
憲法の疑義につきて
Constitutional progress in
Japan
制定法規としての憲法の特
質
憲法の解釋法
帝國憲法と政黨政治
帝國の團體と帝國憲法
我が法とシユタイン
憲法と大正二年法律第二號
憲法雜感
上杉博士の憲法論
三十一議會の憲法問題
過去十五間に於ける憲法
上の學說の變遷
近時の憲法問題

副島 義一〔法協〕	明四二	二七	二一三
花房直三郎〔統集〕	明四二	一	三三九
奥田 義人〔新報〕	明四三	二〇	三三九
小倉 和子〔三學〕	明四三	三	一一〇
上杉 慎吉〔法協〕	明四三	二八	一一〇
穂積 八束〔法協〕	大元	三〇	一一〇
末松 謙澄〔國家〕	大元	二六	一一〇
清水 澄〔法協〕	大二三	二	一一〇
McLaren	〔三學〕	大二	二
美濃部達吉〔三學〕	大二	七	二
植原悦二郎〔國國〕	大二	一	二
美濃部達吉〔國國〕	大二	一	二
美濃部達吉〔法協〕	大二三	二	二
佐々木惣一〔京法〕	大二	八	二
市村 光惠〔京法〕	大二	八	二
清水 澄〔新報〕	大二三	二	二
村田岩次郎〔三學〕	大二三	二	二
吉川 義章〔國國〕	大二三	二	二
清水 澄〔新聞〕	大四	一	一〇〇〇
上杉 慎吉〔法協〕	大四	二	一〇〇〇

憲法の解釋
五月議會に於ける憲法問題
憲法の解釋に關する根本問
題
憲法の解釋と運用
憲法の改正
憲法の改正に付き佐々木博
士の教を乞ふ
近時に於ける憲法問題管見
吉野博士の憲法論を評す
上杉博士の憲法論を評す
近時の憲法問題
「憲法の改正」に就て市村
博士に答ふ
聖德太子の十七條憲法に就
て
第三十九議會の憲法問題
博士美濃部達吉氏の第三十
九議會の憲法問題を讀む
憲法雜題
陪審制度と憲法との關係
陪審制度と憲法
國際聯盟と憲法
國際聯盟と帝國憲法との關

上杉 慎吉〔志林〕	大四	一七	一
佐々木惣一〔京法〕	大四	一〇	一
林田岩次郎〔三學〕	大四	九	一
上杉 慎吉〔法協〕	大四	三	一
佐々木惣一〔京法〕	大四	一〇	一
市村 光惠〔京法〕	大五	一	一
美濃部達吉〔國家〕	大五	三〇	一
植原悦二郎〔國國〕	大五	四	一
植原悦二郎〔國國〕	大五	四	一
上杉 慎吉〔國家〕	大五	三〇	一
佐々木惣一〔京法〕	大五	一一	一
黑板 勝美〔新聞〕	大五	一一	一
美濃部達吉〔法協〕	大六	三五	一
松本 重敏〔新聞〕	大六	一	一
美濃部達吉〔新報〕	大七	二八	一
小齋甚治郎〔辯協〕	大八	二二	一
松本 重敏〔新聞〕	大八	一	一
美濃部達吉〔新報〕	大八	二九	一
板倉 卓造〔法研〕	大三	三	二
宮澤 俊義〔國家〕	大三	三八	二
石井 昂〔法政〕	大四	三	二
和光 米房〔法新〕	大四	一	二
松本 重敏〔法新〕	大四	一	二
美濃部達吉〔國家〕	大五	四〇	二
上杉 慎吉〔國家〕	大五	四〇	二
中野登美雄〔外時〕	大五	四三	二
末岡 精一〔國家〕	明三	二	二
末岡 精一〔國家〕	明三	四	二
加藤 弘之〔國家〕	明三	九	二
清水 澄〔國家〕	大三	二八	二
澁谷 備爾〔新報〕	明二五	二	二
占部百太郎〔三學〕	大二	七	二
占部百太郎〔三學〕	大五	一〇	二
占部百太郎〔三學〕	大八	一三	二
副島 義一〔志林〕	明四一	三	二

係
平和條約と憲法問題
第四十二回帝國議會に於け
る憲法問題
國際聯盟と帝國憲法との關
係
違憲論
憲法の最高解釋と陪審制度
陪審制度と憲法の關係論
最近の憲法問題
國法學上の憲法解釋
憲法裁判所の設立を望む
兩極端の憲法解釋
憲法と陪審法
不文憲法論
憲法法律及び條約
各國憲法の變遷
憲法に於ける學說と現實
憲法と陪審法
陪審制度と憲法との關係
憲法と陪審制度の關係を論
ず
我が日本の憲法問題
憲法爭議解決機關

美濃部達吉〔國家〕	大九	三四	一
金森徳次郎〔法政〕	大九	一七	一
佐々木惣一〔法叢〕	大九	三	一
平野長次郎〔日社〕	大九	七	一
志方 鍛〔法記〕	大九	三〇	一
松本 重敏〔新聞〕	大九	一	一
小室 春富〔新聞〕	大九	一	一
稲田周之助〔新報〕	大二〇	三	一
江木 衷〔辯協〕	大二〇	二五	一
清水 澄〔國家〕	大二〇	三五	一
江木 衷〔新聞〕	大二〇	一	一
江木 衷〔新聞〕	大二〇	一	一
美濃部達吉〔新報〕	大二三	一	一
稲田周之助〔新報〕	大二三	一	一
稲田周之助〔新報〕	大二三	一	一
金森徳次郎〔法政〕	大二三	二〇	一
江木 衷〔新報〕	大二三	三	一
江木 衷〔新報〕	大二三	三	一
穂積 陳重〔新報〕	大二三	三	一
江木 衷〔新報〕	大二三	三	一
稲田周之助〔新報〕	大二三	三	一

政治思想史上憲法發布前
硬性憲法の變遷
憲法私見
憲法と法華經
憲法裁判
日本憲法の特色
今期議會に於ける二三の憲
法問題
外人の日本憲法觀
比 較
英佛普各國憲法性質の差異
英佛獨普各國及北米合衆國
比較憲法の俗話
各國憲法の異同
一部の比較憲法
英 國
英國憲法の沿革及性質
英國憲法の特性
英國憲法の本體
大憲章
支 那
支那の國體を論じて新憲法
に及ぶ

板倉 卓造〔法研〕	大三	三	二
宮澤 俊義〔國家〕	大三	三八	二
石井 昂〔法政〕	大四	三	二
和光 米房〔法新〕	大四	一	二
松本 重敏〔法新〕	大四	一	二
美濃部達吉〔國家〕	大五	四〇	二
上杉 慎吉〔國家〕	大五	四〇	二
中野登美雄〔外時〕	大五	四三	二
末岡 精一〔國家〕	明三	二	二
末岡 精一〔國家〕	明三	四	二
加藤 弘之〔國家〕	明三	九	二
清水 澄〔國家〕	大三	二八	二
澁谷 備爾〔新報〕	明二五	二	二
占部百太郎〔三學〕	大二	七	二
占部百太郎〔三學〕	大五	一〇	二
占部百太郎〔三學〕	大八	一三	二
副島 義一〔志林〕	明四一	三	二

【憲法】

中華民國憲法制定に就て
支那憲法如何
中華民國憲法
支那憲法制定事業の沿革
曹錕憲法の批評一斑
獨逸帝國憲法講義
獨逸に於ける憲法に關する
近事
獨逸帝國憲法の改正に就て
獨逸の新憲法
獨逸國新憲法
新獨逸國憲法の三特色
獨逸新憲法の成立
獨逸新憲法の政治及經濟的
意義
獨逸新憲法概観
新獨逸共和國憲法に就て
(講演)
獨逸新憲法に就て
ドイツ共和國憲法の成立
土耳其帝國憲法
土耳其憲法成條
土耳其帝國憲法

清水 澄〔新報〕大二三九
清水 澄〔外國〕大九一
有賀 長雄〔外時〕大九二
有賀 長雄〔外時〕大九三
及川 恒忠〔亞經〕大五〇
美濃部達吉〔國家〕四四一三
上杉 慎吉〔國家〕四四二
泉田吉次郎〔新聞〕大七一
田中幸一郎〔外時〕大八二
美濃部達吉〔法協〕大九三
森口 繁治〔法叢〕大九三
上杉 慎吉〔國家〕大九三
奧野 彦六〔社政〕大九
小林 俊三〔辯協〕大二五
上杉 慎吉〔法協〕大二九
美濃部達吉〔國家〕大二
高橋 信司〔同論〕大二
有賀 長雄〔外時〕四三
上杉 慎吉〔法協〕四三

新トルコ共和國のアンゴラ
憲法(譯)
土耳其共和國新憲法(譯)
佛國憲法改正案理由書
佛國憲法の百年間の變遷
米國憲法の由來及特質
重大なる米國憲法修正
北米合衆國憲法の實質的變
化
露國ソキエト政府の憲法
露國憲法批判
露西亞社會主義聯邦「サツ
エート」共和國憲法註釋
露國憲法に就て
全露國同盟の新憲法
過渡期を豫考せるソツイエ
ツト・ロシア憲法の考察
ソツイエツト社會主義共和
國聯盟の新憲法
書直された勞農新憲法

今中 大麿〔同論〕大三一
宮澤 俊章〔法協〕大三四
菊地 駒次〔新報〕四三
美濃部達吉〔新報〕四一
美濃部達吉〔國家〕大七三
米田 實〔外時〕大四二
稻原 勝治〔外時〕大八二
有川 治助〔外時〕大八三
市村 光惠〔法叢〕大八
上村 進〔辯協〕大二七
山田準次郎〔國家〕大二三
播磨 檜吉〔外時〕大二三
宇賀田順三〔國家〕大二三
播磨 檜吉〔外時〕大二三

瀋洲に於ける新憲法に就て
南亞憲法草案と加奈太及濠
洲聯邦憲法
ハイチ共和國新憲法
チエコスロヴァク國憲法
英領印度の新憲法
李瀾西の新憲法(譯文)
普國新憲法につきて
The fundamental characteristics
of the Swiss
波蘭國新憲法(譯文)
ユーゴスラヴ國憲法問題
極東共和國憲法正文
愛蘭自由國憲法(譯)
イタリヤ憲法の歴史的性質

内田 嘉吉〔志林〕四二
江木 翼〔法協〕四二
米田 實〔外時〕大八二
美濃部達吉〔國家〕大九三
美濃部達吉〔法協〕大九三
美濃部達吉〔國家〕大九三
清水 澄〔新報〕大二五
Borgeaud 〔國家〕大一一〇
美濃部達吉〔國家〕大一一〇
吉野 作造〔國家〕大一一〇
市村 光惠〔法叢〕大一一〇
高橋 信司〔同論〕大一一〇
高橋 信司〔同論〕大一一〇

法律複本位
英佛獨三國の權利思想
權利の觀念に就て
義務の真相
權利の觀
權利論
權利論
權利の意義に關する我國近
時の二大學說を論評して
自說に及ぶ

菊池 武夫〔新報〕四三
宮本平九郎〔明〕四三
中山成太郎〔法政〕四三
高橋 捨六〔新報〕四三
下野喜太郎〔新報〕四三
岡松參太郎〔内外〕四三
遠藤 隆吉〔法政〕四三
仁保 龜松〔法政〕四三
松本 重敏〔新聞〕四三
家 本 生〔新聞〕四三
寬 克彦〔法政〕四三
仁保 龜松〔京法〕四三
烏賀陽然良〔京法〕四三
有田 八郎〔法協〕四三
松崎藏之助〔法協〕四三
岡村 司〔京法〕四三
中込 宗造〔新報〕四三
仁保 龜松〔京法〕四三

【權利及び義務】

權利の釋義
權利の感想
權利の思想
權利は無權力なり
權利に就て
權利の觀念

石渡 敏一〔法協〕四三
穂積 陳重〔法協〕四三
井上哲次郎〔國家〕四三
穂積 八東〔新報〕四三
渡邊 洪基〔國家〕四三
穂積 八東〔法政〕四三

参照自由。人權。臣民。生存

權利と義務との關係に就て
シユワルツ教授の權利目的
說
權力と法律と經濟
權利否定論
實體上存せざる權利の拋棄
及義務の認諾
權力權

仁保 龜松〔法政〕四三
松本 重敏〔新聞〕四三
家 本 生〔新聞〕四三
寬 克彦〔法政〕四三
仁保 龜松〔京法〕四三
烏賀陽然良〔京法〕四三
有田 八郎〔法協〕四三
松崎藏之助〔法協〕四三
岡村 司〔京法〕四三
中込 宗造〔新報〕四三
仁保 龜松〔京法〕四三

【憲法】 權利及び義務

法律現象の單位としての權利

兒童の權利
植原悦二郎〔國家〕大三八八二
E M 生〔志林〕大五二八
松本 重敏〔新報〕大五二六
批判
デユギエの權利否認論の
批判
杉山直治郎〔法協〕大五三四九二
織田 萬〔法論〕大七一
大谷 美隆〔國國〕大八七一
田村 德治〔法叢〕大八一
織田 萬〔法叢〕大八一
吉田 熊次〔國家〕大九三四
牧野 英一〔志林〕大九三三
長島 毅〔新報〕大九三〇
小林 俊三〔辯協〕大二〇二五
中上友三郎〔臺法〕大二〇一五
平野義太郎〔志林〕大二〇三九二
末弘殿太郎〔新聞〕大二〇一七
田村 德治〔同論〕大〇一
龜谷 萬〔辯協〕大三二六

權利思想の心理及倫理
權利の倫理及び心理
主體なき權利
權利の本源に就て
權利と勤勞
エールリツヒの「權利能力
の經濟的基礎」
所謂權利思想變革の提唱
ベルナチツク權利共同態論
の解説
權利思想と公認心

權利義務價值表の更正
經濟現象に於ける權力關係
權力の社會學的考察
權利の觀念の轉回に就いて
エールリツヒの權利能力論
權力關係の進化
權利の觀念に關する一考察
東西人間性の相違と權利思想
私の獨創である權利論
權利義務の主體
法典及人格
公法の人格
人格の意義を論ず
團體論
最近に於けるギルケイ氏の
團體本質論
人格及權利義務を論ず
權利の目的
團體本質論
機關人格概論
自然意思及法律意思

勝山 内匠〔新聞〕大二二二
長谷川萬太郎〔原雅〕大二三
新明 正道〔我等〕大三六
牧野 英一〔志林〕大三二六
小池 隆一〔法研〕大三四
長谷川萬太郎〔我等〕大三四
岡松成太郎〔志林〕大二四
高木友三郎〔新聞〕大二四
松本 重敏〔正義〕大二五
松本 重敏〔臺法〕大二五
穂積 八東〔新報〕明三三〇
穂積 八東〔法協〕明三七二
菱谷 精吾〔法政〕明三七八
鶴澤 總明〔明學〕明三七
松山得四郎〔法協〕明三八二
寛 克彦〔法政〕明三八九
土方 寧〔新報〕明三八五
寛 克彦〔法協〕明三八三
寛 克彦〔法協〕明三八三
穂積 八東〔法協〕明四二五

家格と人格

外部的組織の本質を略説す
擬制の性質上より二個の大
審院判例を評す
法律意思と自然意思との分
化綜合
擬制に就て
人格者概論
人格か機械か
權利主體論
ベルナチツクの論文「人格
の概念特に官廳の人格」
の内容
法と所謂「人格者」の一考
察
人格實現提唱
私法體系の基調としての規
範人格
階級意識より觀たる人格實
現
私法學に於ける人格の意義
について

井上 友一〔法政〕明四二二
寛 克彦〔新報〕明四二八
武川 海佳〔新聞〕明四一五
穂積 八東〔法協〕明四二七
竹田 省〔京法〕明四二四
寛 克彦〔國家〕明四二五
花井 卓藏〔新報〕大元二二
大谷 美隆〔國國〕大七六
田村 德治〔法叢〕大八一
佐々木英夫〔法政〕大二一九
塚本 毅〔同論〕大三一
渡邊 省三〔法新〕大四一
渡邊 省三〔法新〕大四一
渡邊 省三〔法新〕大四一
廣濱 嘉雄〔社科〕大五二

權利の類別

生命權有無の疑惑
公權は人格權なり
對世權對人權の區別
公權及私權の區別を論じて
公法及私法の區別に及ぶ
公權及私權の區別論に就て
相對權の絕對的效力
權利の新種類に就ての研究
私權分類の標準
公權利の觀念
氏名權論
公權と私權
私權の現實力を論ず
請求權の競合
溪水專用なる財産權なし
既得權の定義を論ず
生體及死體に對する私權
私權の新分類
私權の物質化
人格權を論ず
人格維持權を論ず

土方 寧〔法協〕明一九
穂積 八東〔新報〕明三七
藤崎 明信〔法協〕明三八
卜部喜太郎〔新報〕明三四
岡 實〔新報〕明三五
二上 兵治〔法協〕明三七
志田鈿太郎〔志林〕明三七
富井 政章〔法協〕明三八
穂積 八東〔新報〕明三八
淺見倫太郎〔法記〕明三九
佐々木惣一〔京法〕明四一
池田寅二郎〔新報〕明四二
中島 玉吉〔京法〕明四四
梅 謙次郎〔志林〕明四四
阿部 四郎〔法協〕明四七
市村 光恵〔京法〕明四五
松本 丞治〔新報〕明四二
牧野 英一〔志林〕大二一五
仁保 龜松〔京法〕大五一
松本 重敏〔新聞〕大五二

【權利及義務】 【元老】 【言論の自由】

仁保龜松氏の人格權論を駁す

體軀の所有權を論ず

保持權論

氏名權の存否

人格權論

氏名權論

私權に關する事實の意義に就て大審院の判例を讀む

權利の行使

權利の主張は社會的の任務なり

人權及人義

權利の濫用

未發生權利の拋棄を論ず

權利濫用論

權利の行使と濫用

權利濫用禁止の理論的考察

ローマ法に於ける權利行使に關する原則とシカトーネ

(若くは權利濫用)の禁止

人格法學と權利濫用論

松本 重敏	〔新聞〕	大五	一	二二九
松原 祐馬	〔新聞〕	大六	一	三二六
大谷 美隆	〔國國〕	大七	六	六
長島 毅	〔新報〕	大九	三〇	二
加藤 行吉	〔法政〕	大九	一七	四
小池 隆一	〔法研〕	大二	一	二
竹井小野右衛門	〔新聞〕	大二	一	二五〇
穂積 入東	〔新報〕	四三	六	六四
岡村 司	〔法協〕	四三	二六	九
牧野 英一	〔法協〕	四三	三三	六
鳩山 秀夫	〔志林〕	四三	二	二
高木 藏吉	〔新聞〕	大四	一	一〇〇
小島愛三郎	〔新報〕	大九	三〇	一三
末川 博	〔法叢〕	大四	一四	五
末川 博	〔法叢〕	大四	一三	六
渡邊 省三	〔法新〕	大五	一	五六六

【元老】

元老論

元老は憲法の一章

選舉元老政黨論

護憲と元老會議

【言論の自由】

言論の自由

學界の怪事言論壓迫の新現象

言論の壓迫と(大隈)首相の失言

言論の自由

宮本平九郎〔志林〕四三四 三二〇

田坂 貞雄〔辯協〕大二二七 一八〇

眞下 五郎〔辯協〕大五二〇 七

小島 憲〔法治〕大五五 一

【部】

【皇位繼承】

我國法上天皇崩御の際胎内に在らせらるる皇胤は皇位繼承の資格を有し給ふや

統治の繼續

蘭國の皇位繼承問題に就て

英佛獨三國に於ける君位繼承法の沿革

ブラウンシュワイヒ公位繼承問題

他國の君位繼承事件と干渉

美濃部達吉〔志林〕四四二 二一三

吉野 作造〔國家〕大ニ二七 三三

蛭川 新〔外時〕大四三三 二六三

服部 信吉〔國家〕四三三 一四 一六四

井上 密〔志林〕四三七 六 六一

遠藤 源六〔國際〕四四二 六 一〇

參照||皇室典範。天皇。

參照||市營事業、事業。

參照||價格、價值、貨幣、交換。

參照||市營事業、事業。

參照||市營事業、事業。

參照||市營事業、事業。

【皇位繼承】 【交易】 【公益事業】 【更改】 【航海】 【交換】

米國に於ける公益事業と理財會社

公益事業の料金決定

公益事業會社の配當制限と資本化

都市の公益事業と信託制度

公益事業に對する課税

【更改】

價權の消滅—更改を見よ

櫻井 縣〔東經〕大ニ六八 一七三

渡邊 鐵藏〔經論〕大ニ二 一

小倉 庫次〔都問〕大四一 一 六

吳 文炳〔都問〕大五二 二 三

小倉 庫次〔都問〕大五二 二 五

參照||海上運送、航路、船舶。

大濱 信泉〔早法〕大ニ一 一

藤本幸太郎〔商研〕大〇 一 二

小町谷操三〔志林〕大ニ二七 三

瀬戸瀨三三〔經商〕大四四 一

松波仁一郎〔海法〕大五 一 一

參照||貨幣、交換。

參照||市營事業、事業。

參照||市營事業、事業。

參照||市營事業、事業。

【交換】 【網紀肅正】 【工業】

原始民族に於ける交換の意義

交換の起源に関する疑問
原始社會に於ける交換有無問題

ウイルヘルム・ラウンハルトの交換論抄

【網紀肅正】

官紀紊亂に就て
網紀肅正、黨弊刷新
網紀肅正の一端概念
所謂網紀肅正思想善導の實現に就て

石山 彌平 [辯協] 六七三
志立鐵次郎 [財經] 六〇八
不破 清警 [新聞] 六一〇

【工業】

大工業と小工業との競争を論じて小發動機の經濟上に於ける效力に及ぶ
マルホール氏著「各國の工業及富」に就て

高野岩三郎 [國家] 四九〇
吳 文聰 [統集] 四二一

本邦工業の現況 (講演)

我邦工業の發達
工業法案に就て
第九萬國公會決議工業統計調査法

商工業會社統計調査法
商工業發達の基礎
工業トラスト論
我國機械工業の現状及び將來

工業發達の過去及び將來
手工業者に関する産業組合獎勵
世界經濟上に於ける農業及工業の調和

清國の工業政策
家内工業と工場工業
工業の進歩及技術改良の前提たるべき職工の技能啓發に就きて

工業上の厄災に由る損害の救済に関する歐洲近時の立法例
美術工業と奢侈工業

有賀 長文 [國家] 四三三
廣瀬 吉雄 [統集] 四三三
窪田靜太郎 [法協] 四三六

高橋 二郎 [統集] 四三六
高橋 二郎 [統集] 四三七
河津 暹 [志林] 四三九
伊藤 基樹 [京法] 四四〇

阪田 貞一 [日經] 四四〇
メリス [日經] 四四〇
岡 實 [新報] 四四〇

氣賀 勸重 [國經] 四四一
上野 貞正 [國家] 四四二
河津 暹 [日經] 四四二

坂田 貞一 [日經] 四四二
市村 富久 [法協] 四四二
河津 暹 [日經] 四四二

東京に於ける工業狀態

工業國の國防力
工業の特化と結合
工場工業に於ける立憲的傾向

手工業の推移
小工業は遂に其生存を全くするを得ざるや
國際工業に付て
國際工業論
鹽專賣法が工業に及ぼす影響

工業の規模及組織
美術工業に付て
工業と海軍
商工聯絡の急務
工業の地方的集中及分散
小工業の發達を論ず
小工業の現在及將來
輸出工業の發展
商工業の發展と商業道德
匈牙利國に於ける工業保護政策の效果に関する統計的研究

高木 天嶺 [東經] 四四二
神戸 正雄 [國經] 四四二
關 一 [國經] 四四二
藪田勘兵衛 [京法] 四四二
財部 靜治 [新報] 四四二
リンバルト [國家] 四四二
河津 暹 [新報] 四四二
河津 暹 [日經] 四四二
黒澤 龍濱 [東經] 四四二
上田貞次郎 [國經] 四四二
戸田 海市 [京法] 四四二
阪谷 芳郎 [日經] 四四二
金子堅太郎 [日經] 四四二
關 一 [國經] 四四二
河津 暹 [國家] 四四二
松崎 壽 [東經] 四四二
守屋源次郎 [日經] 四四二
河津 暹 [日經] 四四二
田中鐵三郎 [國家] 四四二

清國の鐵道と商工業

商業道德か工業道德か
工業資金の調達に就て
工業資金の調達に就て
工業道德論に就て
本邦工業の發展策
工業資金問題
商工國民としての日本人の將來

我國工業發展の大障害
農工資金充實の急務
工業獎勵の根本方針
農業と商工業の研究
加奈陀工業紛議調査法實績
軍事工業と民間工業との關係

獨逸の勝敗と農工立國問題
日本工業の前途
獨逸工業の窮狀
獨逸の工業と工業原料
戰亂の影響と工業の獨立
工業移轉論
戰時及び戦後の工業助長策
對支貿易と工業經營

吉田 虎雄 [日經] 四四四
松崎 壽 [日經] 四四五
井上準之助 [國家] 四四五
添田 壽一 [國家] 四四五
津村 秀松 [國經] 四四五
金子堅太郎 [日經] 四四五
海老原竹之助 [日經] 四四五
坂田重次郎 [日經] 四二二
河津 暹 [日經] 四二二
志村源太郎 [財經] 四三一
阪田 貞一 [財經] 四三一
堀切善兵衛 [三學] 四三八
堀江 歸一 [三學] 四三八
竹田 憲元 [日經] 四三二
星野 半六 [三學] 四三二
二宮 基成 [財經] 四三一
阪田 貞一 [財經] 四四二
堀田 晴治 [日經] 四四二
阪田 貞一 [財經] 四四二
鶴見左吉雄 [財經] 四四二

【工業】

最近に觀たる支那の商工業時局の内國工業に及ぼせる影響

鶴見左吉雄 [財經] 大四年二卷八號

工業上に於ける日本の實力

岡 實 [財經] 大四年三卷九

商工業組合の活動

加茂 正雄 [財經] 大四年二卷二

工業金融について

森 貞二郎 [東經] 大四年一七九五

我が發明工業不振の原因

山田 利淳 [東經] 大四年一七八〇

我國當面の工業問題

宿利 英治 [財經] 大五年三卷一

公開工業研究に對する私見

阪田 貞一 [財經] 大五年三卷二

國防と工業

山崎 繁樹 [三學] 大五年二卷二

支那工業の現状と將來

雪 堂 生 [財經] 大五年三卷七

工業金融に就て

鷺 堂 生 [財經] 大五年三卷八

工業金融改良の點

志立鐵太郎 [洋經] 大五年三卷一

工業金融の改善と日本興業銀行

佐伯 貴範 [財經] 大五年三卷二

商工心理學

添田 壽一 [財經] 大五年三卷二

佛國戰後の商工業

大野 辰見 [商經] 大七年一〇四

我が商工業の現在及び將來

鶴見左吉雄 [財經] 大六年三卷一

加里工業經營の急務

岡 實 [財經] 大六年三卷二

戰後に於ける英國工業の優勢

三山喜三郎 [財經] 大六年三卷三

輸出工業上の轉機

阪田 貞一 [資料] 大六年三卷三

戰後の工業及び勞働問題

雪 堂 生 [財經] 大六年四卷一

支那に於ける本邦人の工業經營に就きて

稻山 始 [東經] 大六年一八九二

最近十年間の本邦主要工業の趨勢

加藤 銀藏 [統集] 大六年一四三

工業政策上の施設

松崎 壽 [商經] 大六年一七

小工業者と問屋

服部文四郎 [國經] 大六年二二

小工業保護策と産業組合

松崎 壽 [志林] 大七年二〇

小工業問題研究

上田貞次郎 [國經] 大七年二四

徳川時代に於ける商工階級

瀧本 誠一 [國經] 大七年二五

佛國人の支那工業觀

辻村 楠造 [財經] 大七年四

工業動員法の運用と軍需工業

柏木頑次郎 [國家] 大七年三

工業主(又は鑛業權者)の扶助義務の本質

服部文四郎 [國經] 大七年四

小工業と金融

松崎 壽 [資料] 大七年四

工業動員論

松崎 壽 [資料] 大七年四

戰時佛國工業界

松崎 壽 [國經] 大七年四

工業品の検査制度に就て

松崎 壽 [國經] 大七年四

軍需工業動員法に就て

松崎 壽 [國經] 大七年四

講和問題と我が工業界

松崎 壽 [國經] 大七年四

本邦工業用原料の需用と其輸入額

松崎 壽 [國經] 大七年四

大工業の獎勵策に就て

松崎 壽 [國經] 大七年四

英國戰後の工業政策

松崎 壽 [國經] 大七年四

製造工業の難局に處する方針

針

阪田 貞一 [財經] 大八年六卷三號

America's industrial mobilization

Price [國家] 大八三三

工業會計に於ける材料の取扱及び其の記帳法

中西新兵衛 [會計] 大八六卷四

國際勞働法と日本の工業

阪田 貞一 [財經] 大八六卷六

工業と人間味

森 順治郎 [國家] 大八三三

工業會計に於ける製造間接費の分類

中西新兵衛 [會計] 大八七卷三

財界の反動と工業上の對策

阪田 貞一 [財經] 大八七卷五

工業整理は失業救済

阪田 貞一 [財經] 大八七卷八

工業界に於ける不安の原因

荒木光太郎 [國家] 大九三四

と其救済

宮島清次郎 [財經] 大九〇八

本邦工業の前途に就て

高松 豊吉 [財經] 大九〇八

本邦工業の發展策

堀江 歸一 [三學] 大九一五

工業協約制度を論ず

朝倉 每人 [社政] 大九〇九

農村と工業勞働者

朝倉 每人 [社政] 大九〇九

戰中及戰後に於ける日本の工業

村本 福松 [商事] 大九一七

戰時に於ける日本の電氣及瓦斯其他雜工業

村本 福松 [商事] 大九一七

戰時に於ける日本の工業

村本 福松 [商事] 大九一七

戰時に於ける日本の工業

村本 福松 [商事] 大九一七

戰時に於ける日本の工業

村本 福松 [商事] 大九一七

戰時に於ける日本の工業

村本 福松 [商事] 大九一七

戰時に於ける日本の工業

村本 福松 [商事] 大九一七

戰時に於ける日本の工業

村本 福松 [商事] 大九一七

日本工業が毎年損失する「避け得可き空費」三億圓

我國に於ける機械工業勞働事情一斑

最近に於ける本邦工業の概況

工業と國防

チュールドル、スチユアイト

兩朝に於ける工業政策

商工經營上の危険とその對策

獨逸大銀行の商工業に對する關係

内地工業の支那移轉と其の障礙

議會と商工業

工業顯微鏡學の復興

商工黨組織と農民黨の必要

工業經營形態の配分關係と其變化(獨逸に於ける小工業問題の基礎)

工業問題の基礎

工業金融と兼營組織

工業金融研究の一方法

支那工業の現状に就て

草間 時光 [社政] 大一一二五

濱田 富吉 [統集] 大一一四九

成田 篤 [エコ] 大一一二二

高木 壽一 [三學] 大一二七三

村本 福松 [商經] 大一二〇

須美 芳夫 [銀叢] 大一二一六

澤村 幸夫 [亞經] 大一二七三

神戸 正雄 [時經] 大一二九

小原龜太郎 [商叢] 大一二一

河田 嗣郎 [エコ] 大一二一五

諸井 貫一 [經論] 大一二一

松島 喜作 [銀叢] 大一二一四

松島 喜作 [銀叢] 大一二一四

松島 喜作 [銀叢] 大一二一四

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

及川 恒忠 [三學] 大一二一八

我國の基本工業
基本工業保護獎勵方法
小工業の意義並に其の對策
ドイツに於ける工業社會化運動
工業の勞働に對する社會的義務
「工」及び「工的技術」
獨逸に於ける銀行と工業との關係
我國工業の死活問題
輸出及工業組合と輸出金融
眞の工業的發明
重工業と帝國主義
我國工業の海外移植問題
工業建設地論

田中 貢〔經商〕六三三
深澤甲子男〔財經〕六三二
吉野 信次〔社政〕六三三
吉田 蕙〔社政〕六三三
蒲生 俊文〔經商〕六四四
田崎 仁義〔長彙〕六四四
串本友三郎〔銀研〕六四四
堀江 歸一〔エコ〕六四三
神戸 正雄〔時經〕六四三
藤江政太郎〔新聞〕六四四
松下 芳男〔法治〕六四五
岡崎 虎一〔國經〕六五〇
岡田 重次〔國經〕六五〇
參照Ⅱ金。鑛。鑛業權。鑛業法。
石炭。鐵。鋼。

山内 正昭〔國家〕四〇二
瀧 臺水〔東經〕四〇一
澤海保四郎〔統雜〕四〇一
橋本與八郎〔東經〕四〇一
神戶 正雄〔京法〕六二八

南洋諸島に於ける燐礦の產出
交通事業と鑛業との關係
最近本邦鑛業の發達に就て
我が鑛業界に及ぼしたる歐洲戰亂の影響
支那最近の鑛山業
日本産業發達の裏面（我が鑛山業の今昔）
本邦鑛山衛生一斑
鑛業經濟論
暹羅の錫鑛業
支那の鑛産に就て
會計上より觀たる鑛山業經營の特質
西伯利の鑛業と英國支那に於ける外國人の鑛業權について
工業主（又は鑛業權者）の扶助義務の本質
露國金屬鑛業
南米智利に於ける硫黃鑛業
豐富なる支那の錫鑛
鑛業會社の原價消却特に鑛

細井 岩彌〔日經〕六四一
猪股 洪清〔辯協〕六四九
齋藤 大吉〔經叢〕六五二
渡邊 渡〔財經〕六五三
鷺堂 生〔財經〕六五三
一知半解樓〔財經〕六五三
横山 雅男〔統雜〕六五三
櫻井 一義〔東經〕六五四
阪部 一郎〔洋經〕六五四
小川 琢治〔亞經〕六六二
平澤千萬人〔會計〕六六一
柏田 忠一〔國家〕六六一
柏木禎次郎〔國家〕六七三
田中館秀三〔財經〕六七五
善生 永助〔財經〕六七五

區の原價消却に就いて
數字上に現はれたる鑛夫の衛生状態
獨逸に於ける鑛山の社會化
鑛山に於ける女子組合に就て
佛國鑛山勞働者退職年金法
日支合辦の山東三鑛山
鑛山勞働問題研究資料
鑛山の評價に就て
南阿鑛山大罷業の經過及特質
鑛山女子組合の研究
本邦金屬鑛業勞働事情
營口の過爐銀
露國に於ける鑛山業の起源
西北支那の硝石と石油

三木 良贊〔會計〕六八五
石原 修〔財經〕六九七
山川 武〔社政〕六九七
佐藤 輝雄〔國經〕六〇三
黒川 小六〔社政〕六〇一
澤村 幸夫〔亞經〕六一六
佐藤 輝雄〔國經〕六一三
山本恭次郎〔長彙〕六一三
前田 一〔社政〕六二二
橋本能保利〔社政〕六二二
中村 俊藏〔商濟〕六二六
西山 榮久〔亞經〕六二六
參照Ⅱ商業教育。徒弟。鑛業教育。勞働者教育。
手島 精一〔財經〕六五三

米國に於ける工業教育の一
我が工業教育の缺陷と其改善
工業教育管見

秋保 安治〔財經〕六六四
秋保 安治〔財經〕六七五
松崎 壽〔商經〕六七五
田中 隆三〔新報〕四五二
原 嘉道〔辯協〕四五三
織田 萬〔内外〕四五三
松澤常四郎〔新聞〕四五三
羽田 智證〔新聞〕四五三
中山 末松〔新聞〕四五三
石坂音四郎〔京法〕六二八
末弘殿太郎〔法協〕六二九
鹽田 環〔志林〕六二九
鹽田 環〔志林〕六二九
鹽田 環〔志林〕六二九
鹽田 環〔新聞〕六三三
未掘採鑛物に付て

鑛業權と土地所有權
鑛業上の土地使用權と民法の規定
鑛物所有權と鑛業權
共同井に關する大審院の判決に就て
鑛業權不當處分取消の判決に就て
鑛業權の變更登録と舊鑛業權との關係に就て
共同鑛業と組合契約
鑛業權の本質
斤先掘契約に付て
試掘の競願
未掘採鑛物に付て

【鑛業】【工業化學】【工業教育】【鑛業權】

【鑛業権】 【公共事業】 【工業所有権】

共同鑛業権に関する二三の研究

共同試掘権と優先出願	河崎義三郎 [辯協] 大三八 一八四
共同鑛業権者と優先出願権	鹽田 環 [新聞] 大六一 二八六
共同試掘権者と優先出願	玉井 吾一 [新聞] 大六一 二九六
鑛業會社の解散の鑛業権の消滅及其時期	鹽田 環 [志林] 六七二〇 二
共同鑛業権者の脱退に就て	猪股 淇清 [新聞] 六七 一三九五
鹽田辯護士の共同鑛業権者の脱退に就て	鹽田 環 [新聞] 六八 一五二四
再び共同鑛業権者問題に就て	横見 琪二 [新聞] 六八 一五三三
鑛業権の目的地と所有者の掘穿工事	鹽田 環 [新聞] 六八 一五四六
土地所有権と鑛業権との關係に付て	小島愛三郎 [新報] 六九三〇 九
鑛業権者の土地所有者に對する賠償義務を論ず	中口 末松 [新聞] 六九 二七六四
鑛業権の性質に就て	鹽田 環 [法協] 六〇三九 一一
土地所有と試掘権の關係に就て	鹽田 環 [志林] 六〇三三 二
土地陥落と鑛業権者の責任	横山 亮三 [新聞] 六二〇 一八八
	鹽田 環 [法協] 六三三三 六

【公共事業】

参照||官業。公益事業。鐵道。市營事業。

公共事業と監督	水野鍊太郎 [國家] 四四三 二四 一〇
公私共同事業	關 一 [國經] 六三 一六 四
公共事業に對する報償金と特權稅	坂本 陶一 [國經] 六三 一七 一六
金融業者と公共事業の新組織	フロンガム [イン] 六五 三 一
公共企業に對する監督	吉野 信次 [社政] 六五 一 六六

【工業所有権】

萬國工業所有權保護同盟條約に就て	山田 三良 [法協] 四三四 一九 二
工業所有權の性質	村上小次郎 [新報] 四三九 一六 七
工業所有權及著作權保護條約は戰爭の爲めに消滅するや	泉 哲 [日經] 六三 一六 二
開戦の敵國人の工業所有權保護に及ぼす影響	宿利 英治 [法記] 六三 二四 二
獨逸人の工業所有權に就て	跡部定次郎 [法協] 六三 三三 三
獨逸人の工業所有權保護の理由なし	泉 哲 [國家] 六三 三六 三

【航空】

参照||飛行機。

列強に於ける空中飛行界現況 (講演)	徳永 少佐 [京法] 四四三 二八 七
飛行小史	末廣 重雄 [京法] 四四四 六 五
航空運送	仁保 龜松 [京法] 四四五 七 七
英國航空事業の近情	小島昌太郎 [經叢] 六九 八 三
商業飛行時代の初期	織田松太郎 [商經] 六一 一 二五
新事業としての航空輸送	平井常次郎 [商經] 六二 四 一 三七
	安達 堅造 [エコ] 六二 五 四 七

【航空】 (國際法)

空中飛行術に関する討論	ホルランド [國際] 四四二 八 三
空中飛行と法律	山田 三良 [法協] 四四三 二八 八九
空中飛行機の奇禍に関する責任	無名氏 [國際] 四四四 九 六
飛行機に関する平時規則 (譯)	澤田 廉三 [國際] 四四五 一〇 九
他國領土内に着したる航空機の國際法上の地位 (ルネビレー事件に関するコラー教授の意見)	佐藤 友藏 [新聞] 六二 一 八六六
航空機の國際法上に及ぼす	

再び開戦が敵國人の工業所有權保護に及ぼす影響を論ず

敵國民の工業所有權	宿利 英治 [法記] 六四 二五 四
工業所有權戰時法論	平澤 均治 [辯協] 六四 一九 一九四
工業所有權法に於ける大審院の誤判	山田 三良 [法協] 六六 三五 九
	杉田金之助 [新聞] 六五 一 二四九二

【鑛業法】

鑛業法に就て	織田 萬 [内外] 四八 四 三
鑛業法に関する疑義	高野 茂基 [新聞] 六三 一 九四六
鑛業法釋義 (阪本三郎氏譯) 批評	市村 光惠 [京法] 六四 一〇 三
鑛業法第三一條と第三三條の二との調和	島本 哲郎 [新聞] 六六一 二六一
鑛業法第三條を論ず	鹽田 環 [法協] 六八 三七 九一〇
鑛業法第一九條及第二〇條の解釋に就て	中口 末松 [新聞] 六八 一 一六九二
支那の鑛業條例	只見 徹 [亞經] 六六一 二
佛蘭西鑛業法	杉山直次郎 [法協] 六二〇 三九 五八

【工業所有権】 【鑛業法】 【航空】

【航空】【航空法】【後見】

效果

現戦争に於ける航空機關に

依る都市攻撃を論ず

飛行機の墜落と損害賠償

敵國航空機の取扱

航空機と中立國

飛行將校も軍艦の乗組員な

り

海法と航空條約

Les Etats neutres sont-ils

libres d'interdire le survol

des aéroports belligerents

國際航空問題の將來と日本

安瀟 欽一【外時】六五五

杉村陽太郎【國際】六三三

謝花 寛濟【新聞】六〇一

石川 實【外時】六八三

松波仁一郎【法政】六九七

松波仁一郎【法協】六九三

金森徳次郎【新報】六〇三

森山武市郎【國圖】六〇九

謝花 寛濟【新聞】六〇一

航空法に就て

國際航空法規に就いて

航空法制定論

航空立法の準備を論ず

航空法制

瑞西航空法

航空法と空路設置の急務を

論ず

田宮準一郎【國圖】六三二

立 作太郎【外時】六四三

松波仁一郎【新聞】六五一

小山精一郎【國際】六七七

小山精一郎【國際】六七七

松波仁一郎【法協】六八三

松波仁一郎【海法】六九一

杉村陽太郎【國際】六三三

安瀟 欽一【外時】六五五

謝花 寛濟【新聞】六〇一

石川 實【外時】六八三

松波仁一郎【法政】六九七

松波仁一郎【法協】六九三

金森徳次郎【新報】六〇三

森山武市郎【國圖】六〇九

謝花 寛濟【新聞】六〇一

【後見】

本邦後見慣習一斑

民法施行と未成年者の後見

未成年者の代表に就て民法

の缺點

戸主の後見人は當然家族の

後見人たるを得ざるか

戸主か家族の後見人と爲る

は戸主権の效力なるか

民法第九〇八條第六號に所

謂「後見人に對して訴訟

を爲したる者」の意義

民法第九〇八條第六號に所

謂「後見人に對して訴訟

を爲し又は爲したる者」

の意義

學齡兒童の爲にする後見

東西對の後見制の比較

相續權回復、後見人免職、

親族會決議の無効又は取

消、身分關係確定の訴と

事物の管轄

騰龍 居士【新報】四三六

小川 平吉【辯協】四三二

石山 彌平【新報】四四二

服部 邦光【新聞】四三四

平島直太郎【新聞】四三四

一年有半【新聞】四四五

平島直太郎【新聞】四三五

島村他三郎【志林】四四一

中田 薫【國家】六六三

牧野菊之助【新報】六六二

先順位者の出現に因る後見

人又は保佐人の先格に就

て

後見人に關する戶籍の届出

に就て

【江九虎】

孫江二氏の社會主義

再び江亢虎氏の學說に就て

及川 恒忠【三學】六四九

及川 恒忠【三學】六五〇

松本 丞治【新報】六四五

福井才一郎【新聞】六四一

石川 文吾【國經】四四二

石川 文吾【國經】四四三

河上 肇【日經】四四三

石川 文吾【國經】四四二

黒澤 龍演【東經】四四四

三位 甚造【日經】六三六

神戸 正雄【經叢】六四一

村本 福松【商經】六五一

志賀志那人【日社】六六四

石川 文吾【新報】六九三

【後見】【江亢虎】【廣告】【抗告】

【抗告】

銀行の廣告と預金吸收策

廣告の心理的考察

廣告史觀

クロス・ワード・パズル應

用廣告

廣告映畫の新研究

銀行の廣告法に就て

シエルドン著「廣告要論」

輸出促進策としての廣告

刑訴上民訴第四五五條前段

の如き場合に之れか抗告

を許さざるや

抗告を許さざる豫審終結決

定の確定及び執行と我大

審院判例

改正刑事訴訟法第四五六及

四六七條

不起訴處分と抗告

豫審終結決定に對する被告

人の抗告權

左右田誠一【銀研】六二五

栗原 信一【經商】六二二

中村 茂男【經商】六三三

堀 圭三【商事】六四六

石卷 良夫【商事】六四六

小西 次郎【銀研】六四四

須藤 文吉【國經】六五〇

松宮 三郎【エユ】六五五

板倉松太郎【志林】四四二

富田 山壽【新報】四四三

杉生 紉【辯協】六二七

津田 進【法治】六二二

林 頼三郎【新報】六三三

【抗告】 【交互計算】 【公債】

付て

民

事

抗告の性質を論ず

抗告の違法棄却に對して抗

告を爲し得るや

登記官吏の決定又は處分に

對して抗告することを得

る者

證人忌避の原因なしとの決

定と即時抗告の起算點

再抗告棄却裁判に付ての大

審院の態度を論ず

民訴再抗告の範圍を擴張す

べし

福田甚二郎〔朝司〕六三三 三九

奥田 義人〔新報〕四七四 三四

中込 宗造〔新報〕四一九 一

森 作太郎〔新聞〕六五一 一〇七

阿部文二郎〔新報〕六六二 七

横見 洪二〔新聞〕六二二 二〇六

齋藤 巖〔新聞〕六二二 二五九

【交互計算】

交互計算に付て
交互計算契約に就て
手形と交互計算
交互計算の本質に就て

松本 恣治〔志林〕四六六 五 四二
竹田 省〔京法〕四二二 四 甲六
竹田 省〔京法〕四二二 四 甲七
江口 繁〔新聞〕六一一 一五九 三〇

【公債】

参照 外債。減債基金。財政。
社債。

公債整理の一新案

四分利公債下落の原因

公債と地方財政

減債か減税か

減債か減税か

減債か減税か

減債か減税か

減債か減税か

減債か減税か

減債か減税か

減債か減税か

減債か減税か

公債の弊害

公債價格下落の原因

伊國公債相場

國債減縮に就きて

四分利公債の下落に就きて

國債政策と國庫剩餘金

英國の戦時増税及び公債

英國の在外公債に及ぶ影響

英國の募債と本邦公債價格

の變動

四分半利軍事公債の發行に

就て

我公債政策に就て

谷奥 利吉〔洋經〕四四一 五三
谷奥 利吉〔洋經〕四四一 五六〇
田尻稻次郎〔新聞〕四四四 一 七三六
神戸 正雄〔日經〕四四五 一〇 七
堀江 歸一〔日經〕四四五 一〇 七
松崎藏之助〔日經〕四四五 一〇 七
阪谷 芳郎〔日經〕四四五 一〇 七
本多 精一〔日經〕四四五 一〇 七
瀧本 美夫〔日經〕四四五 一〇 七
月浦 山人〔日經〕四四五 一〇 七
谷奥 利吉〔日經〕四四五 一〇 八
星野 勉三〔三學〕六二七 二
小川郷太郎〔京法〕六二八 八
小川郷太郎〔京法〕六二八 二〇
神戸 正雄〔日經〕六二二 二
北崎 進〔東經〕六二六 八 一七〇
秋村 居士〔東經〕六三九 九 一七五
勝田 主計〔財經〕六四二 二 八
石橋 新藏〔東經〕六四七 三 一八二

マッケンナ〔洋經〕六四一 七六
小川郷太郎〔新報〕六五二 一

【公債】

戰時公債と國際公法

公債價格の維持策を論ず

國債償還の必要を論ず

財源としての公債

日本現時の公債政策に就き

て

公債價格を論ず

金融と公債

公債借換論

四分利借替公債の運命

國債借換の前途

鐵道公債に就きて

諸國國債の比較に於ける觀

察點

諸國國債政策の大勢と我國

の國債政策

内債借替非歡迎論

公債借換の魂膽と其相場

公債相場を論ず

企業界と公債借換

國債借換問題に就て

國債價格の維持に就て

國債償還歩合法

國債政策の矛盾

松波仁一郎〔國家〕四七三 一八 二〇七

堀江 歸一〔國經〕四九三 一 五

星野 勉三〔國經〕四九三 一 五

中野 武營〔東經〕四九二 一 毛 一四七

神戸 正雄〔日經〕四四一 五 四

神戸 正雄〔國經〕四四一 六 六

阪田 實〔東經〕四四一 六〇 一五三

堀江 歸一〔國經〕四四一 三 八

植松 考昭〔洋經〕四四一 一 二五

田中 穂積〔日經〕四四一 七 一

神戸 正雄〔京法〕四四一 五 七

神戸 正雄〔京法〕四四一 五 四

神戸 正雄〔京法〕四四一 五 三

溝淵 寅吉〔東經〕四四一 六一 一五九

黒澤 龍演〔東經〕四四一 六一 一五九

黒澤 龍演〔東經〕四四一 六一 一五九

黒澤 龍演〔東經〕四四一 六一 一五九

神戸 正雄〔日經〕四四一 六 二

服部文四郎〔日經〕四四一 一〇 二

小林丑三郎〔日經〕四四一 九 六

谷奥 利吉〔洋經〕四四一 一 五五二

國債償還問題に就て

英佛公債の成立と米國金融

市場

日露英佛公債の利廻

獨逸の軍費と軍事公債

歐洲戰時財政に於ける國債

の地位

國債償還と資本課税

國債と國際法

梁啓超氏の國債籌畫會に對

する意見

戰時公債募集の眞意義

募債の繼續は唯一の物價調

節策

公債募集策と物價問題

當面の通貨問題と公債政策

國債の本質に就いての考察

佛貨公債の購入整理

保險會社對國債問題

國際整理と生命保險官營

支那の内國債に就て

國際金融上より見たる戦後

の諸國國債に就て

國債の民衆化

工藤 重義〔國家〕六五三 二
内池 廉吉〔國家〕六五三 二
高城仙次郎〔三學〕六五〇 二
津村 秀松〔國經〕六六二 二
堀江 歸一〔三學〕六六二 一 十八
舞出長五郎〔國家〕六六三 二
立 作太郎〔國際〕六七七 三
井上 翠〔亞經〕六七二 三
本多 精一〔財經〕六七五 六
本多 精一〔財經〕六七五 六
石川 文吾〔國經〕六八三 七
濱口 雄幸〔財經〕六八六 二
阿部 賢一〔同論〕六〇一 五
佐藤 雄能〔會計〕六〇八 六
清水 文輔〔東經〕六一〇 八 二〇八
森 莊三郎〔國家〕六一三 六
木村増太郎〔亞經〕六一六 二
尾上 利治〔國經〕六一三 五
清水文之輔〔東經〕六一八 二〇六

【公債】

公債利拂の理論と實際	松島 喜作	〔銀叢〕六二	一	三
公債整理と預金部管理の改善	神戶 正雄	〔時經〕六二	一	一〇
公債の利廻と其前途	高柳 博次	〔エコ〕六二	一	一六
井上蔵相と公債政策	高柳 博次	〔エコ〕六三	一	一五
爲替相場と外貨公債	池田 了實	〔銀叢〕六二	一	一五
公債政策一新の必要	堀江 歸一	〔エコ〕六二	一	一六
減税か減債か	成瀬 義春	〔財經〕六二	一〇	二
外債か内債か	神戶 正雄	〔時經〕六二	一	一五
公債の研究	大田垣士郎	〔銀研〕六二	四	二一
支那内國公債	大村 欣一	〔亞經〕六二	七	三
英貨公債の目米取引	櫻田 勝三	〔銀研〕六二	四	二
スミスの公債論	小川郷太郎	〔經叢〕六三	一八	一
無謀なる募債政策	池田 龍藏	〔エコ〕六三	二	一
國債市場振興策	太田垣士郎	〔銀研〕六三	六	一
日本公債史論	鈴木 平吉	〔國經〕六三	二七	一
緊縮と非募債と減税	成瀬 義春	〔財經〕六三	二	一
豫算及公債政策改革の必要	神戶 正雄	〔時經〕六三	一	二
震災に依る喪失無記名國債	樋貝 詮三	〔新聞〕六三	二	二〇
證券の再交付	山室 宗文	〔エコ〕六四	三	二〇
戦債整理と歐洲復興問題	太田 義繁	〔銀研〕六四	九	一
記名國債の質入に就て	宇都宮 鼎	〔外時〕六四	四	一
戦債整理問題を論ず				

【公使】

駐劄使臣論	岡田 猛雄	〔新報〕四三	三	二
公使の特權	飯島龜太郎	〔國家〕四三	九	三
公使の動産差押事件	岡田 分平	〔國際〕四四	一〇	四
公使と私使	信夫 淳平	〔外時〕六八	三〇	三
公使及領事の司る結婚の效果	泉 哲	〔法治〕六四	四	六

【孔子】

儒墨老の社會主義	吉田 良春	〔國家〕四七	八	九
孔子教獎勵の聲	山形 東根	〔東經〕四一	一五	一四
孔孟の政治經濟說管見	田島 錦治	〔經叢〕六四	一	一五
大學を讀む	上杉 慎吉	〔法協〕六六	三五	一
論語に於ける經濟道德	齋藤 要	〔法政〕六九	一七	一〇
「大學」に見はれたる經濟思想	田島 錦治	〔經叢〕六五	三三	三

【郷士】

郷士の經濟的研究	神戶 正雄	〔經叢〕六五	二	四
舊熊本藩の郷士制度	大竹 虎雄	〔農經〕六四	一	三

【公使】 【孔子】 【郷士】 【合資會社】

【合資會社】

有限責任社員責任の性質	松本 丞治	〔法政〕四三	七	八
合資會社設立行爲と廢罷訴權	天野宗太郎	〔新聞〕四三	一	二七
合資會社に於ける有限責任社員責任	志田鉦太郎	〔志林〕四四	〇	九
舊商法の下に設立したる合資會社の解散	岸本 晋亮	〔新聞〕四四	〇	一
有限責任社員責任の性質	伊藤金次郎	〔新聞〕四四	一	四
合資會社の有限責任社員責任	岡野敬次郎	〔新報〕四四	一	一〇
合資會社の有限責任社員の時効援用權	松波仁一郎	〔法記〕六三	二	七
合名、合資會社の設立行爲は廢罷訴權の目的となるや並合名、合資會社の社員持分に對して金錢債權を執行することを得るや	雄本 朗造	〔新聞〕六三	一	一
有限責任制の擴張に就いて	兒林百合松	〔新報〕六六	二七	一
合資會社に於ける有限責任社員責任の本質を論ず	烏賀陽然良	〔京法〕六七	三	一
ライヘル氏の法律行爲に基				

歐米各國の國債利子課稅狀況	黒田 英雄	〔イン〕六四	一	三
歐洲諸國の戰時公債と合衆國	堀江 歸一	〔エコ〕六四	三	二
加藤内閣の公債政策	小川郷太郎	〔イン〕六四	二	三
我國の國債發行に就て	鳥居 庄藏	〔イン〕六四	二	一
記名國債の質入と其適用法規	鈴木 亨一	〔銀研〕六四	九	三
國債市場と國債政策	堀田 正由	〔金融〕六四	二	五
記名國債の適用法規に就て	板橋 菊松	〔イン〕六四	二	五
金融の繁閑と公債募集市場との關係	吉田 繁吉	〔銀叢〕六四	四	四
永遠國債を起すべし	堀田 正由	〔金融〕六四	二	三
國債長期清算取引に就て	岡田 純夫	〔商事〕六四	五	三
國債額の膨脹と減債基金	堀田 正由	〔金融〕六四	二	五
明治初期の公債政策	鈴木 信雄	〔經研〕六五	三	一
投資物として公債株券並に社債の優劣	高城仙次郎	〔法研〕六五	五	一
國債長期取引と短期資金	岡田 純夫	〔銀研〕六五	一〇	一
公債の償還期以降渡りの利	岩田 耕作	〔イン〕六五	三	三
札	豐浦 與七	〔都問〕六五	二	三
東京市の公債政策を論ず	岩崎 博	〔銀研〕六五	一〇	七
「物價指數公債」を論ず	田川大吉郎	〔洋經〕六五	一	七
公債の高と其利拂ひの方法				

【合資会社】 【公示催告手續】 【公式令】 【皇室】 【皇室典範】 【皇室に對する罪】

く有限責任論
 有限責任社員の間接責任
 合資会社の勞務出資社員が
 退社せし場合の持分拂戻
 に就いて
 有限責任社員に業務執行權
 及會社代表權を附與し得
 るや
 合資会社の無限責任社員は
 有限責任社員の持分を取
 得するを得るや
 合資会社の無限責任社員が
 有限責任社員の持分の讓
 渡を受け得るや
 無限責任社員の會社債權者
 に擔保供與と相續税法第
 三條の債務との關係
 法人の有限責任社員の責任
【公示催告手續】
 届出人の權利を留保したる
 除權判決の效力
 公示催告手續に依る除權判

小栗 國道〔法叢〕大八 一巻 一號
 西本辰之助〔三學〕大八 三 二
 奥田 大造〔會計〕大九 八 三
 江口 繁〔辯協〕大二 二六 二
 小杉 生〔新聞〕大ニ 一 二〇八四
 吉田政之助〔新聞〕大ニ 一 二〇九七
 竹内 恒吉〔新聞〕大ニ 一 二二七
 山内確三郎〔法新〕大四 一 五六
 前田直之助〔新報〕四四 一九 八

決等と手形抗辯
 公式令を讀む
 公式令雜疑
【皇室典範】
 皇室の事務と國家の事務
 皇室の大權
【皇室典範】
 皇室典範の性質
 皇室典範の性質を論じて皇
 族の特殊地位に及ぶ
 皇室典範の性質
 皇室典範と憲法との關係
 大典の眞意義
【皇室に對する罪】
 不敬罪に就て

松本 丞治〔新報〕大七 二九 九
 清水 澄〔新報〕四四 〇 一七 三
 金森徳次郎〔新報〕大九 三〇 三
 美濃部達吉〔國家〕大七 三三 一
 方圓 學人〔新報〕四三 七 七六
 一木喜徳郎〔法協〕四三 二 九
 美濃部達吉〔新報〕四三 一四 五七
 井上 密〔京法〕四三 三 二
 奥田 義人〔新報〕四三 二〇 一
 平澤 均治〔辯協〕大四 一九 二〇一
 古賀 廉造〔新聞〕四三 一 六

味逆事件の判決書を讀み所
 感を述ぶ
 井本 常治〔辯協〕四四 一五 一四九

【濠洲】 濠洲を見よ
 參照||日獨戰爭。

【膠州灣】 參照||日獨戰爭。

青島事情
 膠州灣に對する我國の態度
 膠州灣經路上の一問題
 青島陥落後にすべき對外政
 策
 膠州灣保護領貨幣制度
 青島還附論を評す
 膠州灣の處分と日米協約
 膠州灣の贈與
 青島に於ける專管又は共同
 居留地設置の結果を比較
 表出す
 青島專管居留地問題批判
 青島專管居留地設置の可否
 を論ず
 自開商埠地を論じて青島問

東郷 安〔國國〕大三 二 二
 植原悦次郎〔國國〕大三 二 一〇
 及川 恒忠〔外時〕大ニ 二〇 二四二
 田宮準一郎〔國國〕大四 三 一
 瀧波 正勝〔國家〕大四 二九 三
 蜷川 新〔國際〕大四 一三 五
 末廣 重雄〔外時〕大四 二 二四六
 蜷川 新〔外時〕大四 二 二五五
 高橋 作衛〔國際〕大八 一八 三
 蜷川 新〔外時〕大八 三〇 三六一
 泉 哲〔外時〕大八 三〇 三六一

【皇室に對する罪】 【濠洲】 【膠州灣】 【公證】 【工場】

題に及ぶ
 青島問題と國際聯盟
 青島の通貨並に金融

三枝 茂智〔國際〕大九 一八 九一〇
 蜷川 新〔外時〕大九 三 三六四
 武田 和吉〔長彙〕大五 六 二

【公證】
 伊國公證人法
 公證人手數料規則略義
 公證人法の所謂面識の意義
 英國に於ける民事訴訟仲裁
 並に公證制度の概觀
 公證事務に就て
 公證人の風紀の類廢
 英國の公證制度の調査
 新破産法と公證人の職務に
 就て

山内確三郎〔法記〕四四 二〇 一〇
 花 泉〔新聞〕四四 五 七九七
 池田寅二郎〔法記〕大ニ 二四 二二
 田中 誠夫〔新聞〕大ニ 一 九四七
 那波庄五郎〔新聞〕大五 一 一〇九五
 池田寅二郎〔法記〕大ニ 二七 九一
 竹井 生〔新聞〕大ニ 一 二二〇〇

【工場】
 工場監督實施の方法
 工場の進歩及び技術改良の
 發端たるべき職工の技能
 啓發に就て
 工場改善の方法

桑田 熊藏〔内外〕四三 二 三
 阪田 貞一〔日經〕四二 二 十
 黒澤 龍濱〔東經〕四二 六〇 一五〇

工場衛生に就て
カールツァイス工場に於ける職工待遇設備
科學的工場經營法
工場管理法に就て
獨逸に於ける工場衛生問題の研究

工場地選擇の標準
大阪工場分布概論
歐洲に於ける工場監督機關に就て
工場經營上に於ける貨銀支拂法

工場統計に就ての卑見
工場會計組織
本邦各種工場並其職工工場勘定の本質及び運用法
グロサート「標準工場會計並に其組織」
職工の不注意に因る工場災害並に之が豫防法
職工不熟練より起る工場災害並に其豫防法
冶金工の工場掠取を背景と

岡野辰之介〔洋經〕四三
高木二郎〔國經〕六九三
伊藤 猛〔國經〕六二一
岡 實〔洋經〕六三
山本美越乃〔經叢〕六五二
北川 浩〔國經〕六五二
伊藤 眞雄〔商經〕六五
山本美越乃〔經叢〕六六
三浦 辰二〔國經〕六六三
荒木 淺雄〔統集〕六七
吉田 良三〔會計〕六八
加藤 銀藏〔統集〕六八
中西新兵衛〔會計〕六九
佐生 齋知〔會計〕六九
勝田 一〔社政〕六〇
勝田 一〔社政〕六〇

して觀たる伊太利
工場設備と能率
工場娯樂としての音樂、舞踊及歌劇
安全運動と工場従業者の心身検査
工場計理の運用
工場作業の心理學的考察
工場音樂の創作と指導
作業方法の合理化
工場企業部に就て
來るべき國際労働總會と工場監督制度問題
工場自治制と工場労働課の職務
工場作業の精神物理的機能に及ぼす影響
英國に於ける工場疲勞研究
輓近の進歩
室内に於ける適温
工場災害發生の原因に関する研究
工場災害の豫防を論ず
對外放資と在外工場の設立

長岡保太郎〔社政〕六〇
若林 米吉〔社政〕六〇
小林 愛雄〔社政〕六〇
蒲生 俊文〔社政〕六〇
佐橋 賢次〔計理〕六〇
若林 米吉〔社政〕六二
小林 愛雄〔社政〕六一
高垣寅次郎〔商研〕六三
國松 豊〔商叢〕六二
吉坂 俊藏〔社政〕六二
鈴木 齋〔經商〕六三
桐原 葆見〔勞科〕六三
暉峻 義等〔勞科〕六三
石川 知福〔勞科〕六三
暉峻 義等〔勞科〕六三
蒲生 俊文〔經商〕六三
松崎 壽〔商經〕六三

工場統計規則の改正

工場能率と在郷軍人の利用
工場の換氣に関する研究
工場に於ける採光法規
工場に於ける販賣政策及び組織に就て
保健と工場經濟
工場災害の度數率と輕重率
事業家の責任と工場懇和會
出園工場
工場作業に於ける觸覺識識の變化
會社及工場票記入心得

〔統雜〕六三
〔エコ〕六三
〔勞科〕六四
〔法政〕六四
〔經論〕六四
〔經商〕六四
〔社政〕六四
〔社政〕六四
〔企社〕六五
〔勞科〕六五
〔統雜〕六五
〔京法〕六五
〔社政〕六九
〔社政〕六九
〔經究〕六〇
〔社政〕六〇

【工場委員會】

工場労働委員
我國に於ける工場委員會制度
我國工場委員會制度の現在及將來
工場委員會と労働組合
歐米工場委員會制度の發達と
ホイットリー案

戸田 海市〔京法〕六五
森田 良雄〔社政〕六九
森田 良雄〔經究〕六〇
久保田明光〔社政〕六〇

工場委員會と労働組合との關係に就ての考察
工場委員會制の實施に就て
米國に於ける工場委員會制度
チエヌク・スロヴァークに於ける工場委員會法
諾威に於ける工場會議法
工場委員會制度概觀
我國に於ける工場委員會制度
二十年前に工場委員會制を採用したる經驗
佛國に於ける工場委員會制度
工場委員會制度の日本労働者に對する價值
埃國工場委員會法
工場委員會制に對する一つの見方
經營權分配方法としての工場委員會制度
各國の工場委員會制度
工場委員會制度研究

久保田明光〔社政〕六〇
森田 良雄〔社政〕六〇
山樹 忠好〔社政〕六一
黒川 小六〔社政〕六一
黒川 小六〔社政〕六一
藤井 悌〔社政〕六一
久保田明光〔社政〕六一
榎田 藤郎〔社政〕六一
長岡保太郎〔社政〕六一
田邊 忠男〔國家〕六一
數藤 鐵臣〔法政〕六二
青木 節一〔社政〕六二
田中 貢〔經商〕六三
田中 貢〔經商〕六四
田中 貢〔資料〕六四

工場衛生に就て
カールツァイス工場に於ける職工待遇設備
科學的工場經營法
工場管理法に就て
獨逸に於ける工場衛生問題の研究

工場地選擇の標準
大阪工場分布概論
歐洲に於ける工場監督機關に就て
工場經營上に於ける貨銀支拂法

工場統計に就ての卑見
工場會計組織
本邦各種工場並其職工工場勘定の本質及び運用法
グロサート「標準工場會計並に其組織」
職工の不注意に因る工場災害並に之が豫防法
職工不熟練より起る工場災害並に其豫防法
冶金工の工場掠取を背景と

岡野辰之介〔洋經〕四三
高木二郎〔國經〕六九三
伊藤 猛〔國經〕六二一
岡 實〔洋經〕六三
山本美越乃〔經叢〕六五二
北川 浩〔國經〕六五二
伊藤 眞雄〔商經〕六五
山本美越乃〔經叢〕六六
三浦 辰二〔國經〕六六三
荒木 淺雄〔統集〕六七
吉田 良三〔會計〕六八
加藤 銀藏〔統集〕六八
中西新兵衛〔會計〕六九
佐生 齋知〔會計〕六九
勝田 一〔社政〕六〇
勝田 一〔社政〕六〇

して觀たる伊太利
工場設備と能率
工場娯樂としての音樂、舞踊及歌劇
安全運動と工場従業者の心身検査
工場計理の運用
工場作業の心理學的考察
工場音樂の創作と指導
作業方法の合理化
工場企業部に就て
來るべき國際労働總會と工場監督制度問題
工場自治制と工場労働課の職務
工場作業の精神物理的機能に及ぼす影響
英國に於ける工場疲勞研究
輓近の進歩
室内に於ける適温
工場災害發生の原因に関する研究
工場災害の豫防を論ず
對外放資と在外工場の設立

長岡保太郎〔社政〕六〇
若林 米吉〔社政〕六〇
小林 愛雄〔社政〕六〇
蒲生 俊文〔社政〕六〇
佐橋 賢次〔計理〕六〇
若林 米吉〔社政〕六二
小林 愛雄〔社政〕六一
高垣寅次郎〔商研〕六三
國松 豊〔商叢〕六二
吉坂 俊藏〔社政〕六二
鈴木 齋〔經商〕六三
桐原 葆見〔勞科〕六三
暉峻 義等〔勞科〕六三
石川 知福〔勞科〕六三
暉峻 義等〔勞科〕六三
蒲生 俊文〔經商〕六三
松崎 壽〔商經〕六三

【工場閉鎖】 【工場法】

【工場閉鎖】 同盟罷工を見よ

【工場法】

工場法制定反對論を評す	戸田 海市	〔日経〕	四二	二
工場法制定の準備	戸田 海市	〔日経〕	四二	三
工場法論	金井 延	〔法協〕	四二	二六
工場法管見	關 一	〔國經〕	四二	七
工場法案と妊婦労働	守屋源次郎	〔日経〕	四二	六
工場法案概見	能美 茂雄	〔日経〕	四二	六
工場法案を評す	豊原 又男	〔東経〕	四二	六〇
工場法案概評	戸田 海市	〔新聞〕	四二	一
工場法案に就て	戸田 海市	〔京法〕	四二	一
續工場法管見	關 一	〔國經〕	四二	八
工場法と職工保険	栗津 清亮	〔日経〕	四二	八
工場法と犯罪檢舉	岡 實	〔刑評〕	四二	二
工場法案に就て	藤田藤一郎	〔新聞〕	四二	一
新工場法案を評す	豊原 又男	〔東経〕	四二	六〇
工場法案を評す	片山 潛	〔洋経〕	四二	一
工場法制定の精神を論じて 我法案に及ぶ	山本美越乃	〔京法〕	四二	一

工場法の制定に就て

工場法と農業

工場法の規定と外國工場法の規定参照

工場法案に就て

工場法は社會政策法に非ず

工場法と社會政策に就て

工場法と労働者保険

工場法の實施に就いて

工場法の扶助義務(工場法第一五條の研究)

工場法の主義精神

工場法令の制定及其施行に就て

工場法令の罰則に就て

工場主の責任

労働保險の創設乎工場法の獎勵乎

工場法改正と社會的施設

工場法の改正特に深夜業の禁止

工場法改正案の労働時間問題に就て

工場法改正案に對する意見

岡 實	〔國家〕	四四	二五	一一
横井 時敬	〔日経〕	四四	八	一〇
岡 實	〔國家〕	四四	二五	一一
大崎萬太郎	〔新聞〕	四四	一	一〇
小林丑三郎	〔東経〕	四四	六三	一五
山本美越乃	〔東経〕	四四	六三	一五
關 一	〔國經〕	四四	六三	一五
大崎萬太郎	〔東経〕	四四	六三	一五
朗造	〔京法〕	四五	一一	三
岡 實	〔財経〕	四五	三	六
岡 實	〔法協〕	六六	三五	一五
泉二 新熊	〔國國〕	六六	五	三
宮本 英雄	〔法論〕	六六	一	五六
瀧谷 善一	〔國經〕	六七	二四	一六
成瀬 義春	〔財経〕	六七	二〇	六
神戸 正雄	〔時経〕	六三	一	七
神田 孝一	〔社政〕	六三	一	三

書

改正工場法の施行に就て
工場法施行令改正案私評
工場法第一三條(労働警察の法律的性質について)

英國製造所法の沿革及内容
英國工場法の淵源
英國工場法實施の概況
英國及印度工場法に就て
英國の新工場法案

【交戦團體】

交戦者の資格を論じて旅順
港事件に及ぶ
交戦團體の承認と第三國の地位
秋山博士の交戦團體論を評す
交戦團體の承諾に關する松
原學士の評論を讀む
交戦團體を論ず
交戦團體の承認の效力を論

協 調 會	〔社政〕	六二	一	三二
神田 孝一	〔社政〕	六二	一	三五
神田 孝一	〔社政〕	六二	一	三七
木村 清司	〔社政〕	六五	一	六七
伊藤 祐忠	〔法協〕	三三	一三	四七
高橋誠一郎	〔三學〕	四三	三	五六
勝田 一	〔財経〕	六五	三	三
吉坂 俊藏	〔社政〕	六三	一	四九
花井 卓藏	〔新報〕	四三〇	七	七
秋山雅之助	〔國際〕	四六	二	一
松原 一雄	〔國際〕	四四二	八	三
秋山雅之助	〔國際〕	四四二	八	四一五
立 作 太 郎	〔國家〕	四四五	二	一

【公 訴】

裁判官の言語舉動を論じて
刑事訴訟法の干渉主義に及ぶ
檢事の起訴狀に公訴事實の記載なきものは無効に非ざるか
一事不再整の原則と連續犯
所謂微罪不檢舉主義に就て
申告罪の告訴
刑事訴訟法上の権利拘束

立 作 太 郎	〔國家〕	四四五	二六	一
有賀 長雄	〔國家〕	四四五	二六	二
立 作 太 郎	〔志林〕	四五	一八	二
泉 哲	〔三學〕	六五	一〇	五
泉 哲	〔國際〕	六七	一六	八
原 嘉道	〔新報〕	四三〇	七	七
古谷新太郎	〔新聞〕	四三七	一	一八三
中川孝太郎	〔法協〕	四三八	一	一〇
則 鳴	〔新聞〕	四三八	一	二六三
中川孝太郎	〔法協〕	四三九	二	七
富田 山壽	〔京法〕	四四	三三	一

【工場法】 【交戦團體】 【公訴】

【公訴】

豫審免訴後の再起訴の性質 豊島 直通〔新報〕四二八 五號

起訴の事實 中川孝太郎〔法協〕四二六 二二〇

強姦行為に對する公訴には強姦成傷の行為を包含するや 牧野 英一〔新報〕四二八 七

再起訴の許可ありたる時は 大場 茂馬〔新報〕四二八 二

は檢察は公判に起訴すべきや將た豫審に求むべきや 板倉松太郎〔志林〕四二一 三

連續犯の一部に付確定判決ありたる後其他の部分に對しては公訴を提起することを得るや 板倉松太郎〔志林〕四二一 三

刑事訴訟法上の權利拘束 犯時に於て親告罪ならざりし罪が其後親告罪と爲りし場合の起訴效力に就て 大野 豹吾〔新聞〕四二二 五四二

犯罪と公訴時効との關係を論ず 武川 佳海〔新聞〕四二二 六五九

微罪不檢舉主義 小林 芳郎〔刑評〕四二二 四

公訴權の性質 宮本 英脩〔志林〕四二二 七

刑法施行法に於て刑罰法第六三條を削除したる理由 板倉松太郎〔志林〕四二二 八

詐欺破産罪の公訴時効 富田 山壽〔新報〕四二二 五十六

公訴口頭辯論の内容及び要件 板倉松太郎〔刑評〕四二二 四一

刑事訴訟に於ける起訴權並に檢察處分に對する矯正方法 山岡萬之助〔法記〕四二二 三五

親告罪の告訴に就て 板倉松太郎〔新聞〕四二二 七八

公訴の確定裁判の理由は私訴の裁判を羈束すべきものに非ざるや 板倉松太郎〔志林〕四二二 二

親告罪の告訴及其取下の不可分を論ず 横山勝太郎〔辯協〕四二二 一七四

親告罪の告訴と捜査處分との關係 林 頼三郎〔新報〕四二二 七

條件附告訴の效力 林 頼三郎〔新報〕四二二 八

起訴猶豫に就て(牧野博士の「刑事訴訟法と微罪不檢舉主義」を讀む) 富田 山壽〔新報〕四二二 二

起訴猶豫に就て(富田教授に答ふ) 牧野 英一〔志林〕四二二 三

正式裁判請求の申立と親告罪に於ける告訴 草野 豹郎〔新報〕四二二 九

再び起訴猶豫に就て(牧野博士の答を讀む) 富田 山壽〔京法〕四二二 二

管轄違と公訴不受理との兩

論點の同時に起りたる場合に於ては先づ何れの論點に對し裁判を與ふべきや 板倉松太郎〔新報〕六六二 七 五號

刑の免除すべき場合と公訴時効との關係 林 頼三郎〔新報〕六六二 七 八

訴追條件を缺きたる公訴の效力 板倉松太郎〔新報〕六六二 七 二〇

缺如せる告訴追完の效力 板倉松太郎〔新報〕六六二 七 二二

公訴の時間上の範圍 板倉松太郎〔新報〕六六二 七 二八

親告罪の告訴に關する意見を論明し改正刑事訴訟法起草案者の一考を求む 宮路 貞一〔法叢〕六八二 六

共犯者の一人に對し確定判決ありたる後に於ける告訴放棄の效果 林 頼三郎〔新報〕六〇三 三

公訴附帶の私訴と破産關係 加藤 正治〔評論〕六〇〇 八

刑事訴訟改正案と尊親屬に對する告訴告發 増永 正一〔朝司〕六一一 三

刑事訴訟上管轄と權利拘束 矢追 秀作〔法政〕六一一 九

公訴權の理論 小野清一郎〔志林〕六二二 五 一

公訴權の理論に就て 牧野 英一〔志林〕六二二 五 二

告訴及告發の主體 津田 進〔法曹〕六二三 二 八九

新刑事訴訟法と告訴權の拋棄 林 頼三郎〔新報〕六三三 四 五

起訴の公正 大森 洪太〔法政〕六三三 二 一

刑事訴訟法第二七九條異論 太田孝之助〔新聞〕六三三 一 二〇八

重ねて起訴の公正に付て 大森 洪太〔法政〕六四三 三 一

起訴便宜主義に就て 泉二 新熊〔法曹〕六四三 三 五

不起訴主義不問主義 大森 洪太〔新聞〕六四五 一 二四九七

告訴自制論 高山 和雄〔法公〕六五〇 六 六

電話に依る公訴の提起 津田 進〔新報〕六五三 六 六

重罪の控訴 小松謙太郎〔新報〕四二二 一 四

附帶控訴論 花井 卓藏〔新報〕四二二 四 四

刑事控訴審が一審判決を變更すべき程度 佐藤 博愛〔新報〕四二二 一〇八 一〇八

宮城控訴院の新判例に就て 佐々木清綱〔新聞〕四二二 一 九二

再び被告人の控訴申立書の自署問題に就て 佐々木清綱〔新聞〕四二二 一 九四

刑事控訴を廢すべし 倉富勇三郎〔法記〕四二二 一六 一

控訴審に於て私訴に付關席判決を爲すべき場合に準據すべき規定 板倉松太郎〔志林〕四二二 一〇 四

【公訴】 【控訴】

【控訴】【黃宗義】【皇族】【耕地整理】【交通】

四〇〇

控訴の拋棄と取下の別	阿部文二郎〔新報〕六〇三	一號
境界確定の判決に對する控訴の申立	加藤 正治〔法協〕六一四	六
管轄違の判決に對する被告の控訴と差戻判決の效力に就て	松永 志逸〔法曹〕六二一	四
獨立の控訴と看做さるる附帶控訴の期間	前田直之助〔新報〕六二二	二
管轄違の判決に對する被告人の控訴申立と之に基く差戻判決の效力を論ず	白濱 直衛〔法曹〕六二二	二
控訴裁判所が初めて權利行使の留保を爲す場合には差戻判決を爲すことを得るか	岩村 流芳〔新聞〕六二五	一、二、四、七

【黃宗義】

黃宗義の政治經濟思想

小島 祐馬〔經濟〕六七七

【皇族】

皇室典範の性質を論じて皇族の特殊地位に及ぶ

美濃部達吉〔新報〕四三七

皇族法一斑
皇族王族結婚と皇室典範
明代の皇族

美濃部達吉〔法協〕六七三
松本 重敏〔新聞〕六七一
清水 泰次〔國家〕六〇三

【耕地整理】

參照||農地。

耕地整理法に關する疑義
耕地整理に就て
耕地整理に關する我疑惑
勸業債券と耕地整理
耕地整理に就て
耕地整理の方針に對する一疑義

山内 正瞭〔國家〕四三九
横井 時敬〔日經〕四四一
財部 靜治〔京法〕四四一
志村源太郎〔東經〕四四一
志村源太郎〔東經〕四四一
氣賀 勘重〔三學〕四四一

【交通】

思想交通の統計
ライトゲン「近代交通の發達」(譯)
本邦驛傳の沿革(講演)
國家と交通機關
國家と交通機關との關係

岡松 徑〔統集〕四四一
朝比奈知泉〔國家〕四四一
前島 密〔國家〕四四一
田島 錦治〔新報〕四四一
小林丑三郎〔國家〕四四一
船、航空、交通稅、港灣、市街鐵道、自動車、通債、鐵道、電氣鐵道、飛行機。
參照||運河、運輸、海運、汽

交通の意義

交通方法の觀念及分類

下村 宏〔志林〕四三三

交通と法律

手塚虎太郎〔新報〕四三九

歐亞聯絡の新三大通路

神戶 正雄〔日經〕四四〇

比斯馬克の交通政策

松岡 均平〔法協〕四四二

神代の交通

河田 嗣郎〔京法〕四四三

都市の交通

増井 幸雄〔三學〕四三八

歐亞の交通と支那

瀧波 正勝〔日經〕四三二

世界交通に於ける移民運送の意義

岡田 重次〔國經〕四三二

交通機關と經濟との關係

増井 幸雄〔三學〕四三八

交通事業と礦業との關係

猪股 洪清〔辯協〕四一九

交通機關より見たる我國國民性

下村 宏〔國國〕四三二

露西亞の交通

下村 宏〔國國〕四三二

獨逸植民地交通政策

下村 宏〔國國〕四三二

戰爭と米國交通

下村 宏〔國國〕四三二

最近獨逸機關の發達

下村 宏〔國國〕四三二

交通統計に就て

下村 宏〔國國〕四三二

支那の生産力と交通機關の關係

下村 宏〔國國〕四三二

交通機關論の交通論に於ける地位
交通の密度に就て
戰爭と交通
古代日滿の交通
關西に於ける「交通不安」の社會的意義
近距離(中都市以下に於ける)交通機關の動力
交通機關の罷業事件
デュブイ著交通機關の利用に及ぼす使用料の影響に就いて
交通賃率決定の要素としての費用
海陸聯絡設備並小運送に就て
交通賃率と交通價値

小島昌太郎〔經濟〕六九一
織田松太郎〔商經〕六一一
松下 芳雄〔國知〕六二二
下田 禮佐〔商濟〕六二二
森戶 辰男〔我等〕六三六
坂本 陶一〔國經〕六三二
堀江 歸一〔エコ〕六三二
中山伊知郎〔商研〕六三二
島田 孝一〔早商〕六四一
寺島 成信〔經論〕六四三
島田 孝一〔早商〕六四三
小川郷太郎〔京法〕六二二
神戸 正雄〔經濟〕六二二

【交通稅】

交通稅を論ず
交通稅の補足すべき給付能力

小川郷太郎〔京法〕六二二
神戸 正雄〔經濟〕六二二

【交通】【交通稅】

四〇一

【公判】【神戸】

る救済方法

空扶斯豫防液事件の判決に就て

刑事判決書の改善を論じて直接審理の程度に及ぶ

附帯犯論

附帯犯論

花井氏の附帯犯論を讀む官選辯護制度改良私議

刑事誤判問題

公判手續の改正

刑事誤判に就て

公判に於ける證人訊問

附帯犯論に序す

不當に認められたる權利拘束(刑事)に對する判決

公判始末書に就て

大正六年に於ける重要な刑事訴訟の判例

刑事訴訟法第百八十二條に所謂被告人の不當の行狀

林 頼三郎〔新報〕六四二五二

堀江專一郎〔辯協〕六四一九一九

磯谷幸次郎〔法記〕六五二六二

花井 卓藏〔新報〕六五二〇一三

大場 茂馬〔評論〕六五二四二

勝本勘二郎〔新聞〕六五二二二

大澤 眞吉〔辯協〕六五二〇五

石山 彌平〔辯協〕六五二〇五

岸井 辰雄〔辯協〕六五二〇九

飯島 爾〔新聞〕六五二〇九

山岡萬之助〔法政〕六六二四一

今村力三郎〔辯協〕六六二三三

小野清一郎〔志林〕六六一九五

泉二 新熊〔新報〕六六二七八

板倉松太郎〔志林〕六七二〇一

の意義に就て

時效中斷の原因たる公判手續

大審院二大刑事判例の變更

付て

徳川時代の刑事判決例

女學生の公判傍聴に關する感想

公判調書の效力と形式違背に關する大審院判決の批判

官選辯護判に就て

刑事裁判革新の寶刀

公判準備手續の運用

谷 健次郎〔新聞〕六九一七五

板倉松太郎〔新報〕六二二一〇

泉二 新熊〔新聞〕六三二〇六

黒川 眞前〔法曹〕六三二〇七

小野 實雄〔新聞〕六三二二九

荒木 櫻洲〔新聞〕六三二二五

高山 和雄〔辯協〕六四二九一

布施 辰治〔辯協〕六四二九六

坂本 英雄〔法政〕六五二四五

酒井 順藏〔統集〕四一三二七

酒井 順藏〔統集〕四一三二七

花房道三郎〔統集〕四一三二七

節 堂 生〔東經〕四一三二七

B N〔東經〕四一三二七

藤原銀次郎〔財經〕四一三二七

【衡平法】

徳川時代の衡平法論

【公法】

公法私法の別を詳す

公法學に就て(講演)

萬國公法會議議事書の報告

公法と云ふ言語に就ての話

公法は權力關係たるを説明す

公法及國家主義

公法は權力關係の規定たるを論ず

公法私法を區別する標準

八橋氏の公法私法の區別説を讀む

公法の研究方法を論じて豫算の性質に及ぶ

三浦 周行〔經叢〕六五二三三

小幡 清全〔都問〕六五二二四

豊浦 與七〔法叢〕六五二五二

井原 師義〔法協〕四七二五

斯波淳六郎〔國家〕四三三七

金子堅太郎〔國家〕四三三七

末岡 八東〔法協〕四六二二

穂積 八東〔國家〕四二七六

穂積 八東〔新報〕四二八五

穂積 八東〔法協〕四三〇一

八橋 容〔法協〕四三二二

日山彦十郎〔新報〕四三三九

一木喜徳郎〔新報〕四三三九

公法と私法の區別を論ず

公法學の獨立

公法の特質

穂積先生の「公法の特質」を讀む

「公法の特質」に付美濃部博士の駁論に答ふ

行政法と公私法の接觸

公法私法の區別に就て

公法の本質

公法に依る民事法系の變形

公法的法律行為概論

明治四十三年の公法界

公法と私法との關係を論ず

公法上の行為に於ける私法名義

公法と私法との中間區域

本島(臺灣)人内地人と公法及私法

ベルギーに於ける公法の變遷

公法私法の區別を否認する見解に就て

戸水 寛人〔國家〕四二四一五

上杉 慎吉〔國家〕四三六二七

穂積 八東〔法協〕四三六二七

美濃部達吉〔法政〕四三七八

穂積 八東〔法政〕四三七八

織田 萬〔明學〕四三三八

井上 密〔京法〕四三三九

寛 克彦〔國際〕四三三九

佐々木惣一〔京法〕四三三九

美濃部達吉〔新報〕四四二二

美濃部達吉〔國家〕四四二五

美濃部達吉〔國家〕四四二七

市村 光恵〔京法〕六二二九

美濃部達吉〔國家〕六三二六

伊藤 正介〔臺法〕六九二四

菊池 勇夫〔國家〕六三二八

渡邊宗太郎〔法叢〕六三二二

【神戸】【衡平法】【公法】

【公法】 【公民】 【公務の執行を妨害する罪】 【合名会社】

公法關係と私法關係との接

河村 大助〔辯協〕大九二九 九
板倉 進〔社科〕大四一 七

【公 民】 参照||譯化。臣民。

英國公民權(譯) 無名氏〔國際〕四四一〇 八
公民の社會學的考察 深作 安文〔社雜〕大四一 一八

【公務の執行を妨害する罪】

官吏の職務を行ふを妨害する罪に就て 岡田朝太郎〔辯協〕四七 四 四
公務執行妨害の罪を論ず 大場 茂馬〔法記〕四四二〇 一八
巡査の説諭妨害と公務執行妨害罪に關する大審院判決の批判 荒木 櫻洲〔新聞〕大三一 三九七

【合 名 會 社】

合名會社の社員に非ざる者を業務執行員と爲すことを得ず 松波仁一郎〔明法〕四三七 一
合名會社の總社員の代表權 松波仁一郎〔明法〕四三七 一

を除外することを得るや

二名より成る合名会社に於ける社員の除名

二名より成る會社社員の除名に關する大阪地方裁判所の判決を評す

二名より成る合名會社社員の除名に就て 伊藤藤三郎〔新聞〕四四一 五五七
判事反響先生に答ふ 反響 生〔新聞〕四四二 五六〇
合名會社の人格に關する一大論争 伊藤藤三郎〔新聞〕四四二 五六三

合名會社の設立行爲は廢罷訴權の目的と爲すことを得るか 烏賀陽然良〔京法〕大三九 四
合名、合資會社の設立行爲は廢罷訴權の目的となるや並合名、合資會社の社員の持分に對して金錢債權を執行することを得るや 松波仁一郎〔新聞〕大三一 九八六

合名會社の退社員が持分の拂戻として受けたる不動産の登録稅率 雄本 朗造〔新聞〕大三一 九八六
合名會社社員の責任 雄本 朗造〔京法〕大五一 一
田中耕太郎〔法協〕大七二 七二一

合名會社の計算

合名會社社員の持分 佐藤 雄能〔會計〕大九八 一三
合名會社社員の持分の本質 西本辰之助〔三學〕大九一四 五

社員除名論

合名會社社員の持分を論ず 松本銀太郎〔國國〕大九八 二
合名會社の機關 廣瀬 正雄〔新聞〕大二三 一〇七
水口 吉藏〔法政〕大二三 一〇九
水口 吉藏〔法政〕大四四 四

【效 用】 参照||限界效用。

效用遞減の法則の擴張 河上 肇〔京法〕四四四 六 七
效用遞減の法則成立の根據 河上 肇〔三學〕四四六 二

犧牲の研究 河上 肇〔國家〕四四二 二
所謂效用遞減の法則中に包含せられつゝある一誤謬に就て 河上 肇〔國家〕四四五 二
高城仙次郎〔國家〕四四五 二 四
高城仙次郎〔國家〕四四五 二 四

河上 肇〔京法〕大二八 八
河上 肇〔京法〕大二八 八
小島 祐馬〔經叢〕大六四 六

河上 肇〔京法〕大二八 八
河上 肇〔京法〕大二八 八
小島 祐馬〔經叢〕大六四 六

河上 肇〔京法〕大二八 八
河上 肇〔京法〕大二八 八
小島 祐馬〔經叢〕大六四 六

河上 肇〔京法〕大二八 八
河上 肇〔京法〕大二八 八
小島 祐馬〔經叢〕大六四 六

河上 肇〔京法〕大二八 八
河上 肇〔京法〕大二八 八
小島 祐馬〔經叢〕大六四 六

【合名會社】 【效用】 【公羊家】 【公用徵收】

效用の辯

效用遞減の法則の根據に就て 大野 辰見〔商經〕大八一 一四
全部效用と消費者餘利(キヤナン) 高城仙次郎〔三學〕大三一 七 九
Dutilleulの倫理的意義 古屋 美貞〔同論〕大二三 一四
數理學派に於ける利用遞減理論 岸 與詳〔長彙〕大二三 三
寺尾 琢磨〔三學〕大三一 一八
古典的價值學說と效用概念 高橋誠一郎〔三學〕大四一九 二
リフマンの限界餘利均等の法則 丸谷 喜市〔國經〕大五四〇 三

公羊家の理想とする大同の社會 小島 祐馬〔經叢〕大八八 六

【公 用 徵 收】 参照||土地收用。

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

公用徵收法大意 一木喜徳郎〔法協〕四三九 一四
公法上の賠償を論ず 泉二 新熊〔國家〕四三四 一五
行政地役論 織田 萬〔内外〕四三三 四
公の企業を買収と私權 水野鍊太郎〔國家〕四四〇 二
國權の適法なる行爲による

【公用徴収】 【功利主義】 【航路】 【講和】

財産損失に對するの補償 副島 義一〔法協〕四二六 八九號
 公用徴収と軍事徴収との關係 島村他三郎〔志林〕四四一 一〇 九
 公用徴収法に於ける補償を論ず 佐々野章邦〔法政〕六七五 八

【功利主義】

デウイド・ヒュームの奢侈論と其功利主義的倫理 高橋誠一郎〔三學〕六九二 四
 功利主義と生産政策 堀 經夫〔經叢〕六一 一 五
 ジョン・スチュアート・ミルの功利主義に就いて 宇佐美 洵〔三學〕六三二 八 一

【航路】

航海獎勵法案 伊吹山徳司〔法協〕四九一 四 三一五
 航海及航路に關する政策 伊吹山徳司〔國家〕四三六 一七 二九二
 韓國の通信機關及航行自由問題 松宮春一郎〔外時〕四三八 八 九
 布哇轉航禁止論 根來 源之〔國際〕四四四 九 八
 航路補助問題と海運助成の精神 坂本 陶一〔國國〕六三二 二 一
 沿岸航海開放すべからず 伊藤重治郎〔外時〕六三〇 二 三〇 二三四

參照 海運。汽船。船舶。

【講和】

遠洋航路補助問題に就て 仲小路 廉〔財經〕六四二 六
 支那内水路 〔資料〕六五二 三
 中欧貫通水路計畫 〔資料〕六七四 六
 日支經濟關係と連絡航路の前途 下田 禮佐〔長彙〕六一 一
 松黒兩江航江權問題 〔資料〕六一 八 三
 日本に於ける當面の海事問題 寺島 成信〔海法〕六三 一 九
 國際公法上講和論 參照 歐洲戰爭。日清戰爭。日露戰爭。平和。
 債金の請求 中村 進午〔國家〕四八 一 一〇二
 降服條約論、附丁汝昌降服事件の顛末 中村 進午〔外時〕四三八 八 八九
 講和談判と休戦 花井 卓藏〔新報〕四六 一 五 二
 講和に關する諸慣例の綜合的考察 立 作太郎〔國際〕四三六 三 一〇
 世界五大講和會議の史實と其の比較 牧野 義智〔國際〕六七七 三 三
 講和會議所感 牧野 義智〔國國〕六八七 五 一八
 米國前國務卿ランシング氏の講和秘録を評す 近衛 文麿〔日社〕六九七 四 五
 添田 壽一〔國聯〕六一〇 一 三

【港灣】

港灣行政論 伊吹山徳司〔國家〕四三〇 年 卷 二 三三
 商港の變遷 關 一〔國經〕四四〇 三 一
 商港論 堀 光延〔國經〕四四〇 三 甲六
 露國極東自由港問題 田中 栗〔國經〕四四〇 三 六
 英國に於ける商港經營 内池 廉吉〔國經〕四四一 四 一
 獨逸に於ける商港經營 内池 廉吉〔國經〕四四一 四 五
 米國に於ける港灣行政 内池 廉吉〔國經〕四四一 四 六
 自由港問題 津村 秀松〔國經〕四四一 五 二
 神戸築港の前途に就て B N〔東經〕四四二 六〇 一五〇九
 東京築港を論ず 松尾小三郎〔東經〕四四五 六六 一六六〇
 商港論 關 一〔日經〕六九二 三 三
 東京灣築港の研究 田川大吉郎〔洋經〕六九二 三 三
 自由港を論ず 河津 暹〔日經〕六二二 四 一
 河津 暹〔法協〕六二二 四 一
 商港視察談(講演) 河津 暹〔國家〕六二二 七 八
 米國の港灣施設改良問題 川崎 兼秀〔統雜〕六五 一 三七
 京都府の港灣 阿部 秀助〔三學〕六六二 二 一
 我邦海港の史的研究(博多と堺) 阿部 秀助〔資料〕六八五 四 一
 浦港以北の西比利亞諸港 阿部 秀助〔資料〕六八五 四 一

【港灣】 【コーザツク】 【コーヘン】 【コーラー】 【コール】

我國の自由港問題

河津 暹〔經論〕六二二 二
 【コーザツク】 (Konrad Cosack, 1855-) 大谷 美隆〔國國〕六一一 一〇 一
 コーザツク教授と語る
 【コーヘン】 (Julius Henry Cohen, 1873-) 〔資料〕六一 一 一七
 團體交渉と立法 コーヘン〔社政〕六一 一 一七
 【コーラー】 (Joseph Kohler, 1849-1919) 法律繼受に關するコーレル教授の所見 吾孫子 勝〔志林〕四四三 三 二四
 コーラーの法律解釋論 木村 龜二〔志林〕六一 二四 九二
 コーラー教授の千五百マール契約に對する見解 水口 吉藏〔評論〕六三二 二 一九
 コーラー教授自由意思論 小林 俊三〔辯協〕六六二 三 三八
 故ヨッセフ・コーラー教授に就て 牧野 英一〔法協〕六九三 八 二
 (Geoge Douglas Howard Cole, 1889-)
 コールの産業自治論 高田 保馬〔我等〕六九二 一

【コイル】【コイル・マネー】【小切手】

コイルの産業自治論
 コイル國家觀の補論
 コイルの大労働組合論
 ルソーとコイルの議會否認論

英國労働組合の現状（コイル氏及ブランシャード氏の近著紹介）
 コイル「フアッシュスト黨の労働組合政策」（譯）

【コイル・マネー】 貸付を見よ

【小切手】 参照II小切手法。手形。

小切手の支拂保證
 小切手の引受に就て
 清水鐵太郎君の「小切手の法定呈示期間に就て」を讀む
 保證小切手の效力を論ず
 支拂保證小切手に付て
 玉木君の「支拂保證小切手

に付て」を讀む
 小切手の支拂保證に付きて指定銀行に付て
 小切手に就て
 小切手の償還請求に就て
 小切手授受の効果を論ず
 小切手に關する疑議に就て比較小切手法及小切手要件論
 偽造及變造小切手
 小切手の實質上の要件並其形式
 小切手より生ずる損害は何人の負擔に歸すべきや
 小切所持人の支拂人に對する直接訴權
 甲又は持參人に支拂ふべき小切手に就て
 支拂保證小切手論
 保證小切手に就て
 簿記學上より保證小切手を論ず
 小切手の支拂保證に就て
 小切手支拂保證に就て

- 松本 重敏 [明法] 四三三 一六
- 土方 寧 [法協] 四三三 一八
- 坂本 生成 [新聞] 四四四 一五
- 菫淵 清雄 [新聞] 四四四 一五
- 菫淵 清雄 [新聞] 四四四 一五
- 岡野敬次郎 [新聞] 四四四 一五
- 高橋 捨六 [新聞] 四四五 一〇一
- 高根 義人 [内外] 四七七 三
- 高根 義人 [國經] 四三九 一五
- コンラード [内外] 四三九 一三
- 烏賀陽然良 [京法] 四四一 三
- 竹田 省 [京法] 四四一 三
- 岡野敬次郎 [新聞] 四四二 一八
- 大原 信久 [東經] 四四二 一七
- 瀬川新太郎 [新聞] 四四四 一四
- 大原 信久 [新聞] 四四四 一
- 菫淵 清雄 [新聞] 四四四 一
- 森 作太郎 [新聞] 四四四 一

小切手の撤回に就て
 北米合衆國に於ける小切手商法第五三三條の二第一項の規定と小切手支拂人の義務
 線引小切手に付て
 橫線小切手管見
 線引小切手再論
 小切手に於ける支拂委託の取消
 小切手契約に就て
 橫線小切手の支拂に關する再論二篇
 支拂保證小切手の研究
 小切手支拂保證
 橫線小切手の支拂に就て
 小切手流通上の或考察
 小切手支拂保證の效力と方式
 交換所經由支拂小切手引落
 橫線小切手の實際問題
 橫線小切手の支拂保證に就て
 橫線小切手の呈示權に就て

銀行を經由せざる橫線小切手の效力
 古野氏の「橫線小切手の呈示權に就て」を讀みて
 銀行を經由せざる橫線小切手問題に就て
 再び「橫線小切手の呈示權に就て」
 橫線小切手の呈示に付ての私見
 古野氏「橫線小切手の呈示權」の再論を讀みて
 橫線小切手問題に就て
 橫線小切手に就いて高木氏に答ふ
 橫線小切手問題に就いて高木氏に答ふ
 再び橫線小切手に就て
 小切手の喪失に就て
 政府預金小切手の性質
 橫線小切手と其支拂保證

- 栗村平三郎 [京法] 四四四 二六
- 山室 宗文 [法協] 四四四 二九
- 西村 孝三 [新聞] 四四五 一七
- 西村 孝三 [新聞] 四六一 八七
- 田中 榮 [新聞] 四六一 八七
- 西村 孝三 [新聞] 四六一 八七
- 竹田 省 [法叢] 四八二 四一五
- 烏賀陽然良 [新報] 四〇三 一
- 藤尾 一雄 [銀研] 六二二 三
- 藤城 敬二 [銀研] 六二二 三
- 草島完太郎 [銀研] 六二二 三
- 横山千代村 [銀研] 六二二 三
- 藤波 正 [銀研] 六二二 三
- 木部 林次 [銀研] 六二二 三
- 小宮山敬保 [計理] 六二二 一
- 藤城 敬二 [銀研] 六二三 一
- 太田 義繁 [銀研] 六二三 一
- 古野 周藏 [新聞] 六二三 一
- 山口 直 [新聞] 六二三 一
- 大橋 茹 [新聞] 六二三 一
- 竹内 恕平 [新聞] 六二三 一
- 古野 周藏 [新聞] 六二三 一
- 吉村 宗次 [新聞] 六二三 一
- 竹内 恕平 [新聞] 六二三 一
- 高木武比古 [新聞] 六二四 一
- 吉村 宗次 [新聞] 六二四 一
- 竹内 恕平 [新聞] 六二四 一
- 高木武比古 [新聞] 六二四 一
- 太田 義繁 [銀研] 六二四 一
- 淺野 俊終 [銀研] 六二四 一
- 藤尾 一雄 [銀研] 六二四 一

【小切手法】

【小切手】 【小切手法】

【小切手法】 【國債】 【國際會議】

新獨逸小切手法に就て 獨逸小切手法一斑 小切手法案に就て 英法學者の見たる新獨逸小切手法

毛戸 勝元〔京法〕四二 三 九號
岡野敬次郎〔新報〕四二 一八 二
守安富太郎〔新聞〕四二 一 九六
上杉 復男〔法協〕四二 二七 一
山口 弘一〔國經〕四二 六 三
竹田 省〔京法〕四二 六 十八
岡野敬次郎〔新報〕四二 十九
毛戸 勝元〔京法〕六二 八 七

【國債】 公債を見よ

【國際會議】 參照||國際關係。條約。平和會議。

執近の國際法の發達と國際會議
維納會議と權力均衡主義及正統主義
海峽會議の結果に就て
一九一一年八月瑞西國ベルンに於てカーネギー國際

立 作太郎〔志林〕四三 三 九
立 作太郎〔國際〕四三 八 一〇
道家 齊〔國際〕四四 一〇 二

平和寄附財團の經濟及び歴史部によりて招集せられたる會議の議事要目

萬國阿片會議
列國會議召集說
ミュンスターの平和及ウエ
ストフアリア國際大會議
倫敦講和會議と列強外交
第一回國際司法警察會議
ダニユープ河歐洲委員會成立の出來及其業績
維納會議
列國公會と列國會議
テッシェン國際委員會に就て
テッシェン問題に就て(法
理研究會講演)
國際會議所觀
カンヌよりゼノアへ
ゼノア會議と國際金融問題
海峽會議に就て
興味深きゼノア會議
ゼノア會議の財政決議に就

穂積 重遠〔法協〕四五 三〇 一
高木 友枝〔外時〕四五 一五 一七
重徳 來助〔外時〕六二 一六 一八九
立 作太郎〔國際〕六二 二二 三
有賀 長雄〔外時〕六二 二七 一
牧野 英一〔志林〕六四 一七 八
矢野 眞〔國國〕六八 七 五
立 作太郎〔外時〕六八 二 三四〇
小山精一郎〔外時〕六八 二 三四一
山田 三良〔國際〕六九 一 九
山田 三良〔國際〕六九 一 九
山田 三良〔法協〕六九 三九 一
浦彌 五郎〔國聯〕六九 一 六
大鹽 龜雄〔經商〕六一 一 二
平野 清〔銀研〕六一 三 二
大鹽 龜雄〔經商〕六一 一 三
志立鐵太郎〔財經〕六一 九 五

て
國際會議雜感
調停委員會問題
倫敦會議の決裂まで
ゼノア會議とロシア問題
ゼノア會議と歐洲の經濟恢復

青木 得三〔財經〕六一 九 七
三谷 隆信〔國聯〕六一 二 六
澤田 謙〔國際〕六一 二 八九
西澤 英一〔財經〕六一 九 九
木村 賢吾〔國聯〕六一 二 九
奥山 八郎〔外時〕六二 三五 四六
稻田周之助〔外時〕六二 三五 四二
中尾 龍夫〔外時〕六二 三五 四一
稻原 勝治〔外時〕六二 三五 四三
布施 勝治〔外時〕六二 三五 四三
米田 實〔外時〕六二 三五 四四
中尾 龍夫〔外時〕六二 三五 四二
布施 勝治〔外時〕六二 三五 四二
稻原 勝治〔外時〕六二 三五 四四
鳩山 秀夫〔國知〕六三 三 一
平野 清〔國經〕六三 三五 四
美濃部達吉〔國知〕六三 三 四
蠟山 政道〔國際〕六三 三 一〇
立 作太郎〔外時〕六三 三 九 四五九
青木 得三〔外時〕六三 三 九 四六九

會議一成果)

長春會議決裂の眞因
長春會議を顧みて
近東會議の開催
始めて國際會議に臨みて
ゼノア會議と通貨並に信用問題
ブラッグの聯合會所見
ドゥズ委員會案の行政技術的觀察
會議外交
ドゥズ委員會の報告を讀む

【國際關係】

倫敦會議とドーズ案
倫敦會議の一成果
ドーズ案(Dawes Plan)の成果如何
ドーズ案の經濟的解剖
ドーズ案實施の成績と其將來
巴里會議と保障問題
會議外交
聯合國大藏大臣會議
兵器取引取締會議
日本と東亞に於ける歐洲協調
國際公法の發生發達及實行に付き列國間に國力均衡の缺くべからざる所以を論ず
外國國家に對する債權者及

宇都宮 鼎〔外時〕六三 四〇 四七
青木 得三〔外時〕六三 四〇 四七
川口 西三〔商濟〕六四 五 二
生島廣治郎〔國經〕六四 三九 二三
生島廣治郎〔國經〕六四 三九 二三
生島廣治郎〔國經〕六四 三九 五
西澤 英一〔財經〕六四 二 八
松原 一雄〔新報〕六四 三五 二
森 賢吾〔外時〕六四 四 四八五
奥野 八郎〔外時〕六四 四 四九二
參照||歐洲戰爭。外交。國際會議。國際主義。國際債權。國際通商。國際聯盟。國際勞動問題。仲裁裁判。
有賀 長雄〔外時〕六三 一 四
秋山雅之助〔志林〕四三 一 一

【國際會議】 【國際關係】

依權國

東京海口の砲臺と國際法
國際禮法の形式に就て
國力均勢主義の既往及將來
所謂地的衝突規程と時的衝突規程との關係
在內國外人教育の權利義務
日本人の對外思想を論ず
救援救助に關する條約案短評
經濟上に所謂國際主義
平和平均均勢乎小問題乎大問題乎
勢力の均衡
現今に於ける國際的行動
權力平均と機會均等
合衆國の外國人土地所有權
法案と國際法及國際通商
國際紛争平和的處理方法を論ず
世界に於ける日本の地位
(講演)
交戰國の耐戦力と制海權
戰時に於ける海上公有財産

中村 進午	〔新報〕	三三	二
蜷川 新	〔外時〕	三六	六六
ウールセー	〔法政〕	三六	六六
寺崎 勝治	〔新報〕	三六	六六
山口 弘一	〔志林〕	三六	六六
中村 進午	〔外時〕	三六	六六
丹羽 筑山	〔東經〕	三六	六六
加藤 正治	〔志林〕	三六	六六
山内 正政	〔國家〕	三六	六六
松宮春一郎	〔外時〕	三六	六六
林 毅陸	〔國際〕	三六	六六
日吉 平吉	〔國家〕	三六	六六
寺尾 亨	〔法協〕	三六	六六
立 作太郎	〔志林〕	三六	六六
立 作太郎	〔國家〕	三六	六六
添田 壽一	〔京法〕	三六	六六
伊藤重治郎	〔外時〕	三六	六六

を論ず

極東と國際警察權
國際電報機關に就て
ロバートソン・スコット氏の日本英國及び世界を讀む
小國の將來
フイヒテの鎖國論
政治同盟の研究
チロン「國際團體と警察」
(譯)
強國たるべき三拍子
戰後の國際關係と海運
國際關係の將來
國際政策と正義
二重保障條約の本質
獨逸の國際法違反に對する制裁
世界戰亂の終結と我國民の覺悟(講演)
國際通信社に就て
國際間の差別的待遇廢止問題
米國の新政局と世界の進動

立 作太郎	〔法協〕	三三	二
泉 哲	〔國國〕	三三	二
煙山專太郎	〔外時〕	三三	二
鶴澤 總明	〔國國〕	三三	二
高田 保馬	〔經叢〕	三三	二
藤谷光之助	〔國經〕	三三	二
蜷川 新	〔國際〕	三三	二
東 讓三郎	〔國際〕	三三	二
雪 堂 生	〔財經〕	三三	二
門脇 龍雄	〔國經〕	三三	二
松崎 壽	〔三學〕	三三	二
蜷川 新	〔外時〕	三三	二
牧野 義智	〔國際〕	三三	二
小山精一郎	〔外時〕	三三	二
水野鍊太郎	〔法政〕	三三	二
寺田 四郎	〔國際〕	三三	二
戶田 海市	〔經叢〕	三三	二
惠美 孝三	〔外時〕	三三	二

海權の意義に就て
國際官僚主義の心理
國際問題としての經濟的正義
世界協力團體の理論研究
國家精神と國際精神
國際均勢と國際道德
國際紛争の平和的處理
緩衝國建設の急務を論ず
國家觀と國際思想の消長
陸權の新熟字に就て
國際大學
國際思想と國家
國際間に於ける猜疑心と章備
世界現下の反動的傾向
國際大學論其の他
強國の弱點
東洋協調と均勢運動
國際協調の心
現代國際政治の現實暴露
東洋均勢運動の完成
民法學者の國際關係觀
世界新文化の開展と日本

村田 懸磨	〔外時〕	三三	二
建部 遜吾	〔外時〕	三三	二
澤田 謙	〔外時〕	三三	二
稻垣 守克	〔國聯〕	三三	二
高島平三郎	〔國際〕	三三	二
信夫 淳平	〔外時〕	三三	二
杉村陽太郎	〔國際〕	三三	二
田宮準一郎	〔國國〕	三三	二
今中 治磨	〔外時〕	三三	二
佐藤綱太郎	〔外時〕	三三	二
小野塚善平次	〔國家〕	三三	二
今中 次磨	〔外時〕	三三	二
三宅覺太郎	〔外時〕	三三	二
田川大吉郎	〔國聯〕	三三	二
大山 郁夫	〔我等〕	三三	二
澤田 謙	〔外時〕	三三	二
田川大吉郎	〔國聯〕	三三	二
大山 郁夫	〔我等〕	三三	二
澤田 謙	〔外時〕	三三	二
惠積 重遠	〔國聯〕	三三	二
手塚 小南	〔國聯〕	三三	二

戰後の列國關係
闘争方面の變換
世界の現状打破
世界改造の三思想
カントの契約的國際社會論
國際人格の研究
經濟問題と國際争議の關係
日本國民の世界に對する二大主張
現代世界史管見
國際共和主義の提唱
國際政治組織と其單位問題
震災と我國際關係
國際問題大觀
外國の同情に就て
現下の國際關係と日本國民
日本一等國(國力の根據と帝國の武力)
國際的社會正義の實現
國際政治の基礎問題
國際政治學の指導原理
世界の反動的傾向
國際的日本の建設
安全保障問題

添田 壽一	〔外時〕	三三	二
松下 芳男	〔國聯〕	三三	二
末廣 重雄	〔外時〕	三三	二
稻垣 守克	〔外時〕	三三	二
今中 次磨	〔外時〕	三三	二
澤田 謙	〔法協〕	三三	二
清水文之輔	〔東經〕	三三	二
川島信太郎	〔國際〕	三三	二
大熊 潮	〔國知〕	三三	二
上村 進	〔辯協〕	三三	二
蠟山 政道	〔國際〕	三三	二
河野 恒吉	〔國知〕	三三	二
稻田周之助	〔外時〕	三三	二
紀平 正美	〔外時〕	三三	二
泉 哲	〔國知〕	三三	二
松波仁一郎	〔外時〕	三三	二
淺利順四郎	〔國知〕	三三	二
蠟山 政道	〔國知〕	三三	二
蠟山 政道	〔國際〕	三三	二
北 哈吉	〔外時〕	三三	二
井上準之助	〔外時〕	三三	二
林 毅陸	〔外時〕	三三	二

【國際關係】 【國際行政法】 【國際公法】 【國際私法】

安全保障の成否	末廣 重雄〔外時〕六四四	五〇〇
安全保障とは何ぞ	町田 梓樓〔外時〕六四四	四九四
ワルソウ大會に於て議せられたる法律問題	石崎政一郎〔國知〕六四四	一〇
國際聯盟と保障問題	西澤 英一〔財經〕六四二	一四
安全保障問題と來るべき軍縮會議	三枝 茂智〔國知〕六四四	五
勢力均衡に就ての一考察	神川 彦松〔國家〕六四三	二〇
世界の不安	一宮房治郎〔外時〕六四四	四九五
國際共和主義の提唱	上村 進〔辯協〕六四二	九一〇
今春劈頭の國際問題	西澤 英一〔財經〕六四二	一
英米と日本（國際的疑懼心と平和主義）	米田 實〔國知〕六四四	二
人道問題の國際的解決	青木 節一〔社政〕六四四	五三
國際紛争調停手續の研究	坂本 瑞男〔國知〕六四四	五
世界戦争責任の問題	松下 芳男〔法政〕六四二	一
國際社會成員としての國際聯盟と國際協力	塚本 毅〔國知〕六四五	一
政略と戦争指導との關係	N 將 軍〔外時〕六四五	五〇六
國際生活の目標	松井 等〔外時〕六四五	五〇六
國家生活に關する地理的考察の一例	小野 鐵二〔商論〕六四五	一
大戦後七年間の回顧	長岡 春一〔外時〕六四五	五〇六
世界思潮の變遷と内省	惠美 孝三〔外時〕六四五	五二四

國際政治上の日本	町田 梓樓〔外時〕六四五	五二二
國際利權の法理的解説	稻田周之助〔外時〕六四五	五〇九
世界の新形勢	宇都宮 鼎〔外時〕六四五	五二二
年頭の國際政治所感	米田 實〔外時〕六四五	四七五
會議外交	松原 一雄〔新報〕六五三	二一五
滿鐵を中心とする外交（東亞に於ける日米衝突の基礎）	高橋清三郎〔外時〕六五三	六
最近國際關係の批判	高橋清三郎〔外時〕六五三	六
【國際行政法】	松原 一雄〔國際〕六三六	二
國際行政法に就て	泉 哲〔國際〕六三三	三
國際警察權	泉 哲〔國際〕六三三	四
國際行政警察	蠟山 政道〔國際〕六三三	九
國際行政とその機關	渡邊宗太郎〔法叢〕六三三	三
ノイマイヤー「國際行政法基礎論」	參照 外國人、轉化、國際商法、國際破産法、國際民事訴訟法、國際民法、國籍。	
【國際公法】	參照 外國人、轉化、國際商法、國際破産法、國際民事訴訟法、國際民法、國籍。	
【國際私法】	參照 外國人、轉化、國際商法、國際破産法、國際民事訴訟法、國際民法、國籍。	

英吉利法の一部として國際私法を論ず	ダイセイ〔法協〕四九八	一〇
國際私法序	穂積 陳重〔法協〕四九五	五
國際私法の研究	ト部喜太郎〔新報〕四八八	五〇
國際私法論	ト部喜太郎〔新報〕四八九	六四
國際私法の性質を論じて穂積博士の教を乞ふ	宮本平九郎〔法協〕四八五	四
宮本法學士に答ふ	穂積 陳重〔法協〕四八五	六
シヨウス「國際私法に於ける住所主義」(譯)	提定次郎〔法記〕四三〇	七
國際私法の範圍	穂積 陳重〔法政〕四三三	三八
國際私法の研究に就て	山田 三良〔新報〕四三二	一〇
海牙國際私法會議條約	宮内國太郎〔法協〕四三二	一一
國際私法の性質及其國際私法學並國際法に對する地位の一斑	入江 良之〔内外〕四二六	二
國際私法に就て	山田 三良〔新聞〕四二六	一
海牙國際私法會議記事	河村讓三郎〔法記〕四二七	一五五
海牙國際私法會議の成果	山田 三良〔法協〕四三八	甲三
國際私法の發達	齋藤 隆夫〔辯協〕四三〇	一〇一
亞米利加國際法に就て	山田 三良〔國際〕四三二	八
ジタン教授の國際普通法論に就て	跡部定次郎〔京法〕四三二	三
國際私法規定の欠缺補充を	跡部定次郎〔京法〕四三二	三

論じ併せてヒヨルダ教授の In audio lex fori 説を評す	跡部定次郎〔京法〕四三二	一〇
準國際私法	山口 弘一〔國際〕四三二	八
國內地方特別私法適用規則	跡部定次郎〔京法〕四三二	七
法律の抵觸の意義に就て	山田 三良〔國際〕四三二	五
ビレー「將來の國際私法上注意の二三」(譯)	東 讓三郎〔國際〕四三二	四
伊太利の國際私法學に對する寄與	寺田 四郎〔國際〕四三二	五
國際私法の衝突	山口 弘一〔國際〕四三二	七
國際私法の基礎觀念を論ず	館田 謙吉〔法治〕四三一	一
國際私法の範圍	跡部定次郎〔法叢〕四三一	三
國際私法と州際私法との分歧發達	寺田 四郎〔外時〕四二五	四七
國際労働問題と國際私法	井上 蒙〔國知〕四二三	八
英國國際私法に於ける反致理論	島本 英夫〔商濟〕四二四	二
【國際司法裁判所】	立 作太郎〔國際〕四一九	四
常設國際司法裁判所	山田 三良〔國際〕四二二	二
常設國際司法裁判所の開設	山田 三良〔國際〕四二二	二
常設國際司法裁判所に就いて	山田 三良〔國際〕四二二	二

【國際法】【國際法上個人の地位】

就て

我國最初の國際法研究者
幕末國際法の發達
國際立法への寄與
國際法の名稱に就て
グローテウスに於ける國際法と自然法との關係
フーゴー・グローテウス著
「平戦法規論」の由來
グローテウス及び其名著
「戦争及平和法規論」の國際法學上の地位
グローテウス著「平戦法規論」の版數に就て
國內裁判所に於ける國際法
國際法典編纂の運動
國際法の社會化に就て
國際公法の本質及淵源
キヤノン法と國際法
國際法學上の新學說ガライ主義
エヌラム教の國際法に及ぼせる影響

松原 一雄	尾佐竹 猛	尾佐竹 猛	横田喜三郎	田岡 良一	横田喜三郎	陳重	立 作太郎	山田 三良	立 作太郎	山名 壽三	松原 一雄	山名 壽三	泉 哲	天野 良信	泉 哲
【國際】六三三	【國知】六三三	【法治】六三三	【國知】六四四	【法叢】六四四	【國際】六四四	【國察】六四四	【國際】六四四	【國際】六四四	【新報】六四四	【法政】六四四	【國際】六四四	【法政】六四四	【國際】六四四	【國知】六四四	【國際】六四四
九	二	二	五	四	五	五	五	六	五	三	三	三	二	六	五

日本國際法學會及國際法協會
會日本支部議定國際法典案

【國際法上個人の地位】

個人は國際法の主格たることを得るか
個人損害賠償に就て
國際法上個人の地位
戦争より生じたる損害を理由とする請求權
戦争に關する個人の地位と第二回平和會議の法規慣例に關する條約の規定
外人の權利被害と聯邦政府の責任
戦争中外國に在る獨逸人に加へたる暴行に對する損害賠償問題
戦争より生ずる個人の金錢上の請求權
國際法上個人の地位

コクサイホウシヨウジンチイ

松原 一雄	長岡 春一	松原 一雄	松原 一雄	ナイス	立 作太郎	佐藤丑次郎	眞野 毅	中山 詳一	泉 哲
【國際】六二五	【法協】四三三	【法政】四三三	【新報】四三三	【法協】四三三	【國際】四三三	【京法】六三九	【法協】六四三	【京法】六五二	【法治】六一一
六	二	七	三	一	一	九	六	二	一

【國際民事訴訟法】

民事訴訟法案に於ける國際的規定に就て
外國民事判決の内國に於ける效力
國際私法上より觀察したる我民事訴訟法修正案
日本民事訴訟法に於ける國際關係

コクサイミンジシヨウホウ

寺崎 雪竹	泉二 新熊	花岡 敏夫	跡部定次郎	穂積 八東	平岡定太郎	山口 弘一	穂積 陳重	山口 弘一	山口 弘一
【新聞】四二六	【新報】四三七	【國際】四三七	【京法】四四一	【新報】四四五	【新報】四四六	【法政】四三三	【法協】四三三	【志林】四三七	【法協】四三三
一	二	二	三	二	三	三	二	六	二

【國際民法】

對し日本に於て失踪の宣告を爲したるときは日本に於ける財産の所有者は何人なるや
權利能力の準據法に就て
人及物の敵性に關する住所主義と國籍主義
法例第七條の規定に就て
權利能力の準據法
國際私法上に於ける失踪物
法例第一〇條に就て
登記に關する規定は法例第三〇條の公安規定に非ず
物の所在地の變更と物權の準據法
債權
契約の效力に關する國際私法の原則を論ず
契約の準據法如何
國際私法上に於ける不法行為
國際的行為に就て

山口 弘一	山口 弘一	渡邊 信	跡部定次郎	山口 弘一	松野 祐裔	山口 弘一	梅 謙次郎	寺尾 亨	寺尾 亨	山田 三良	山口 弘一
【法政】四三三	【法協】四三七	【法協】四二二	【京法】四四一	【國際】六三二	【法記】六三〇	【法政】四三三	【志林】四二二	【法政】四三三	【國家】四三〇	【内外】四三五	【國際】四三七
二	三	五	二	六	六	七	一	五	二	一	二

【國際民事訴訟法】【國際民法】

國際的無記名證券の準據法	山口 弘一	〔法政〕三三九	九卷	二號
袁子壯對露清銀行の訴訟事件に就きて	岡松參太郎	〔法協〕三三八	三三	二
國際私法上債權讓渡の從ふべき法律	跡部定次郎	〔京法〕四四〇	二	一〇
失占無記名證券の準據法に關する萬國國際法學會の決議に就て	山口 弘一	〔國家〕四四〇	二	一〇
財産的法律行為に基因する債權の準據法に就て	山口 弘一	〔國家〕四四一	七六	二一八
親族	植村 俊平	〔法協〕四三三	八	三
日本の婚姻と英國法廷	戸水 寛人	〔法政〕四三四	五	四四
私生子認知に關する英國法律の規定	中村 進午	〔新報〕四三五	二	九
婚姻事件に關する裁判管轄婚姻に關する國際法	フキリモーア	〔國際〕四三五	一	九
婚姻の效力に關する海牙條約僭評	山口 弘一	〔法政〕四三九	一〇	六
國際私法上父母の婚姻同意權	跡部定次郎	〔京法〕四四〇	二	四
寫眞結婚問題に就て	山口 弘一	〔法政〕四四〇	二	四
外國人は果して日本の家の家族たることを得るか	山口 弘一	〔法政〕四四一	二	二
寫眞結婚問題	小林 絹治	〔國際〕六九二	八	一〇

外國に於ける婚姻の準備と法例の解釋	大島 正義	〔新聞〕六二四	一	二四三九
相續遺贈に關する外國人の地位	若槻禮次郎	〔志林〕四三三	二	九
相續及遺言に關する海牙條約僭評	山口 弘一	〔國際〕四三九	七六	一〇
法例第二五條相續に關する準據法の適用範圍を論ず	藤原 卓藏	〔新聞〕六九一	一	二六八
戰後の國際聯盟に就て	小野塚喜平次	〔國家〕六七三	九	九
國際聯盟	立 作太郎	〔外時〕六七二	八	三三八
非國際聯盟論を駁す	西山 重和	〔外時〕六七二	八	三三八
國際聯盟と民族主義	田中幸一郎	〔外時〕六七二	八	三三八
國際聯盟と民族主義の調和	松田 知之	〔外時〕六八二	九	三三九
國際聯盟	牧野 義智	〔國際〕六八一	七	三四二
國際聯盟論	松波仁一郎	〔國際〕六八二	六	四
國際聯盟實行案	泉 哲	〔國家〕六八七	七	二
國際聯盟と本邦ドクトリン宣言の急務	田宮準一郎	〔國家〕六八七	七	六

【國際聯盟】

國際聯盟案の經濟觀	河津 暹	〔國家〕六八三	三	四一五
國際聯盟の法律的性質	森口 繁治	〔法叢〕六八一	一	四
國際聯盟を論ず	謝花 寛濟	〔新聞〕六八一	一	一五五
聯盟協議國の聯盟破壞	長谷川萬次郎	〔我等〕六八一	一	一一
國際聯盟に於ける移民問題	戸田 海市	〔政治〕六八一	一	二
民族の聯盟と國家の聯盟	泉 哲	〔國家〕六八一	七	五
國際聯盟の勞働問題	戸田 海市	〔經濟〕六八一	八	四
國際聯盟並萬國赤十字同盟に就て	蜷川 新	〔國際〕六八一	八	一
國際聯盟の日英同盟に及ぼす影響	牧野 義智	〔國際〕六八一	八	一
國際聯盟と英佛米の三國同盟	原 勝郎	〔外時〕六八二	九	三五二
「大同書」を讀みて	田中幸一郎	〔外時〕六八二	九	三三九
國際聯盟と日英同盟	立 作太郎	〔外時〕六八三	〇	三五二
國際聯盟に對する一疑問	山本美越乃	〔外時〕六八三	〇	三五五
國際聯盟と仲裁裁判	立 作太郎	〔外時〕六八三	〇	三六〇
國際聯盟と共同統治	松本 重敏	〔新聞〕六八一	一	二五六一
國際聯盟と憲法	美濃部達吉	〔新報〕六八一	一	二〇
國際聯盟と戰爭	岩崎彦彌太	〔日社〕六九七	七	四一五
國際聯盟と帝國憲法との關係	平野長次郎	〔日社〕六九七	七	四一五
儒教の本義より國際聯盟を論ず	松永 榮	〔日社〕六九七	七	四一五

國際聯盟の批判及其將來	土生 秀穂	〔日社〕六九七	七	四一五
國際聯盟と帝國憲法との關係	美濃部達吉	〔國家〕六九三	四	一
國際聯盟と委任統治制度	立 作太郎	〔國家〕六九三	四	六
國際聯盟と中立關係	立 作太郎	〔國家〕六九三	四	七
國際聯盟	杉村陽太郎	〔國際〕六九一	八	一〇
國際聯盟の機關	杉村陽太郎	〔國家〕六九三	四	六七
國際聯盟の根本義	志立鐵次郎	〔財經〕六九七	七	一〇
國際聯盟と Clausula rebus sic stantibus	松原 一雄	〔國際〕六九一	九	二
國際聯盟と日英同盟	杉村陽太郎	〔外時〕六九三	一	三五
國際聯盟の本質	立 作太郎	〔外時〕六九三	一	三六四
國際聯盟と國民本位	蜷川 新	〔外時〕六九三	一	三五五
青島問題と國際聯盟	蜷川 新	〔外時〕六九三	一	三六四
國際聯盟の價値を論じて太平洋問題に及ぶ	佐藤 堅司	〔外時〕六九三	一	三五九
國際聯盟とモンロー主義	立 作太郎	〔外時〕六九三	一	三五九
法律的國際聯盟の要望	三浦 信三	〔外時〕六九三	一	三七九
國際聯盟と赤十字	蜷川 新	〔外時〕六九三	一	三七九
國際聯盟協會聯合會議	小野塚喜平次	〔法協〕六九三	一	一一
世界の平和と國際聯盟の活動	松井慶四郎	〔國聯〕六九一	一	四
米墨の開戦と國際聯盟	澤田 謙	〔外時〕六九三	一	四〇二
國際聯盟下に於ける國際的				

統計組織

國際聯盟とは何ぞ(講演)
聯盟の國際立法作用
國際聯盟の取扱ふ社會問題
移民問題と國際聯盟
國際聯盟と財界問題
國際聯盟につきて
國際聯盟の本質と國際法人

ロシヤと聯盟

國際聯盟の成績
國際聯盟と世界の危機
國際聯盟の概念
國際聯盟の人類準備
國際聯盟の價值
國際聯盟に就て
聯盟の法律觀
國際聯盟精神と國際聯盟政

策との區別

國際聯盟概論
國際聯盟に就て
文化問題としての國際聯盟
國際聯盟の思想と聯盟協會
國際聯盟協會の必要なる理

Table listing authors and page numbers for the top section. Includes names like 本丸 重郎, 杉村陽太郎, 澤田 謙, etc.

由
國際聯盟と聯盟協會との關係
國際聯盟に對する感想
聯盟平和論の一誤謬
國際聯盟の本質に關して
日英同盟と國際聯盟
國際聯盟悲觀樂觀に就て
國際聯盟の目的
聯盟の社會人道事業
國際聯盟の發達
國際聯盟と國際聯合との對立の理論的意義
國際聯盟とルール問題
國際聯盟の保健機關に就て
國際聯盟制度と刑罰制裁問題

Table listing authors and page numbers for the middle section. Includes names like 添田 壽一, 阪谷 芳郎, 澁澤 榮一, etc.

國際聯盟の功罪

國際聯盟による貨幣價值の管理を論ず
國際聯盟新議定書と日本
國際聯盟の將來
國際聯盟の新平和議定書に就て

國際聯盟第四年の成績

國際聯盟と國內問題
國際聯盟の法人格に就て
國際聯盟の法律「人格」學說研究

國際聯盟の強制力について

國際聯盟の本質に就て
國際聯盟法格論の辯
大戰後歐洲不安定と國際聯盟

國際聯盟と領土の擔保

歷史の進化に於ける國際聯盟
國際聯盟と國際勞働會議
國際聯盟と保障問題
國際聯盟か財團聯盟か
自主的外交と國際聯盟

Table listing authors and page numbers for the bottom section of the left page. Includes names like 圓地與四松, 神川 彦松, 横田喜三郎, etc.

聯盟の發育と世界の情勢

國際聯盟第五年の成績
國際聯盟の組織と活動
國際聯盟に就いて
聯盟理事會改造と解決案
ロカルノ協定と國際聯盟
獨露新條約と聯盟
太平洋問題と聯盟
國際社會成員としての國際聯盟と國際協力

聯盟と學藝協力

最近國際聯盟活動の一面
常任理事國問題
聯盟理事會の組織變更問題
と我國の對策
國際聯盟に於ける理事會の地位

ロカルノと聯盟の内紛

世界戰爭責任の問題
國際聯盟協會の目的に就て
ロカルノ協定と國際聯盟の危機

獨露中立條約と國際聯盟

獨露中立條約と國際聯盟

Table listing authors and page numbers for the bottom section of the right page. Includes names like 杉村陽太郎, 横田喜三郎, 新戶部稻造, etc.

國際聯盟の一轉機	柳澤慎之助〔外時〕六五三	五三
最近國際聯盟の悲喜劇	泉 哲〔外時〕六五三	五三
ロカルノ條約と國際聯盟	立 作太郎〔外時〕六五三	五〇六
國際聯盟の危機	高木 信威〔外時〕六五三	五二二
講和條約中に挿入せられたる國際聯盟規約を評す	泉 哲〔國國〕六八七	六
國際聯盟規約草案批判	泉 哲〔商經〕六八一	一四
國際聯盟規約	杉村陽太郎〔國國〕六九一	一
國際聯盟規約の法律上の地位	立 作太郎〔新報〕六九三	四
北歐三國の聯盟規約修正案に就て	米田 實〔國國〕六〇〇	七八
聯盟規約の研究	杉村陽太郎〔法協〕六〇三	四七
國際聯盟規約第二三條の研究	町田 實雄〔國國〕六二二	五
國際聯盟規約第一五條第八項の規定と英佛紛爭事件に就て	跡部定次郎〔法叢〕六二〇	一
國際聯盟規約改正問題	鳩山 秀夫〔國家〕六二七	二一五
聯盟規約第一二條と平時復仇	立 作太郎〔外時〕六三三	三九
立法學博士に質す	田岡 良一〔外時〕六三三	四六一
立博士に謝して	田岡 良一〔外時〕六三三	四六五

國際聯盟規約の改正	阿部 三四〔商經〕六五六	二
國際聯盟總會の決議	杉村陽太郎〔國國〕六〇〇	二一三
國際聯盟總會を賭る	大谷 美隆〔國國〕六〇〇	九
國際聯盟總會第一會期の成績	小野塚喜平次〔國家〕六〇三	六
第一回國際聯盟總會に就て	泉 哲〔外時〕六〇三	三九
國際聯盟總會と理事會との法律的關係	來間 恭〔國家〕六一三	五
國際聯盟總會第二會期の成績	蠟山 政道〔國家〕六一三	五六
エスベラントと國際聯盟總會	井上萬壽藏〔國知〕六二三	二
國際聯盟總會第三會期の成績	岩田喜三郎〔國國〕六二三	五六
國際聯盟第五回總會を顧みて	圓地與四松〔外時〕六三〇	四七九
余の見たる聯盟協會聯合總會	鈴木 文治〔國知〕六四一	一〇
國際聯盟臨時總會の功罪	須磨瀧吉郎〔外時〕六五三	五三
聯盟と憲法及條約問題	牧野 義智〔國國〕六八一	四
國際聯盟と一般の條約	杉村陽太郎〔外時〕六九三	三七四
國際聯盟と條約	杉村陽太郎〔外時〕六九三	三七三

國際聯盟と國際條約	立 作太郎〔國國〕六〇一	八
國際聯盟と特殊條約の關係を論ず	牧野 義智〔國國〕六二〇	三四
條約と國際聯盟	鳩山 秀夫〔國知〕六二二	七
聯盟と國家	泉 哲〔外時〕六八二	三〇六
國際聯盟と國家の主權侵害	矢野 生稿〔國國〕六八七	三
主權又は獨立と國際聯盟	田邊 壽利〔日社〕六九七	四五
國家の發達と國際聯盟	牧野 義智〔國國〕六九八	二
國際法上の聯盟と國際法上の國家結合	尾崎 行雄〔國聯〕六〇一	二
國家の存亡と 聯盟	泉 哲〔國國〕六二二	一一
國際聯盟と國家主權	立 作太郎〔國國〕六二四	八
國際聯盟の將來の變化並に國家主權及び獨立	坂本 俊篤〔國國〕六八一	二
聯盟と軍備	小山精一郎〔國國〕六九二	二
國際聯盟と軍備問題	蜷川 新〔外時〕六九三	三六二
國際聯盟と軍備制限	坂本 俊篤〔國聯〕六〇一	四
國際聯盟と軍備制限	添田 壽一〔國聯〕六〇一	三
國際聯盟と軍備の將來	稻田周之助〔外時〕六〇三	四〇四
華府會議と國際聯盟の將來	山田 三良〔國聯〕六二二	一
國際聯盟とワシントン會議	山田 三良〔國聯〕六二二	二
國際聯盟と四國協約	〔國聯〕六二二	二
國際聯盟と軍縮問題	稻垣 三郎〔國知〕六二三	七

聯盟六星霜の軍縮運動	三枝 茂智〔國知〕六五六	一
國際聯盟と軍備縮小	奧野 七郎〔外時〕六五三	五〇九
日 本		
國際聯盟と日本の地位	三枝 茂智〔外時〕六八二	三〇三
國際聯盟會議と日本	一 外交家〔外時〕六九三	三六四
國際聯盟と日本の主張	末廣 重雄〔國聯〕六〇一	四
國際聯盟と國民の覺悟	織田 萬〔國聯〕六〇一	四
國際聯盟と日本	高石眞五郎〔國聯〕六〇一	四
League of nations and Japan	藤井 新一〔外時〕六二四	四九〇
獨 逸		
獨逸政府の國際聯盟案	金俊 淵〔國家〕六九三	一一
國際聯盟と獨逸	杉村陽太郎〔國家〕六〇三	五
獨逸と國際聯盟	稻垣 守克〔國知〕六二三	二
賠償問題と獨逸の國際聯盟加入問題	永富守之助〔外時〕六三〇	四七六
獨逸と聯盟加入問題	ヘルストロフ〔國知〕六四一	一
獨逸の聯盟加入問題の投げたる波紋	松原 一雄〔國知〕六五五	四
米 國		
米國上院と國際聯盟	稻原 勝治〔外時〕六八三	三五
國際聯盟に對する北米合衆國の真意	鈴木榮太郎〔日社〕六九七	四一五
史的考察としての國際聯盟と米國	高島佐一郎〔國經〕六〇三	一一

【國際聯盟】 【國際勞働問題】

國際聯盟と米國 米田 實 [國聯] 六一〇 年 卷一 二號
米國聯盟に近寄らんとす 串田 萬藏 [國聯] 六一一 二
北米合衆國と國際聯盟 高木 八尺 [國知] 六一四 五 三 八 二號

【國際勞働問題】 參照II 勞働及び勞働階級。

國際勞働者問題 堀川 新 [外時] 六一六 二 三三
國際勞働黨の組織及分派沿革 牧野 義智 [國國] 六一七 六 五
國際勞働原則に就て 榊田 民藏 [國家] 六一八 三 三
國際勞働問題の現勢 森戸 辰男 [國家] 六一九 三 八
第一次國際勞働大會の議事事項を論ず 堀江 歸一 [三學] 六一三 一〇
國際勞働協定に就いて 神戸 正雄 [外時] 六一二 九 三
國際勞働規約に就て 田中 萃一郎 [外時] 六一三 〇 三
第一回國際勞働會議の顛末 上田 貞次郎 [國經] 六一八 九 五
國際勞働會議と其將來 武藤 七郎 [社政] 六一九 一
委員の責任を論ず 田宮 準一郎 [國國] 六一九 八 二
國際勞働會議の成果 窪田 文二 [財經] 六一九 七 三
國際勞働會議に對する所感 武藤 山治 [財經] 六一九 七 三
國際勞働會議に於ける産前産後問題 石川 文吾 [國經] 六一九 二 七
華府勞働會議の決議綱要 川崎 巳太郎 [國際] 六一八 八 七

國際勞働機關 華府勞働條約と我邦の立法 世界的恒久平和の理想と國際勞働會議 國際勞働條約案の批准に就て

華盛頓勞働會議の決議に基づき最近各國の執れる立法其の他の措置 第三回國際勞働會議 來るべき第四回國際勞働會議に就て 國際勞働條約案及勸告に對する各國の措置 華盛頓勞働會議の決議と物爾牙利 國際勞働と暹羅 國際勞働會議に關する近刊三種 國際勞働會議に就て 國際勞働問題と國際私法 國際勞働條約案批准の現狀 勞働條約案改正手續問題 來るべき國際勞働總會と工

立石 信郎 [經研] 六一〇 一 二一四
上田 貞次郎 [外時] 六一〇 三 三九二
末弘 嚴太郎 [財經] 六一九 二 九
上田 貞次郎 [外時] 六一二 五 四二五
島崎 一郎 [社政] 六一二 一 三
永井 亨 [社政] 六一二 一 三
島崎 一郎 [社政] 六一二 一 二四
島崎 一郎 [社政] 六一二 一 二五
島崎 一郎 [社政] 六一二 一 二七
上田 貞次郎 [商研] 六一二 二 一
梶田 年 [經商] 六一二 二 甲六
井上 蒙 [國知] 六一三 三 八
島崎 一郎 [社政] 六一三 一 二九
加藤 三郎 [社政] 六一三 一 三三

場監督制度問題

國際勞働問題としての「婦人夜業問題」 松本 圭一 [勞科] 六一三 一 一一二
國際聯盟と國際勞働會議 關口 泰 [國知] 六一三 四 五
國際勞働會議に對する我等の態度 鈴木 文治 [國知] 六一三 四 五
國際勞働會議と日本 河原田 稼吉 [國知] 六一三 四 五
國際勞働機關と厚生社會の原則 菊地 勇夫 [外時] 六一三 三 四
第六回國際勞働會議に就て 菊地 勇夫 [外時] 六一三 四 三
第六回國際勞働會議の成績 吉野 作造 [國知] 六一三 四 三
國際勞働會議及國際勞働條約 田中 貢 [經商] 六一三 三 一
本年の國際勞働總會 吉坂 俊藏 [社政] 六一三 一 四
來年の勞働總會 國際勞働局 [社政] 六一三 一 四
英國勞働黨内閣と國際勞働機關 三浦 惟一 [國知] 六一三 四 七
第六回國際勞働總會 國際勞働局 [社政] 六一三 一 五
國際勞働會議と日本 堀江 歸一 [エコ] 六一三 二 八
國際勞働機關の新傾向 田中 盛枝 [社政] 六一四 一 九
國際勞働と日本 田川 大吉郎 [國知] 六一四 五 九
英國政變と國際勞働問題 菊地 勇夫 [外時] 六一四 四 二
國際勞働會議を顧みて 守屋 榮夫 [國知] 六一四 六 二
國際勞働運動 神戸 正雄 [時經] 六一五 一 四三

【國產】 參照II 産業。粗製濫造。

國產獎勵に就て 松崎 藏之助 [日經] 六一三 一 六
國產獎勵の根本問題 横井 時敬 [財經] 六一三 一 一〇
國産品使用II 國產獎勵の愚論 本多 精一 [財經] 六一三 一 一〇
國產獎勵と支那 莊田 秋村 [東經] 六一三 七 一
誤解せられた國產獎勵 山本 唯三郎 [洋經] 六一四 一 六九二
國產獎勵を論じて學問の獨立に及ぶ 内田 銀藏 [國經] 六一四 一 一
國產使用主義の經濟的觀察 馬場 誠 [國經] 六一九 二 二
經濟界の現狀と國產愛用運動 神戸 正雄 [時經] 六一四 一 三五

【國勢調査】 參照II 人口。人口統計。統計。

國庫剩餘金より國勢大調査 費を支山 へさの議 白井 喜之作 [統雜] 六一六 一 八六
人口調査の急務 横山 雅男 [統集] 六一六 一 一七
大日本國勢問答 河合 利安 [統集] 六一九 一 一七
人口調査實施に就て 篠崎 亮 [統集] 六一九 一 一七
民勢調査の急務 河合 利安 [統集] 六一九 一 一七
萬國國勢調査に付各國準備の近況 高橋 二郎 [統雜] 六一〇 一 一三
國勢調査私議 吳 文聰 [統集] 六一二 一 二〇一

國勢調査施行令及要項	濱田 富吉	〔統集〕六七	三九〇
各國國勢調査の時期			
國勢調査問題關係者招待會に於ける演説			
産業軍事及衛生より國勢調査の施行を望む	横山 雅男	〔統集〕六七	四四三
國勢調査の概念	森 數樹	〔統集〕六七	四四三
國勢調査問題盡力者招待會に於ける演説	花房直三郎	〔統集〕六七	四四七
國勢調査施行令			
國勢調査の性質と第一回國勢調査	高野岩三郎	〔國家〕六八	三
國勢調査評議會及特別委員會會議概況			
衆議院に於ける國勢調査豫算變更法律案議事速記			
貴族院に於ける國勢調査豫算變更法律案議事速記			
國勢調査施行の請願書提出當時の懷舊談	篠崎 亮	〔統雜〕六八	三九七
國勢調査施行細則國勢調査地方事務取扱規程及國勢調査員心得			
我縣(山梨)の國勢調査と			

杉先生 我が國勢調査問題の沿革 樺太國勢調査事務取扱規程 國勢調査員心得 朝鮮國勢調査事務取扱規程 國勢調査員心得 國勢調査要領 國勢調査事項問題沿革 國勢調査に就て 下院に於ける國勢調査地方經費國庫支出法律案の議事	佐藤 利正 横山 雅男	〔統雜〕六八 〔統雜〕六八	三九六 四〇二
國勢調査に關する曆表 國勢調査の法規に關する說明 國勢調査の施行に關する内地及殖民地間の比較 國勢調査地方經費の説明 國勢調査事務概要 國勢調査の方法中特別注意事項に就て 國勢調査の趣旨普及方法如何 國勢調査要旨	片岡源之助 横山 雅男 二階堂保則 牛塚虎太郎 濱田 富吉 鷺尾 弘準 後藤 市藏 二階堂保則 北垣 増藏	〔統雜〕六八 〔統集〕六八 〔統集〕六八 〔統集〕六八 〔統集〕六八 〔統集〕六八 〔統集〕六八 〔統集〕六八 〔統雜〕六九	四〇二 四〇三 四〇五 四〇六 四〇二 四〇五 四〇五 四〇六 四〇五

國勢調査の準備

國勢調査の方法	財部 靜治	〔統雜〕六九	四〇九
日高國荻伏村國勢調査豫習概況	吳 文聰	〔統雜〕六九	四二二
東京市の國勢調査執行方法	内館 泰三	〔統集〕六九	四六九
國勢調査の施行に關し調査局と行政各部との協商往復	竹内秀次郎	〔統集〕六九	四七〇
良好なる國勢調査の要件	鷺尾 弘準	〔統集〕六九	四七三
國勢調査申告書記入方法及調査方法に關する質疑解答			
國勢調査に關する法律案提出前後の事情	内藤 守三	〔統集〕六九	四七五
國勢調査の趣旨			
國勢調査事務調査經過概要			
第一回國勢調査速報を讀む	二階堂保則	〔統集〕六九	四七六
國勢調査記念事業に就て	内館 泰三	〔統集〕六九	四八五
今秋行はれる國勢調査と失業統計調査	下條 康鷹	〔統時〕六九	二
國勢調査宣傳劇	實藤 豐吉	〔統雜〕六九	四七〇
我國に於ける初回の中間國勢調査に就て	A・NON	〔統集〕六九	四七二
大正十四年國勢調査の結果を見て	森 數樹	〔統集〕六九	四七四

米

米國センサスの結果	河合 利安	〔統集〕四三〇	二二五
米國の國勢調査に就て	河合 利安	〔統集〕四三二	二二八
一九〇〇年に於ける米國センサス施行方	田中 太郎	〔統集〕四三三	二二〇
第十二回米國センサス	田中 太郎	〔統集〕四三三	二二二
米國第十二回以後の民勢調査法	村金 俊穂	〔統集〕四三三	二二三
一九〇〇年第十二回米國センサスのプラン	田中 太郎	〔統集〕四三三	二二三
米國新領土玖馬島センサスの概況	村重 俊穂	〔統集〕四三四	二二四
一九〇〇年第十二回米國センサス製造工業調査原案	田中 太郎	〔統集〕四三五	二二五
一九〇〇年米國國勢視察の一斑	吳 文聰	〔統集〕四三四	三五九
米國センサス沿革略話	後藤 市藏	〔統集〕六六	四〇一
北米合衆國第十四回及再後十年回歸國勢調査法律案			
北米合衆國の國勢調査に就て			
一九二〇年の第十四回米國國勢調査	小枝指健造	〔統集〕六九	四六八
第十四回北米合衆國國勢調査	小枝指健造	〔統集〕六九	四六八

査	松本 肇〔統集〕六二〇	年	一	卷	四七九
其	美濃部俊吉〔統雜〕四二八	年	一	卷	二一六
他	相原 重政〔統集〕四三九	年	一	卷	二七五
	高橋 二郎〔統集〕四三三	年	一	卷	二八二
	高野岩三郎〔國經〕四四〇	年	二	卷	三三八
	時戸口調査	年	二	卷	三三三
	一七〇二年十二月三十一日	年	二	卷	三三三
	勃耳加里國詮査斯の結果	年	一	卷	三五三
	歐米各國國勢調査の來歴及其現況	年	一	卷	三五九
	一九一一年四月二日の英國センサスに就て	年	一	卷	三六二
	一九〇一年二月一日暹馬國檢査斯結果表章法及批評	年	一	卷	三七八
	佛蘭西の國勢調査に就て	年	一	卷	四六四
	支那に於ける國勢調査に就て(講演)	年	一	卷	四六四
コク	服部宇之吉〔日社〕六二〇	年	九	一	二
セキ	田中 太郎〔統集〕四四四	年	一	卷	三六二
	高橋 勝治〔統集〕四四五	年	一	卷	三七八
	小枝指健造〔統集〕六八一	年	一	卷	四六四
	相原 重政〔統集〕四四四	年	一	卷	三五九
	中村 進午〔國際〕四三七	年	二	卷	二二
	中村 進午〔内外〕四三七	年	三	卷	四
	中村 進午〔法政〕四三八	年	九	二	二
	跡部定次郎〔京法〕四三九	年	一	卷	四
	山田福太郎〔新聞〕四四二	年	一	卷	四七七
	山口 弘一〔國家〕四四三	年	三	卷	五
	立 作太郎〔志林〕四四三	年	二	卷	一〇
	跡部定次郎〔京法〕六二八	年	二	卷	二
	跡部定次郎〔京法〕六三九	年	八	二	二
	跡部定次郎〔京法〕六四〇	年	九	二	二
	植原悦二郎〔國國〕六五四	年	二	卷	二
	跡部定次郎〔京法〕六五一	年	一	卷	四
	山田 三良〔法協〕六五三	年	四	卷	五
	跡部定次郎〔京法〕六五二	年	一	卷	六
	山田 三良〔法協〕六五四	年	七	卷	七
	立 作太郎〔外時〕六五三	年	二	卷	七〇
	牧野 英一〔國際〕六七六	年	四	卷	四

新領土の土地所有權	卜部喜太郎〔新報〕四三六	年	五	卷	一〇三
新領土に關する法律關係を論ず	山田 三良〔國家〕四三六	年	九	卷	一〇三
新領地住民の國民分限及其所有不動産に就て	山口 弘一〔國家〕四三八	年	九	卷	一〇六
再び領地割讓の結果を論ず	山田 三良〔法協〕四三九	年	二	卷	一〇六
新領土住民の國民分限及其所有不動産に就ての論を評す	山田 三良〔國家〕四三九	年	一〇	卷	一〇七
再び新領土住民の國民分限及其所有不動産に就て所謂撰擇約款に就て	山口 弘一〔國家〕四三九	年	一〇	卷	一〇八
新領地臣民の地位	山田 三良〔國家〕四三九	年	一〇	卷	一〇八
國際法協會の國籍に關する決議	山田 三良〔國家〕四三九	年	一〇	卷	一〇八
國籍と契約說	立 作太郎〔法協〕四三九	年	一〇	卷	一〇七
無籍人の論	山口 弘一〔法政〕四三九	年	一〇	卷	一〇七
國籍法第一六條に關する意見	山口 弘一〔法政〕四三九	年	一〇	卷	一〇七
重國籍に關する國法及條約の明文	花井 卓藏〔新報〕四三九	年	一〇	卷	一〇七
法人の國籍を論ず	中村 進午〔新報〕四三六	年	一〇	卷	一〇七
土地割讓に伴ふ國籍變更に	山田 三良〔明法〕四三六	年	一	卷	一〇三

關する約定の注意	中村 進午〔國際〕四三七	年	二	卷	二二
樺太下半露民の國籍	中村 進午〔内外〕四三七	年	三	卷	四
不統一法國に屬する外國人の本國法に就て	中村 進午〔法政〕四三八	年	九	二	二
國籍喪失者の届出方に付當局者の注意を促す	跡部定次郎〔京法〕四三九	年	一	卷	四
國籍の基礎	山田福太郎〔新聞〕四四二	年	一	卷	四七七
併合と國籍	山口 弘一〔國家〕四四三	年	三	卷	五
「二重國籍問題法的研究」	立 作太郎〔志林〕四四三	年	二	卷	一〇
著者吉田公重君に答ふ	跡部定次郎〔京法〕六二八	年	二	卷	二
歐洲最近國籍法と日本國籍法との比較研究	跡部定次郎〔京法〕六三九	年	八	二	二
二重國籍問題	跡部定次郎〔京法〕六四〇	年	九	二	二
國籍法中改正に就て	植原悦二郎〔國國〕六五四	年	二	卷	二
國籍法の改正に就て	跡部定次郎〔京法〕六五一	年	一	卷	四
國籍離脱說に就て山田博士に答ふ	山田 三良〔法協〕六五三	年	四	卷	五
跡部博士の國籍離脱論に就て	跡部定次郎〔京法〕六五二	年	一	卷	六
日米問題と我が國籍法の改正	山田 三良〔法協〕六五四	年	七	卷	七
國籍に關する諸國の法令に就て	立 作太郎〔外時〕六五三	年	二	卷	七〇
	牧野 英一〔國際〕六七六	年	四	卷	四

アルサス・ローレンの國籍主義	東 讓三郎〔國際〕六七六	年	九	卷	一
新獨逸國籍法	御厨 信市〔法政〕六一九	年	一	卷	一
土地割讓と人民投票及國籍選擇	中村 進午〔商研〕六〇一	年	一	卷	一
法人の國籍	島本 英夫〔國經〕六三三	年	一	卷	一
國籍の離脱に關する新規定に就て	山田 三良〔國際〕六三三	年	七	卷	七
國籍法中改正法律案を論じて再び一般離脱論に及ぶ	跡部定次郎〔法叢〕六三二	年	四	卷	四
國際法上に於ける國籍衝突問題	跡部定次郎〔法叢〕六四二	年	二	卷	二
船舶の國籍に就て	田中 誠二〔國際〕六四二	年	二	卷	一〇
國際法上國籍の得喪に關する原則	山田 三良〔國際〕六五二	年	五	卷	六
立憲君主制	末岡 精一〔法協〕四五〇	年	八	卷	八
家制及國體	穂積 八束〔新報〕四五二	年	二	卷	一三
國家、國體及政體の觀念	不須多樓主人〔新報〕四五二	年	九	卷	一〇〇
君主制度の成立を論ず	井上 密〔法政〕四五〇	年	二	卷	八
國體の種類	美濃部達吉〔新報〕四五〇	年	一七	卷	九
エリネツク教授の國體論	美濃部達吉〔國家〕四五二	年	二	卷	二〇
	參照 政體。民主主義。				

【國體】 【告知義務】

國體と政體	上杉 慎吉〔法協〕四四二九	年卷	一
政體と國體	河上 肇〔京法〕四四六六	年卷	三
支那の國體を論じて新憲法に及ぶ	副島 義一〔志林〕四四三二	年卷	二
國體に關する「憲法講話」の所説	上杉 慎吉〔國家〕四四二六	年卷	六
日本皇國の本質	寛 克彦〔新聞〕六九一八	年卷	三
帝國の國體と帝國憲法	美濃部達吉〔法協〕六二二二	年卷	六
國體觀念と自由思想	小山 東助〔國體〕六二二一	年卷	六
皇國國體根柢たる古神道に就て	寛 克彦〔法協〕六三三三	年卷	二〇
君主主義に關するフーゲルマンの説	森口 繁治〔京法〕六五二二	年卷	一
國體を論ず	仁保 龜松〔京法〕六六二二	年卷	一
君主國の特長を論ず	佐藤丑次郎〔法論〕六六一一	年卷	一
我が國體の特長を論ず	佐藤丑次郎〔法論〕六六一一	年卷	一
中歐君主制破滅の影響如何	稲田周之助〔新報〕六七一八	年卷	二
國體の區別に就て	森口 繁治〔法叢〕六九四二	年卷	二
皇國の原動行爲及非常行爲	寛 克彦〔法協〕六九三三	年卷	九
國體論	江木 衷〔辯協〕六〇二五	年卷	二
江木博士謹草の國體論	江木 衷〔新報〕六二二二	年卷	八
國體概論	石井 昶〔新報〕六二二二	年卷	八
國體概念と政治思想	永井 亨〔社政〕六三三一	年卷	四

國體と思想の關係
フランスに於ける君主專制思想の發展
建國の大精神

不破 清警〔新聞〕六三二二	三
松平 齊光〔國家〕六四三九	六
田崎 仁義〔商濟〕六五二六	二
告知義務	
保險契約に於ける告知義務に就て	玉木爲三郎〔辯協〕四三二七
保險契約に於ける告知義務を論ず	玉木爲三郎〔法政〕四三二九
告知義務の規定（商法改正案を評す）	岡野敬次郎〔新報〕四三二五
告知義務に關する法規の改正に就て	高野 金重〔保評〕四四四二
告知義務に於ける危險告知義務者	松本 丞治〔法協〕四四二九
告知義務に於ける保險の危險	水口 吉藏〔保評〕六二二六
告知義務者	松本 丞治〔保評〕六二二六
告知義務に就て	水口 吉藏〔評論〕六二二二
告知義務に關する規定は強	水口 吉藏〔評論〕六二二二

行規定か認容規定か	水口 吉藏〔新聞〕六五二二	年卷	一
商法第四二九條の告知義務違反に關する大審院の判例に就て	松本 丞治〔新聞〕六六一二	年卷	三
告知義務違反の規定と詐欺錯誤の規定との關係	成道齋次郎〔法記〕六七二二	年卷	二
告知義務違反に就て	篠原 昌治〔保評〕六二二二	年卷	一
告知義務の違反に因る保險契約の解除に就て	竹田 省〔法叢〕六〇二六	年卷	四
告知義務に關する諸問題	岡 五朗〔法政〕六二二二	年卷	二
生命保險法上の告知義務と他生命保險會社の保險契約申込拒絕	寺田 四郎〔辯協〕六三二七	年卷	三
告知義務違反の要件を論ず	三浦 義道〔新報〕六二二三	年卷	六
告知義務に關する外國法の比較（講演）	三浦 義道〔保評〕六三二七	年卷	一
告知義務法制的研究	三浦 義道〔新報〕六三三四	年卷	四
告知義務の法律上の性質	三浦 義道〔保評〕六三二七	年卷	五

告知義務違反に就て	寺田 四郎〔辯協〕六三二七	年卷	三
告知義務違反の要件を論ず	三浦 義道〔新報〕六二二三	年卷	六
告知義務に關する外國法の比較（講演）	三浦 義道〔保評〕六三二七	年卷	一
告知義務法制的研究	三浦 義道〔新報〕六三三四	年卷	四
告知義務の法律上の性質	三浦 義道〔保評〕六三二七	年卷	五
告知義務違反に就て	寺田 四郎〔辯協〕六三二七	年卷	三
告知義務違反の要件を論ず	三浦 義道〔新報〕六二二三	年卷	六
告知義務に關する外國法の比較（講演）	三浦 義道〔保評〕六三二七	年卷	一
告知義務法制的研究	三浦 義道〔新報〕六三三四	年卷	四
告知義務の法律上の性質	三浦 義道〔保評〕六三二七	年卷	五

國防に於ける移民問題と國防問題	小倉 和子〔三學〕四四二一	年卷	三
太平洋上の國防問題	沼田 照義〔國際〕六二二二	年卷	九
國防上の危機	佐藤鐵太郎〔國體〕六二二二	年卷	一
非國防會議論	莊田 秋村〔東經〕六二二二	年卷	一
帝國國防の標準と其統一	片桐西次郎〔日社〕六三二二	年卷	一
飛行機國防論	岡野養之助〔財經〕六三二二	年卷	二
軍備、國防及國是の概念	西本國之輔〔國體〕六三二二	年卷	三
國防會議無用論	犬養 毅〔財經〕六三二二	年卷	四
國防會議に就て	小澤 武雄〔日經〕六三二二	年卷	四
國防税の本質	犬養 毅〔國體〕六三二二	年卷	七
國防税の當否	神戶 正雄〔經叢〕六三二二	年卷	二
國防と工業	神戶 正雄〔經叢〕六三二二	年卷	三
國防充實と増税	雪 堂 生〔財經〕六三二二	年卷	七
人口と國力	小川郷太郎〔經叢〕六三二二	年卷	五
何ぞ國防充實の不急を叫ぶ	大西猪之介〔國體〕六三二二	年卷	四
ざる	龜井 陸良〔財經〕六三二二	年卷	七
經濟的國防論	添田 壽一〔東經〕六三二二	年卷	八
國防の基準と軍備縮少限度	河野 恒吉〔財經〕六三二二	年卷	一
我が陸軍當局の國防錯覺	伊藤 正徳〔財經〕六三二二	年卷	八

【告知義務】 【小口保險】 【國防】

【國務大臣】【穀物】

議及大臣の進退を論ず
外交調査會と輔弼責任
大臣の貨直論
國務大臣の副署につきて
國務大臣の輔弼の範圍
國務大臣の副署の拒否
軍の統帥に關する事項と國
務大臣の輔弼
國務大臣たる海軍大臣と他
管事項の應答

外 國

英國の内閣制と大宰相の地位
英國議會の大任彈劾權
清國大臣責任法論
清國の内閣總理大臣
支那國務總理大臣
獨逸聯邦に於ける國務大臣
の任免及責任
獨逸帝國宰相責任法案に就
て
獨逸帝國宰相の不信任
英佛米普各國彈劾に就ての
俗語

秋山 眞澄	〔新聞〕	六六	一三二八
松本 重敏	〔新聞〕	六六	一三七〇
木破 清警	〔新聞〕	六九	一七七八
清水 澄	〔新報〕	六〇	三二
金森徳次郎	〔新報〕	六一	三三
稻田周之助	〔新報〕	六三	三四
金森徳次郎	〔新報〕	六四	三五
金森徳次郎	〔新報〕	六四	三五
占部百太郎	〔三學〕	六三	三八
川手 忠義	〔新報〕	六五	三九
青柳 篤恒	〔外時〕	四四	三
青柳 篤恒	〔外時〕	四四	三
及川 恒忠	〔注研〕	六一	一
岩村 茂	〔國家〕	四五	六六
ラバンド	〔國家〕	四二	二三
上杉 慎吉	〔法協〕	六三	三三
末岡 精一	〔法協〕	四三	七

ヂェブリエ「白耳新立憲大
臣論」(譯)
佛國憲法に於ける統帥權と
國務大臣の責任

【穀物】

瑞西の穀物專賣計畫
穀物定期取引の穀價に及ぼ
す影響
穀物トラストに就て
穀物商品取引所の機能
露國に於ける政府穀物專賣
案
獨逸と穀物關稅問題
獨逸の穀物專賣
英獨兩國に於ける戰時の穀
物供給
穀物定期取引論
穀物商業論
英國穀法史論
英國の一九一七年穀物生産
法に付て

モツ

坂部行三郎〔國家〕
中野登美雄〔早法〕
參照||米。常平倉。農業倉庫。
農産物。米價。米穀法。

瀧本 美夫	〔國經〕	四三	七
河田 嗣郎	〔京法〕	四二	四
内池 廉吉	〔日經〕	四四	一〇
遠藤 隼見	〔國經〕	四五	二六
神戶 正雄	〔京法〕	六二	八
阿部 秀助	〔三學〕	六四	九
瀧谷 善一	〔國經〕	六四	一八
上田貞次郎	〔國經〕	六四	一九
河田 嗣郎	〔經叢〕	六五	二
河田 嗣郎	〔國經〕	六五	二〇
飯島 幡司	〔國經〕	六七	二四
松村眞一郎	〔志林〕	六八	二

英領馬來の米穀管理に就て
貯穀と常平倉
滿洲産雜穀禁輸令に就て
預備倉と濟農倉
支那及我邦に於ける穀倉の
研究
東三省に於ける防穀令に就
て
水戸烈公の穀物政策
水戸藩に於ける各種の貯穀
大震災と支那防穀令の解禁
英國穀物市場の史的考察
本邦穀物並に砂糖關稅の沿
革

【國】

參照||官業。公共事業。社會主
義。鐵道。土地國有。

尾上 利治	〔國經〕	六九	二九
本庄榮治郎	〔經叢〕	六九	二二
〔資料〕	六〇	七	一
善水 泰次	〔亞經〕	六一	六
小島 憲	〔經商〕	六一	一
松田 琢海	〔亞經〕	六二	七
本庄榮治郎	〔經叢〕	六三	二六
本庄榮治郎	〔經叢〕	六三	二七
細谷 清	〔外時〕	六三	三六
高木 壽一	〔三學〕	六三	一八
三宅鹿之助	〔經研〕	六五	三
神戶 正雄	〔京法〕	六五	七
神戶 正雄	〔京法〕	六二	八
林 癸未夫	〔社政〕	六〇	一
棟居喜久馬	〔東經〕	六〇	二〇
清水文之輔	〔東經〕	六二	二九
松崎 壽	〔商經〕	六二	一九

【穀物】【國有】【小作】

土地國有と資本國有
土地國有と資本國有
信用國有論
銀行國有と獨立労働黨
如何なる企業を國營とする
か
英國に於ける國有化運動の
一期

【小作】

米納小作料の是非
米納小作の利害に就て
小作料金納の利害
我國の小作慣行に就て
小作組合の研究
富山縣に於ける特殊なる小
作慣習
我國の農業労働と小作問題
注意すべき小作人問題
愛知縣に於ける地主小作人
間の紛擾
地主組合及び小作組合の目
的に就て

秋守常太郎	〔洋經〕	六三	一〇三
武藤 山治	〔洋經〕	六三	一〇三
岩崎 靜也	〔銀叢〕	六三	三
春日井 薫	〔銀研〕	六四	九
永富守之助	〔エコ〕	六四	二
松澤 兼人	〔社政〕	六四	一
田中 穂積	〔日經〕	四四	九
横井 時敬	〔日經〕	四四	一〇
桑田 熊藏	〔三學〕	六〇	六
山本美越乃	〔京法〕	六三	九
小野 武夫	〔國經〕	六三	二
和田 一郎	〔國家〕	六八	三
横井 時敬	〔財經〕	六九	七
河田 嗣郎	〔經叢〕	六〇	二
山崎 忠好	〔社政〕	六〇	一
中澤辨次郎	〔社政〕	六〇	一

【小作】

小作農兼貸銀労働者の生計

状態

地主對小作人の紛争
農村小作問題
村有小作地設定の議
小作農問題對策
小作制と小作法
地主小作人の協調
小作爭議原因の研究
小作料の高低
借地借家及小作爭議の調停的解決
小作爭議の解決
高潮しつつある我國小作人運動

Table with 3 columns: Author, Title, Page. Includes entries like 中澤辨次郎 (社政) 六二〇, 太田 利一 (社政) 六二〇, 矢作 榮藏 (社政) 六二〇, etc.

支那小作制度の現状

小作料を公定せよ
小作調停主義
小作爭議調停の効果
大正十三年に於ける小作爭議概観

小作爭議の態様に就て
小作爭議法廷戦の傾向
小作料の種類を論ず
小作爭議の概要
小作人はどの程度迄小作料減額を求め得るか
岡山縣に於ける小作爭議の情况

我國に於ける小作の種類
勞働組合としての小作人組合
小作問題と朝鮮の小作制
耕作權の保障と小作組合法
小作爭議解決の種々なる提案と其歸趨
小作と調停主義
農村問題と小作爭議
畦畔小作料問題

Table with 3 columns: Author, Title, Page. Includes entries like 長野 朗 (亞經) 六三三, 河田 嗣郎 (エコ) 六三三, 牧野 英一 (志林) 六三三, etc.

アメリカ合衆國の小作
經濟學に於ける地代論の繁榮と小作料

【小作調停法】

小作調停法案に就て
小作調停法の實施
時代相と小作調停法のギャップ
小作調停法に就て
小作調停法の有効に行はるる秘訣
小作調停法に對する安部教授の所論を讀む
小作調停法は人情味ある温かい解決を望む

Table with 3 columns: Author, Title, Page. Includes entries like 澤村 康 (農經) 六二五, 田邊 忠男 (社政) 六二五, 水本 信夫 (法新) 六三三, etc.

【小作法】

小作制と小作法
獨逸の小作法
英克蘭の小作法
伊太利及びルーマニアの小

【小作】 【小作調停法】 【小作法】 【兒島惟謙】 【戸主及び家族】

【兒島惟謙】

護神の神兒島惟謙全傳

【戸主及び家族】

家と戸主權
「家」の法理的觀念
絶家再興論
絶家再興の法理
「家」の觀念
民法上の「家」
佛國民法典に於ける家の組織
實家復籍に就て
棄兒の引受及引取
轉婚又は轉嫁組を爲したる者の復籍に就て
他家相續
民法第七三九條と第七四一條との關係

Table with 3 columns: Author, Title, Page. Includes entries like 澤村 康 (社科) 六二五, 江木 翼 (新報) 四三〇, 穂積 八東 (新報) 四三二, etc.

民法第七四一條に就て
家族制度と長子相続
婚姻又は養子縁組の取消に
因り復籍すべき者の實家
の廢絶せる場合に於ける
家籍

民法第七四四條適用の範圍
入夫の離婚は必ず入夫の去
家となるか
家に就て
私生子認知と縁家
民法中国家制改正の急務を論
ず

我が民法に於ける戸主制度
認知と家籍との關係を論ず
戸主制の存廢
相続權回復、後見人免職、
親族會決議の無効又は取
消、身分關係確定の訴は
事物の管轄
家籍の變更と親族會の存續
母系主義と臺灣生蕃
スイス民法の家制
届出人の關知せざる轉籍及

牧野菊之助	〔法政〕四〇	二
石坂音四郎	〔京法〕四四	三一
牧野菊之助	〔志林〕四四	一〇
島田 鐵吉	〔明學〕四四	一三
牧野菊之助	〔志林〕四四	二
石山 彌平	〔新報〕四四	一九
繁田 保吉	〔新聞〕四三	一
石山 彌平	〔新報〕四四	二
齊藤 巖	〔新聞〕四五	一
岡村 司	〔志林〕四四	三
岡村 司	〔京法〕六二	九八
牧野菊之助	〔新報〕六六	二七
小石川 生	〔新聞〕六六	一
岡松參太郎	〔新報〕六六	二七
穂積 重遠	〔日社〕六七	六

離婚の届出
戸口規則の性質を論ず
古代法に現れたる家族制
家族制度と淳風美俗
親族法の改造と現代的家族
制度
私生子認知に因る家籍の變
動
民法第七四四條廢止論
吾國家族制度に對する法律
的一考察
戸口規則の性質の關係
未成年者と相続人の指定及
轉籍の能力に關する宮城
控訴院判例批評
民法施行前の去家と施行後
に於ける遺産相続權
戸主及び家族の權利義務
家と戸主權
民法第七四九條第三項に付
て
居所の指定に從はざる法定
の推定家督相続人の離籍
に關する新判例

穂積 重遠	〔法協〕六七	三
杉本 榮次	〔臺法〕六九	一四
野村兼太郎	〔三學〕六九	一四
中島 玉吉	〔法叢〕六〇	五
磯谷幸次郎	〔志林〕六〇	三
岡村 玄治	〔志林〕六二	二四
中島 玉吉	〔法叢〕六二	九
小室 春富	〔辯協〕六三	二七
姉齒 松平	〔臺法〕六三	一七
荒木 櫻洲	〔新聞〕六三	一
岸井 辰雄	〔辯協〕六四	二九
江木 翼	〔新報〕六〇	七
山本徳太郎	〔志林〕六三	二
佐々木茂三郎	〔志林〕四三	二

民法第七四九條第三項の場
合に於ては法定の推定家
督相続人と雖も之を離籍
することを得るか
氏名に就て
親權と戸主權
氏名權論
家族に非ずして相続人に指
定せられたる者の戸主權
の取得
族稱論
戸主の不同意に關する救済
方法
戸主なき戸主權
氏名論
戸主の所有物と家族の使用
及占有
戸主權を論ず
家族の婚姻と戸主の同意權
戸主權の喪失
絶家の時期
民法施行前法定の推定家督
相続人他家に入り其後該
單身戸主死亡して家督相

梅 謙次郎	〔志林〕四三	年	四	卷	二	號
牧野菊之助	〔法政〕四三	九	六	八		
岡村 司	〔志林〕四三	八	三			
淺見倫太郎	〔法記〕四三	九	一	六		
牧野菊之助	〔志林〕四一	一〇	一			
牧野菊之助	〔法記〕四一	一八	二			
島田 鐵吉	〔明學〕四一	一	二	四		
阪本 三郎	〔志林〕四一	二	二			
川名謙四郎	〔志林〕四一	二	四			
齋藤 巖	〔新聞〕四五	一	七	七		
仁保 龜松	〔法叢〕六九	四	一			
鬼武 義彦	〔新聞〕六三	一	二	〇		
川名兼四郎	〔法政〕四五	六	五			

續開始したるも絶家と爲
らざる場合と家及財産の
處分
民法第七六二條に所謂已む
ことを得ざる事由に付き
絶家の時期に就て
未成年者の廢家能力

【個人主義】
個人主義
個人主義と共同主義
琉球系滿の個人主義的家族
社會政策と個人主義
個人主義に就て(其の國家
主義及び社會主義との關
係)
分合の法則を論じて個人主
義及び國家主義の協同に
及ぶ
合理的專制主義及個人主義
社會主義と個人主義的自由
個人主義及社會主義局外觀
個人主義より人格主義へ

牧野菊之助	〔新報〕六六	二七	九
牧野菊之助	〔新報〕六九	三〇	五
徳永 平次	〔辯協〕六一	二六	六
齋藤 巖	〔新聞〕六三	一	三
參照 共產主義、經濟學、資本主義、社會主義			
ロールウエル	〔新報〕四四	一	七
永井 亨	〔法協〕四六	二	一
河上 肇	〔京法〕四四	六	九
金井 延	〔法協〕六〇	三〇	九
稻田周之助	〔新報〕六二	二三	二
丸谷 喜市	〔國經〕六六	二三	一
村瀬武比古	〔國國〕六二	一〇	四
河上 肇	〔社問〕六二	一	三五
財部 靜治	〔經叢〕六二	一	二
深作 安文	〔法公〕六五	三〇	三四

國家と社會的生活の完成	堀江 歸一〔刑評〕四四三
國家問題と人種問題	戸田 海市〔志林〕四四一三
機關行為と國家の責任	村田岩次郎〔三學〕四四一六
プラトンの哲理及國家論	寛 克彦〔法協〕四四三〇
アリストテレスの哲理及國家論	寛 克彦〔法協〕四四三〇
機關といふ語	寛 克彦〔法協〕四四三〇
國家及政體	上杉 慎吉〔新報〕四四三三
國家道德論を讀む	美濃部達吉〔國家〕六九二六
希臘論辯學者の哲理及び國家論	今村力三郎〔辯協〕六九二六
國家有機體説の概要及び其批評	寛 克彦〔法協〕六九二二
國家と其意義	稻田周之助〔新報〕六九二二
國家と自治體	植原悦二郎〔國國〕六九二一
洪範に現はれたる王道的國家觀念の研究	村田岩次郎〔三學〕六九二八
國家の重量と專念建設	田崎 仁義〔國家〕六九二八
政治心理學上より觀たる國家	鶴澤 總明〔國國〕六九二二
國家意思の歸一	稻田周之助〔新報〕六九二五
國家と法	村田岩次郎〔三學〕六九二九
國家の王道的發展	織田 萬〔京法〕六九二〇
皇室の事務と國家の事務	鶴澤 總明〔國國〕六九二四
	美濃部達吉〔國家〕六九三〇

ポリビオスの國家論に就て	森口 繁治〔京法〕六六三
國家の起源	植原悦二郎〔國國〕六六五
國家の性質	植原悦二郎〔國國〕六六五
國家の生物學的觀察	田中萃一郎〔三學〕六六一
國家の宗教的意義	紀平 正美〔國國〕六六五
國家本位	市村 光惠〔法論〕六六一
國家の席次に關する法王ジュリアス二世の勅命に就て	
學問の對象としての國家	中山 詳一〔京法〕六六三
カント國家及法律哲學と論理形式主義經濟學	森口 繁治〔京法〕六六二
戰爭と國家組織(講演)	福田 德三〔三學〕六六二
立法事業と國家	佐藤綱次郎〔日社〕六七六
生活史料と國家の生存	川手 忠義〔辯協〕六七三
ルソー「民約論」を讀む	矢野 貫城〔亞經〕六七二
國家分裂の際に於ける責任の分擔	森口 繁治〔京法〕六七三
古代希臘に於ける國家理論	泉 哲〔國國〕六七六
國家正義の保障と社會政策	森口 繁治〔法論〕六七二
假想國家論の意義と價值	布施 辰治〔新聞〕六七二
國家機關概説	森口 繁治〔法叢〕六八二
國家と勞働問題	美濃部達吉〔法協〕六八三
「古代國家論」の五十年紀	田宮準一郎〔國國〕六八七
	田中萃一郎〔三學〕六八三
	森口 繁治〔京法〕六六三
	中山 詳一〔京法〕六六三
	森口 繁治〔京法〕六六二
	福田 德三〔三學〕六六二
	佐藤綱次郎〔日社〕六七六
	川手 忠義〔辯協〕六七三
	矢野 貫城〔亞經〕六七二
	森口 繁治〔京法〕六七三
	泉 哲〔國國〕六七六
	森口 繁治〔法論〕六七二
	布施 辰治〔新聞〕六七二
	森口 繁治〔法叢〕六八二
	美濃部達吉〔法協〕六八三
	田宮準一郎〔國國〕六八七
	田中萃一郎〔三學〕六八三

不完全國家の危懼

不完全國家の危懼	稻田周之助〔外時〕六九三
ギルソ社会主義の國家觀	加田 忠臣〔三學〕六九二
ヘーゲルの自由意志説と國家	長谷川 萬次郎〔我等〕六九二
國家本質に關する二大思潮の對立を論じて私見を述べ	中島 重〔同論〕六九一
英國に於ける新國家論	中島 重〔同論〕六九一
絶對國家説に對する社會學的批判	長谷川 萬次郎〔我等〕六九二
國家と眞理との交戦状態	長谷川 萬次郎〔我等〕六九二
生活の現實と超國家の破滅	長谷川 萬次郎〔我等〕六九二
ケルゼン「國家機關の人格」	田村 德治〔法叢〕六九三
プロイスの機關人格論解説	田村 德治〔法叢〕六九三
アントン・メンガー「社會主義的國家論」の輪廓	恒藤 恭〔法叢〕六九四
マルクス派の國家觀	加田 忠臣〔三學〕六九四
コール國家觀の補論	加田 忠臣〔三學〕六九四
國家觀と國際思想の消長	今中 次麿〔外時〕六九四
主權説の成立と其崩壞	長谷川 萬次郎〔我等〕六九四
サン・シモンの國家觀	恒藤 恭〔我等〕六九四
國家精神と國際精神	高島平三郎〔國聯〕六九四
國家觀念の確立	平松 市藏〔辯協〕六九五
アントン・メンガー新國家	

組織の經濟的基礎

組織の經濟的基礎	山口正太郎〔國經〕六九五
國家觀念の確立	平松 市藏〔辯協〕六九五
ケルゼン「機關態と代理態」	田村 德治〔法叢〕六九五
國民、國民的國家及世界國民	宮崎 力藏〔國經〕六九五
國家機能の二大分歧	奥井復太郎〔三學〕六九五
機關論の發達に就て	田村 德治〔法叢〕六九五
國家機關の人格を論ず	野津 務〔法協〕六九五
イェリネック「國家機關の法律地位」	田村 德治〔法叢〕六九五
プラトンの國家觀と之れに對するアリストオテリ	
イズの批評	高橋誠一郎〔三學〕六九五
西洋中世の國家及社會	大類 伸〔法政〕六九五
主權の學説と國際主義の開展	大山 郁夫〔我等〕六九五
國家を團體の一種なりとする新説	中島 重〔我等〕六九五
資本主義國家の一歸着點(獨逸戰後の經濟狀態)	
國家論に就て	大内 兵衛〔原バ〕六九五
近代國家の原則と其將來	會田 範治〔辯協〕六九五
社會に於ける國家の地位	杉森孝次郎〔國聯〕六九五
多元論的國家學説成立の可能性	高田 保馬〔國家〕六九五
	中島 重〔同論〕六九五

國家と社會との關係	高田 保馬〔法政〕六一一九
ブルンチユリーの國家論に 現はれたる國家構成の原 理としての國民性	村瀬武比古〔法政〕六一 副島 義一〔法政〕六一 山崎又次郎〔法研〕六二 山崎又次郎〔法研〕六二
法と國家との關係	山崎又次郎〔法研〕六二
公共團體即國家の概念	山崎又次郎〔法研〕六二
公共團體即國家の本質に關 する二三の考案	山崎又次郎〔法研〕六二
ルソ一の國家及法律論の基 調	船田 享二〔法政〕六二 石井 易〔法政〕六二 田中萃一郎〔法研〕六二
國家と會社	船田 享二〔法政〕六二
ラアスキイ氏の國家論	石井 易〔法政〕六二
ステルンベルヒの國家と法 律	田中萃一郎〔法研〕六二
マキアベリの國家論と近世 ユトピア	藩 德 新〔法治〕六二
國家の滅亡と政體の變更	生島廣次郎〔國經〕六三 泉 哲〔國經〕六三
社會主義と國家	小泉 信三〔三學〕六三 紀平 正美〔外時〕六三
國家の特殊性を發揮せよ	紀平 正美〔外時〕六三
英國に於ける國家内の一國 家	細川 嘉六〔原バ〕六三 生島廣次郎〔國經〕六三 平野 清〔國經〕六三 副島 義一〔早法〕六三
近世國家思想と法理思想	細川 嘉六〔原バ〕六三
マツケンヂの三重國家論	生島廣次郎〔國經〕六三
國家論	平野 清〔國經〕六三

多元的國家の哲學的根據	柳澤 泰爾〔法治〕六二
國家概念の法律的構成	菊池 勇夫〔國家〕六二
多元論的國家學說と倫理學 上の自我實現說	中島 重〔同論〕六二
ヴェンツェル氏「法律團體 及び國家」	渡邊宗太郎〔法叢〕六二 松平 齊光〔國家〕六二
ルソ一と多元的國家論	松平 齊光〔國家〕六二
人生觀の改築と國家概念の 展開	本莊 可宗〔國知〕六二 北原 龍雄〔マル〕六二
國家社會主義の國家觀	本莊 可宗〔國知〕六二
マルクス・エンゲルスの國 家論	北原 龍雄〔マル〕六二
ケルゼン「規範的體系」と しての國家	平野 常治〔社雜〕六二
カントの國家論	平野 常治〔社雜〕六二
社會主義と國家思想	黑田 覺〔法叢〕六二
クラッペの「近代國家觀」	關 榮吉〔社雜〕六二
國家に關する一斷片	小泉 信三〔財經〕六二
形而上學的國家論	大山 郁夫〔我等〕六二
ギールケの有機體及び社會 法の概念(グルキツチ)	高橋 眞樹〔マル〕六二
ギールケに於ける有機體の 概念	村瀬武比古〔法治〕六二
ヘーゲルの國家理念論の考	能勢 克男〔同論〕六二 船田 享二〔法政〕六二

ケルゼン「神と國家論」の 梗概	今中 次磨〔國家〕六三
ヴェンツェルの國家概念に 對するケルゼンの批評を 讀む	飯塚 敏夫〔法政〕六三
超國家の組織と英獨及び日 米	渡邊宗太郎〔法叢〕六三
マクドウガルの國家學說	田崎 仁義〔長彙〕六三
ルドルフ・チエレーンの國 家に關する學說	津曲藏之丞〔我等〕六三
社會主義國家の階級問題	藤澤 親雄〔國際〕六四
社會的國家觀念	ブイストリ〔マル〕六四
Gott und Staat	村瀬武比古〔法治〕六四
ケルゼンに於ける Staatslehre の地位	Hans Kelsen〔早法〕六四
階級國家の崩壊過程	堀 眞琴〔國家〕六四
階級國家の崩壊	河野 密〔我等〕六四
政治と國家	馬場 恒吾〔外時〕六四
ヘーゲルの國家論	戸澤 鐵彦〔法集〕六四
行動の體系としての國家	紀平 正美〔外時〕六四
ヤング教授の國家論	長谷川 萬次郎〔我等〕六四
國家概念の一考察	淺野 研眞〔法政〕六四
マルクス・ウエバアの國家	黒田 覺〔法叢〕六四

概念	ゲオルグ・マイヤー著「國 家と既得權」
と強制秩序	マルキンズに於ける國家 主權に關する三様の考察
國家行動の四形態	主權に於ける多元論と一元 論
論	デユギアの國家論
マルクスの國家觀(譯)	マルクス國家觀の生誕
福田博士の「レーニンの國 家理論」とケルゼンの 「社會主義と國家」との 奇蹟的合致	岩城 忠一〔商論〕六五
國家の機關と其權限	森口 繁治〔法叢〕六五
國家主權說の國際法上に於 ける地位	山本 三吾〔外時〕六五
社會と國家の關係	五來 欣造〔早政〕六五
現代國家の本質とその分解	高橋 清吾〔早政〕六五
マルクス說に於ける社會と 國家	河野 密〔我等〕六五
堀 眞琴〔國家〕六四	二
淺野 正一〔法叢〕六四	五六
森戸 辰男〔我等〕六五	三八
村瀬武比古〔法政〕六五	一五
長谷川萬次郎〔我等〕六五	二四
今中 次磨〔同論〕六五	一九
中島 重〔社科〕六五	三
カウツキイ〔社科〕六五	六
森戸 辰男〔原雜〕六五	一
岩城 忠一〔商論〕六五	一
森口 繁治〔法叢〕六五	一三
山本 三吾〔外時〕六五	五〇七
五來 欣造〔早政〕六五	三十四
高橋 清吾〔早政〕六五	四
河野 密〔我等〕六五	八

【國家】(國際法上)

參照II國際聯盟—聯盟と國家保護國。

- 國際法の區別及其主格 花井 卓藏〔新報〕四八 五三
- 國際法國を論ず 松村 敏夫〔法協〕三九 一四
- 國家自衛權の性質及範圍 山石 正文〔新報〕三〇 七
- 國際法上國家の責任を論ず 白雲生處主人〔新報〕三一 八
- 國際法上國家の人格を論ず 鐵城 學人〔新報〕三一 八
- 國際法上國家の權利に關する大疑問 宮本平九郎〔法協〕三二 一七
- 國家責任の法理 長谷川千代松〔外時〕三三 三
- 國際間の自衛權を論ず 倉知 鐵吉〔法政〕三三 四
- 避擧國(楔子國) 戸水 寛人〔法政〕三四 五
- 國際公法の主體を論ず 秋山雅之助〔志林〕三五 四
- 國際法上より觀察したる主權 松原 一雄〔法政〕三五 六
- 國際公法の主體に就て 蜷川 新〔國際〕三五 一
- 一部主權國なる文字に就て 蜷川 新〔國際〕三五 一
- 對外主權なる文字に就て 蜷川 新〔國際〕三五 一
- 國際法上の權利と國內法上の權利 松原 一雄〔國際〕三五 一
- 國際賠償責任 松原 一雄〔明法〕三五 一
- 國際法上の自衛權に就て 松原 一雄〔國家〕三六 二
- 國際團體と非歐洲國民 加福 豊七〔國際〕三六 二
- 所謂緩衝地に就て 松原 一雄〔新聞〕三六 一

現時の國際團體中小國家の地位

- 國際法上より見たる自衛權を論ず カテラニイ〔國際〕三七 二
- 國家の承認は遡及力を有するや ウエストレーキ〔法政〕三七 八
- 國際法上所謂自衛權の根據及性質を論ず 遠藤 源六〔國際〕四〇 五
- 保護國の類別 渡邊 省三〔法協〕四〇 二五
- 國際法上に於ける國家の主權 有賀 長雄〔外時〕四〇 一〇
- 一部主權國と云へる新術語を批駁す 立 作太郎〔法協〕四二 六
- 外國人の受けたる損害に對する國家の國際責任 千賀鶴太郎〔京法〕四二 三
- 國際法上の獨立權 アンチロッチ〔明學〕四二 一
- 國際法上の主權を論ず 立 作太郎〔新報〕四三 二
- 國際法上及國法上の主權 津島 壽一〔國際〕四四 一〇
- 國際法上に於ける主權國及半主權國の觀念 川端 審三〔三學〕四五 六
- 國際法上國家及び國家の分類に關する私論 立 作太郎〔新報〕四五 三
- 國際生活に於ける小國の地位 板倉 卓造〔三學〕四六 四
- 位 燧山亭太郎〔外時〕四六 一六

國際法上大國の地位

- 高橋博士の基本權の説を批駁す 板倉 卓造〔國際〕六一 二
- 國旗の凌辱を論ず 千賀鶴太郎〔京法〕六二 八
- 國旗論 立 作太郎〔志林〕六三 一八
- 國際法上國家の責任 松波仁一郎〔國際〕六三 二
- 國際法上に於ける國家の相續の基本思想 遠藤 源六〔新報〕六三 二
- 國家の獲得權に就て 立 作太郎〔國際〕六四 四
- 國家の基本權 千賀鶴太郎〔京法〕六六 二
- 國家の破産と國際公法 千賀鶴太郎〔京法〕六六 二
- 主權又は獨立と國際聯盟 大久保忠雄〔法論〕六六 一
- 國家聯合の意義に就て 矢野 生稿〔國國〕六八 七
- 國際法學上の「國家」概念に就て 佐々 弘雄〔國際〕六九 二〇
- 國際社會に於ける國家の無過失責任 塚本 毅〔國家〕六九 二
- グオルグ・マイヤー著「國家と既得權」 蠟山 政道〔國知〕六三 四
- 國際不法行為に對する國家の責任 淺野 正一〔法叢〕六四 二四
- 無政府國の國際的地位 泉 哲〔國際〕六四 二四
- 松原 一雄〔外時〕六五 三三
- 松原 一雄 五二六

【國會議員】

- 國家議員の歳費又は日常に關する各國制度の比較 小田切善太郎〔國家〕四九 一〇
- 國法上國會議員の權利及義務 井上 密〔内外〕四五 一
- 國會議員歳費論 川島 龜夫〔新聞〕四六 一
- 衆議院議員の失格を論ず 岩田 宙造〔新報〕四七 一
- 衆議院議員の失格に關する疑義 稻田周之助〔新報〕四八 一
- 國家議員の歳費 帝國議會議員は保護會社重役たらしむべからざるか 稻田周之助〔日經〕六一 二
- 國家學の一新(講演) 加藤 弘之〔國家〕四二〇 一
- 國家學講究の方針 渡邊 法基〔國家〕四二二 二
- 學理と實務との關係 木場 貞長〔國家〕四二三 三
- 今日の國家學(講演) 加藤 弘之〔國家〕四二三 四

議會を見よ

【國家學】 【國家主義】 【國交に關する罪】 【ゴッセン】 【ゴットル】

國家學と妖怪學との關係
國家學とは何ぞや
伊藤公と國家學會(講演)
法學及國家學に於ける現象
學的傾向
井上 圓了(國家)四二七
瀧本 美夫(國經)四四〇
阪谷 芳郎(國家)四四三
堀 眞琴(我等)六五八

【國家主義】 參照||國際主義。國民主義。

公法及國家主義
大國家主義としての社會政
策
個人主義に就て(其の國家
主義及び社會主義との關
係)
分合の法則を論じて個人主
義及び國家主義の協同に
及ぶ
民本主義を評し國家主義を
奉せざるべからざるを論
ず
國家主義、帝國主義、軍國
主義、戰爭謳歌
國家主義の禍
總積 八東(新報)四八五
寺尾 隆一(日經)四四五
稲田周之助(新報)六二二
内谷 喜市(國經)六六三
竹内賀久治(辯協)六七三
杉村陽太郎(外時)六二〇
クート(國聯)六二二

【國交に關する罪】

國際主義と國家主義
世界主義に對する國家主義
的反抗
現代國家主義と國防上の特
徴
世界は國家主義に還元す
改正刑法の國旗國章の意義
に就て
私戰の意義
國章に對する罪の容體
木村 重治(外時)六二七
栗原 信一(法政)六三三
伊丹 松雄(外時)六四四
鹽澤 昌貞(外時)六四四
藤澤茂十郎(新聞)四四一
牧野 英一(志林)四四二
牧野 英一(志林)四四二
山口正太郎(國經)六五二
山口正太郎(同論)六九一
Gottl. Oettilienfeld,
1868-)

認識論的經濟價值論

【ゴドウィン】 (William Godwin, 1756-1836)

ゴドキンとウオルストン。
クラフトとの結婚生活
森戸 辰男(我等)六四七

【コブデン】 (Richard Cobden, 1804-1865)

コブデンの自由貿易論
關 一(日經)四四〇
中野 海藏(東經)六二六
士熊仁三郎(洋經)六五

護謨の相場と將來
面目一新せるゴム事業と其
の將來
スマトラに於ける護謨栽培
業の實況
護謨事業の將來
井上 雅二(財經)六七五
井上 雅二(財經)六二〇

【小麦粉】 參照||製粉。麥。

本邦に於ける小麦粉の生産
と其輸出入
加藤 銀藏(統集)六七一

【ゴットル】 【ゴドウィン】 【コブデン】 【護謨】 【小麦粉】 【米】

【米】

小麥及小麦粉關稅引上是非
河田 嗣郎(經叢)六三二
參照||穀物。常平倉。取引所。
農業倉庫。農産物。米價。
米穀法。

米作地方の重要程度
食料米及一人平均分配量
米の經濟
定期米受渡の方法
外米課税と米價の關係
米穀輸入稅率改正につきて
稻作と我農業
米穀輸入稅改正に就て
米及米關稅に關する統計調
査
米に關する調査
肥後の米券倉庫
徳川幕府時代に於ける最高
百萬石の米穀取引に關す
る調査
榎合米相場と取引所政策
米穀検査に對する改正意見
米穀買占と其の制裁
吳 文聰(統集)四三六
吳 文聰(統集)四三六
横井 時敬(國經)四四一
川上 賢三(國經)四四五
十樓 生(東經)四四九
河津 暹(志林)四四二
横井 時敬(日經)四四一
福島 平(新報)四四一
水野 良高(日經)四四二
山崎繁次郎(東經)四四二
佐野 善作(國經)四四二
佐野 善作(國經)四四二
横井 時敬(日經)四四二
莊田 秋村(東經)四四二

米收穫石高豫想用粒實算定

法

米價暴騰と米穀輸入税の關係

本邦米の産額及消費高に就

て

米價の將來と米穀輸入税

米穀關稅廢止論

加賀藩藩政時代に於ける高岡綿場及び金澤米場に關する調査

米買占と資金

外米關稅廢止問題と議會

東北凶作と外米輸入税減廢

東北凶作地方状況の瞥見

徳川幕府時代に於ける尾州名古屋の延米高に關する調査

米麥豫想調は必要なり

麥作と米作

東北凶作と稻作

米産額の前途

米の供給と關稅

標準米制度を論ず

河原 丑輔〔統集〕四五 卷一 三七號

莊田 秋村〔東經〕四五 卷一 一三七

相原 重政〔統集〕四五 卷一 三三二

河津 暹〔日經〕四五 卷一 一

小林丑三郎〔東經〕四五 卷一 一四五

佐野 善作〔國經〕六三 卷一 四一六

莊田 秋村〔東經〕六二 卷一 一六六

莊田 秋村〔東經〕六二 卷一 一六九

秋村 居士〔東經〕六二 卷一 一七六

三浦 哲郎〔日社〕六三 卷一 一四五

佐野 善作〔國經〕六三 卷一 一六六

吳 文聰〔東經〕六三 卷一 一七四

秋村 居士〔東經〕六三 卷一 一七五

横井 時敬〔日經〕六三 卷一 一

横井 時敬〔財經〕六三 卷一 一

鈴木梅四郎〔財經〕六三 卷一 一

内池 廉吉〔國經〕六四 卷一 一

米券に就て

米の豊凶と米價

米麥の收穫統計に就きて

日本産業發達の裏面(米麥栽培業)

貿易品としての米に就て

米の生産費に就て

米の生産費

米穀の貯藏に就て

米穀定期取引に對する數箇の疑義

佛國米麥調査に關する布告

米穀管理に就て

米切手

米に對する政策

國民生活の安定と米穀の官營

米穀取引所の格付制度に就て

無謀なる我が米穀經濟策

米の收穫高と人口の増加

支那米輸出解禁問題

大正八年度下半年に於ける内地産米の量價に就て

道家 齊〔日經〕六四 卷一 二二

高田 保馬〔經叢〕六四 卷一 二

吳 文聰〔東經〕六五 卷一 一八七

一知半解樓〔財經〕六五 卷一 三

河合 利安〔統集〕六五 卷一 三

河田 嗣郎〔經叢〕六五 卷一 二

小林丑三郎〔東經〕六五 卷一 一八四

古在 由直〔財經〕六六 卷一 二

山崎 繁樹〔三學〕六六 卷一 八

野宮 進〔統集〕六七 卷一 四

河合 良成〔國家〕六七 卷一 二

幸田 成友〔三學〕六七 卷一 一三

神戸 正雄〔經叢〕六七 卷一 四

大場 茂馬〔法論〕六七 卷一 八

河合 良成〔國家〕六七 卷一 五

横井 時敬〔財經〕六七 卷一 七

加藤 銀藏〔統集〕六七 卷一 七

吉田 虎雄〔亞經〕六八 卷一 三

伊丹 萬里〔經叢〕六八 卷一 二

支那米輸出解禁問題の將來

米收穫豫想高と實收高との比較

米問題の根本的解決策

米穀の貯藏に關する研究

米穀消費量の計算方法に就て

徳川時代の米穀消費節約策

支那米輸出解禁問題の將來

日本の米、英國のパン

米穀取引に就て

支那米の生産及び消費状態

米穀投資防止運動に就て

江戸時代に於ける尊米賤貨論

江蘇省に於ける稻作に就て

米麥の品種改良に就て

米の需給關係の米價の消長

米作統計と平年作算出方法

米穀專賣提議

米穀市場改善の要務

舊仙臺藩に行はれたる買米制度

本年度の米穀需給關係に就

柏田 忠一〔亞經〕六八 卷三 四號

細野 繁藏〔統集〕六八 卷一 四六

古在 由直〔財經〕六八 卷一 四

大工原銀太郎〔財經〕六八 卷一 二

高城伸太郎〔三學〕六八 卷一 七

本庄榮治郎〔經叢〕六八 卷一 三四

柏田 忠一〔亞經〕六九 卷一 二

田川大吉郎〔洋經〕六九 卷一 九七

指田 義雄〔東經〕六九 卷一 一〇〇

島津 忠男〔財經〕六九 卷一 一

田邊 忠男〔財經〕六九 卷一 三

中村 孝也〔國國〕六九 卷一 六七

瀬川 政雄〔亞經〕六九 卷一 三

寺尾 博〔財經〕六九 卷一 五

有働 良夫〔財經〕六九 卷一 一

橋本傳左衛門〔財經〕六九 卷一 九

河田 嗣郎〔エコ〕六九 卷一 九

河田 嗣郎〔エコ〕六九 卷一 一〇

土屋 喬雄〔經論〕六九 卷一 三

て

舊岡山藩の社會法に就いて

是非必要な米專賣制

米穀關稅免除延期の可否

外米關稅と内地米價

米に關する相關現象の研究

食糧問題と朝鮮の米作

米の收穫と價格との關係

水稻作付反別調査法の一考察

鮮米増産計畫

米穀定期取引所の實際と其弊害に就て

米穀取引所に於ける朝鮮米の地位

米穀取引所の統一と取引改善

善

朝鮮米と清算取引

朝鮮産米増殖計畫に就て

朝鮮産米増殖計畫と世論

米穀關係と輸出地の米價

米株の相場(取引)と法律

正米市場の問題

十四年度米實收高

入江 魁〔財經〕六二 卷一 四

黒正 巖〔經叢〕六二 卷一 二

河田 嗣郎〔エコ〕六三 卷一 一

河田 嗣郎〔エコ〕六三 卷一 二

米澤 耕實〔社政〕六三 卷一 一

大平 頼母〔商經〕六三 卷一 三

河田 嗣郎〔經叢〕六三 卷一 九

猪間 驥一〔經論〕六三 卷一 二

由井 威如〔統雜〕六四 卷一 四七

神戸 正雄〔時經〕六四 卷一 三

平尾縫太郎〔民衆〕六四 卷一 二

島 剛〔取引〕六四 卷一 二

香月 芳〔取引〕六四 卷一 三

石塚 峻〔取引〕六四 卷一 三

矢内原忠雄〔農經〕六五 卷一 一

山本美越乃〔經叢〕六五 卷一 一

河田 嗣郎〔經叢〕六五 卷一 一

原田鹿太郎〔民衆〕六五 卷一 四

神戸 正雄〔時經〕六五 卷一 四

神戸 正雄〔時經〕六五 卷一 四

四六〇

【米】【米騒動】【雇傭】【娯樂】

正米市場法案

神戸 正雄〔時経〕六二五 年一 卷四五號

【米騒動】

参照||米價。

米騒動の今昔
是果して誰れの罪ぞ
米騒動以上に恐るべきものあり

東田 藤吉〔國経〕六七二 五
新井要太郎〔辯協〕六七三 九

米騒動論
米價暴動の社會的意義
米一揆

平澤 均治〔辯協〕六七三 九
有賀 成可〔辯協〕六七三 九一〇

米騒動の社會觀
米價騒擾と階級戦争
一揆の觀念

戸田 海市〔經叢〕六七七 四
本庄榮治郎〔經叢〕六七七 四
榑田 民藏〔國家〕六七三 一〇
内池 廉吉〔東經〕六七七 一六九
本庄榮治郎〔經叢〕六八八 一

【雇傭】

労働者企業者間の法律關係
に關する新説

参照||

使用人の地位に就て
労働契約
不忠實なる雇人の行爲は善
良の風俗に反するものなり

牧野 英一〔法協〕四三六 二 五
雄城 生〔新聞〕四三六 一 一三六
岡村 司〔京法〕四四一 三六二 二

雇傭者責任法と労働保險制

森 作太郎〔新聞〕四四一 一 五四三
野守 廣〔保評〕四四四 四 一四

コーラー教授の千五百マール契約 對する見解

同盟罷工の法律的觀察
雇傭契約發展の史的考察
(ギールケ「雇傭契約の起原」に就て)

水口 吉藏〔評論〕六三二 一九
松永 義雄〔辯協〕六九二 四 五七

英法に於ける労働組合及労働爭議

末川 博〔法叢〕六二〇 五 五

徒弟契約に就て
雇傭契約に關する二三の考察

宮本 英雄〔法叢〕六一八 五
佐野 潔〔辯協〕六二二 六 一〇

繼續的債權契約の特質と賃
貸借及び雇傭
同盟罷業の合法性と其の私
法的效果

小地 隆一〔法研〕六二二 一 一
平野義太郎〔志林〕六二二 五 一四

徒弟契約に於ける使用者の
使用義務

平野義太郎〔法協〕六三二 四 一五六
小橋 壽夫〔新聞〕六四一 二四二 六

【娯樂】

参照||活動寫眞。

劇場法
最近十五年間に於ける各種
興行物の趨勢

オベツト〔志林〕四三三 一 四三三

寄席興行一斑

権田保之助〔國家〕六八三 三 四

娯樂税に就て

山崎 犀二〔法政〕六八二 年一 卷四四號

寄席興業の統計的觀察
民家娯樂の發達に就て
遊戯及遊戯場問題

権田保之助〔統集〕六八一 四九
権田保之助〔統集〕六九一 四七
新井 誠夫〔社政〕六〇一 九

工場娯樂としての音楽、舞
踊及歌劇

小林 愛雄〔社政〕六〇一 一四

ギョウ・コロンビエ劇場の
主義方針

三島 章道〔我等〕天二 四 一
権田保之助〔我等〕六一 四 一

民衆娯樂の純化
社會生活に於ける娯樂の一
考察

権田保之助〔原雅〕六三二 一
神戸 正雄〔經叢〕六三一 九 二
神戸 正雄〔經叢〕六三一 九 五

娯樂税の重税
娯樂税の構成

権田保之助〔原雅〕六三二 一
神戸 正雄〔經叢〕六三一 九 二
神戸 正雄〔經叢〕六三一 九 五

【コロニニ・クロンベルク】 (Abrecht Graf Coronini-Cronberg)

クロンベルクの占有論

藥師寺傳兵衛〔法記〕六七二 六 二

【婚】 参照||家族。婚姻(法)。離婚。

婚姻の事實

岡松 徑〔統集〕四一五 一 二

結婚を論ず

奥田 義人〔法協〕四一七 二 六

婚姻論

横山 雅男〔スタ〕四二〇 一 一
横山 雅男〔スタ〕四三三 一 三六

婚姻論

横山 雅男〔スタ〕四三三 一 三六

結婚年齢論

横山 雅男〔統集〕四三三 一 九四

婚姻の話

横山 雅男〔スタ〕四三三 一 五〇

結婚論

田中 太郎〔統集〕四三四 一 二二七

結婚と離婚及生産と死亡

河合 利安〔統集〕四三九 一 二九三

プリンチング「早婚と其利
害」(譯)

高野岩三郎〔國家〕四三二 一 一五九

結婚年齢論

林 源治〔新報〕四三三 九 九五

結婚

吳 文聰〔統雅〕四三三 一 一六七

聾者の結婚

田中 太郎〔統集〕四三三 一 二二七

結婚を論ず

吳 文聰〔統雅〕四三三 一 一六七

近親結婚と統計

松本 修〔法協〕四三二 一 二

我國の結婚歩合

河合 利安〔統集〕四三九 一 三〇八

本邦結婚統計一斑

高野岩三郎〔法協〕四四〇 二 一

結婚税を新設すべし

瀧 臺水〔東經〕四一五 八 一四六

婚姻制度論

河田 嗣郎〔京法〕四四一 三 五八

經濟學上より觀たる結婚問
題

高城仙次郎〔三學〕四四四 六 一

キリスト教の婚姻非解消主
義

穂積 重遠〔法協〕六三三 〇 八九

夫婦婚姻年齢の組合せ

財部 静治〔經叢〕六四一 二 二

日本人の婚姻妊娠及び出生
原始亂婚に就て

二階堂保則〔國國〕六五四 一 五

結婚の數より觀たる内臺同
化の實現

高田 保馬〔經叢〕六六四 一 一
久保田豊三〔法政〕六九一 七 一

【娯樂】 【コロニニ・クロンベルク】 【婚姻】

自由結婚自由離婚
近親結婚禁止の精神分析學的考察
獨身概論
我國に於ける逆縁婚に就て
遊牧民の購買結婚に就いて
逆縁婚の一資料
婚姻率に就て
日米兩國に於ける夫婦結合の強さに關する比較
結婚季節の變化
族内婚姻俗
婚姻の儀式
兄の妻をめとる古俗
階級的内婚制に就いて
封建組織に於ける婚姻制度に就て
ウエスタマーカの「人類婚姻史」と穂積陳重の「隱居論」
外國
支那古代の婚姻制度
パピロニアの婚姻制度
朝鮮人の婚姻と族姓

牧野 英一〔志林〕六〇三	フロイド〔我等〕六一	戸田 貞三〔統時〕六三	高田 熊雄〔統集〕六三	田崎 仁義〔長覺〕六四	中川善之助〔法協〕六五	別所梅之助〔社研〕六五	戸田 貞三〔社雜〕六五	何 畏〔社雜〕六五	穂積 重遠〔社雜〕六五	東川 徳治〔京法〕六六	江口 新〔法叢〕六三	都守 泰一〔社雜〕六五
二	四	九	一	三	一	一	一	一	一	六	二	一
三	七	九	一	三	一	一	一	一	一	六	二	一

英國に於ける出生死亡及婚姻に關する統計報告摘要
一八九〇年獨逸帝國の結婚出生及死亡
英克蘭及威爾斯の未成年者婚姻
歐洲各國結婚比較

結婚の豫約に就て
嫁資論
婚姻の性質
重婚罪と民法第七八〇條
繼父又は繼母と繼子との間に於ける婚姻の禁制
婚姻の豫約に就て
婚姻の豫約に就て
婚姻の豫約
婚姻豫約の性質
姦通罪と婚姻方式との關係を論ず
無勢力は婚姻無効の原因たるか

【婚姻】(法) 参照：夫婦財産制。離婚。

相原 重政〔統集〕四三四	小島 貞三〔統集〕四四四	相原 重政〔統集〕四三六	石山 彌平〔新報〕四二九	石山 彌平〔新報〕四三三	宮本平九郎〔志林〕四三三	加古貞太郎〔志林〕四三三	平島直太郎〔志林〕四三三	柳川 勝二〔法政〕四五五	日比谷道人〔新聞〕四五五	掛下金次郎〔明法〕四五五	稻村藤太郎〔新聞〕四五五	岩味 隆次〔新聞〕四三六	寺尾 亨〔法協〕四三七
一	一	一	七	九	二	三	四	六	九	一	一	一	三
二	三	一	七	九	二	三	四	六	九	一	一	一	三

民法第七九一條の解釋に關し志方鍛君に答ふ
民法第七九一條の解釋に關する法學博士梅謙次郎君の駁論を讀み再び所信を述ぶ
婚姻豫約の效力
婚姻の性質
女戸主其家族たる男子と婚姻するは入夫婚姻なりや
失踪宣告後の再婚
婚姻の豫約
辯護士森作太郎氏の婚姻豫約論を讀む
婚姻に就て
婚姻觀念發展の曙光
經濟學上より觀たる婚姻法
婚姻の豫約は何故に全然無効なるや
訴訟當事者の隱居又は入夫婚姻
婚姻の豫約を論ず
婚姻の豫約
婚姻豫約論

梅 謙次郎〔志林〕四三七	志方 鍛〔法記〕四三七	池田寅二郎〔法協〕四三九	谷田勝之助〔新聞〕四四一	牧野菊之助〔志林〕四四二	穂積 重遠〔法協〕四四二	森 作太郎〔新聞〕四四二	一瀬勇三郎〔新聞〕四四二	笠原文太郎〔辯協〕四四三	上島益三郎〔新聞〕四四三	平招 淑郎〔志林〕四四三	森 作太郎〔新聞〕四四四	雄本 朗造〔新報〕六二二	高窪喜八郎〔評論〕六四四	中島 玉吉〔京法〕六四一〇	石坂音四郎〔法記〕六四二五	
六	一	二	一	二	二	一	一	一	一	一	一	二	二	四	六	七
五	一	二	一	二	二	一	一	一	一	一	一	二	二	四	六	七

婚姻届出義務の不履行(所謂婚姻の豫約に關する大審院の判決に就て)
戸内婚姻と繼親子關係を論ず
婚姻豫約有效判決の眞意義
婚姻の無効(民法第七七八條の解釋)に就て
婚姻豫約(事實婚)不履行に關する節操蹂躪損害賠償事件に付ての疑義
婚姻豫約論
家女入夫婚姻有效論
婚姻豫約を論ず
婚姻豫約違反に因る損害賠償に就て
婚姻本質に關する疑義に就て
報酬附婚姻媒酌の效力
日本に於けるイギリス人の婚姻
戸主の同意を得ずして分家したる女戸主との入夫婚姻の效力

岡松參太郎〔新聞〕六四一	長谷川一郎〔國國〕六六五	穂積 重遠〔志林〕六六一	近藤 登吉〔法論〕六七一	松原 祐馬〔新聞〕六七二	藤田 善嗣〔法政〕六八二	藥師寺志光〔法記〕六九三	横田 秀雄〔法政〕六九三	三上 英雄〔法政〕六九三	小林榮太郎〔新聞〕六九七	宮本 英雄〔法叢〕六一七	岩田喜三郎〔法協〕六二四	島田 鐵吉〔新報〕六三三
一	六	九	九	一	一	九	九	七	一	一	四	三
一	六	九	九	一	一	九	九	七	一	一	四	三

【婚姻】 【コンゴ】 【コンジアック】 【コント】

内縁の夫婦に就て	中島 玉吉〔法叢〕六二〇	三〇
夫妻關係の解消と原因要素	姉齒 松平〔臺法〕六三一	四
家族の婚姻と戸主の同意権	鬼武 義彦〔新聞〕六三一	二〇九
我が太古の婚姻法	中田 薫〔法叢〕六三一	一
内臺人の共婚の法律觀	後藤和佐二〔臺法〕六三一	一
婚姻法改正論	中島 玉吉〔法叢〕六三一	二
子の婚姻に對する父母の同意	穂積 重遠〔法協〕六三三	二一三
内縁の夫婦に付て	吉田平次郎〔朝司〕六三三	六
我國に於ける婚姻法に就て	成田治三郎〔法曹〕六三三	二
の一問題	和田 干一〔民衆〕六三三	二
婚姻立法の逆轉	泉 哲〔法治〕六四四	六
公使及領事の司る結婚の效果	中田 薫〔國家〕六四三	九
果	齊藤 巖〔新聞〕六四一	二三
徳川時代の婚姻法	内縁の妻は民法第九四四條	
の利害關係人なり	外 國 法	
夫婦別居法比較論	穂積 重遠〔法協〕六三八	二〇
比較婚姻法中森通論	ブリ デル〔法協〕六三三	七
獨逸法に於ける婚姻の豫約	三瀨 信三〔志林〕六四〇	九
支那法上より見たる婚姻の豫約	東川 徳治〔志林〕六六一	九
露國革命と婚姻法	穂積 重遠〔國家〕六九三	四

ノルウェーの新婚姻法	穂積 重遠〔國家〕六二〇	二二
獨逸民法の婚姻豫約制度	藤村 東〔民衆〕六三三	二
ローマ婚姻法の東方化	栗生 武夫〔法叢〕六四一	二一三
【コ ン ゴ】		
白耳義國王及コンゴ獨立國	有賀 長雄〔外時〕六三三	二八
國際法上より觀察したる公	果獨立國	
果獨立國	長岡 春一〔國家〕六四一	一七五
減	山田 三良〔國家〕六四一	二〇
國際法上より觀察したる公	果獨立國	
果獨立國	長岡 春一〔國家〕六四一	一七五
【コンジアック】	(Eime Bonnot de Mably Condillac, 1715-1780)	
スミスとコンジアックとの	價値論	
田島 錦治〔經叢〕六三一		一
【コ ン ト】	(Auguste Comte, 1798-1875)	
社會現象と實證的方法(コ	ムトの社會學的方法論の	
考察)	永田 伸也〔同論〕六九	一

オーギスト・コント其時代

及其思想

本田喜代治〔社雜〕六三一年 卷 一 二二

【近藤虎五郎】

統計の恩人近藤博士を悼む
土木統計の恩人たる故近藤
工學博士

篠崎 亮〔統雜〕六一 一 四九
篠崎 亮〔統雜〕六一 一 四四〇

【コンモンズ】 (John Rogers Commons, 1862)

失業防止に関する立法

コンモンズ〔社政〕六一 一 三三

【コンラアド】 (Johannes Conrad, 1839-1915)

昆良士氏農産統計論
コンラアド教授逝く

岡松 徑〔統集〕四二 一 七七八
河田 嗣郎〔經叢〕六四 一 四

【コンラアド】 (Otto Conrad)

コンラド『社會主義の利子
説に對するボエームパウ
エルクの評評の批評』

河上 肇〔京法〕四四五 七 六七

【コント】 【近藤虎五郎】 【コンモンズ】 【コンラアド】 【コンラアド】

サ 部

【財】

参照II財産。私有財産。

- 「財」「財産」及び「資本」 坂西 由藏〔國經〕四〇二 一號
- 經濟財の概念を論ず 河上 肇〔京法〕四〇五 二
- 人は財貨なりや 高城仙太郎〔國經〕四〇二 一
- 自由財か自由物か 寺尾 隆一〔國經〕四〇二 一
- 財の意義に就ての研究 大西猪之介〔國家〕四四二 二
- 財と財産權 井浦仙太郎〔國經〕六三二 七
- 財の効用及價值 田島 錦治〔商經〕六五 一
- 財の意義 安原 太郎〔國經〕六六三 三
- 生産財と享樂財 河上 肇〔社問〕六一 一

【在外正貨】

参照II外債。貨幣。國際貸借。

- 在外正貨準備現存額幾何 池島 誠三〔日經〕四〇一 八
- 在外正貨の保持 小林丑三郎〔東經〕四四一 五
- 在外正貨に就て 若槻禮次郎〔日經〕六二二 二
- 在外正貨と兌換制度 伊藤 欽亮〔財經〕六三一 一
- 在外正貨の増加と外債償還 本多 精一〔財經〕六四二 二
- 在外正貨處分問題に就て 河津 暹〔國家〕六五三 一
- 在外正貨處分に就て 小川郷太郎〔經叢〕六五二 三

再び在外正貨處分問題に就て

- 在外正貨の處分に就て 河津 暹〔國家〕六五三 一
- 國際經濟上より見たる在外正貨 小川郷太郎〔經叢〕六五二 三
- 在外正貨と兌換券との關係を論ず 重ねて在外正貨問題を説いて河津博士に答ふ
- 在外正貨借ひに足らず 通貨收縮と金解禁及在外正貨準備廢止問題
- 我國の在外正貨問題 在外正貨問題及爲替相場問題

在外正貨制度の廢止説に就て

在外正貨論

- 河津 暹〔國家〕六五三 一
- 小川郷太郎〔經叢〕六五二 三
- 神戶 正雄〔經叢〕六五三 一
- 豐崎善之介〔財經〕六九七 六
- 三宅嘉十郎〔銀研〕六一三 四
- 松崎 壽〔商經〕六一 一
- 神戶 正雄〔銀叢〕六三二 三
- 高山 武雄〔銀叢〕六三三 六
- 田中 金司〔國經〕六五四 六

【災害】

参照II火災。震災。地震。

- 水害の話 篠崎 亮〔統集〕四一九 一

水害に就て

- 日本の災害 篠崎 亮〔統集〕四一九 一
- 佛國巴里火災統計法 河合 利安〔統集〕四二二 一
- 水害と森林の關係 高橋 二郎〔統集〕四二九 一
- 水害樂觀説に就て 川瀬善太郎〔日經〕四三二 八
- 徳川時代の火防制度 溝淵 實吉〔東經〕四三二 一
- 水害並暴風雨より受けたる新藤 銀藏〔刑評〕四三三 一
- 我邦の損失 河合 利安〔統集〕四四一 一

【災害保險】

傷害保險を見よ

【最惠國條款】

- 最惠國條款 鳩山 和夫〔法協〕四三二 七
- 最惠國條款辯 石井菊次郎〔法協〕四三二 九
- 最惠國條款之辯 飯島龜太郎〔國家〕四三七 八
- 新條約に於ける最惠國條款を論ず 秋山雅之助〔志林〕四三三 二
- 最惠國條款 小川郷太郎〔國際〕四三六 一
- ビイツセル氏最惠國條款論 太田 一郎〔國際〕四三六 一
- 最惠國條款論 藤井 實〔新報〕四四〇 六
- 現行通商條約の最惠國條款に依り本邦輸出品が外國

に於て受くる關稅利益

- 最惠國條款及其分類 板倉 卓造〔三學〕四四一 一
- 現行通商條約の最惠國條款 丹羽 筑山〔東經〕四四一 五
- 條約改正と最惠國約款 河津 暹〔國經〕四四三 八
- 最惠國條款の沿革 板倉 卓造〔三學〕四四三 三
- 本邦現行條約の最惠國約款 松崎 壽〔東經〕四四三 八
- 最惠國條款論 トイベルン「國際通商條約中の最惠國條款」(譯) 松永 正虎〔法協〕四三三 一
- 最惠國條款に就て 牧野 英一〔國際〕四三三 二
- 無條件最惠國條款は絕對的無價規定に非ず 板倉 卓造〔三學〕四三三 七
- 投資禁止法の制定と最惠國條款 河津 暹〔財經〕四六四 二
- 最惠國民條款の國際法上の研究 立 作太郎〔國家〕四六三 八
- 戦後に於ける最惠國條款の撤廢と互惠本位條約 泉 哲〔國國〕四七六 七
- 最惠國約款の經濟的觀察 河津 暹〔新報〕四七二 七
- 最惠國約款問題 河津 暹〔外時〕四七二 三

【債】

参照II社債。

- 勸業債券と耕地整理 志村源太郎〔東經〕四七一 一

【債券】【債權】

株券と債券
債券發行の法律上の性質を論ず
勸業債券の月賦賣買
記名株式又は記名債券名義書換に關する委任狀全廢論
動産銀行の債券
農工債券の便宜的發行
動産抵當債券の特色(譯)
債券市價決定の原因
債券課相場建と其記帳整理法
債券の額面價格以下の發行に就いて
債券課の相場と利乘勘定記帳法
短期債券放棄の特例
短期債券利乗計算法の特例
銀行の債券發行に就て
買戻保證附債券賣買に就て
金利の騰落と債券市價
紛滅失亦は盜取されたる債券と代證券請求手續

雨夜亭	(東經)	四四一	五七一	一
岡野敬次郎	(新報)	四四二	二	一
黒澤龍濱	(東經)	四四三	一五六	一
富永藤兵衛	(東經)	四四五	一六六	六
服部文四郎	(國經)	大一一四	三	三
黒澤和雄	(東經)	大一一七	一六九	〇
大島親貞	(東經)	大一一八	一七九	〇
横山正雄	(銀研)	大一一〇	二	二
中村遊龜夫	(銀研)	大一一〇	二	二
春日井薫	(國國)	大一一〇	四	四
須藤文吉	(會計)	大一一〇	四六	六
須藤文吉	(會計)	大一一二	六	六
須藤文吉	(會計)	大一一二	三	三
春日井薫	(經商)	大一一二	三三四	四
池田了實	(銀叢)	大一一二	二	二
池田了實	(銀叢)	大一一二	一	一
服部洪	(銀研)	大一一五	三	三

債券民衆化の三大條件
債券講話
債券放棄と債券市價決定の原因
債券利廻計算法に就て
零碎資金の債券化の債券の民衆化
債券市場の實現と發達を望む
米國の外債應募と日本の債券民衆化
朝鮮財界と債券發行に就て
復興債券と其收入金の通用
債券及び株券の保護預り業務
商法の社債法と特殊債券法
大藏省提案の債券の複利計算
債券の利廻に就いて
資本利子税の實施と債券界
債券市場と金融

富田勇太郎	(イン)	大一一	二	二
津島壽一	(イン)	大一一	一	一
勝田貞次	(イン)	大一一	二	二
片岡勉	(イン)	大一一	四	四
勝田主計	(イン)	大一一	三	三
松本修	(イン)	大一一	一	一
阪谷芳郎	(イン)	大一一	六	六
野中清	(イン)	大一一	三	三
青木一男	(イン)	大一一	五	五
栗栖越夫	(イン)	大一一	二六	二六
板橋菊松	(イン)	大一一	三	三
富田勇太郎	(銀研)	大一一〇	四	四
原口亮平	(國經)	大一一〇	四	四
岩田耕作	(イン)	大一一〇	三	三
神戸正雄	(時經)	大一一〇	一	一

【債權】
再び民法第一七七條に所謂第三者の意義及び債權の排他性
任意債權
債權讓渡契約の性質を論じて債權契約及物權契約の區別を排す
收保請求權
請求權の競合否認論
富は債務を生ず
羅馬法に於ける自然債務の沿革及名稱
債權國論
債權の共有關係と總有關係
債權の性質
中島博士の新著に引用せられたる余の所説に就て
債權者保護
富は義務を負ふ
債權法に於ける信義誠實の原則
債權債務の總解合
債權の目的
選擇債務

富田勇太郎	(法記)	大一一	二	二
磯谷幸次郎	(法記)	大一一	二	二
中島玉吉	(京法)	大一一	三	三
岡村玄治	(志林)	大一一	九	九
牧野英一	(新聞)	大一一	一三五〇	〇
小栗栖國道	(法叢)	大一一	二	二
徳地屋初之進	(國經)	大一一	二二三	三
松岡熊三郎	(國國)	大一一	八	八
岡松參太郎	(新報)	大一一	三〇	二
末弘嚴太郎	(法協)	大一一	三九	五
太田哲三	(會計)	大一一	三	六
松永義雄	(辯協)	大一一	二八	一
鳩山秀夫	(法協)	大一一	一八	一八
武田鼎一	(エゴ)	大一一	三	一五
平沼騏一郎	(法政)	大一一	四	三五

【債權】
物權人權の區別
物權と債權との區別
獨逸民法は無記名債權に付き創造主義を認めたるか
民法に於ける信用制度
物權債權の區別に就て
無記名債權と創造主義
請求權の本質
代位の性質
不作爲の債權
債務と責任
請求權の競合
債務の個數を定むる標準
通知及び通知義務
債務制限の觀念
請求權
獨逸中世法に於ける債務と代當責任との區別
債務者萬歳の時機
古代印度の債權法
債權者雜
債務と責任
債權の排他性に就て

土方專	(法協)	二七二	二	五
オリエー	(法協)	三〇一	一五	二
遠藤武治	(京法)	三三九	一	四
岡村司	(志林)	三三九	八	七
ハイマ	(志林)	三三九	八	二
遠藤武治	(京法)	三三九	二	八
志田鈿太郎	(法協)	三三九	二	九
岡松參太郎	(志林)	三三九	二	二八
川名兼四郎	(法協)	三三九	二	二
石坂音四郎	(京法)	三三九	二	二
中島玉吉	(京法)	三三九	二	三
横田秀雄	(志林)	三三九	二	三
石坂音四郎	(京法)	三三九	二	三
加藤正治	(新報)	三三九	二	三
川名兼四郎	(法協)	三三九	二	三
中田薫	(法協)	三三九	二	三
藍入太輔	(辯協)	三三九	二	三
武田豊四郎	(評論)	三三九	二	三
末弘嚴太郎	(志林)	三三九	二	三
加藤正治	(法協)	三三九	二	三
末弘嚴太郎	(志林)	三三九	二	三

【債權】

不特定物給付の債務と選擇債務との區別の標準
 選擇債務論
 不法原因に基く給付と横領罪との關係に就て
 給付の不能と受領遲滯及履行遲滯
 再び給付の不能と受領遲滯の關係に付て
 不確定なる給付の確定
 混合的種類債務を論ず
 契約上の請求權と不法行為の請求權との競合
 給付の確定を論ず
 給付不能論
 給付不能の効力
 不特定物の給付と不可抗力
 夫役現品の給付 (Natural Leistung)
 給付の不能
 第三者の債權侵害
 債權の内容の變更
 消極的地役と不作爲債務の差異

乾 政彦	〔志林〕四二〇	二〇
村上 恭一	〔新報〕四三二	九
伊藤藤三郎	〔新聞〕四四三	一六八
味道 文藝	〔京法〕四四三	五
味道 文藝	〔京法〕四四四	六
乾 政彦	〔國經〕四四四	一〇
杉 程次郎	〔新報〕四四四	二
加藤 正治	〔志林〕四四四	一三
乾 政彦	〔志林〕四四四	一三
石坂音四郎	〔新報〕四四四	二二
石坂音四郎	〔京法〕四四五	七
西川 一男	〔新報〕四四五	三
杉 郁	〔法協〕四四三	三
仁井田益太郎	〔法協〕四五三	四
岡松參太郎	〔京法〕四五二	二
中島 玉吉	〔新報〕四六二	七
小島愛三郎	〔新報〕四八二	九

生前の單獨行為と債權の發生
 給付の確定
 給付方法と準法律行為の別
 延滯利息債權と元本債權、債權讓渡對抗要件の意義
 定期金債權を論ず
 種類債務の特定を論ず
 限定的種類債權を論ず
 債務の内容と取引慣習
 債權の效力
 損害の辯
 排他訴權を論ず
 義務の効力たる直接履行の訴權を論ず
 保證金の効力
 獨逸民法上の遲滯を論ず
 廢罷訴權に於ける審證の責任を論ず
 民法第四一四條の解釋
 損害賠償に就て
 廢罷訴權に就て
 債務不履行に對する救濟手段

小島愛三郎	〔新報〕四八二	二
村上 恭一	〔新報〕四九三	一
小島愛三郎	〔新報〕四九三	二
鳩山 秀夫	〔法協〕四九三	九
横田 秀雄	〔新報〕五一三	二
石田文次郎	〔法協〕五一七	三
石田文次郎	〔國經〕五一三	五
三野 昌治	〔法曹〕五一三	一〇
富井 政章	〔法協〕五一七	七
寺尾 亨	〔法協〕五一八	八
寺尾 亨	〔法協〕五一八	八
寺尾 亨	〔法協〕五一八	九
石山 彌平	〔新報〕五一三	三
グアキル	〔法協〕五一七	五
齋藤 隆夫	〔辯協〕五一三	三
岡松參太郎	〔新報〕五一三	一〇
卜部喜太郎	〔新報〕五一三	一
岡松參太郎	〔新報〕五一三	二
卜部喜太郎	〔新報〕五一三	二

間接訴權

債務契約の不履行に因り履行に代るべき損害賠償を請求するには契約を解除することを要せず
 廢罷訴權の物權の變動に關する對抗要件との關係を論ず
 裁判上の代位を論ず
 高橋脩一君に質す
 違約金を論ず
 擔保物返還後復活せる債權の効力
 詐害行為事件の大審院判例を論ず
 民法第四二四條に付て
 債務者の遲滯に關する一疑問
 保證金及敷金の性質
 非訴事件手續法第七六條處分の意義を論じて民法第四二三條に及ぶ
 民法第四二三條に就て

岡松參太郎	〔新報〕四三七	一三
梅 謙次郎	〔志林〕四三七	六
宮島 次郎	〔新聞〕四三八	一
高橋 脩一	〔新聞〕四三八	一
松澤常四郎	〔新聞〕四三八	一
烏賀陽然良	〔國經〕四三九	一
加藤 正治	〔志林〕四三九	八
小山吾郎一	〔辯協〕四三九	一〇
池田寅二郎	〔法協〕四四〇	二五
伴 房次郎	〔京法〕四四〇	二
富井 政章	〔志林〕四四〇	九
石川 正	〔新聞〕四四〇	一
榊原周次郎	〔新聞〕四四〇	一

代位の性質

債權は第三者に依り侵害せらるゝことを得るや
 隱居前の詐害行為請求の相手方
 民法第一七八條と第四二四條との關係
 遲延利息の時効期間
 損害賠償責任の競合
 不作爲債務の遲滯
 契約保證金の性質及效力
 廢罷訴權を論ず
 詐害行為と廢罷訴權
 詐害行為廢罷の訴權に就て
 債務者の遲滯には過失を必要とせざるや
 抗辯論
 債務の不履行に因て生じたる損害額計算の時規
 債權者取消權 (廢罷訴權) 論
 遲滯の責任と過失の有無

岡松參太郎	〔志林〕四二〇	三
石坂音四郎	〔新報〕四二一	八
牧野菊之助	〔志林〕四二一	一〇
横田 秀雄	〔志林〕四二一	九
梅 謙次郎	〔志林〕四二一	一〇
三橋 久美	〔法協〕四二二	二
横田 秀雄	〔新報〕四二二	一
横田 秀雄	〔志林〕四二二	二
村上 恭一	〔新報〕四二二	六
西川 一男	〔新報〕四二二	一〇
海原 憐平	〔新聞〕四二二	一
石坂音四郎	〔京法〕四二二	六
中島 玉吉	〔京法〕四二二	六
横田 秀雄	〔新報〕四二二	七
石坂音四郎	〔志林〕四二二	一三
西川 一男	〔新報〕四二二	二

債權者の遅滞と過失
債務者の責に歸すべき事由に因りて履行不能となりたるときは債權者は期限前に於ても損害賠償を請求することを得るか
第三者に依る債權の侵害を論ず
詐害行為の取消權者を論ず
債務者か債務者を害する意思を以て民法第七〇八條の行為を爲したる場合と廢罷訴權
民法四一四條の規定の性質と強制履行の意義
強制履行及び強制執行
債務者の取消權を論ず
履行期前に於ける履行拒絶と債權保全
債務者及第三者の共同行為に因る損害の賠償責任
性質上強制履行を許さざる債務の意義
民法第四一四條の解釋(維)

横田 秀雄〔新報〕四五三	乾 政彦〔志林〕四五二	田中 秀雄〔新聞〕四五	西川 一男〔新報〕六三	加藤 正治〔志林〕六四	仁井田益太郎〔法協〕六三	金田 才平〔法協〕六三	松本 丞治〔志林〕六二	石坂音四郎〔新報〕六二
四	六	七	八	九	二	六	二	三

本博士の「強制履行及び強制執行」を評す
民法第四一四條の規定の性質を再論し維本博士に答ふ
債權者の遅滞と遅延利息
債權者の同意を得て他人か自己の名義に依りて爲す債權の行使
債務不存在を知りて爲せる給付受領者か其物の權利を取得する理由
債權は第三者に於て侵害することを得るやの問題を
決したる英國判決(譯)
債權の侵害は不法行為を構成するや
債權者の取消の訴の性質
債權者の遅滞
債務者の歸責事由に因る履行不能と期限到來前に於ける要債
債務不履行と不法行為との競合

石坂音四郎〔京法〕六二	加藤 正治〔志林〕六二	嘉山 幹一〔新報〕六二	石坂音四郎〔新報〕六四	水口 吉藏〔新報〕六四	堀江專一郎〔辯協〕六四	高木 藏吉〔新聞〕六四	維本 朗造〔志林〕六五	鳩山 秀夫〔法協〕六五	石坂音四郎〔新報〕六五	鳩山 秀夫〔志林〕六五
三	五	九	四	九	三	一	一	二	九	二

債務不存在を知りて爲したる不任意の給付と其返還請求

停止條件成就の履行不能の性質
不作爲の債權
特定物の給付を目的とする債權と詐害行為取消權との關係
債權者の遅滞と辨濟の提供
過失なき錯誤に因り目的物を損傷して給付不能又は單純なる遅滞を生せしめたる場合と債務者の責任
債權者遅滞に就て
債務不履行に因る損害賠償請求權と原債權との關係
民法第四二三條と金錢以外の債權保全
債權者取消權の存續要件に付きて
債權者の遅滞と辨濟の提供に就きて再び申見を述べ
再び債權者遅滞と辨濟の提

眞野 毅〔法政〕六六	長島 毅〔新報〕六六	中島 玉吉〔京法〕六七	磯谷幸次郎〔新報〕六七	磯谷幸次郎〔法記〕六七	長島 毅〔新報〕六七	鳩山 秀夫〔志林〕六八	横田 秀雄〔新報〕六八	横田 秀雄〔新報〕六八	藤田 圓平〔新聞〕六八	磯谷幸次郎〔新報〕六九
七	八	八	九	一〇	八	二	三	七	一五	四

供に就て
契約解除と債務不履行に因る損害賠償豫定額請求の適否
一般債務の不履行並運送人の不履行と舉證責任
間接訴權の研究
詐害行為取消に關する相對的效果説の當否
過失相殺論
債務不履行と無形の損害
詐害行為廢罷訴權に就て
債權者の遅滞を論ず
同時履行抗辯と履行遅滞との關係
債務の履行拒絶に就て
債權者代位權の性質
廢罷訴權私論
債權の履行期に關する虛偽の主張
間接訴權の行使と債務者の破産
債權者の受領遅滞
填補賠償請求の可否

鳩山 秀夫〔志林〕六九	白旗 文一〔新聞〕六九	烏賀陽然良〔新報〕六九	維本 朗造〔法叢〕六九	鬼澤藏之助〔新報〕七〇	菅原 春二〔法叢〕七〇	城山 圭太〔辯協〕七〇	横田 秀雄〔法政〕七〇	横田 秀雄〔新報〕七一	神戸寅次郎〔法研〕七一	菅原 春二〔法叢〕七一	長島 毅〔新報〕七一	佐藤 有恭〔新聞〕七一	宮本 英脩〔法曹〕七一	菰淵 清雄〔法政〕七二	姉齒 松平〔臺法〕七二	岡村 玄治〔法政〕七二
九	一〇	二	五	二	四	三	七	六	一	一	一	二	一	一	一	一

取消権に関する研究（民法

第四二四條）

第三者に依る債権の侵害に就て

詐害行為の相手方の悪意推定に関する判例及び學說を評す

多數當事者の債権

主たる債務者にあらざれば爲し得ざる債務と保險契約

負擔部分を論ず

債務と責任の區別と多數當事者の債務關係

多數當事者の債権に就て

不可分債務と相殺との關係

數人が體様を異にする不可分債務の負擔

不可分債務と連帶債務との區別

特定物の引渡と可分債務

連帶債務と全部義務との區別

姉齒 松平〔臺法〕大三一八

渡邊吉右衛門〔朝司〕大二三三

磯谷幸次郎〔法曹〕大四三九

西川 一男〔新報〕四四二一

岡村 玄治〔法記〕大七二八

船田 亨二〔法政〕六一一九

横田 秀雄〔法政〕大二三〇

松田 義正〔法政〕四三二

横田 秀雄〔新報〕四二一八

岡松參太郎〔志林〕四一〇

小島愛三郎〔新報〕大九三〇

別

連帶債務の性質

破産に於ける連帶債務の效力

連帶債務者間の代位

不可分債務と連帶債務との區別

連帶保證契約の主たる契約の解除か保證契約に及ぼす效果

連帶債務者の一方が契約を解除したる場合の義務

連帶債務の性質を論ず

中島博士の連帶債務論を評す

再び連帶債務を論じて石坂博士に答ふ

再び中島博士の連帶債務論を評す

連帶債務の性質を論ず

連帶債務者間に於ける協力義務

連帶債務者の一人の負擔部分以下の辨濟と求償權

岡松參太郎〔法協〕四三七一

信岡雄四郎〔志林〕四三五〇

加藤 正治〔國家〕四四〇二

平井彦三郎〔新聞〕四四〇一

岡松參太郎〔志林〕四四一〇

横田 秀雄〔新報〕四四一八

横田 秀雄〔志林〕四四二〇

中島 玉吉〔志林〕四四二一

石坂音四郎〔京法〕四四四六

中島 玉吉〔京法〕四四四六

石坂音四郎〔京法〕四四四六

石坂音四郎〔新報〕大二三五六

乾 政彦〔志林〕大四一七

乾 政彦〔志林〕大四一七

連帶債務の性質

連帶債務と負擔部分に付き

特約なき場合

連帶債務者の求償權と代位

連帶保證と連帶債務

連帶債務者間相互間の求償權に關する大審院判決に就て

連帶債務者の有する求償權の範圍

連帶債務者の負擔部分の確定に就て

不真正連帶債務に關する疑問

連帶債務者の求償權を論ず

連帶債務の觀念に就て

民法第四四四條の解釋に就て

我古法に於ける保證及連帶債務

保證法

保證の契約

羅馬法に於ける保證

仁井田益太郎〔法協〕大五三四

水口 吉藏〔新報〕大五二六

三浦 信三〔志林〕大五二八

鳩山 秀夫〔志林〕大六一九

岡田兆弘子〔新聞〕大六一三三

鳩山 秀夫〔新報〕大七二八

齋藤 巖〔新聞〕大七一三九三

末川 博〔法叢〕大八一四

横田 秀雄〔新報〕大九三〇

箱田 淳〔朝司〕大一一五六

藤田 善嗣〔新聞〕大一一三〇〇

中田 薫〔國家〕大四三九

鈴木 充美〔法協〕四二七二

伊藤 佛治〔法協〕四二六四

岡松參太郎〔法協〕四二七二

連帶保證論

連帶保證

保證債務を論ず

英美法に於ける保證

將來の債務に對する保證に就て

連帶保證の性質

契約解除後に於ける保證人の責任に就て

第三者が債務者に對し保證を爲すべきことを約したる契約の性質

保證債務の範圍

分別の利益を論ず

保證人の抗辯を論ず

保證債務

保證債務者の消滅時効拋棄に就て

身元保證契約に付き

主たる債務保證の意思と預金證書の署名

身元保證人の責任解除に就て

身元保證人の責任解除に就

身元保證人の責任解除に就

梅 謙次郎〔志林〕四三一

川名兼四郎〔新報〕四三二

川名兼四郎〔法協〕四三五〇

二上 兵治〔法協〕四三八三

乾 政彦〔志林〕四三九

横田 秀雄〔志林〕四四〇

澤田 例外〔新聞〕四四〇

梅 謙次郎〔志林〕四四一〇

横田 秀雄〔志林〕四四二〇

中島 玉吉〔京法〕四四四六

石坂音四郎〔京法〕四四五七

仁井田益太郎〔新報〕四四九二

西村 孝三〔新聞〕大三一

木村篤太郎〔辯協〕大四一九

水口 吉藏〔新報〕大五二六

市村 富久〔新聞〕大五一

債權譲受人の譲渡請求権の性質
民法第四七〇條と偽造の債權證書
並存的債務引受
延滞利息債權と元本債權、債權譲渡對抗要件の意義
債權債務の移轉を論ず
債權債務の移轉を論ず
債權譲渡が訴訟引受を主要縁由となす時は無効也
保證人に對する債權譲渡の對抗要件
債權引受か債權者の意思に反する場合に付て
賃借權の譲渡及び轉貸の制限に就て
免責の債務引受契約に就て
債權の一部消滅の抵當權に及ぼす效果
Tod als Einigungsgrund

小島愛三郎〔新報〕大八二九	七
小島愛三郎〔新報〕大八二九	一〇
末川 博〔法叢〕大九〇	三、四、五、六
鳩山 秀夫〔法協〕大九三六	九
横田 秀雄〔新報〕大九三〇	一、二、三、四、五、六
烏賀陽然良〔新報〕大〇三二	六
松下 宏〔新聞〕六一一	二〇四
江口 繁〔新聞〕六一一	二六三
原田 等〔朝司〕大二三	三、四
小池 隆一〔法研〕大二四	四、二
中治 武二〔同論〕大二四	一、八
末川 博〔京法〕大七一三	八、一〇
鳩山 秀夫〔法協〕大九三六	八

des Schuldverhältnisses 辨濟
代物辨濟論
代物辨濟の原理
辨濟の法律上の性質
代物辨濟を論ず
辨濟力
連帶債務者間の代位受取證書に就て
獨逸民法に於ける受取證書代位の性質
履行行為の意義
債務履行地に關するレオン
ハード氏の新説
代物辨濟の目的
民法四七五條の適用
民法四七五條と同第一九二條との關係に就て
他人の物を以て爲したる辨濟の効力
債權者の引取義務
無記名債權の債務者は其所持人の眞偽を調査する義務

Stenberg〔法協〕大三三	一
下部喜太郎〔新報〕四三九	九六
鮫島東四郎〔法政〕四三九	三四
岡松參太郎〔京法〕四三九	一
岡松參太郎〔新報〕四四〇	一七
加藤 正治〔志林〕四四〇	九
平井彦太郎〔新聞〕四四〇	一
中島 玉吉〔法政〕四四一	二
清瀬 一郎〔京法〕四四一	三
岡松參太郎〔志林〕四四一	三、四
竹田 省〔京法〕四四一	三、七
竹田 省〔京法〕四四一	三、七
横田 秀雄〔志林〕四四一	一〇
飯島 喬平〔明學〕四四一	一、二、四
伊藤藤三郎〔新聞〕四四一	一、四九
鳩山 秀夫〔志林〕四四一	一、二
乾 政彦〔志林〕四四一	二、四

務なきや
辨濟は法律行為なりや
代物辨濟契約の解除と原狀回復の義務
抵當權と代物辨濟
債務辨濟と時効利益の拋棄に就て
民法第四七〇條と第四七八條との關係
民法第四七四條第二項の解釋
債權者變更と辨濟の場所に關する東京控訴院の判例に就て
債務辨濟當時債務の不存在を知りたる場合と返還の請求
不法行為に基く損害賠償と代位の法則
代位辨濟
辨濟の性質
民法第二七六條の消滅請求と同法第五〇一條の適用
代物辨濟

飯島 喬平〔志林〕四四一	年 卷 五 號
石坂音四郎〔志林〕四四一	九
西川 一男〔新報〕四四二	二
西川 一男〔新報〕四四二	八
帶刀吉五郎〔新聞〕四四二	一、七、九
松本 然治〔評論〕大九一	一
西川 一男〔新報〕四四二	三
無名氏〔新聞〕大九一	一、八、三
嘉山 幹一〔新報〕大三二四	三
石坂音四郎〔新報〕大三二四	六
仁井田益太郎〔法協〕大四三三	一
仁井田益太郎〔新報〕大四二五	二
仁井田益太郎〔新報〕大四二五	四
仁井田益太郎〔新報〕大四二五	七

他人の物を引渡したる辨濟者と共に取戻請求權の本質
目的を定めずして處分を許されたる未成年者の財産と取消し得べき債務の辨濟
債權保全の爲めにする年金恩給受領の委任及び辨濟充當の契約に就て
代位辨濟に關する疑義數則
連帶債務者數人が辨濟したる場合と求償權
民法第四七四條二項の解釋
債權者の遲滞と辨濟の提供
留保附辨濟に就て
民法第四七四條第一項但書に所謂「當事者カ反對ノ意思ヲ表示シタルトキ」及第二項に所謂同「債務者ノ意思ニ反シ」の意義
債權者の遲滞と辨濟の提供に就きて再び卑見を述ぶ
代位辨濟の場合に果して債權の移轉ありや

石坂音四郎〔新報〕大四二五	二
末弘嚴太郎〔新報〕大五二六	五
菱川 憲正〔新聞〕大五一	一〇六七
鳩山 秀夫〔法政〕大六一四	一
烏賀陽然良〔新報〕大六二七	五
堀田 馨一〔新聞〕大六二七	一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇、一一、一二、一三、一四、一五、一六、一七、一八、一九、二〇、二一、二二、二三、二四、二五、二六、二七、二八、二九、三〇、三一、三二、三三、三四、三五、三六、三七、三八、三九、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇
磯谷幸次郎〔法記〕大七二六	一〇
末川 博〔法叢〕大八二	五
長島 毅〔新報〕大八二九	六
磯谷幸次郎〔新報〕大九三〇	四
岡村 玄治〔志林〕大九三三	五

【財産税】 【財産評価】

【財産税】

松崎博士に與ふる書(所得税及び財産税を結合するの可否)

財産税より一回資本を推算する方法

相続税と財産課税

財産税と租税給付能力

財産税の利弊

財産税に對する諸種の非難に答ふ

純理上より觀たる財産重課の理由

財産税に就いて

財産税に就て

財産税と國富統計

財産税の性質

財産税論

社會政策税としての財産税

財産税に於ける都鄙の對立

財産税と資本利子税

ノイマン(日經) 四二 年 卷 四 一 號

長郷 有泰(統集) 四四 一 卷 三三 號

神戶 正雄(經叢) 六七 七 卷 三三 號

神戶 正雄(經叢) 六九 一 卷 三五 號

神戶 正雄(經叢) 六九 一 卷 三五 號

神戶 正雄(經叢) 六九 一 卷 三五 號

神戶 正雄(經叢) 六九 一 卷 三五 號

神戶 正雄(經叢) 六九 一 卷 三五 號

井上辰九郎(財經) 二〇 八 卷 二二 號

馬場 鏡一(新報) 二〇 二 卷 二二 號

沙見 三郎(經叢) 二二 一 卷 二二 號

小林丑三郎(經商) 二二 一 卷 二二 號

小川郷太郎(經叢) 二二 一 卷 二二 號

神戶 正雄(時經) 二四 一 卷 二二 號

神戶 正雄(經叢) 二四 二 卷 二二 號

堀江 歸一(エウ) 二四 三 卷 二二 號

【財産評價】

参照||財産目録。貸借對照表。

財産目録に記載すべき財産及其評價を論ず

商法改正と時價評價問題に就て

改正商法草案と財産評價

財産の評價について

株式會社の財産の評價に就て

不動産の評價法

財産評價法問題

營業用固定財産の評價

決算上資産評價の標準を論ず

貸借對照表に於ける資産評價の原則に就て

減價償却及資産評價と所得課税

棚卸商品の評價を論ず

棚卸評價損益金の處分に關する私見

企業財産評價の原則を論ず

松本 丞治(志林) 四三 一 卷 六一 號

大原 信久(新聞) 四三 一 卷 六一 號

大原 信久(新聞) 四三 一 卷 六一 號

黒澤 龍濱(東經) 四三 一 卷 六一 號

岡野敬次郎(新報) 四四 二 卷 六一 號

原口 亮平(國經) 四四 二 卷 六一 號

佐藤 雄能(東經) 四四 二 卷 六一 號

松本 丞治(新報) 四四 二 卷 六一 號

鹿野清次郎(國經) 四四 二 卷 六一 號

三邊 金藏(三學) 四五 一 卷 六一 號

北川 浩(國經) 四六 二 卷 六一 號

原口 亮平(國經) 四六 二 卷 六一 號

中西新兵衛(會計) 四六 二 卷 六一 號

渡邊 鐵藏(新報) 四六 二 卷 六一 號

減價償却と評價に就きて
我商法の評價規定を論ず
製造會社の貸借對照表に於ける財産評價に就て
公益事業會社の評價
パトン及チーブソン兩氏
時價評價論
固定資産の評價に就て
罹災會社財産評價と其の損失填補法
企業財産の評價及會計損益市價の公表なき株式會社の株券評價法に關する一考察

渡邊 義雄(會計) 六八 年 卷 六 一 號
三邊 金藏(三學) 六八 一 卷 二二 號
榎並 越夫(法政) 六九 一 卷 二二 號
馬場 敬治(國家) 二〇 三 卷 二二 號
太田 哲三(計理) 二〇 一 卷 七 一 號
辰野 辰雄(會計) 二二 九 卷 五 一 號
吉田 良三(會計) 二二 三 卷 六 一 號
中村 茂男(會計) 二二 五 卷 一 號
東 爽五郎(會計) 二二 五 卷 一 號
高窪喜八郎(正義) 二四 一 卷 五 六 一 號
原島 茂(早商) 二四 一 卷 一 號

【財産目録】

参照||財産評價。貸借對照表。

財産目録及貸借對照表調製に關する意見

財産目録貸借對照表に就て

財産目録と貸借對照表に付て

大原 信久(新聞) 四四 一 卷 四七 號

岡野敬次郎(新報) 四三 一 卷 三三 號

松本 丞治(新聞) 四三 一 卷 三三 號

財産目録に記載すべき財産及其評價を論ず
商法第二六條の財産目録調製に就て
財産目録の作成に就て
財産目録貸借對照表に關する岡野博士所論を讀む
商法第二六條第二項の改正と銀行業
財産目録の記載事項を論ず
財産目録に附する價額に就いて
貸借對照表と財産目録の區別如何
財産目録に記載すべき財産を論ず
財産目録に記載する事項
財産目録と其の記載價格
財産目録に債務記載の要無し
複式簿記法に於ける財産目録に就て
財産目録及び貸借對照表を論ず

松本 丞治(志林) 四三 一 卷 六一 號
大原 信久(新聞) 四三 一 卷 六一 號
一柳 貞吉(新聞) 四三 一 卷 六一 號
大原 信久(新聞) 四三 一 卷 六一 號
米澤 貞二(日經) 四三 一 卷 六一 號
小村益太郎(會計) 四三 一 卷 六一 號
奥田 大造(會計) 四三 一 卷 六一 號
兒林百合松(會計) 四三 一 卷 六一 號
中西新兵衛(會計) 四三 一 卷 六一 號
佐藤 雄能(會計) 四三 一 卷 六一 號
佐藤 雄能(會計) 四三 一 卷 六一 號
増島 信吉(會計) 四三 一 卷 六一 號
岡田 誠一(會計) 四三 一 卷 六一 號
松本 丞治(新報) 四三 一 卷 六一 號

【財産評價】 【財産目録】

【財産目録】【祭祀】【再審】【財政】

信託会社の貸借対照表及財産目録

細矢 祐治〔會計〕大三 年 卷 五十六 號

【祭 祀】

日本古代の祭政と法律
祭祀公業を廢止すべし
國民道德の本質としての祖

川面 凡兒〔國國〕大 卷 二二
杉本 榮次〔臺法〕大 卷 一五
補永 茂助〔法政〕大 卷 二〇 三五
有賀 成可〔正義〕大 卷 一四
野村調太郎〔朝司〕大 卷 一五 四五

【再 審】

刑事訴訟法草案再審に於て
再審の訴を爲し得る裁判

野村安次郎〔新聞〕大 卷 一四
豊島 直通〔法政〕大 卷 一〇 一五

上訴に關して終局判決と看
做すべき確定の中間判決
に對する再審の許否を論

松岡 義正〔法政〕大 卷 一七 一八

財政統計論

財政談

財政統計に就て

各國經費比較論

外國財政に關する要報

財務刑法

平和會議と列國の財政

財政と道義

戦後の財政

日本の財政特に租税制度に

就て

好箇の財源

經濟財政金融策

財政整理の要義

維新前後の財政状態と我國

の將來

我財政を如何にすべき

伊藤博文侯と日本財政

各國財政負擔比較統計

列國財政上の通患

伊藤公と財政經濟(講演)

租税及國費法則の新提案

財政と鐵道の衝突及之が救

河合 利安〔統維〕大 卷 一八 二八
松崎藏之助〔新報〕大 卷 一八 九一
水科七三郎〔統維〕大 卷 一五 一九七
小林丑三郎〔國家〕大 卷 一六 一九九
堀江 歸一〔國經〕大 卷 一三 二一七
泉二 新熊〔志林〕大 卷 一三 二八
瀧本 美夫〔國經〕大 卷 一〇 三六
神戸 正雄〔日經〕大 卷 一〇 三九
小林丑三郎〔新報〕大 卷 一〇 三九
神戸 正雄〔日經〕大 卷 一〇 三九
雨 夜 亭〔東經〕大 卷 一五 一四四
田尻稻次郎〔日經〕大 卷 一四 一四一
田中 穂積〔日經〕大 卷 一四 一四七
大隈 重信〔洋經〕大 卷 一〇 一五九
無名 氏〔日經〕大 卷 一〇 二七〇
阪谷 芳郎〔東經〕大 卷 一〇 二七〇
河田 嗣郎〔日經〕大 卷 一五 一〇一
吉澤 滋〔日經〕大 卷 一五 一〇四
濫澤 榮一〔國家〕大 卷 一四 一〇七
神戸 正雄〔國家〕大 卷 一四 一〇七

記載して同時に主張する
ことを要す

森 作太郎〔新聞〕大 卷 一五 七

即時抗告の提出を懈怠した
る場合に原裁判所に爲し
たる原状回復の申立

前田直之助〔新報〕大 卷 一三 三

上訴若くは再審申立の場合
に民訴第一六七條第二項
の附加期間を定むる裁判
所

前田直之助〔新報〕大 卷 一三 一〇
林 頼三郎〔新報〕大 卷 一七 四

再審の訴の取下
適法なる送達を缺く判決の
確定と再審の訴

吉田常次郎〔新報〕大 卷 一三 八
參照 會計。外債。關稅。金融。
經濟。決算。公債。財政。
學。軍事費。專賣。租稅。
地方財政。豫算。(尙各
國名を見よ)

【財 政】

國家永久收入論

國家經費論

財政統計の必要を論ず

廿三年間財政要論(講演)

財政改良論

松方伯と明治の理財法

王安石財政策

阪谷 芳郎〔國家〕大 卷 一〇 一
阪谷 芳郎〔國家〕大 卷 一〇 一
横山 雅男〔統集〕大 卷 一 八
阪谷 芳郎〔國家〕大 卷 一三 四
阪谷 芳郎〔國家〕大 卷 一五 六
阪谷 芳郎〔國家〕大 卷 一五 六
高橋 作衛〔國家〕大 卷 一七 八

濟案

日本財政の國際的地位

植民地の財政方針

現時我國の財政に就きて

政府と似非資本の製造

制限を要すべき財政上の二

大原則

財政期間論

戦時財政論

財政負擔の國際比較に就き

て

財政管見

財政經濟の將來

戦争と財政及經濟

戦争と財政

財政整理上の一大問題

土地増價税と財政需要

我國財政の現状及其救濟策

外交軍事財政の兼修

我國財政上の積極主義

新内閣の財政方針

豫算に依る財政の事前監督

に就て

谷奥 利吉〔洋經〕大 卷 一五 二
神戸 正雄〔日經〕大 卷 一七 二一四
堀切善兵衛〔三學〕大 卷 一三 二
神戸 正雄〔京法〕大 卷 一五 一
溝淵 實吉〔東經〕大 卷 一六 一五〇
神戸 正雄〔國經〕大 卷 一八 六
青木 得三〔國家〕大 卷 一四 九
田崎 慎治〔國經〕大 卷 一三 九
神戸 正雄〔京法〕大 卷 一六 八
神戸 正雄〔日經〕大 卷 一〇 二
片岡 直温〔洋經〕大 卷 一〇 二
松崎藏之助〔法協〕大 卷 一〇 一
神戸 正雄〔日經〕大 卷 一〇 一
田中 穂積〔日經〕大 卷 一〇 一
神戸 正雄〔京法〕大 卷 一〇 一
田尻稻次郎〔日經〕大 卷 一〇 一
匿名 士〔國際〕大 卷 一〇 一
堀江 歸一〔日經〕大 卷 一〇 一
堀切善兵衛〔日經〕大 卷 一〇 一
馬場 鏡一〔新報〕大 卷 一〇 一

【財政】

況
近時の財政と金融
減
財政経済問題の骨子
日本の財政経済上の地位
現内閣の財政政策と減税問題
日本財政病の治療一斑
戦後の財政に就て
財政上の緊急處分
財政計畫の過去と將來
國民黨の財政方針
我國財政政策の主義如何
植民地地方費の法律上の性質に就て
我國植民地財政政策概論
官業整理と財政
財政經濟單本位の國際競争
戦亂に因る財政上の負擔
不徹底なる現内閣の財政方針
針
財政紊亂の根源を見ずや
依然たる財政經濟上の懸案
現内閣財政の真相

工藤 重義〔國家〕大二二七	六三號
小林丑三郎〔日經〕大二三	六三號
馬場 鏌一〔國國〕大二	一三
本多 精一〔財經〕大三一	一三
神戸 正雄〔新報〕大三四	一三
町田 忠治〔財經〕大三一	一三
添田 壽一〔新報〕大三四	一三
高木 正年〔財經〕大三一	一三
村田岩次郎〔三學〕大三八	一三
若槻禮次郎〔財經〕大三一	一三
鈴木梅四郎〔財經〕大三一	一三
堀江 歸一〔財經〕大三一	一三
渡邊 秀雄〔國家〕大四二九	六
渡邊 秀雄〔國家〕大四二九	六
小川郷太郎〔經叢〕大四一	三
本多 精一〔財經〕大四二	二
〔國經〕大四一八	二
松崎藏之助〔財經〕大四二	五
本多 精一〔財經〕大四二	五
本多 精一〔財經〕大四二	五
長島 隆二〔財經〕大四二	五

最近の財政問題
專賣と戦後財政
帝國財政の危機
議會に於ける朝野の財政論
財政上より見たる國家の變遷及發達
解決されざる財政經濟問題
目下の財政問題に就て
帝國財政の過去と現在
徳川氏の豊臣氏財政攪亂策
戦費の源泉と戦後財政整理策
戰時財政論
戰争の歐洲財政に及ぼす影響
戦後に於ける聯合國の共同的財政調整案
戦争と信用通貨並に財政戦後財政の歸趣
憲法と財政經濟
社會政策より見たる我國の財政
財政問題よりも經濟問題
講和會議と財政問題

鎌田 榮吉〔財經〕大四二	八
小川郷太郎〔經叢〕大三一	一
仲小路 廉〔財經〕大四二	九
本多 精一〔財經〕大五三	一
松崎藏之助〔國家〕大五三〇	二
本多 精一〔財經〕大五三	三
工藤 重義〔國家〕大五三〇	三
本多 精一〔財經〕大六四	一
三浦 周行〔國經〕大六三	四
堀切善兵衛〔三學〕大六一	一〇
内池 廉吉〔外時〕大七二七	三七
高島 誠一〔國經〕大七二四	三
高島 誠一〔國經〕大七二五	五六
堀江 歸一〔三學〕大七二	五九
小川郷太郎〔經叢〕大七八	一
神戸 正雄〔經叢〕大七八	三
小川郷太郎〔經叢〕大八九	一三
橋本圭三郎〔財經〕大八六	一
深井 英五〔國家〕大八三	二

戦後財政整理策としての資

本徴發
中央財政と地方財政
誤れる財政經濟政策
整理節約の同盟
社會問題と財政制度
來年度の財政計畫を評す
不徹底なる財政計畫
政費節減論
財政制度の動因に關する二種の見解
整理緊縮の財政經濟政策
社會主義的財政と露國勞農政府の財政
列國財政の改造的思想
財政の本質
財政の概念原則及革命
積極的財政政策を改めよ
財政緊縮問題と英國の先蹤
國家經費論の一節
復興經濟途上の財政及金融
財政整理と司法制度
財政々策と金融政策
憲法第七〇條の財政上必要

内池 廉吉〔外時〕大八二九	三四號
内池 廉吉〔國經〕大九二九	四五
武富 時敏〔財經〕大九七	七
田川大吉郎〔洋經〕大九一	九二七
小林丑三郎〔社政〕大〇一	六
若槻禮次郎〔財經〕大〇八	二二
阪谷 芳郎〔東經〕大〇八	二七
小川郷太郎〔經叢〕大二一五	一
阿部 賢一〔同論〕大二一	七
阪谷 芳郎〔財經〕大二九	五
阿部 賢一〔國家〕大二二六	一〇
小林丑三郎〔エコ〕大二二	一
關口健一郎〔經商〕大二三	三
小林丑三郎〔經商〕大二三	三
片岡 直温〔エコ〕大二二	一〇
蘆田 均一〔財經〕大二三	二
松崎 壽一〔商經〕大二三	一
細矢 祐治〔銀研〕大二三	七
瀬尾 義治〔辯協〕大二三	八
土方 成美〔經研〕大二三	一

處分

財政に於ける積極主義と消極主義
行政財政整理の根本義
財政策に於ける消極と積極
明年度の財政計畫
國家の收入を中心として考察したる財政の本質
財政の概念及び作用
舊鹿兒島藩の財政改革
財政は消極、經濟は積極
財政整理と銀行整理
妙心寺の財政組織
財政と金融の改善
財政整理の財界に及ぼす影響
財政整理の失敗と國民經濟の改造
徳川明治轉換期に於ける財政政策
財政に關する二、三の管見
舊仙臺藩財政状態の沿革
明治維新の財政と太政官札
行政及財政組織の單純化

稲田周之助〔新報〕大二三	四
神戸 正雄〔時經〕大二三	二八
堀江 歸一〔エコ〕大二三	二
堀江 歸一〔エコ〕大二三	二
堀江 歸一〔エコ〕大二三	二
堀江 歸一〔エコ〕大二三	二
松井 敏生〔經叢〕大四四	六七
花戸 龍藏〔國經〕大四三九	一三
土屋 喬雄〔經論〕大四四	二
堀江 歸一〔エコ〕大四三	一六
松 本〔金融〕大四二	五
中川與之助〔經叢〕大四二	六
堀江 歸一〔エコ〕大四三	八
結城豊太郎〔エコ〕大四三	六
小川郷太郎〔イン〕大四一	二
毛利英於菟〔經研〕大四二	四
松崎 壽一〔商經〕大四一	三七
土屋 喬雄〔國家〕大四三九	四八
三宅鹿之助〔法集〕大四一	一
成瀬 義春〔財經〕大五三	七

【財政】【財政學】【財政恐慌】【埼玉】【最低賃銀】

四九〇

經費の本質と財政的原生作用
 向後十年間の財政計畫
 山片幡桃の二ツの意見書について

松井 敏生〔年 經商〕六二五 五二一三
 神戸 正雄〔年 時經〕六二五 一四五
 土屋 喬雄〔年 國家〕六二五 四〇二

【サイ 財 政 學】 參照 財政。

財政學一斑
 財政論
 國法學と財政學との關係
 國際比較財政論綱
 財政學の近況
 ジード氏の戦時並戦後財政論
 元祿時代の財政學說一斑
 「財政學」の英語に就て
 サイ・ウキリアム・ベターの財政學說
 宇都宮鼎著「最近財政學綱要」小川郷太郎著「租稅論」
 H. C. Adams の爲人、業績と米國財政學文獻考

和田垣謙三〔年 國家〕四三〇 一
 松崎藏之助〔年 國家〕四三三 二九
 岡 實〔年 志林〕四三六 五 四三
 神戸 正雄〔年 京法〕四四二 四一〇
 金井 延〔年 新報〕四四二 四
 高城仙次郎〔年 三學〕六五二 二
 原 萬里〔年 三學〕六六二 二
 工藤 重義〔年 國家〕六七三 六
 阿部 賢一〔年 同論〕六九 二
 内池 廉吉〔年 國經〕六一三 五
 高島佐一郎〔年 國經〕六二四 二二三

アダム・スミスの財政論梗概
 財政學に於ける方法論の資料

【サイ 財 政 恐 慌】 恐慌を見よ

【サイ 埼 玉】

埼玉縣秩父地方に於ける織機種類の變遷と之に伴ふ産業組織の變化
 北埼玉地方の足袋製造業

桂 阜〔年 社政〕六三 一
 小島 英一〔年 國經〕六三 三六
 關 一〔年 國經〕六六 一一四
 大山 壽〔年 京法〕六三 九 一
 山本美越乃〔年 經叢〕六五 三 三
 氣賀 勘重〔年 國經〕六五 二 三四
 森戸 辰男〔年 國家〕六五 三〇 八

【サイ 最 低 賃 銀】 參照 賃銀。

最低賃銀
 社會立法上に於ける最低勞賃の意義
 最低賃金の制度に就きて
 最低勞賃の公定
 女子最低賃銀是非
 團體交渉の一形式としての

最低賃銀法の強制
 最低賃銀
 各國最低賃銀法設定の效果
 最低賃金の意義及標準
 最低賃銀法の經濟上に及ぼす影響

アドキンス〔年 社政〕六二 一七
 田中 貢〔年 經商〕六二 二七
 〔年 資料〕六二 九 七八
 林 癸未夫〔年 社政〕六二 二九
 吉田 蘇〔年 社政〕六二 三九
 淺野 研真〔年 金融〕六三 一
 丸谷 喜市〔年 國經〕六三 三七 六
 森山武次郎〔年 民衆〕六五 四 四

英國

英國職工組合の法制的地位を論じて最低賃銀國定制度に及ぶ
 英國炭坑最低賃銀法
 英國最低賃銀裁定局法施行の實績
 英國最低賃銀裁定局法施行の狀況
 英國農業労働者の最低賃銀
 英國婦人労働者の最低賃銀
 濠洲に於ける最低勞賃の意義

堀江 歸一〔年 三學〕四四五 六 三
 關 一〔年 三學〕四四五 六 三
 堀江 歸一〔年 國經〕六二 一四 五
 堀江 歸一〔年 三學〕六四 九 二
 島崎 一郎〔年 社政〕六九 一 二
 水上鐵治郎〔年 社政〕六二 一 一八
 大山 壽〔年 京法〕六二 八 九

濠洲に於ける最低賃銀
 米國に於ける最低勞賃法案
 合衆國の最低賃銀制度を論じて移民問題に及ぶ

【サイ 裁 判】 參照 公判。裁判所。司法。判決。法廷。

帝王の裁判上に在する權力を論ず
 軍律及軍事裁判
 裁判至要抄の由來
 憲法上陸海軍軍法會議の地位を論ず
 裁判權を論ず附國家の統治機關
 裁判の効力
 逡巡の裁判
 刑事裁判不公開論
 我裁判制度の改正要點
 刑事裁判に對する予が感想の推移
 刑事裁判官の反省を望む
 商事事件の裁判に就て

坂垣 茂末〔年 國經〕六二 一五 四六
 大山 壽〔年 京法〕六二 八 二
 堀江 歸一〔年 三學〕六九 一四 二
 參照 公判。裁判所。司法。判決。法廷。
 増島六一郎〔年 新報〕四五 二 二六
 岩村 茂〔年 法協〕四六 一 二一三
 宮崎道三郎〔年 法協〕四七 一 一
 遠藤 源六〔年 國家〕四五 一六 四一八
 卜部喜太郎〔年 新報〕四六 一 一〇
 高窪喜八郎〔年 辯協〕四四 一 一三三
 江木 衷〔年 辯協〕四四 一 一三六
 松本 丞治〔年 志林〕四四 一 二
 原 夫次郎〔年 法記〕四四 二〇 二二
 中島松次郎〔年 刑評〕四四 二 二二
 長谷川吉次〔年 辯協〕四四 一四 一九
 笠原文太郎〔年 辯協〕四四 一五 一五〇

【最低賃銀】【裁判】

四九一

刑事裁判制度改善私議の第

二 王朝時代伊勢神領の裁判手

裁判の信用	石巻 良夫〔法協〕大二三
認定裁判を排す	泉二 新熊〔評論〕大二二
刑事裁判と國民の信頼	大井 静雄〔辯協〕大三八
刑事裁判に同情の必要	横田 秀雄〔新報〕大三四
國民的裁判制度の梗概	下部喜太郎〔新聞〕大三一
裁判公開の大意	水口 吉藏〔國國〕大三二
大名領地の裁判制度	大場 茂馬〔新報〕大四五
陪審制度と感情裁判	岸井 辰雄〔辯協〕大五〇
巡回裁判と陪審制度	三浦 周行〔京法〕大六二
國民裁判	猪股 淇清〔辯協〕大八三
法律の力と裁判の力	占部百太郎〔三學〕大八三
刑事裁判と刑事判	大場 茂馬〔新報〕大八二
法律と裁判との關係	齋藤 巖〔新聞〕大八一
裁判事務の忘緩	長尾 景徳〔臺法〕大八二
時代思潮と刑事裁判	山本 龜市〔志林〕大九二
エッガー氏「民法と裁判」	鹽入 太輔〔新聞〕大九一
裁判の眞意義	緒方 清繼〔臺法〕六一一
形式的眞實と實體的眞實	廣濱 嘉雄〔法叢〕大三九
	太田 資時〔辯協〕大二〇
	松岡 義正〔評論〕大二〇

裁判と社會平和

裁判制度の進化と退化
裁判に對する民衆の責任感に付て(講演)

裁判の進化と退化	松永 義雄〔新聞〕大〇
裁判に對する民衆の責任感に付て(講演)	岸井 辰雄〔辯協〕大〇
裁判審理の改善	中西六三郎〔辯協〕大〇
愛の裁判	高野 金重〔辯協〕大〇
民事裁判に於ける自由裁量	緒方 清繼〔臺法〕大二
輿論を酌みたる裁判の可否	片山 通夫〔新聞〕大二
裁判學の必要	梅原錦三郎〔辯協〕大二
刑事裁判に就ての所感	有賀 成可〔辯協〕大二
出張裁判を一巡して	一辯護士〔新聞〕大二
民事に於ける法と裁判	佐伯 復堂〔新聞〕大二
社會感情と裁判上の正義	西本辰之助〔法研〕大二
裁判教育と陪審	高島 晴雄〔辯協〕大二
司法裁判に於ける事實認定の原理	原 嘉道〔新報〕大二
立法の懈怠か裁判の偏狹か	中島 弘道〔法曹〕大二
所謂放免の言渡なる裁判と拘留との關係に就て	西本辰之助〔法研〕大二
抽象的裁判と具體的裁判	武田清太郎〔新聞〕大二
舊法律と新裁判	片山 通夫〔法政〕大二
當面の問題としての調停裁判	安達元之助〔法新〕大二
	森 眞一郎〔辯協〕大二

今後の法律解釋と裁判の實際化

法律と人情味裁判と平和氣分の傾向に就て	横田 秀雄〔新聞〕大三
裁判の簡易化	松倉慶三郎〔新聞〕大四
法律と裁判	柳澤 重固〔新聞〕大四
イエスに對する裁判	穂積 重遠〔朝司〕大四
司法制度裁判事務取扱と國民生活安定淳風美俗維持	瀧川 幸辰〔法叢〕大四
司法制度の改善	松倉慶三郎〔新聞〕大四
民事裁判の國民生活擁護實際化を望む	松倉慶三郎〔新聞〕大四
秘密主義を難す	田坂 貞雄〔法公〕大五
ジエーン・グレイ姫と當時の世相及裁判	大森 洪太〔法曹〕大五
裁判事務の現状と「親切なる努力」	吉田平治郎〔朝司〕大五
裁判制度は如何に改善すべきか	松山與三吉〔法新〕大五
裁判及裁判制度の根本的改善	松山與三吉〔新聞〕大五

年裁判所。陪審制度。判事。法律。法廷。民事訴訟。

行政裁判所及司法裁判所の權限	田部 芳〔法協〕三四
合議裁判所の民事評決法に就て	田部 芳〔法記〕三五
ブラーリアク「裁判所及行政廳に付主義上の區別」(譯)	應 當融〔法記〕三五
行政廳と通常裁判所間に所見を異にせる裁判權限論に就て	山東 生〔國家〕三五
司法裁判所の權限	一木喜徳郎〔國家〕三〇
陳述禁止と忌避申請	信岡雄四郎〔辯協〕三一
大審院の民事部の判決を論ず	井本 常治〔辯協〕三三
裁判所に於ける合議制度の可否を論ず	名村 伸〔法協〕三四
裁判所の休暇を半減すへし	井本 常治〔明法〕三四
軍法會議は裁判所なりや	岡 實〔新報〕三四
裁判所に付て	仁井田益太郎〔明法〕三五
特權廢止問題	信岡雄四郎〔志林〕三七
刑事辯論公開停止の理由	信岡雄四郎〔志林〕三七

【裁判所】

るべき安寧秩序とは如何
國際司法共助に關する我國
の現行制度

三審制度改正私見
下級法務員の増俸に就て
裁判所員の宿直料に就きて
非辯護士の訴訟
有威名古屋地方裁判所之近
事

裁判所獨立の議
行政裁判所と司法裁判所
支部復活論(裁判所構成法
改正私案)

區裁判所廢止は斷じて不可
なり
裁判所構成法改正案中區裁
判所權限擴張の非なるを
論ず

裁判所の開廷事件の順序に
付き司法當局者に望む
裁判所の命令審査權に付て
裁判所と應用心理學
朝鮮制令違反者所在地の内
地裁判所と制令

溝淵 孝雄	〔明法〕	四三九	一	卷	一〇〇
松田 道一	〔志林〕	四四〇	九	一	二
海原 憐平	〔新聞〕	四四三	一	一	三九
山内 公允	〔新聞〕	四四三	一	一	六五
山内 公允	〔新聞〕	四四四	一	一	七〇
笠原文太郎	〔辯協〕	四四五	一	一	六三
不破 清警	〔新聞〕	四四五	一	一	七〇
原 嘉道	〔辯協〕	四五六	一	一	六七
清水 澄	〔法記〕	四二二	三	一	七
今村力三郎	〔辯協〕	四二七	一	一	八二
笠原文太郎	〔新聞〕	四二一	一	一	八〇
不破 清警	〔新聞〕	四二一	一	一	八五〇
駒澤 辰明	〔新聞〕	四二二	一	一	八五三
美濃部達吉	〔三學〕	四四九	三	一	三
猪股 淇清	〔辯協〕	四四九	一	一	九六
山岡萬之助	〔新報〕	四五二	六	一	三

上告裁判所の評議を公開せ

憲法第六〇條に付きて
社會問題と裁判所
三審制度施行其他の革新に
就て

裁判所の簡易化
裁判所獨立私案
民衆思想の傾向と和解裁判
所設置の急務

訴訟法上の忌避權を論ず
混合仲裁裁判所
裁判所に和解の勸告を望む
裁判所の名稱

行政整理と裁判所
地方裁判所支部の性質及權
限に關する判決批判

裁判所構内の怪事
増員並に増俸問題
火災裁判所の特設を望む
東京の裁判所の分割

國內裁判所に於ける國際法
民事政策の要求(小額請求
裁判所の設立)

新井要太郎	〔辯協〕	六七三	六	一	六
清水 澄	〔新報〕	六七二	一〇	一	〇
山本 龜市	〔志林〕	六八二	一	一	三
菅野善三郎	〔臺法〕	六八三	八	一	八
穂積 重遠	〔法協〕	六九三	四	一	八
原 嘉道	〔海協〕	六〇二	五	一	四
中島 寬二	〔新聞〕	六〇〇	一	一	七九
谷 健次郎	〔新聞〕	六〇〇	一	一	九七
太刀川秀雄	〔法政〕	六一九	一	一	八
今田鎌太郎	〔新聞〕	六二二	一	一	五三
尾佐竹 猛	〔法曹〕	六三三	二	一	二
岸田 常吉	〔辯協〕	六三二	二	一	二
荒木 櫻洲	〔新聞〕	六三三	一	一	一〇
三上 英雄	〔新聞〕	六三三	一	一	〇〇
加藤 行吉	〔新聞〕	六三三	一	一	〇四
荒木 櫻洲	〔新聞〕	六三三	一	一	二九
播磨 龍城	〔新聞〕	六三三	一	一	三三
立 作太郎	〔新報〕	六四三	一	一	七
寺崎 勝治	〔法曹〕	六四三	一	一	一

高窪博士の「社會生活の法

則」中「裁判所の職分」
を讀みて

裁判所の時間問題

英

英國裁判所

英國海上裁判所論

英國裁判所の構成(譯)

英國の刑事裁判制度

倫敦警察裁判所の實況

英國刑事裁判の實況と其根
本義

英國刑事裁判所の組織及審
理手續

ロンドン大學及び英國裁判
所の近情

英國に於ける刑事巡迴裁判
所及四季開廷裁判所の實
況

ノルマン朝の裁判制度

英國の勞働裁判所に就て

英國裁判所の組織について

獨

獨

獨

獨

獨

獨

獨

獨

獨

獨

獨

獨

獨

國

寺田 四郎 〔法新〕 | 四二四 | 一 | 卷 | 二七 || 豊島 武夫 | 〔新聞〕 | 四二四 | 一 | 一 | 二八 |
菊池 武夫	〔法協〕	四二八	三	一	三
松波仁一郎	〔法協〕	四三一	一	一	六七
藤波 元雄	〔法記〕	四三八	一	一	六五
平沼駿一郎	〔法記〕	四四四	一	一	七
泉二 新熊	〔法協〕	四二二	三	一	八
磯谷幸次郎	〔新聞〕	四三三	一	一	九〇
磯谷幸次郎	〔法記〕	四三三	一	一	九八
磯谷幸次郎	〔法記〕	四三三	一	一	一〇
穂積 重遠	〔法協〕	四三三	一	一	一四
飯島 喬平	〔法記〕	四二五	二	一	二
占部百太郎	〔三學〕	四八三	一	一	一
竹井 廉	〔法曹〕	四三二	二	一	五
今村 有	〔商濟〕	四二五	六	一	一

商事裁判所及商事部に關す

る獨逸の現行法制
獨逸の參審裁判所
獨逸に於ける商事裁判制度
と商人裁判所及び職工裁
判所に於ける訴訟手續
仲裁官廳としての獨逸商人
裁判所及職工裁判所に就
て

獨逸に於ける刑事裁判制度
獨逸に於ける刑事裁判制度
の一大變革

獨逸勞働裁判所法案に就て

獨逸刑事裁判手續に對する
新立法

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

佛

雄本 朗造 〔京法〕 | 四四五 | 七 | 二 | 二 || 岡田 庄作 | 〔刑評〕 | 四四五 | 四 | 一 | 七八 |
山内確三郎	〔法記〕	四四五	二	一	五
山内確三郎	〔法記〕	四五二	二	一	八
阿部文二郎	〔法記〕	四二五	四	一	四
森山武市郎	〔法曹〕	四三二	二	一	四
中村 武	〔新報〕	四三三	四	一	五
清水 鼎良	〔法曹〕	四三二	二	一	六
垂水 克己	〔法曹〕	四三二	二	一	一〇
グラットン	〔新報〕	四三三	一	一	一五
宮澤 俊義	〔國家〕	四三九	二	一	二
鹽田 環	〔法協〕	四四〇	二	一	六
堀江專一郎	〔辯協〕	四五〇	一	一	一四

【裁判所】 【裁判所構成法】

策的立法と裁判所(譯) 荒井 誠一〔法協〕大五三二 一
 米國の裁判を傍聴して 川口 義久〔法政〕大六一四 四
 米國に於ける家庭審判所の 池田寅二郎〔法記〕大〇三二 六
 制度に就て 池田寅二郎〔法協〕大〇三九 二〇
 米國の家庭裁判所 池田寅二郎〔法記〕大〇三三 三
 亞米利加裁判所の事情に就 宮本 英雄〔法叢〕大二一八 三
 て 米國の裁判制度 池田寅二郎〔法記〕大〇三三 三
 歐洲の裁判制度 松波仁一郎〔明法〕四三四 一
 歐洲裁判制度雜觀の一 板倉 中〔刑評〕四四三 一
 歐米に於ける勞働裁判所及 秋山 眞澄〔新聞〕大七一 一四七
 無料法律救助事業 其 商事裁判所及商事部に關す 維本 朗造〔京法〕四四七 二
 る獨塊の現行法制 村上 貞吉〔辯協〕大二一七 一七四
 上海會審衙門に付き 蘭領印度に於ける法制並裁 石井 謹吾〔辯協〕大〇二五 七
 判一斑 支那に於ける英國の裁判制 岡本 乙一〔辯協〕大二二六 三
 度並に上海會審衙門に就 支那の裁判及監獄 關口 半〔朝司〕大二三三 六九

【裁判所構成法】

サイバンシヨコウセイホウ
 裁判所構成法一斑 武田鬼十郎〔新聞〕四三九 一三五
 裁判所構成法改正論 M T 生〔法協〕四三三 八 七三
 現行裁判所構成法民事訴訟 花井 卓藏〔新報〕四二四 一 一
 法等に關する修正意見 一瀬勇三郎〔法記〕四三三 九 九三
 裁判所構成法第一四條と裁 野村安次郎〔新報〕四三四 二 二三八
 判管轄 仁井田益太郎〔明法〕四五五 一 四九
 商事裁判所構成法を讀む 鳩山 和夫〔辯協〕四三九 一〇 九五
 裁判所構成法改正意見 淺野豊三郎〔新聞〕四三九 一 三三
 裁判所構成法中改正法律に 今村力三郎〔辯協〕大二一七 一五
 就き 岸井 辰雄〔辯協〕大二一七 一七六
 意見 龜山 要〔新聞〕大二一 八四九
 裁判所構成法改正に伴ふ弊 羽田 智澄〔新聞〕大三一 九五二
 害 土屋 倫啓〔新聞〕大六一 二六七
 裁判所構成法の改正に就て 紀志 蓼軒〔新聞〕大七一 一三五九
 裁構法の改惡 三浦彌五郎〔新聞〕大二四 一 二四六
 裁判所構成法改正の議 就て

参照 刑事訴訟法。檢事。裁判。裁判所。裁判所書記。執達吏。司法。司法官。判事。民事訴訟法。

外國

北米合衆國所頒比律賓群島 服部 應保〔法記〕四三五 二 一三二
 裁判所構成法(譯) 獨逸に於ける刑事訴訟法改 正運動の經過後に其改正 の主要點の一たる裁判所 構成問題に對する草案規 定の理由 武田鬼十郎〔法記〕大六二七 二

【裁判所書記】

サイバンシヨシヨキ
 裁判所書記を論ず 卜部喜太郎〔新報〕四二七 四 三八
 下級吏員の増給問題 窮 措 大〔新聞〕四四四 一 七五三
 裁判所書記及廷丁の待遇を 改善すべし 安東 正臣〔新聞〕大二二 一 二〇六五
 文官任用令改正と裁判所書 記の境遇 豐島 武夫〔新聞〕大二五 一 二五〇六

【裁判所の管轄】

サイバンシヨカンカツ
 刑 區裁判所の管轄に屬する刑 事事件 金子富次郎〔新聞〕四三六 一 二七二
 特定の金額の幾倍を科した

【裁判所構成法】 【裁判所書記】 【裁判所の管轄】

る罰金刑の裁判管轄に就

きて 武田鬼十郎〔新聞〕四三九 一 三三五
 管轄違の裁判所の先着手の 効力 板倉松太郎〔志林〕四四二 一〇 六
 囚人の犯罪に對する裁判管 轄を論ず 淺野豊次郎〔新聞〕四四二 一 四七六
 豫審判事か被告事件を自己 所屬地方裁判所管内の區 裁判所の管轄に屬するも のと思料したるときの手 續 板倉松太郎〔志林〕四四二 二 六
 正犯訴追前從犯所在地の裁 判所と其從犯に對して管 轄權を有するや 板倉松太郎〔志林〕四四二 二 一〇
 犯罪地の裁判籍を論ず 富田 山壽〔京法〕四四二 四 二三
 刑訴第二九條の特別裁判籍 と令狀を發すべき裁判所 富田 山壽〔新報〕四四二 二 二
 刑事訴訟法第二九條第三〇 條の特別管轄を論ず 岡田 庄作〔國國〕大五四 二 二
 管轄違と公訴不受理との兩 論點の同時に起りたる場 合に於ては先づ何れの論 點に對し裁判を與ふべき や 板倉松太郎〔新報〕大六二七 五

外國犯罪の裁判籍
刑事訴訟上管轄と權利拘束
區裁判所事件と地方裁判所
の管轄權

- 清水 行恕〔法政〕大八二六 二
- 矢追 秀作〔法政〕六一一九 六
- 津田 進〔法治〕六一五 三

民 事

裁判所の管轄

- レインホルム〔法協〕三三〇 三六

裁判管轄の一疑問

- 伊藤 悌治〔新報〕三三三 三〇

裁判管轄の合意

- ト部喜太郎〔新報〕三三八 五
- 四七

民事訴訟法上合意管轄を論ず

- 小木曾義房〔法政〕三三三 二

裁判所構成法第一四條と裁判管轄

- 野村安次郎〔新報〕三三四 二
- 二二八

特別裁判籍に就て

- 玉置剛一郎〔新聞〕三三四 一
- 三五

管轄指定に就て

- 前田 孝階〔法協〕三三三 三
- 二

民事訴訟法改正案に於ける契約の裁判籍の規定に就て

- 齋藤十一郎〔法協〕三三三 二
- 一〇

裁判所の管轄に關する契約規定の法則に一大補正を加へたき意見

- 一瀬勇三郎〔新聞〕三三六 一
- 一六五

共同訴訟の管轄

- 中込 宗造〔新報〕三三二 一八
- 五

債權の讓渡か該債權創設契約中に包含する裁判管轄の合意に及ぼす効果

- 中込 宗造〔新報〕三三二 一九
- 二

約束手形の振出人が補箋に記載したる裁判管轄の合意の効力

- 青木 徹二〔新報〕三三二 一九
- 四

反訴の管轄

- 日吉 平吉〔志林〕三三二 二
- 四

地方裁判所の事物の管轄に屬する訴訟物に付き支拂命令の申請ありたる場合と主參加の訴を爲すべき裁判所

- 前田直之助〔新報〕三三三 三

權利拘束發生後に於ける被告の住所移轉か管轄に及ぼす影響

- 菅原 春二〔新報〕三三三 三

管轄に關する合意の當事者以外に及ぼす効力

- 前田直之助〔新報〕三三三 五

土地收用補償金請求訴訟の裁判籍

- 松岡 歸豊〔新聞〕三三三 一
- 四九八

一定の裁判所のみに出訴し得へしとの管轄合意

- 細野 長良〔新報〕三三三 一
- 二

訴訟物の價額

- 仁井田益太郎〔法協〕三三三 三

管轄合意は一般承繼人並に特定承繼人を拘束するや

- 細野 長良〔新報〕三三三 四

契約の裁判籍

- 仁井田益太郎〔新報〕三三三 六

各種の訴訟物及其價額

- 山田 正三〔京法〕三三三 一〇
- 一一

訴訟價額の算定に就て

- 齋藤 巖〔新聞〕三三三 一五
- 一六五

土地收用に因る補償に關する裁判管轄及前決問題

- 宿利 英治〔新報〕三三三 二
- 九三〇

事物管轄の規定に對する脱法行爲的訴訟提起

- 富永 竹夫〔新聞〕三三三 一
- 一七九

保證人の主たる債務者に對する求償の訴と民法第一八條

- 前田直之助〔新報〕三三三 一

合意に依る管轄裁判所ある場合と訴提起前の和解の申立を爲すべき裁判所

- 前田直之助〔新報〕三三三 三

契約上の債權の裁判籍に就て

- 宮田龜之助〔辯協〕三三三 七
- 七八

相續人廢除に關する裁判管轄權に就て

- 福井才一郎〔新聞〕三三三 一
- 二四七

共同訴訟の管轄權に就て論ず

- 松本 三郎〔法政〕三三三 四

【催眠術】

催眠術問題

- 淺見倫太郎〔新聞〕三三三 一
- 一七三

催眠術を以て私に治療を施すを業と爲すは刑法私爲

- 岡田朝太郎〔内外〕三三三 三
- 三

醫學の罪か

- 古賀 廉造〔法記〕三三三 一
- 四

催眠術と醫學の區別を論ず

- 古賀 廉造〔法記〕三三三 一
- 四

【裁判所の管轄】 【催眠術】 【ザウアー】 【ザウイニー】 【堺】

催眠術を以て疾病を治療することを業とするは刑法

- 勝本勘三郎〔志林〕三三三 六
- 六二

第二五六條私爲醫學に該當すへきか

- 泉二 新熊〔新報〕三三三 一
- 一五五

催眠術と刑法

- 福來 友吉〔刑評〕三三三 二
- 四

催眠術の取締に就て

- 福來 友吉〔刑評〕三三三 二
- 四

ザウアーの新カント派法理學辯護論

- 今川 赴夫〔國家〕三三三 三
- 三四

【ザウアー】 (Wilhelm Sauer, 1879-)

- 今川 赴夫〔國家〕三三三 三
- 三四

【ザウイニー】 (Friedrich Kari von Savigny, 1779-1861)

- 高柳 眞三〔國家〕三三三 六

ザウイニーの根本思想

- 高柳 眞三〔國家〕三三三 六

【堺】

- 我邦海港の史的的研究 (博多と堺)
- 阿部 秀助〔三學〕三三三 一
- 一一

【詐欺罪】

小切手を偽造し銀行より預金を取出したる行為の被害者に就て
不作爲を手段としたる詐欺取財に就て
虚偽の債権に基く配當要求と詐欺取財
虚構債権に基く配當要求と詐欺取財
不作爲の詐欺取財
虚構債権に基く配當要求と詐欺取得
不動産詐欺取財の成立時期を論ず
刑法民法交渉問題殊に被害者に贓物返還請求権なき場合に於ける詐欺取財罪の成立
不法の原因に基く物の給付と詐欺取財罪成立との關係

菫淵 清雄〔新聞〕四三〇	一	五二
小崎 傳〔新聞〕三七七	一	二二
岩瀬 義一〔新聞〕三七七	一	二三四
植木幸次郎〔新聞〕三七七	一	二三四
岡田朝太郎〔法協〕三六二	一	二二
鹽田 正長〔新聞〕三六二	一	二七〇
谷田藤之助〔新聞〕三六二	一	二八四
泉二 新熊〔法協〕三九二	一	二四七
小崎 傳〔新聞〕四四〇	一	四六〇

一般人を欺罔する意思を以て唯一の詐術を用ひ數人より財物を騙取したる行為は一罪なりや
人を欺罔し不法原因に基きて財物を給付せしめたる者の處分
詐欺取財罪の構成要件に付て富山地方裁判所の判決を評す
詐欺取財罪に關する富山地方法裁判所の判決に就て
再び不動産騙取罪の構成要件に就て
再び詐欺取財罪を論ず
證書を騙取し其證書引換に金圓を受領したる場合の處分に關する大審院の判決に就て
財物の騙取と財物以外利益の獲得との併合
權利騙取の性質
樹量を減少して物を賣り減少部分は之を顧客に與へ

牧野 英一〔新報〕四二一	一	七
牧野 英一〔新報〕四二一	一	一〇
吉田平治郎〔新聞〕四四一	一	四九三
谷田藤之助〔新聞〕四四一	一	四九七
吉田平治郎〔新聞〕四四一	一	五〇〇
谷田藤之助〔新聞〕四四一	一	五〇七
古賀才治郎〔新聞〕四四一	一	五三七
牧野 英一〔志林〕四四二	一	二
牧野 英一〔志林〕四四二	一	三

たる者の處分

抵當欺隱に因る重罪
不法原因に基く給付と詐欺取財
詐欺取財に關する大審院判決と民法第四七六條の解釋に關する名古屋地方裁判所の判決に就て
詐欺取財と民事の判決
詐欺罪既遂の時期に關する一疑問
刑法第二四六條の適用に就て
無錢宿泊飲食詐欺の罪數を論じ併て其事實認定方を評す
詐欺罪
財産上の損害は詐欺罪の成立要件なるや
詐欺取財罪の着手に就て
詐欺手段を以て通行税の納付を免れたる者の責任を論ず
背任罪と横領罪との關係

小崎 傳〔新報〕四四一	一	九
宮本 英脩〔法記〕四四二	一	九
泉二 新熊〔志林〕四四二	一	二一
谷田藤之助〔新聞〕四四二	一	五三九
横田 秀雄〔志林〕四四二	一	一〇
岡村 玄治〔刑評〕四四三	一	二二
秋山高三郎〔志林〕四四三	一	二二
寺崎 福彦〔新聞〕四四四	一	七八
山岡萬之助〔法協〕四四五	一	五
後藤多喜藏〔法協〕四四五	一	五
阿蘇 温藏〔刑評〕四四五	一	五
中村虎次郎〔新聞〕四四五	一	七九
山中 靜次〔刑評〕四四五	一	二二

詐欺の手段と横領

二重抵當の刑法上の責任
背任罪
詐欺罪雜問
背任罪と目的
背任罪の成立に關する横濱地方裁判所の判決を評す
詐欺罪に付て
詐欺賭博に就て
虚電に因る金錢騙取行為に就て
領得罪に因り領得したる物の賣却行為と詐欺罪
Telephoneと詐欺
有價證券虚偽記入罪の成立と詐欺罪の不成立並實行行為を代表せしめたる者の責任

泉二 新熊〔法記〕六二二	一	八
牧野 英一〔志林〕六二二	一	二
宮本 英脩〔評論〕六二二	一	一五
泉二 新熊〔新報〕六四二	一	三
牧野 良三〔志林〕六四二	一	三
金城 生〔新聞〕六六二	一	二二
新保勘解人〔法記〕六七二	一	六
雨花 山人〔新聞〕六九二	一	二七四
泉二 新熊〔新報〕六九二	一	四
渡邊 純一〔朝司〕六三三	一	一
板倉松太郎〔法曹〕六四三	一	五八
平井彦三郎〔新報〕六五三	一	一

【錯誤】

詐欺と錯誤
法律の錯誤
錯誤を論ず

岡野敬次郎〔法協〕四三三	一	七四
岡野敬次郎〔法協〕四三三	一	八〇
土方 寧〔新報〕四三三	一	三

【錯誤】【サクソニヤ】【酒】

獨逸民法に於ける錯誤の意義
 錯誤が犯罪の故意に及ぼす影響
 英米法に於ける錯誤の觀念
 法律行為の要素の錯誤と數量の不足又は一部滅失による賣買契約の解除
 法律の錯誤と事實の錯誤との區別
 法律の錯誤と犯意との關係に就て
 積極的の錯誤
 錯誤論
 表示上の錯誤
 錯誤
 錯誤に就いて(規範的評價と加罰的評價)
 錯誤論の一考察
 錯誤に因る意思表示と惡意の場合の効力
 法の錯誤に就て
 法律の錯誤と犯意との關係に就て

松本 修	〔法協〕	三六二	二	五
平沼騏一郎	〔法政〕	四三七	八	三
鳩山 秀夫	〔法協〕	四二一	二六	一
梅 謙次郎	〔志林〕	四一〇	一〇	六
牧野 英一	〔志林〕	四〇二	二	三
牧野 英一	〔志林〕	三三六	一〇	一〇
泉二 新熊	〔新報〕	大五二六	三	三
岡田 庄作	〔國經〕	大六三四	三	三
鳩山 秀夫	〔法協〕	大七三六	三	三
山岡萬之助	〔法政〕	大〇一八	一	四
宮本 英脩	〔法叢〕	大二一八	八	六
瀧川 幸辰	〔法叢〕	大四一四	四	六
吉田 久	〔新報〕	大四三五	五	五
宮本 英脩	〔法叢〕	大四一四	四	六
山口 嘉夫	〔志林〕	大四二七	七	七

「法律行為の要素」の錯誤に關する一考察

杉之原舜一〔法協〕大四四三

【サクソニヤ】

普魯士、撒遜、英吉利の所得統計
 一八九五年素遜王國人口調査法

多久米三郎〔統集〕四三四
 相原 重政〔統集〕四三六

【酒】

參照アルコール。禁酒。

飲酒の害を論ず
 飲酒と自殺との關係
 露國の火酒專賣
 酒造稅論
 少年禁酒法に就て
 歐米の禁酒政策
 民法上及刑法上に於ける飲酒の影響
 伏見造酒株仲間
 飲酒より起る犯罪に就て
 酒と罪
 酒稅の矛盾及び不徹底

吳 文聰〔スタ〕四三三
 田中 太郎〔統集〕四二七
 瀧本 美夫〔國經〕四一五
 河田 嗣郎〔日經〕四二二
 鎌田 榮吉〔辯協〕四二二
 手塚 太郎〔刑評〕四四三
 手塚 太郎〔法記〕四四二
 本庄榮治郎〔京法〕大九九一
 加藤 銀藏〔統集〕大五三
 舞出長五郎〔國家〕大六三
 神戸 正雄〔經叢〕大七六

米價調節と外米酒造
 禁酒問題(講演)
 米價と酒造制限との關係
 酒の政府專賣と公益
 飲酒と唐手
 清酒の醸造及消費高に就て
 現行内國酒稅
 本邦の酒に關する統計
 本邦造酒工業勞働事情
 清酒庫出稅と租稅の立替
 酒造業に於ける納稅保證と貸借對照表
 酒に原因する心神喪失心神耗弱に關する裁判例及立法例

戸田 海市	〔商經〕	大七一	七	一
田子 一民	〔日社〕	大八七	一	三
戸田 海市	〔經叢〕	大八八	八	三
神戸 正雄	〔經叢〕	大九一〇	四	四
黒田源太郎	〔統集〕	大〇一	一	四
相原 重政	〔統集〕	六一	一	三
關口健一郎	〔國家〕	六一三六	九	一〇
加藤 銀藏	〔統集〕	大二一	一	一〇
吉田 寧	〔社政〕	大四一	一	一〇
汐見 三郎	〔經叢〕	大五二二	一	一〇
平山 與一	〔會計〕	大五二八	二	二
花井 卓藏	〔新報〕	大五三六	三	三

【差押】強制執行を見よ

【殺人の罪】

英律の所謂殺人罪とは何ぞや
 殺人犯に關する意見

戸水 寛人	〔法協〕	四一九	四	三
卜部喜太郎	〔法新〕	四三三	九	四

伊庭想太郎被告事件を論じて謀殺故殺の法理に及ぶ
 自殺下手未遂の處罰
 誤殺誤傷に就て
 刑法上に於ける人の始終承諾を得て人を殺害したる者の處分如何
 誤殺論
 誤殺未遂を論ず
 誤殺罪に就て
 誤殺未遂に就て
 誤殺論
 殺傷に就て
 自殺を教唆し且其囑托を受けて手を下したる者の處分
 不作爲の殺人罪に關する英獨法の比較
 英吉利刑法に於ける自殺罪の比較研究
 鐵道車内殺人罪事件公判
 自殺補助論
 殺人罪に就て

花井 卓藏〔新報〕四三五
 豊島 直通〔志林〕四三五
 岡田朝太郎〔明學〕四三七
 島 集〔新聞〕四三七
 淺野豊三郎〔新聞〕四四〇
 淺野豊三郎〔新聞〕四四〇
 榊 崎 生〔新聞〕四四〇
 淺野豊三郎〔新聞〕四四〇
 淺野豊三郎〔新聞〕四四〇
 玉澤庄次郎〔新聞〕四四〇
 牧野 英一〔法協〕四四二
 牧野 英一〔新報〕四四一
 菱谷 精吾〔刑評〕四四三
 菱谷 精吾〔新報〕四二三
 増島六一郎〔辯協〕四二七
 眞野 毅〔新聞〕四一九
 山岡萬之助〔新聞〕四一七

【酒】【差押】【殺人の罪】

殺人研究資料 山崎 佐〔志林〕大 六九 二〇
 ビンディングの「殺人の許容」 中野 峰夫〔法叢〕大三一 一五

【札幌】

札幌區區勢調査 高岡 熊雄〔國經〕四二 六
 札幌區區勢調査の概況 高岡 熊雄〔統集〕四四 一
 札幌區に於ける住家の状態 高岡 熊雄〔國經〕大三一 六
 札幌區の所帯に關する研究 高岡 熊雄〔統集〕大七一 一
 札幌區の人口に關する研究 高岡 熊雄〔統集〕大七一 一
 札幌區の職業に關する研究 高岡 熊雄〔統集〕大八一 一

【砂糖】

砂糖課税の理論及實例 小林丑三郎〔國經〕四一 一
 砂糖輸出獎勵金問題の由來及影響 河津 暹〔國經〕三七 一
 日本糖業論 河田 嗣郎〔日經〕四〇 二
 臺灣に於ける製糖業行政に就て注意すべき要點 山内 正暉〔國經〕四一 二
 糖業前途の好望 齋藤武次郎〔東經〕四二 一
 臺灣に於ける糖業の獎勵成績と將來 新渡戸稻造〔國經〕四三 二
 臺灣粗糖聯合と輸出策 谷奥 利吉〔洋經〕四三 一

我輸出糖の運命 谷奥 利吉〔洋經〕四三 一
 糖業保護の程度如何 小林丑三郎〔日經〕大九 一
 フイリピン群島の糖業一斑 新渡戸稻造〔國經〕大二 二
 砂糖の産額及輸出入額 相原 重政〔統集〕大二 一
 臺灣糖業の批判 安田與四郎〔洋經〕大二 一
 寒心す可き糖業の將來 一知半解樓〔財經〕大三一 一
 糖稅論 青木 得三〔國經〕大三一 一
 各國に於ける砂糖政策 荒井 泰治〔財經〕大三一 一
 糖業論 尾上登太郎〔法協〕大三一 一
 大阪に於ける黒糖取引に就て 村本 福松〔商經〕大五 一
 露國の砂糖專賣案 難波五百磨〔財經〕大五 三
 臺灣糖業の發達 加藤 繁〔統集〕大八 一
 現行砂糖消費稅法を論ず 加藤 繁〔統集〕大八 一
 本邦砂糖に關する統計 加藤 繁〔統集〕大八 一
 露國製糖事情 加藤 繁〔統集〕大八 一
 支那に於ける甘蔗及砂糖の起源に就いて 加藤 繁〔統集〕大八 一
 混沌たる糖業界の前途 加藤 繁〔統集〕大八 一
 臺灣糖界の合同は不可能 加藤 繁〔統集〕大八 一
 我國糖業政策管見 加藤 繁〔統集〕大八 一
 鹿兒島藩の砂糖專賣 加藤 繁〔統集〕大八 一
 世界に於ける我國糖業の地位 加藤 繁〔統集〕大八 一

本邦製糖業労働事情 廣池 千英〔社政〕大四 一
 砂糖關稅改正と本邦製糖業 三宅鹿之助〔經研〕大五 三
 本邦穀物並に砂糖關稅の沿革 三宅鹿之助〔經研〕大五 三
 大阪砂糖取引所は倫敦砂糖取引所 東田 藤吉〔商經〕大五 一

【佐藤信淵】

日本のカメラリスト(佐藤信淵論) 松崎藏之助〔國經〕四二 三
 徳川時代の社會主義 河上 肇〔京法〕四二 八
 幕末の社會主義者佐藤信淵 瀧本 誠一〔三學〕大四 一
 佐藤信淵の國家專賣法 内田 繁隆〔早政〕大四 一
 佐藤信淵の政治學說 内田 繁隆〔早政〕大四 一

【サムナー】

(William Graham Sumner, 1840-1910)
 今井 時郎〔社雜〕大五 一
 綿貫 哲雄〔社雜〕大五 一

【サルモンド】

(Sir John William Salmond, 1862-)
 綿貫 哲雄〔社雜〕大五 一

【砂糖】 【佐藤信淵】 【サムナー】 【サルモンド】 【蠶業】 【産業】

サルモンドの占有論

宮本 英雄〔京法〕大六 二

【蠶業】

參照 生絲。蠶絲。

農蠶業の土地の利用 宮本 基〔統集〕四三 一
 蠶種統一及官營 稻田周之助〔國經〕四三 九
 本邦の養蠶並蠶絲業に就て 加藤 銀藏〔統集〕大六 一
 英國の養蠶 財部 静治〔經叢〕大七 七
 養蠶と農家の經濟 神原 周平〔洋經〕大八 一
 養蠶源流労働者問題 早川 直瀬〔國經〕大〇 三〇
 支那の蠶業及機械業 中田 豊衛〔亞經〕大〇 五
 養蠶業の擴張及び改善 戸田 海市〔經叢〕大二 一
 蠶及び其賣買取引 西垣 實〔法政〕大三 二
 參照 經濟。工業。蠶業。産業組合。失業。産業政策。商業。生産。同盟罷工。能率。(尙各國名を見よ)

【産業】

日獨産業發達比較觀 神戸 正雄〔京法〕四三 五
 日本産業と現状と保護の弊 戸田 海市〔日經〕四四 八
 日本固有産業の發達 戸田 海市〔日經〕四四 八
 産業に對する國家の補助金 氣賀 勘重〔國經〕大元 一
 産業上の第二維新 三浦鐵太郎〔洋經〕大元 一
 所謂産業獎勵 本多 精一〔財經〕大元 一

産業界に於ける婦人の努力	大多和耕人〔東經〕大三	六九	二七四六
世界産業界の豫想	川瀬 俊繼〔東經〕大四	七一	八〇二
資本の獨立と産業の獨立とは兩立せず	丹羽 豊〔東經〕大四	七一	八〇二
日本産業發達の裏面	一知半解樓〔財經〕大四	二	四
産業の發達と國民的習性	石澤久五郎〔國經〕大五	二〇	二一三
本邦原料補給政策の將來	稻山 始〔東經〕大六	七五	一八九六
組織的産業制度論	河津 暹〔外時〕大六	二五	四二九
産業上に於ける代議制度の提案	丸谷 亨市〔國經〕大六	三三	六
産業上の學國一致を論ず	田島 錦治〔法論〕大六	一	三
所謂産業の不安	氣賀 勳重〔三學〕大六	二	二
産業闘争の性質	森戸 辰男〔國家〕大六	三	三
産業史上に於けるカルヴァン	藤谷光之助〔國經〕大六	三三	二一三
産業不安の原因と其救済策	山本美越乃〔經叢〕大七	六	二
産業組織完備統一の急務	岡 實〔財經〕大七	五	七
我が原料供給國としての支那	善生 永助〔財星〕大七	五	八
幕政の崩壊と明治産業の開始	石澤久五郎〔國經〕大七	二四	五十六
明治産業の開始に就きて	石澤久五郎〔國經〕大七	二五	三
産業權法に就て	泉田吉次郎〔新聞〕大七	一	一四七〇

産業權法概評	清瀬 一郎〔新聞〕大七	一	一四七
労働者と産業管理權	堀江 歸一〔三學〕大八	一	三
産業的平和の基礎	北澤新次郎〔我等〕大八	一	九
内外の労働争議と産業の自衛	本多 精一〔財經〕大八	六	二
通信設備と産業との關係を論ず	榎谷 益藏〔法政〕大八	一	二
サンケイ氏レポートの價値	細川 嘉六〔國家〕大八	三	二
産業統計改善私議	細野 繁藏〔統集〕大九	一	四七
物資の缺乏と奢侈	石川 文吾〔國經〕大九	二	二
産業上に於ける協調	永井 亨〔社政〕大九	一	二
將來の産業的指導者としての日本及び其他の諸國	石川 興二〔經叢〕大九	一	五
熱帯富源の開發に就て	山本美越乃〔國經〕大九	二	六
コオルの産業自治論	高田 保馬〔我等〕大九	二	一
コオルの産業自由論	帆足理一郎〔我等〕大九	二	一
英國に於ける産業協議會	三邊 重藏〔三學〕大九	四	七
産業管理と労働組合	森田 良雄〔社政〕大九	一	二
産業代議制度に對する米國儲主の意見	渡邊 鐵藏〔社政〕大〇	一	六
米國の産業會議	上田貞次郎〔國經〕大〇	三	五
社會主義的産業組織に對するマインシャル博士の批評			
ヤルド制度の下に於ける産			

業組織	古賀 進〔社政〕大〇	年	卷	號
産業調査と其の方法並機關	チエイニイ〔社政〕大〇	一	一	一五
産業民主化の趨勢	宮島清次郎〔財經〕大〇	八	二	一五
我が産業の情勢と勞資問題	久保田明光〔經究〕大〇	一	七	二
産業民主化傾向の大勢	阿部 賢一〔同論〕大〇	一	四	七
獨逸に於ける産業社會化論	永井 亨〔社政〕大〇	一	二	四
産業立憲及産業自治に就て	佐々木啓七〔統集〕大〇	一	一	二
統計上より觀たる帝國産業發達の趨勢	丸谷 喜市〔國經〕大〇	三〇	一	二
英國産業協議會制度の研究				
英國に於ける産業協議制の發達				
私有財産主義に依る産業社會の改造	藤森 達三〔國國〕大〇	九	四	一
産業事故及報償統計に就て	茂 恒夫〔國經〕大〇	三	四	一
獨逸に於ける産業委員會議	アウンホイゼル〔社政〕大〇	一	一	一七
米國大統領主催第一回産業會議に於ける團體交渉	ラッセル〔社政〕大〇	一	一	一七
近代産業組織と技術者の地位	出井 盛之〔我等〕大〇	一	一	一八
カーライル及ミルの産業論	上田貞次郎〔國經〕大〇	三	一	一六
勞働問題の真相を論じて産業管理に及ぶ	永井 亨〔社政〕大〇	一	一	一六
天然資源の國際的開放の原				

戰後獨逸の産業界に於ける新合同法に就て	戸田 海市〔經叢〕大〇	二	一六	四
小産業に對する金融	今泉嘉一郎〔東經〕大〇	二	一五	二
産業災害の起因に就て	木島陽太郎〔銀叢〕大〇	一	一	六
天然資源保存運動に就て	鈴木 久藏〔社政〕大〇	一	一	四九
帝都復興と産業振興	織田松太郎〔商經〕大〇	一	一	二九
戰爭と産業との關係及我國の戰爭と産業	神戸 正雄〔時經〕大〇	一	一	一七
無政府状態に在る産業界に法的秩序を與へることに就て	松下 芳男〔法治〕大〇	一	一	一〇
ヴェブレンの産業組織論	田中 貢〔經商〕大〇	二	二	六
産業界に於ける利益協同	北澤新次郎〔原巴〕大〇	一	一	一四
産業に於ける人的要素を教育上より論ず	神戸 正雄〔時經〕大〇	一	一	二
英吉利國に於ける産業疲勞の研究	鳥居 助三〔商濟〕大〇	三	三	五
産業に於ける人の浪費	古賀 行義〔商叢〕大〇	三	三	二
本邦産業の統計的觀察	蒲生 俊文〔經叢〕大〇	三	三	二
産業經營の職能と其の分化	佐々木啓七〔統集〕大〇	三	三	一
産業社會の進化和産業組合	馬場 敬治〔經論〕大〇	四	四	一
製絲の變遷	早川 直瀬〔國經〕大〇	四	四	三

【産業】【産業組合】

五〇八

産業集中に就てのマルクス説の謬想
産業豫備軍と農民の都市流入
近世産業組織の一面観
鐵鋼業の窮狀に表はれたる本邦産業の危機を論ず
産業統計調査費國庫補助問題に就て
我が産業に於ける高級利員の問題
産業統計沿革史
今期帝國議會の主要産業立法解説
國際經濟戰爭を通じて見たる我國産業の發達を阻害する時弊九ヶ條
香川縣の産業
産業に於ける諸職能
産業經營に於ける能率及び標準なる語の意義に就て
産業組織の推移と會計思想

田島 錦治〔経叢〕六二二〇	平卷 一號
小泉 信三〔三學〕六四一九	八
岡崎 良藏〔商經〕六二四一	五三九
小島 精一〔國家〕六四三九	四
佐々木啓七〔統集〕六二四一	五三二
高橋 龜吉〔マル〕六二四二	五
細野 繁莊〔統雜〕六二四一	五四六八 五四七二
猪間 曠一〔經研〕六二四二	三
今泉嘉一郎〔金融〕六二四二	三二
馬場 敬治〔商工〕六二四五	一三
馬場 敬治〔經論〕六二四五	四
平井泰太郎〔國經〕六二五〇	六

【産業組合】

産業組合に就て
農業に關する産業組合の萬國聯合會設立に就て
手工業者に關する産業組合獎勵
産業組合の精神
産業組合に關する雜感
産業組合に就て
果實栽培者組合の成功
本邦産業組合概況
産業組合の組織
産業組合經營に就て
本邦産業組合の發達
産業組合の振興に就て
預金部資金の運用と産業組合の充實
産業組合の組織に就いて
小工業保護策と産業組合
産業組合の利用發展策
舊中村藩の報徳仕法と産業組合

岡 實〔國家〕四三三	四
矢作 榮藏〔國家〕四四〇	二
岡 實〔新報〕四四〇	二
松崎藏之助〔國經〕四四一	三
加納 久宜〔法政〕四四二	二
加納 久宜〔東經〕四四二	五七
イヤリイ〔日經〕四四三	五
松崎藏之助〔法協〕四四三	二
河津 暹〔日經〕四四三	七
志村源太郎〔財經〕四四四	二
加藤敬三郎〔國國〕四五四	一
矢作 榮藏〔國家〕五六三	六
松崎 壽〔志林〕六七二〇	二
道家 齊〔財經〕六二〇	八
瀧本 誠一〔三學〕六二一七	二

産業組合中央金庫と農村振興策

産業組合中央金庫の經營に就て
産業組合の本質
産業組合中央金庫に就て
産業組合中央金庫論
震災地と産業組合
産業組合と自治精神
農村興廢と中央金庫の責務
中央金庫の前途難
産業組合と農業政策
産業組合中央金庫管見
産業政策の進化と産業組合製絲の變遷
日本産業組合に關する一新著

矢作 榮藏〔財經〕六二二〇	平卷 七號
矢作 榮藏〔國家〕六二二七	七
上田貞次郎〔社政〕六二二一	三五
河田 嗣郎〔經叢〕六二二一	四
松島 喜作〔銀研〕六二二四	七
大森 健作〔經叢〕六二二七	五
上田貞次郎〔エコ〕六二二一	三
岡 實〔エコ〕六二二一	三
河田 嗣郎〔エコ〕六二二三	七
東畑 精一〔農經〕六二四一	二
鈴木 平〔金融〕六二四二	二
早川 直瀬〔國經〕六四三八	三
猪谷 善一〔商研〕六四三三	四
大森 繁治〔銀叢〕六四三四	四
大森 繁治〔銀叢〕六四三四	四
青木 誠一〔金融〕六四四二	一
三上喜久夫〔經評〕六四四一	一

就いて

産業組合中央金庫の機能
我國最近の産業別組合合同運動
外 國
伊太利に於ける産業組合運動
英國のインダストリアルユニオンズム
米國に於ける産業別組合の發達

上田貞次郎〔國經〕六二五〇	一
岡本英太郎〔銀叢〕六二五六	五
松澤 兼人〔社政〕六二五五	一
久保田明光〔國經〕六二〇三	六
堀江 歸一〔三學〕六九二四	一
北澤新次郎〔原雜〕六三二	二
毛戸 勝元〔京法〕四四四	六
大原 信久〔新聞〕四四五	一
矢作 榮藏〔國家〕六六三	八
井川 忠雄〔國家〕六九三	一
清水文之輔〔東經〕六二八五	二

【産業組合法】

株式法産業組合法萬國會議
産業組合法と簿記法
産業組合法の改正法律を評す
露西亞産業組合法
産業組合中央金庫法案に對する疑問

サンギョウクミアイホウ

【産業政策】 参照||經濟政策。

【産業組合】【産業組合法】【産業政策】

五〇九

【産業政策】

東北地方の産業振興策

内國産業保護と輸出貿易

大正の新政と産業政策

立國の基礎を鞏固にせよ

特許行政と産業開發

速に産業方針を決定せよ

今後の産業發展策

時局と産業の革新

産業政策確立の急務

我國戦後の科學振興策

戦後の産業政策

英國の産業革命當時と其後

に於ける經濟思想と産業

政策との關係

産業保護と販路擴張

支那關稅改正と産業保護

英國の産業自治論

世界の經濟事情と我が産業

政策

現在の國策II改善の急務

産業政策と特許期間

小松原英太郎 (日經) 四四〇 二卷 四號

河津 暹 (新報) 四四四 二卷 七九

岡部菊太郎 (東經) 六〇六 一六六四

原田清兵衛 (日經) 六三二 一四

村上 隆吉 (日經) 六三一 一五

早川千吉郎 (日經) 六三一 一五

田中 穂積 (財經) 六四二 二

岡 實 (財經) 六五三 三

堀江 歸一 (財經) 六五三 三

龜高 徳平 (財經) 六五三 三

小林丑三郎 (法政) 六六四 六

石澤久五郎 (國經) 六六三 五六

河津 暹 (新報) 六六二 六七

根岸 信 (亞經) 六六一 一

増井 光藏 (國經) 六八二 六

添田 壽一 (財經) 六八六 一二

仲小路 廉 (財經) 六九七 九一〇

吉田 敬直 (法政) 六九七 九一〇

大戦後の經營と産業政策

産業立國と助長政策

國際經濟戰と産業參謀本部

産業立憲と産業福利

獨逸社會民主黨の産業及社

會政策

各國に於ける産業政策の將

來

産業立憲政策の提唱

國立産業統制機關の效果

獨逸革命と産業公有制度

産業政策の變遷と各國政黨

の消長

我國産業政策の既往及將來

明治十七年の産業政策

金利引下と産業振興策

産業主義と當來の國際條約

産業立國の意義と方策

産業國の建設に努めよ

南洋産業計畫

經濟攻究會の「貿易及産業

振興策」を讀む

吉田 敬直 (法政) 六九一 七

天岡 直嘉 (財經) 六九二 八

後藤 新平 (外時) 六一三 五

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

永井 亨 (社政) 六二二 九

【三國協商】

三國同盟と三國協商

三國協商の進化如何

【三國同盟】

三國同盟の由來

トリポリ協約と三國同盟

バルカン問題の餘波三國同

盟の前途

三國同盟と三國協商

【蠶糸】

蠶糸類の輸出貿易

本邦に於ける蠶糸の産額に

就て

蠶糸の生産過剩説

成功か失敗か吾が蠶糸貿易

悲觀すべき伊佛の蠶糸業

我國蠶糸業の前途

米價調節と蠶糸救済策

有賀 長雄 (外時) 四四二 二

重徳 來助 (外時) 六三二 二

中村 進午 (明法) 四三三 一

煙山專太郎 (外時) 四三三 一

宮本平九郎 (外時) 四四二 二

有賀 長雄 (外時) 四四二 二

河合 利安 (統集) 四三八 一

相原 重政 (統集) 四四五 一

飯島千代太 (日經) 四四五 一

飯島千代太 (日經) 六二二 二

河田比備三 (日經) 六二二 二

本多岩次郎 (財經) 六三一 一

横井 時敬 (財經) 六四二 二

参照II織物。生絲。蠶業

蠶糸類の輸出貿易

本邦に於ける蠶糸の産額に

就て

蠶糸の生産過剩説

成功か失敗か吾が蠶糸貿易

悲觀すべき伊佛の蠶糸業

機宜を失したる蠶糸救済

戦後の我國蠶糸業

吾國蠶糸業の現在及び將來

支那現時の蠶糸業

蠶糸業の過去と將來

蠶糸金融の改善策

戦中戦後の米國絹業界と我

蠶糸業

長野縣の蠶糸業

本邦の養蠶並蠶糸業に就て

蠶糸業の改進に關する注意

比較生産費より見たる日本

及支那蠶糸業

我が蠶糸業の現状と改良策

蠶糸業發展策

蠶糸業者原料買入の協定

蠶糸定期取引の改善に就て

本邦に於ける蠶糸の統計

我國蠶糸業の脅威

蠶糸金融策としての米資輸

入問題

蠶糸低利資金觀

堀越善重郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本多岩次郎 (財經) 六四二 二

本年度露米金融の特徴
本邦露米金融の實際

高山 武雄〔銀研〕大四年九卷四號
高山 武雄〔銀叢〕大五卷六二
参照||アイ・ダフリユー・ダフ

【サンジカリズム】

リユー。ギルド社會主義。
社會主義。怠業。ボルシ
エヴィズム。

革命的サンデカリズムと現
代生活

米田庄太郎〔京法〕四四五 七 六 七
桑田 熊藏〔新報〕大二三 二

革命的サンデカリズムに關
する一新書
最近サンデカリズム運動の
發展

河上 肇〔京法〕大ニ 八 九
大山 壽〔京法〕大三 九 一〇

集散主義及サンデカリズム
批評としてのギルド・ソ
ンヤリズム

小泉 信三〔國家〕大六三 一 五 六

思想問題として見たるサン
デカリズムとベルグソン
哲學との交渉

左右田喜一郎〔三學〕大六二 一 八
河田 嗣郎〔經叢〕大七 七 一 四
小泉 信三〔財經〕大五 一 三 九

【サン・シモン】

(Claude Henri de Rouvroy, comte
de Saint-Simon, 1760-1825)

サン・シモンの國家觀
三大ユトオビアンの生涯と
思想概説

恒藤 恭〔我等〕大十 三 九
淺野 研真〔法政〕大一一 九 一〇 一一

學及び連帶思想
近代社會主義學說の發展と

米田庄太郎〔經叢〕大二三 一 七 一 一 六
久保田明光〔社政〕大三 一 五 六

サン・シモン主義
サン・シモンの生涯に就て

赤神 良讓〔社研〕大四 一 二
赤神 良讓〔經商〕大四 四 七 九
増井 幸雄〔社政〕大五 一 六 七

産業主義者サン・シモン
【サンダーランド】 (Jabez Thomas Sunderland, 1842-)

Sunderlandの日本文明評 財部 靜治〔經叢〕大十 一 一 四
サンダーランド博士の日本
文明を讀む 小齊甚次郎〔辯協〕大十 二 五 一〇

【山林】

森林を見よ

シ 部

【ジイウエキング】

(Ernst Friedrich Sieveking.
1837-1909)

漢堡控訴院長シーベツキン
グ氏を弔す 加藤 正治〔法協〕四三 二 八 三 號

【ジイゲル】

(Julius Siegel)

ユリウス・ジイゲル氏文書
の證據力 小栗栖國道〔法叢〕大十 五 六
ユリウス・ジイゲル氏文書
の法律行為に對する關係 小栗栖國道〔法叢〕大十 六 一

【ジイド】

(Charles Gide, 1847-)

La Repercussion Financiere
de la guerre pour l'Europe. Gide 〔國經〕大 七 二 四 三
飯島幡司著「ヂイド」修正經
濟學原論」を讀む 高島佐一郎〔國經〕大二三 五 一

【ジイボルト】

(Philipp Franz von Siebold,
1796-1866)

【ジイウエキング】 【ジイゲル】 【ジイド】 【ジイボルト】

【寺院】 【寺院法】

我國商業及びシイボルト

武藤 長藏〔國經〕大二三 三 六 五

【寺 院 法】

寺有財產處分論

高木金之助〔新報〕四三 九 一〇 一

誰か寺院を財團と謂ふ

江木 衷〔新報〕四三 一〇 一〇 七

社寺領の觀念

竹内金太郎〔法協〕四三 一 九 七

寺院は法人なりや

劍 鉦 生〔新聞〕四五 一 一 二 六

寺院財產處分の認可に就て

永守安太郎〔新聞〕四五 一 一 三 九

徳川時代に於ける寺社境内
の私法的性質

中田 薫〔國家〕大五 三〇 三 一 〇

【寺 院 法】

中世寺院法の貨幣説

山口正太郎〔我等〕大二三 六 一 一

中世寺院法と銀行業

山口正太郎〔銀研〕大四 八 一

中世寺院法と社會問題

山口正太郎〔國經〕大四 三 八 六

【シ ー ア ー】

(Johann Friedrich Schar)

私經濟學者ニクリツシユ及
びシエーアの資本學說に

駒井清次郎〔商研〕大二三 四 一 一

關する若干の研究

青地玄三郎〔長彙〕大 一 四 七 六 七 一 一

二大私經濟學者の資本學說

青地玄三郎〔長彙〕大 一 四 七 六 七 一 一

五二二

【市營事業】【ジエームス】【シエクスピリア】【シエツフレール】【ジエボンス】
 【シエラー】【シエリング】【鹽】

【市營事業】 参照II官業。企業。公共事業。

英獨市營事業の消長 田中鐵三郎〔國家〕四四二五卷一號
 コーン教授の市營事業論 松崎 壽〔國經〕四四二〇
 市營事業論 關 一〔國經〕四四二〇
 最近市營事業趨勢 〔資料〕六七四
 市營事業概論 〔資料〕六八五
 市營事業と共職員 上田貞次郎〔企社〕二五

【ジエームス】 (William James, 1842-1910)

ラッセルの思想とウキリア ム・ジエームス 奥井復太郎〔三學〕六九二四八—一〇

【シエクスピリア】 (William Shakespeare, 1564-1616)

沙翁と法律 乾 政彦〔志林〕四三二二五—二
 「ヴェニス商人」に表は 水口 吉藏〔國國〕六一一
 れたる沙翁の法律観 高橋誠一郎〔三學〕六六一
 沙翁の著書として誤傳せら 演尾 四郎〔法政〕六二二〇
 れたる匿名氏の經濟論 六八
 犯罪人としてのマクベス及 マクベス夫人

【シエツフレール】 (Albert Eberhard Friedrich Schäffle, 1831-1903)

前十年紀中萬國市場に於ける獨逸と英佛兩國との競争

【ジエボンス】 (William Stanley Jevons, 1835-1882)

ゼボンス教授と統計學 藤本幸太郎〔統時〕六一一

【シエラー】 (Max Scheler 1874-)

マックス シエラーの「知の社會學について」 谷川 徹二〔同論〕六一一

【シエリング】 Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854)

シエリングの學說 戸水 寛人〔法協〕四四二五

【鹽】

我邦鹽業の獨立如何 奥 健藏〔日經〕四〇一
 鹽鐵論を讀む 山路 愛山〔日經〕四〇一

鹽稅史論

「鹽鐵論」の鹽鐵論を評す 青木 得三〔法協〕四三二八
 鹽の産額及消費高 相原 重政〔統集〕六一一
 鹽鐵論に就て 内田 銀藏〔京法〕六一〇
 支那の鹽稅 町田 成美〔國家〕六五三〇

製鹽業と鹽務行政(經濟上の支那、一二)

四川省の鹽務行政史觀 善生 永助〔財經〕六六四
 大阪に於ける舊時の鹽問屋 田中 保平〔亞經〕六七二
 京都に於ける舊時の鹽屋仲間 本庄榮治郎〔經叢〕六七六

赤穂の鹽田

本庄榮治郎〔經叢〕六七六
 本庄榮治郎〔經叢〕六七六
 本庄榮治郎〔經叢〕六七六

本邦の鹽に關する統計 加藤 銀藏〔統集〕六八一
 鹽の國內需給問題 福井 乙丸〔財經〕六九七
 鹽の需要供給狀態 入江 魁〔財經〕六九七
 鹽の需要供給狀態に就て 神山 政良〔財經〕六九七
 民國の鹽政 木村増太郎〔亞經〕六二七
 鹽に關する調査 伊藤 政行〔財經〕六三一

鹽專賣

鹽專賣に就て 松本 重藏〔國家〕四四二
 鹽專賣廢止說に就て 濱口 雄幸〔日經〕四四二
 鹽專賣法が工業に及ぼす影響 黒澤 龍演〔東經〕四四二

【鹽】【ジオニズム】【市街鐵道】

支那に於ける鹽專賣

醬油稅の整理と鹽專賣法の撤廢 根岸 信〔國經〕四四三
 鹽專賣の不當及其改造 種子島源兵衛〔國經〕六九二
 古支那の鹽專賣 神戶 正雄〔經叢〕六七六
 鹽專賣事業の近狀 田中 保平〔亞經〕六七二
 舊仙臺藩の鹽專賣 西野 生〔財經〕六一九
 舊金澤藩の鹽專賣 土屋 喬雄〔經論〕六二三
 土屋 喬雄〔經論〕六二五

【ジオニズム】 猶太人を見よ

【市街鐵道】 参照II電氣鐵道。

英國に於ける市街鐵道市有市營の成績 永原 岩雄〔國經〕四三九
 獨逸市街鐵道貨率表 關 一〔國經〕四四〇
 グラスゴウ市の市街鐵道に就て 河津 暹〔志林〕四四四
 市街鐵道論(英文) マクラーレン〔三學〕四四四
 市街鐵道法概論 美濃部達吉〔國經〕六三三
 フイラデルフィヤ市街鐵道の團體交渉末 ミツタン〔社政〕六一一

【事業】 【資金】 【試験】

【事業】

参照：官業。企業。市營事業。

勤儉貯蓄と事業界の統一
本邦事業會社の失態を論ず
本邦會社事業の四大缺點
官營事業と私營事業
部下統御の巧拙と事業の盛衰

兩宮敬次郎〔日經〕四四〇 一巻九號
津村 秀松〔日經〕四四二 一巻九號
戸田 海市〔日經〕四四二 一巻九號
佐伯勝太郎〔東經〕四四二 一巻九號

衰

社會病理學上の實業患
事業界發展の趨向
實業家の授爵説に就て
本邦事業家に對する要望
日支實業提携の急務並に其方策

山形 東根〔東經〕四四二 一巻九號
鈴木券太郎〔刑評〕四四二 一巻九號
神戸 正雄〔日經〕四四二 一巻九號
黒澤 龍演〔東經〕四四二 一巻九號
添田 壽一〔日經〕四四二 一巻九號

個人經營の事業を會社の經營に移す一動機

吾國實業家覺醒の急要
アダム スミスと我國の實業界
實業同志會の成立に就いて
我事業界と金利政策を如何
事業家の責任と工場懇和會

山本唯三郎〔洋經〕六三 一巻九號
關口健一郎〔經叢〕六八 一巻九號
土方 久徹〔東經〕六〇 一巻九號
武藤 山治〔財經〕六一 一巻九號
神戸 正雄〔時經〕六二 一巻九號
森口 繁治〔法叢〕六二 一巻九號
山成 喬六〔エゴ〕六三 一巻九號
河津 暹〔社政〕六四 一巻九號

事業界の整理ほぼ成る

小野英二郎〔銀叢〕六四 一巻九號

【資】 【金】

金融を見よ

【試】 【驗】

判檢事辯護士試験と國語と外國語

山内 公允〔新聞〕四四二 一巻九號

判檢事辯護士試験制度改正論に對する卑見

中島 不言〔新聞〕六二 一巻九號

試験制度改正運動に就て

西見 芳宏〔新聞〕六二 一巻九號

司法省參事官三浦榮五郎君に一言す

吉門 忠志〔新聞〕六二 一巻九號

試験制度及改正運動に關し

三藤 久也〔新聞〕六二 一巻九號

判事申言君に誨ふ

鎌田 榮吉〔國國〕六三 一巻九號

試験制度と特權

三上 英雄〔新聞〕六三 一巻九號

試験制度改正運動に關して

南部 皆治〔辯協〕六六 一巻九號

高教を仰ぐ

田坂 貞雄〔辯協〕六二 一巻九號

文官試験制度に就て

脇本 辰藏〔法治〕六四 一巻九號

試験制度及試験に對する當局の態度

受驗者に對する希望

梅 謙次郎〔新聞〕四四二 一巻九號

横田 秀雄〔志林〕四四二 一巻九號

森 三五六〔新聞〕四四二 一巻九號

清瀬 一郎〔京法〕四四二 一巻九號

酒瀬 一郎〔京法〕四四二 一巻九號

梅 謙次郎〔新聞〕四四二 一巻九號

横田 秀雄〔志林〕四四二 一巻九號

大場 茂馬〔新報〕四四二 一巻九號

布施 辰治〔辯協〕四四二 一巻九號

天野 敬一〔辯協〕四四二 一巻九號

西川 一男〔新報〕四四二 一巻九號

横田 秀雄〔志林〕四四二 一巻九號

柴山 雄一〔志林〕四四二 一巻九號

榊原周次郎〔新聞〕四四二 一巻九號

横田 秀雄〔志林〕四四二 一巻九號

柴山 雄一〔志林〕四四二 一巻九號

榊原周次郎〔新聞〕四四二 一巻九號

横田 秀雄〔志林〕四四二 一巻九號

柴山 雄一〔志林〕四四二 一巻九號

榊原周次郎〔新聞〕四四二 一巻九號

横田 秀雄〔志林〕四四二 一巻九號

柴山 雄一〔志林〕四四二 一巻九號

榊原周次郎〔新聞〕四四二 一巻九號

【私】 【權】

權利及び義務を見よ

【私】 【權】 の 享有

民法(第二條)修正意見
民法第二條修正案反對私見
外國人の私權享有
外國人の私權享有に就て
人の始終
外國人の私權保護に就て

穂積 八東〔新報〕四三〇 一巻九號
山田 三良〔國家〕四三〇 一巻九號
中村 進午〔新報〕四三〇 一巻九號
山田 三良〔國際〕四三〇 一巻九號
岡松參太郎〔内外〕四三〇 一巻九號
鈴木 萬美〔法治〕六二五 一巻九號

【時】 【效】

時效の效力
月賦辨濟と消滅時效
時效拋棄の性質を論ず
時效停止の意義
時效の援用に關する民法上の疑義
時效完成の效力を論ず
法學士飯島喬平君の時效援用に關する新説を讀む

岡松參太郎〔新報〕四二七 一巻九號
横見 霞仙〔新聞〕四二八 一巻九號
近藤 治郎〔新聞〕四二八 一巻九號
伴 房次郎〔京法〕四二九 一巻九號
飯島 喬平〔法協〕四三〇 一巻九號
伊藤金次郎〔新聞〕四三〇 一巻九號
武川 佳海〔新聞〕四三〇 一巻九號

時效雜題

消滅時效の效力は期間満了の時に生ずるか當事者か採用したる時に生ずるか債權の取得時効を論ず地役權不可分の原則と消滅時效
遅延利息の時效期間
私訴を民事裁判所に提起して請求權を認められたる場合に於ける債權の時效
時效中斷の事由たる請求の意義
裁判に因りて確定したる請求權の時效
不動産の取得時効と登記との關係
民法第一四七條第一四九條の裁判上の請求の意義
會計法の時効と民法の時効
民法第一六九條に關する大審院判例を讀む
時効に因る不動産取得は登記

伴 房次郎〔京法〕四四二 一巻九號
清瀬 一郎〔京法〕四四二 一巻九號
森 三五六〔新聞〕四四二 一巻九號
横田 秀雄〔志林〕四四二 一巻九號
梅 謙次郎〔新聞〕四四二 一巻九號
大場 茂馬〔新報〕四四二 一巻九號
布施 辰治〔辯協〕四四二 一巻九號
天野 敬一〔辯協〕四四二 一巻九號
西川 一男〔新報〕四四二 一巻九號
横田 秀雄〔志林〕四四二 一巻九號
柴山 雄一〔志林〕四四二 一巻九號
榊原周次郎〔新聞〕四四二 一巻九號

【私】 【權】 の 享有

時効

【時効】【自殺】

記なくして第三者に對抗し得可きや	伊藤金太郎〔新聞〕四三	六三
時効援用の主體を論ず	法叢 學人〔新聞〕四三	六四五
時効に因て取得したる不動産所有權の對抗條件に登記を要せずとの東京控訴院判決の誤謬	大橋 誠一〔新聞〕四三	六六八
時効に因て取得したる不動産所有權の對抗條件に登記を要せざるの理由	X Y 生〔新聞〕四三	六六二
取得と其登記	瀧本駒太郎〔新聞〕四三	六八〇
時効並行論	杉 程次郎〔新報〕四四	二五
不動産物權の時効取得と登記	乾 政彦〔法協〕四五	三〇 六七
時効に因る不動産所有權の取得を第三者に對抗するには登記を要するや	中島 玉吉〔法記〕六三	二四 六
解除權は時効に依りて消滅するか	岩井 尊文〔新聞〕四五	一一九四
Neue Lehre von der Verjährung im Privatrecht.	Sternberg 〔法協〕六六	三五 八一〇
形成權の消滅時効を論ず	藥師寺傳兵衛〔國國〕六六	五 一一
消滅時効の效力	小林 俊三〔新聞〕六六	一一三三

債務者は消滅時効完成の事實を知らずと主張するを得ざるや	堀田 馨一〔新聞〕六六	一一二七
民法第一六六條に所謂權利を行使することを得る時の意義	長島 毅〔新報〕六七	二八
遅延利息と消滅時効	横田 秀雄〔新報〕六八	二九
時効に關する二三の疑問	長島 毅〔法政〕六八	一六
民法第五五〇條の消滅時効取得時効に因る不動産物權の取得と登記	未成辯護士〔新聞〕六八	一一五〇
民法第一七三條に所謂小賣人若くは卸賣商人の意義	長島 毅〔新報〕六九	三〇
時効援用の性質	安永澤太郎〔新聞〕六九	一六九
寄託物返還請求權と消滅時効	吉田 久〔新報〕六一	三三
形成權の消滅時効に關する新考案	横田 俊夫〔朝司〕六二	二
永小作權の時効取得	江口 繁〔新聞〕六二	二〇八
民法第一六〇條に所謂「相續人の確定」の意義	西川 一男〔新報〕六四	三五
公物と取得時効	長島 毅〔新報〕六四	三五
	大谷 傑舟〔新聞〕六五	一一五九

【自殺統計】

自殺論	和田 詮吉〔統集〕二八	一
慢性の自殺	今井 武夫〔スタ〕二〇	一一
自殺の話	穂積 陳重〔統集〕二〇	一
社會的勢力と自殺との關係	田中 太郎〔統集〕二二	一八一
普伊兩國の自殺	吳 文聰〔統雜〕二五	一七四
飲酒と自殺との關係	田中 太郎〔統集〕三一	一〇七
本邦人の自殺に就て	横山 雅男〔統雜〕三五	一〇九
自殺に就て	岡田朝太郎〔法協〕三六	二二
自殺の民法上の效果	高橋 律郎〔京法〕三九	一〇
自殺論	吳 文聰〔統集〕四〇	一
東京府下に於ける自殺者	加藤 銀藏〔統集〕四一	一
自殺の増加	澤村 晴夫〔刑評〕四二	一
自殺の客觀的動機としての時	守屋 生〔日經〕四二	五
自殺の法醫學的豫防法	片山 國嘉〔刑評〕四三	二
府下に於ける自殺	新藤 銀藏〔刑評〕四三	二
經濟學上より自殺を論じて	高城仙次郎〔三學〕六六	六
英吉利刑法に於ける自殺罪の比較研究	菱谷 精吾〔新報〕六二	二
自殺補助論	眞野 毅〔新聞〕六四	一
自殺に關する研究	井上虎二郎〔統集〕六五	一
自殺の増加と社會の罪	澤村 晴夫〔法政〕六七	一
生存權と自殺權	高橋誠一郎〔三學〕六八	一

自殺者に就いて	三田 定則〔社雜〕六三	一
自殺に關する考察	杉田 直樹〔社雜〕六四	一
ウイストコット「自殺論」	林 惠海〔社雜〕六五	一
自殺統計論	岡松 徑〔統集〕四一	一
歐洲各國軍人自殺の多少	吳 文聰〔統雜〕四五	一
本邦兵員の病死自殺及不慮の狀態	吳 文聰〔統雜〕四五	一
自殺統計に就て	吳 文聰〔統雜〕四九	一
東京府下の自殺統計	横山 雅男〔統雜〕五〇	一
自殺統計	岡松 徑〔統集〕五一	一
少年自殺の統計	無名氏〔保雜〕五一	一
本邦自殺統計の來歴	田中 太郎〔統集〕四四	一
普魯西亞に於ける自殺統計	高橋 二郎〔統集〕四四	一
大正二年中の全國自殺者に就て	三浦 義道〔保雜〕六二	一
本邦自殺の男女別	石川 惟安〔統集〕六五	一
自殺統計論	財部 靜治〔經叢〕六二	一
自殺動機統計に就きて	財部 靜治〔經叢〕六四	二
兒童の自殺に關する統計的考察	財部 靜治〔統時〕六四	一
	柴田銀次郎〔統集〕六四	一

【市場】

【自殺】

【市場】【指數】

普通市場と取引所
 農産物の豊凶と商業市場
 日本橋魚市場の組織及取引方法
 農家の副業と市場問題
 公開市場につきて
 小賣制度の改善と公開市場
 東京市魚市場經營に就て
 生産者より見たる市場制取の價值
 Nischay Nowgorod に於ける市
 市營小賣市場問題に關する報告
 大阪堂島市場に於ける競買買の方法
 割引市場論
 露國市場と外國商人の取引
 カープ市場の研究
 公設市場設立に就て
 日用品市場に就て
 公設市場の設置に就いて
 公設市場論
 食糧品市場論

戸田 海市〔京法〕 <small>三四</small> 二卷 六一八	大塚金之助〔國經〕 <small>四五</small> 一
内池 廉吉〔國經〕 <small>四四</small> 一 三四	安川 彦夫〔國經〕 <small>四五</small> 二〇 四五
黒澤 龍濱〔東經〕 <small>四四</small> 二六〇 四五	井浦仙太郎〔國經〕 <small>四五</small> 二二
山本美越乃〔日經〕 <small>四四</small> 一〇 三五	門脇 龍雄〔國經〕 <small>四五</small> 二二 一六
河津 暹〔法協〕 <small>四五</small> 三〇 三	河津 暹〔財經〕 <small>四五</small> 五
河津 暹〔三學〕 <small>四五</small> 六 一	戸田 海市〔經叢〕 <small>四五</small> 六
諸井 四郎〔國家〕 <small>四五</small> 二六 二	道家 齊〔財經〕 <small>四五</small> 五 二
石川 文吾〔國經〕 <small>四五</small> 一七 三	藤澤 穆〔政治〕 <small>四五</small> 一 二
本庄榮治郎〔京法〕 <small>四五</small> 九 七	内池 廉吉〔國經〕 <small>四五</small> 二六 三

國際市と國際的法律
 小賣市場問題
 小賣商習慣と公設市場
 公設市場に就て
 青物市場の改造に就いて
 現物市場と定期市場との關係
 公設及中央市場問題
 食料品市場問題
 競賣市場論
 市場體系と商人排斥
 中央卸賣市場に就いて
 割引市場論
 組織的觀念市場としての取引所
 生産者の市場制御に就て
 市場經濟と經營經濟
 中央卸賣市場の賣買組織と都市の對策
 ブラウン著「市場販賣論」

穂積 重遠〔法協〕 <small>四五</small> 八三七 七	須藤 文吉〔國經〕 <small>四五</small> 四〇 五
神戸 正雄〔經叢〕 <small>四五</small> 八八 一	内池 廉吉〔都問〕 <small>四五</small> 二 二
根本 清六〔三學〕 <small>四五</small> 八八 一〇	向井 鹿松〔三學〕 <small>四五</small> 一八 一〇
織田松太郎〔商經〕 <small>四五</small> 八八 一五	村本 福松〔商經〕 <small>四五</small> 一 三六
西山 朝吉〔社政〕 <small>四五</small> 二〇 一 三	向井 鹿松〔三學〕 <small>四五</small> 一八 九
棗田 藤吉〔商經〕 <small>四五</small> 二〇 一 三	荒木 秀一〔銀叢〕 <small>四五</small> 二 二 三四
神戸 正雄〔時經〕 <small>四五</small> 二一 一 三	
河田 嗣郎〔經叢〕 <small>四五</small> 二一 一 五	
内池 廉吉〔商研〕 <small>四五</small> 二一 一 一	
内池 廉吉〔商研〕 <small>四五</small> 二一 二 三	
内池 廉吉〔國經〕 <small>四五</small> 二一 三 一	
荒木 秀一〔銀叢〕 <small>四五</small> 二二 二 三四	

【指數】 參照 物價指數。

指數と貨幣の購買力
 統計經濟指數法に就て
 經濟指數法に就て
 經濟狀態の指數に就て
 生産指數に就て
 統計指數の性質種類を論ず
 統計に用ひらるる指數の意義

財部 靜治〔京法〕 <small>四五</small> 五卷 四號	大内 武次〔經商〕 <small>四五</small> 四 五
高野岩三郎〔統雜〕 <small>四五</small> 一 三三六	
高野岩三郎〔國家〕 <small>四五</small> 二七 四	
高田 保馬〔京法〕 <small>四五</small> 一〇 六	
郡 菊之助〔國經〕 <small>四五</small> 一〇 三 二 一三	
郡 菊之助〔商叢〕 <small>四五</small> 二 二 一	

【靜岡】

靜岡藩各地政表調査の概要
 靜岡縣の茶と清水港

河合 利安〔統集〕 <small>四五</small> 一 三五九
木本 是郎〔統雜〕 <small>四五</small> 一 三六〇

【シスモンディ】

シモンド・ヅ・シスモンディの生涯
 ノロバート・オウエンとシモンド・ド・シスモンディの比較
 機械生産の創生と其必然性に關するシスモンディ説

高橋誠一郎〔三學〕 <small>四五</small> 三 四	猪谷 善一〔社科〕 <small>四五</small> 一 一
	猪谷 善一〔商研〕 <small>四五</small> 一 一

【指數】【靜岡】【シスモンディ】【私生子】【シセロ】【自然】

【私生子】 實子を見よ
 Ciceroの「法律論」を讀む
 古羅馬社會闘争史上に於けるキケロ

春木 一郎〔京法〕 <small>四五</small> 五 一	石橋 五郎〔國經〕 <small>四五</small> 三九 一 四
高橋誠一郎〔三學〕 <small>四五</small> 一四 一 九	川邊 治六〔三學〕 <small>四五</small> 二 二 四
	戸田 海市〔國經〕 <small>四五</small> 八 二 一三
	石橋 五郎〔國經〕 <small>四五</small> 一六 六
	藤森 達三〔國國〕 <small>四五</small> 四 九
	木村 毅〔法政〕 <small>四五</small> 一九 二 一
	大内 武次〔經商〕 <small>四五</small> 二 二 五
	榎本 鏡治〔三學〕 <small>四五</small> 一八 二 二
	伊藤 秀一〔三學〕 <small>四五</small> 一八 二 一

【自然】

自然と經濟との關係
 社會と境遇及天然
 自然主義
 天然に對する人類の影響
 自然生命心理及社會の解説
 大自然論(講演)
 經濟と自然
 自然主義以前
 社會と自然との平衡關係と「生産力」
 人類社會に及ぼす自然の力に就て
 自然と人生

朝日 融溪〔社雜〕 <small>四五</small> 一 七
江原 萬里〔經論〕 <small>四五</small> 四 四

【自然】【自然法】【私訴】

社會と自然

木村喜一郎〔商經〕大五 卷一 號四

【自然法】

參照法學。

自然法論

サルモンド〔法協〕四二八 一三九 一二

自然法を論ず

仁保 龜松〔京法〕四四〇 二二 五七八
〔法政〕四四三 二二 二二三

自然法に關する學說の變遷を論ず

田中萃一郎〔三學〕四四三 三 四

シヨペンハウエルの自然法學說

寺田 四郎〔國國〕大三 二 一〇

經濟學に自然法ありや

飯島 幡司〔國經〕大四 一九 五

新自然法に就て

山之内 一郎〔法協〕大〇 三九 一〇

ウルピアヌスの自然法論

船田 享二〔法協〕大二 四〇 二二三

自然法と立憲制

副島 義一〔早法〕六一 一 一

イギリスに於ける自然法論

船田 享二〔法政〕大二 二〇 二二三

希臘に於ける自然法の觀念

船田 享二〔法協〕大三 四三 一四

羅馬法に於ける自然法の適用

船田 享二〔法協〕大三 四三 一四

用

グロチウスに於ける國際法と自然法との關係

横田喜三郎〔國際〕大四 二四 五

デル・ヴェキオの自然法

平野義太郎〔志林〕大四 二七八 一〇

自然法の私法に對する適用

船田 享二〔法協〕大三 四三 一四

について

平野義太郎〔法協〕大四 四三 九

【私訴】

刑事訴訟法第四條第二項の解釋に付て

下部喜太郎〔新報〕四三七 四 四二

私訴可廢論

石山 彌平〔新報〕四三〇 七 四七

私訴に於ける登記取消の請求

佐々木茂三郎〔志林〕四三三 二 四

委託金費消罪と私訴請求權

中島 常松〔新聞〕四三七 一 二二

公訴の豫審中に爲す附帶私訴

大場 茂馬〔新報〕四四二 一九 四

私訴の内容

板倉松太郎〔志林〕四四二 二 四

私訴に於て訴訟代理人となるべき者の資格

板倉松太郎〔志林〕四四二 二 四

私訴の原因

板倉松太郎〔刑評〕四四三 三 一〇

公訴の第二審繫屬と第一審に爲したる附帶私訴

富田 山壽〔新報〕四四五 二 一

私訴の審理と其規定

平澤 均治〔辯協〕大四 一九 一九

私訴に於ける自由の性質

板倉松太郎〔法政〕大六 一四 二

私訴に於ける認諾及和解

板倉松太郎〔法政〕大七 一五 八

公訴附帯の私訴と破産關係

加藤 正治〔評論〕大〇 一〇 八

私訴時効の意義

津田 進〔新報〕大二 三三 六

改正刑事訴訟法の認むる附帶私訴

山田 正三〔法叢〕大二 九八 二四

慰籍料の請求を何か故に附帶私訴に許さざる耶

齋藤 巖〔法新〕大四年 一 卷四 號六

【自治】

參照行政。地方行政。

自治は代議より大切なり

加藤 弘之〔國家〕四二四 五 三五

自治制度略論

合川 正道〔新報〕四二五 二 一九

自治論

一木喜徳郎〔國家〕四二六 七 七八

地方自治を論ず

松田 源治〔法政〕四三〇 一 六

地方團體の法律上の性質

副島 義一〔法政〕四三〇 一 六

監督權を論ず

鐵城 學人〔新報〕四三二 八 八八

監督權の範圍

一木喜徳郎〔國家〕四三二 二 一三五

地方自治體と警察

一木喜徳郎〔法協〕四三三 一七 一〇

自治の原義

川島 仟司〔新報〕四三三 九 一〇四

地方自治と社會的の制度

窪田靜太郎〔國家〕四三三 一五 一五〇

地方自治體營業論

島村他三郎〔新報〕四三三 二 一一

地方公共團體は營業を爲すの權能ありや

中川 望〔法政〕四三三 六 一四

國家及公共團體の構成及財力

岡 實〔新報〕四三三 一三 三

公共組合の性質を論ず

鴻嶺 樵夫〔法政〕四三三 七 七

現行自治行政の監督

山脇 玄〔新報〕四三三 一三 二二

自治制度改正論

岸本 辰雄〔明法〕四三三 一 五三

地方團體の費用に就て

織田 萬〔明法〕四三三 一 五三

【私訴】【自治】

國家及公共團體の構成及財力

岡 實〔新聞〕四三六 一 二二

國家組織の内部に於ける行政

小原 新三〔法政〕四三六 九 九

公共團體の性質

松本 順吉〔法政〕四三六 九 二

地方自治を論ず

織田 萬〔明法〕四三六 一 六七

兵役と自治

上杉 慎吉〔新報〕四三九 二六 二

公共團體（公法人）の觀念に就て

美濃部達吉〔新報〕四三九 二六 二

公法人は不法行為に對し常に無責任なるか

松澤常四郎〔新聞〕四三九 一 三〇

自治行政の觀念

美濃部達吉〔新報〕四四〇 一七 七

自治事務を論ず

山室 宗文〔法協〕四四〇 二五 十八

地方自治の發展

中川 望〔法政〕四四〇 二 一五

自治機關の腐敗と總選舉

瀧 興治〔東經〕四四一 五七 一四

自治體に對する國家の監督權

美濃部達吉〔新報〕四四三 二〇 一

保甲制度の性質を論ず

月 州〔新聞〕四四四 一 七二

地方改良の本旨

水野鍊太郎〔國國〕大二 一 二二

立憲政體と地方自治制度

植原悦二郎〔國國〕大三 二 三

地方自治の振興に就て

織田 萬〔京法〕大三 九 七

國家と自治體

村田岩次郎〔三學〕大三 八 六

農村振興と自治の刷新

横井 時敏〔財經〕大四 二 一四

市町村行政の監督

織田 萬〔法論〕大六 一 一

【自治】【質権】

地方自治の不振を論ず

自治行政の眞義

歐米自治行政の趨勢と我國の現状

自治の本義

自治政治の新精神

保甲と我自治制度の沿革

王安石の保甲法

産業組合と自治精神

自治體の破壊

伊太利に於けるボデスタ制の新設と輿論

英國地方自治制度の特質

小田垣光之輔 (都問) 大五二 三三四

小川市太郎 (都問) 大五二 三四六

【質権】

質権と占有

動産質入の効果

本邦の動産抵當を論ず

質に關する觀念の淵源及其發達

民法上根抵當の性質

根抵當を論ず

佐藤丑次郎 (法論) 大六 一五七

水野鍊太郎 (法政) 大七一 三三四

水野鍊太郎 (法政) 大七一 三三四

水野鍊太郎 (法政) 大七一 三三四

後藤 新平 (東經) 大〇八三 二〇七七

小島 憲 (國圖) 大一一〇 一

松井 等 (亞經) 大二七 一

上田貞次郎 (エコ) 大二一 三

播磨 龍城 (新聞) 大三 一三四四

小田垣光之輔 (都問) 大五二 三三四

小川市太郎 (都問) 大五二 三四六

野添 重一 (法協) 四二六 二

三宅 長策 (法協) 四二六 二

石山 彌平 (新報) 四二六 三

ウイグモア (法協) 四三〇 一

加藤 正治 (法政) 四三一 二

梅 謙次郎 (志林) 四三四 一

梅 謙次郎 (新聞) 四三四 一

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

民法第三四五條と質權の運

證券質入の効力を論ず

三たび盗品たる無記名有價

質權本質論

根抵當論

效力

高窪喜八郎 (評論) 大四 一

富井 政章 (新聞) 大四 一九九七

中島 玉吉 (法協) 大四 三三

中島 玉吉 (京法) 大四 一〇 十九

高窪喜八郎 (評論) 大四 一

高窪喜八郎 (評論) 大四 一

命

根抵當論

質權の順位を論ず

轉質に就て

根抵當の性質及び登記手續

民法第三四五條に關する法

三瀧 信三 (評論) 大四 四 一〇

石坂音四郎 (法協) 大五 三四 一〇

中島 玉吉 (京法) 大五 一一 一三

中島 玉吉 (京法) 大五 一一 一三

花岡 敏夫 (新聞) 大五 一〇九三

三瀧 信三 (志林) 大六一 二

上田八九三 (新聞) 大七一 一三六四

藤田 實雄 (辯協) 大八 二九

太田 義繁 (銀研) 大二四 九

鈴木 亨一 (銀研) 大四 九 三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

民法第一九三條と質權者の

權利取得に就て

商標權を目的とする質權の

設定を認め得る乎

記名國債の質入に就て

記名國債の質入と其適用法

三瀧 信三 (志林) 大六一 二

上田八九三 (新聞) 大七一 一三六四

藤田 實雄 (辯協) 大八 二九

太田 義繁 (銀研) 大二四 九

鈴木 亨一 (銀研) 大四 九 三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

春木 一郎 (法協) 大四 三三

【質権】【質屋】

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

債權質の效力に付て

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

【質権】

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

債權質の效力に付て

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

【質権】

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

債權質の效力に付て

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

【質権】

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

債權質の效力に付て

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

【質権】

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

質權の性質

轉質の性質

記名株式を目的とする質權

の實行に就て

契約保證金の性質及效力

債權質の效力に付て

横田 秀雄 (志林) 四二〇 一

富井 政章 (辯協) 四四二 二

飯島 喬平 (法協) 四四二 二

横田 秀雄 (志林) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

横田 秀雄 (新報) 四四二 二

【質権】

質權の性質

【質屋】【漆器】【失業】

質屋の景況
公立質制度の機運
質屋公營論
獨逸國の市營質屋
獨逸國市營質屋業定款
質屋は商人に非ざる乎
質屋營業者は商人に非ざる乎

東京市内質業に関する統計調査
都市下層金融制としての質屋考
質屋について

【漆器】
日本産業發達の裏面(漆器工業)
支那漆器の既往と現在

【失業】
失業問題
幼年労働と失業問題
失業問題

多久米三郎(統集) 二〇九
井上友一(國家) 四〇二
永野八郎(日經) 四〇四
吾孫子勝(志林) 四〇三
吾孫子勝(評論) 六二二
山本佐一郎(新聞) 六五二
中村福太郎(新聞) 六五二
竹内秀次郎(統集) 六七一
岡野文之助(都問) 六四一
幸田成友(商研) 六三三

器械と失業との關係を論ず
アツシトン氏の失職と疾病との關係を讀む
失業の賃銀に及ぼす影響
失職者の意義を論ず
八時間労働及労働者失業の問題に付て
失業問題に就て
戦後の失業問題
失業の救済と保險の制度
失業者問題
失業者と海外移住問題
綿糸救済と失業問題
失業の原因及其影響
失業問題及我國現時の失業状態
目下の恐慌及び失業
失業問題と失業保險
失業の實相
工業整理と失業救済
坑夫失業問題及其對策
出炭制限と坑夫の失業問題
失業の脅威と失業者の運動
不景氣襲來と失業問題

佐々木勝三郎(日經) 六三一
藤本幸太郎(國經) 六五二
田邊俊介(國經) 六六三
津島壽一(法政) 六七五
松村眞一郎(志林) 六八二
神戸正雄(經叢) 六八八
戸田海市(商經) 六八一
桑田熊藏(國經) 六八二
河津暹(國家) 六八三
小野武夫(國經) 六八九
宮島清次郎(東經) 六九二
小林郁(社政) 六九二
田野奎治(社政) 六九二
戸田海市(經叢) 六九二
龜田豊治郎(保評) 六九三
圓谷弘(法政) 六九七
阪田貞一(財經) 六九七
柏木暮川(社政) 七〇〇
遊佐敏彦(社政) 七〇〇
遊佐敏彦(社政) 七〇〇
宇都宮治郎(社政) 七〇〇

行詰れる失業問題と資本主義經濟

失業問題と國民の反省
失業防止に關する立法
失業の原因とその唯一救済策
戦後各國の失業状態及び措置に就て
失業救済施設に就いて
ビグウ「失業論」(譯)
大震災後の失業救済法
震災による失業労働者に關する調査
國家と失業並に失業者
大震災に伴ふ失業問題
震災後の失業救済
失業救済策としての歸農論
歸納的移住による失業救済
失業救済
失業の責任と我國の失業保險
失業問題
我國最初の失業調査
失業救済としての移民政策

北澤新次郎(財經) 二〇八
添田壽一(財經) 二〇八
コンモンズ(社政) 二〇三
パーカー(社政) 二〇一
永井亨(社政) 二〇一
國乾治(三學) 二〇一
山内辰吉(我等) 二〇一
三邊金藏(財經) 二〇一
堀江歸一(三學) 二〇一
遊佐敏彦(社政) 二〇一
河津暹(社政) 二〇一
高岡熊雄(エコ) 二〇一
河田嗣郎(エコ) 二〇一
神戸正雄(時經) 二〇一
森田良雄(社政) 二〇一
神戸正雄(時經) 二〇一
遊佐敏彦(社政) 二〇一
森田良雄(社政) 二〇一

失業問題の數的考察
失業問題解決の根本
失業と物價の相關々係
失業對策の二方面
現代日本の失業問題
失業對策と國庫剩餘金
國家的見地より失業者を救ふ
失業問題と國民性の短所缺點の矯正
失業と生産過剰
失業對策としての金融政策
自由労働者の失業問題
オウエンの失業問題對策
大阪市の知識階級失業者と失業労働者
失業問題の緩和と割引政策
失業の根本原因に就て
俸給者の失業救済

福田德三(統集) 六三三
出井盛之(エコ) 六三三
圓地與四松(社雜) 六三三
北澤新次郎(早商) 六三三
布川靜淵(社雜) 六三三
土方成美(社政) 六三三
末松借一郎(臺法) 六三三
播磨龍城(新聞) 六三三
安積十太夫(統集) 六三三
佐倉重夫(社政) 六三三
湊石三男(財經) 六三三
北野大吉(社政) 六三三
猪間曠一(都問) 六三三
松崎壽(商經) 六三三
上條勇(統集) 六三三
神戸正雄(時經) 六三三
高橋正熊(社政) 六三三
栗屋關一(國知) 六三三

【失業】

【自動車】

交通機關としての自動車の有望

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

自動車の將來と其取締法
一九〇九年獨逸帝國自動車調査

高木益太郎 (日經) 四四〇 一 卷 六號
高木益太郎 (日經) 四四二 四 二

相原 重政 (統集) 四四三 一 三九

野間莊三郎 (法協) 四四五 三〇 一 二
堀江專一郎 (辯協) 六七三 一

水口 吉藏 (國國) 六七六 一〇
川上 俊介 (財經) 六九七 六

田原 藤造 (保維) 六九一 一 二八
織田松太郎 (商經) 六九一 一 九

内務省地方局 (法政) 六一一九八一〇
常松 三郎 (財經) 六二四 二 一四

織田松太郎 (商經) 六二五 一 四二
本宮 一男 (商經) 六二五 一 四二

參照 威海衛。關東州。膠州。遼。西藏。東洋。滿洲。蒙古。

寺尾 亨 (國國) 六二一年 一〇
中久喜信周 (外時) 六二二七 二〇〇

重徳・來助 (外時) 六二二七 二〇六
有賀 長雄 (外時) 六二二八 二二〇

大庭 景秋 (外時) 六二二八 二二九

後藤朝太郎 (國家) 六二二七 六二二
村田 俊彦 (國際) 六二二七 六二二

内藤虎次郎 (外時) 六二二七 二七
吉野 作造 (外時) 六二二七 二七

矢野 仁一 (外時) 六二二七 二七
吉江 高行 (法記) 六二二七 二七

深田 十藏 (法論) 六二二七 二七
上田 萬年 (同社) 六二二七 二七

永井柳太郎 (日社) 六二二七 二七
石山 福治 (亞經) 六六一 一

谷 喬木 (亞經) 六六一 一
武藤 長平 (亞經) 六七二 一

石山 福治 (亞經) 六七二 一
山崎 直方 (日社) 六七六 一

支那の將來と日本
支那の現勢

支那の危機
北京滯在中の余の事業

露西亞及支那(一九一三年史)

支那古代に於ける法制經濟
關係文字の解剖

支那に關する最近感想
支那時局私見

支那時局私見
支那時局に對する第三説

桂萬榮「業陰比事」
滿洲及び支那視察報告

支那視察談
我觀支那
支那語の將來に對する日本人の態度

歷史上及國際法上より觀たる清國
南清南洋遊歷談
清國國民教育の方針

支那帝國の將來
支那の將來に就て
清國の最近時機に關する豫言

日漢兩國の天職
清國赤十字事業に就て
支那人の國民性

支那雜觀
支那興隆説
北京通信

支那問題と論ず(講演)
印度海峽植民地及南部支那視察談(講演)

支那の運命と我外交
支那問題綱要
思想道德の上より觀たる民國の前途

先づ支那の國民性を研究せよ
先づ支那を實見せよ

高橋 榮三 (國家) 四三四 一五 一六九
岡 實 (志林) 四三五 四 三五二

青柳 篤恒 (外時) 四四〇 一〇 一一五
植松 考昭 (洋經) 四四三 一 三五七

阿部守太郎 (國際) 四四三 八 三五二
岡田朝太郎 (國際) 四四四 九 七

茅原鹿太郎 (外時) 四四四 一四 一七〇
有賀 長雄 (國際) 四四五 一〇 一七五

奥田 竹松 (國際) 四四五 一〇 一七五
副島 義一 (國家) 四四五 二六 一七五

竹越與三郎 (外時) 四四五 一五 一七四
有賀 長雄 (國際) 四二二 一 一七四

寺尾 亨 (國家) 六二二七 四
宮川久次郎 (國家) 六二二七 二

大谷 誠夫 (國國) 六二二 一 九
川島清治郎 (國國) 六二二 一 九

服部宇之吉 (國國) 六二二 一 九
川島 浪速 (國國) 六二二 一 九

松平 親信 (國國) 六二二 一 九

田中 忠夫 (亞經) 六七二 一 一
石田 秀二 (亞經) 六七二 一 一

鶴見左吉雄 (保評) 六七二 一 一
内藤虎次郎 (外時) 六七二 三 三

稻葉 岩吉 (經叢) 六七七 五
瀧本 誠一 (經叢) 六七八 四

稻葉 岩吉 (經叢) 六七八 五
小島 祐馬 (經叢) 六八九 六

市村瓊次郎 (日社) 六八六 四 五
奈倉 次郎 (亞經) 六八三 一 二

石山 福治 (亞經) 六八三 三
諸橋 徹次 (日社) 六八六 四 五

芳澤 謙吉 (日社) 六八六 四 五
田崎 仁義 (國經) 六九八 二 七

稻葉 岩吉 (亞經) 六九八 三 七
石山 福治 (亞經) 六九八 四 三

稻葉 岩吉 (亞經) 六九八 四 三
蒙古と支那本部との限界

四庫全書讓渡案件
支那電報符號の研究
蒙古と支那本部との限界

各國支那研究機關
外國に於ける支那研究調査機關

白河の天津
支那視察談
支那を悲觀し併せて我國論を悲觀す

王制の作者に就て
稻葉氏に謝す
再び王制の作者に就て

鄧牧の「伯牙琴」
漢唐文化の異同に就て(講演)

支那官吏の見地より歐米人に與ふるの書
乾隆時代の木製活字版

遊支雜感(講演)
支那及其民族性に就て(講演)

禹貢論
四庫全書讓渡案件

支那電報符號の研究
蒙古と支那本部との限界

支那の將來と日本
支那の現勢

支那の危機
北京滯在中の余の事業

露西亞及支那(一九一三年史)

支那古代に於ける法制經濟
關係文字の解剖

支那に關する最近感想
支那時局私見

支那時局私見
支那時局に對する第三説

桂萬榮「業陰比事」
滿洲及び支那視察報告

支那視察談
我觀支那
支那語の將來に對する日本人の態度

支那人の嫌ふ文字と圖形と色彩
徳川時代支那貿易に使用せし支那語

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那の國語統一問題
支那民族の發展

支那に於ける文化運動の研究
支那時局解説
支那に於ける自然科学の發達
支那文明の根本的改造
露支兩國國民性の類似點
北支那の飢饉
支那饑饉の慘狀と其救済策
支那學問研究法上の一特色
杜威氏の支那論
中華民國標準語問題
支那視察の所感述べて日支關係に及ぶ
明代の皇族
葡萄牙人支那渡來顛末
漢代の生活と文化
自由競争場裡の東洋
支那問題根本的解決法
廣東人と新支那
支那海水路誌及び海圖上の地名に就て
支那時局に對する變つた解説

石山 福治	〔亞經〕	六九	四	二
稻葉 岩吉	〔亞經〕	六九	四	二
柏田 忠一	〔亞經〕	六九	四	四
宍倉 保	〔亞經〕	六九	四	四
放浪 生	〔財經〕	六九	七八	一〇
戸田 海市	〔經叢〕	六九	一一	五
善生 永助	〔財經〕	六九	七	二
田中萃一郎	〔亞經〕	六〇	五	一
稻葉 岩吉	〔亞經〕	六〇	五	一
石山 福治	〔亞經〕	六〇	五	三
仁保 龜松	〔法叢〕	六〇	六	二
清水 素次	〔國家〕	六〇	三五	一一
矢野 仁一	〔亞經〕	六一	六	二
松井 等	〔亞經〕	六一	六	三
澤田 謙	〔外時〕	六一	三五	四
田崎 仁義	〔亞經〕	六一	六	一
田中萃一郎	〔亞經〕	六一	六	四
西山 榮久	〔亞經〕	六一	六	四
清水 安三	〔我等〕	六一	四	四

支那の話
支那の文學を現代的に理解せしめんには
滿蒙は支那本來の領土に非ざる論
支那は國に非ざる論
支那の文學を現代的に理解せんには
上海論
ラッセル氏の新著支那問題を読む
周禮冬官司工に就て
支那の習慣の機微を理解せんには
支那の美術を現代的に理解せんには
支那の視察旅行を有效ならしむるには
支那の中心問題
支那時局觀(結局國際威力を加ふるの外無し)
佐藤氏の支那時局觀を讀む
支那學徒の謬想
周禮冬官司空の官名に就て

清水 安三	〔我等〕	六一	四	三
後藤朝太郎	〔法政〕	六一	九	六七
矢野 仁一	〔外時〕	六一	三五	四二
矢野 仁一	〔外時〕	六一	三五	四七
後藤朝太郎	〔法政〕	六一	一九	九二
柏田 忠一	〔亞經〕	六一	七	一四
長岡 克曉	〔亞經〕	六一	七	一
田崎 仁義	〔亞經〕	六一	七	一
後藤朝太郎	〔法政〕	六一	二〇	六
後藤朝太郎	〔法政〕	六一	二〇	四五
後藤朝太郎	〔法政〕	六一	二〇	七九
矢野 仁一	〔外時〕	六一	三七	四四
佐藤安之助	〔外時〕	六一	三	四九
稻葉 岩吉	〔外時〕	六一	三	四九
稻葉 岩吉	〔外時〕	六一	三	四九
那波 利貞	〔亞經〕	六一	三	八

史記の漢商本紀に就て
支那時局と日本の主動的地位
甦生支那創造の根本基礎
支那土匪論
支那印象の改造
對支難感
議員團支那視察旅行改善提議
後藤博士に與ふ「議員團支那視察旅行改善の提議」に就いて
對支研究と我中等教育
元治元年に於ける幕吏の上海視察記
滿蒙及北支雜記
現實の支那を見よ
世界の謎、支那の赤化
支那民族の起原に關する一説
社會的結合及統制の發展史的觀察上より現代支那を論ず
支那研究に就て(講演)

稻葉 岩吉	〔亞經〕	六三	八	二
西澤 英一	〔財經〕	六三	一一	三
草壁 龜雄	〔臺法〕	六三	一八	三
矢野 仁一	〔外時〕	六三	三九	四五
後藤朝太郎	〔外時〕	六三	三九	四五
小幡 西吉	〔外時〕	六三	三九	四五
後藤朝太郎	〔外時〕	六三	四〇	四八
柏田 忠一	〔外時〕	六四	四	四八
西山 榮久	〔亞經〕	六四	九	一
新村 出	〔商濟〕	六四	五	二
西山 榮久	〔亞經〕	六四	九	三
米内山庸夫	〔國知〕	六四	五	九
柏田 忠一	〔國知〕	六四	五	一〇
西山 榮久	〔亞經〕	六四	九	二
田崎 仁義	〔社研〕	六四	一	二
狩野 直喜	〔和バ〕	六四	一	特別號

支那の新局我觀
支那改造の曙光
孫中山の思ひ出
支那南洋より觀たる日本教育
黎明期の支那
支那の所謂愛國運動
支那現勢力の鳥瞰
支那改造の根本問題
解放期にある支那
道統一系としての支那
支那の事態を大觀して支那に關する一考察
禍福をへる支那
紛亂の支那か改善の支那か
清朝盛時の平和と文運
マルクスの支那論に就て
支那の國民的要望
クイデータ前後の支那
支那猥談
支那時局と勞農聯合
恵まれた支那の現状
支那とは何ぞや
支那の進むべき途

神田 正雄	〔外時〕	六四	四	四八
伊丹 松雄	〔外時〕	六四	四	四八
岡 實	〔外時〕	六四	四	四八
後藤朝太郎	〔外時〕	六四	四	四九
西原 龜三	〔外時〕	六四	四	四九
松井 石根	〔外時〕	六四	四	四九
水野 梅曉	〔外時〕	六四	四	四九
佐々木利一	〔外時〕	六四	四	四九
太田宇之助	〔外時〕	六四	四	四九
西本 白川	〔外時〕	六四	四	四九
金崎 賢	〔外時〕	六四	四	五〇
西田 虎三	〔外時〕	六四	四	五〇
大西 齋	〔外時〕	六四	四	五〇
松本 錦吉	〔外時〕	六四	四	五〇
矢野 仁一	〔亞經〕	六四	一〇	一
嘉治 隆一	〔我等〕	六四	八	二
末廣 重雄	〔外時〕	六四	四	四九
河瀬 蘇北	〔國知〕	六四	六	六
桑原 隆藏	〔外時〕	六四	四	五〇
竹田 鐵男	〔外時〕	六四	四	五〇
大西 齋	〔外時〕	六四	四	五〇
半澤 玉城	〔外時〕	六四	四	五〇
木村増太郎	〔外時〕	六四	四	五〇

支那時局考察

革命

支那革命運動の由來	川崎巳之太郎〔國際〕四四一〇	三
清國革命動亂と國際法	有賀 長雄〔國際〕四四一〇	三
支那の社會と革命亂	戸田 海市〔日經〕四四一〇	六
支那革命の容易に成らざる所以	福本 日南〔外時〕四四一四	一七二
支那革命及其借款を論ず	莊田 秋村〔東經〕四四一六	一六二九
清國事變の裏面觀	服部宇之吉〔國家〕四四二六	六
清國革命に對する米國の潛勢力	失名氏〔國際〕四四二〇	七
妥協革命	重德 來助〔外時〕四四二五	一七六
革命と袁世凱	菊地 良一〔國圖〕六二一	七
儒教より見たる支那革命觀	鹽谷 温〔國圖〕六二一	九
佛蘭西革命と支那革命との比較研究	稻田周之助〔新報〕六三二四	四
支那革命の回顧	牧 卷太郎〔外時〕六三一九	三〇
第三革命に就いて	吉野 作造〔國家〕六六三二	七
第三革命に於ける雲南軍の活動に就いて	吉野 作造〔國際〕六六二五	八
支那第一革命より第三革命まで	吉野 作造〔國家〕六六三〇	一一二
來るべき民國革命	村田 懋磨〔外時〕六〇三三	四一

松本 鎮吉〔外時〕六二五三 五七

移民―支那を見よ

川崎巳之太郎〔國際〕四四一〇

有賀 長雄〔國際〕四四一〇

戸田 海市〔日經〕四四一〇

福本 日南〔外時〕四四一四

莊田 秋村〔東經〕四四一六

服部宇之吉〔國家〕四四二六

失名氏〔國際〕四四二〇

重德 來助〔外時〕四四二五

菊地 良一〔國圖〕六二一

鹽谷 温〔國圖〕六二一

稻田周之助〔新報〕六三二四

牧 卷太郎〔外時〕六三一九

吉野 作造〔國家〕六六三二

吉野 作造〔國際〕六六二五

吉野 作造〔國家〕六六三〇

村田 懋磨〔外時〕六〇三三

支那革命の當時統治權が清帝國から中華民國へ移轉せる法理の考察

甲子革命の前途

ラデックの支那革命論

支那關稅改正と帝國

支那關稅改正問題と條約

紡績業者が支那關稅引上に反對する理由

支那關稅改正と日支經濟關係

支那關稅問題に就て

關稅會議と對支借款整理問題

支那の關稅會議と內政干渉問題

關稅自主と治外法權の撤廢

支那關稅特別會議と日本關稅會議と日支の長計

青柳 篤恒〔早政〕六二四一

波多野乾一〔外時〕六二四二

嘉治 隆一〔我等〕六二五八

貨幣―支那を見よ

參照―關稅。

根岸 佶〔外時〕六二二八

及川 恒忠〔外時〕六三一九

武藤 山治〔財經〕六六四

高柳松一郎〔財經〕六一一九

堀内 干城〔外時〕六三三〇

勝田 主計〔外時〕六二四四

木村増太郎〔外時〕六二四四

速水 一孔〔外時〕六二四四

橋川 凌〔外時〕六二四四

木村増太郎〔外時〕六二四四

神田 正雄〔外時〕六二四四

宇治田直義〔外時〕六二四四

坂西利八郎〔外時〕六二四四

支那關稅會議の局外觀

支那關稅特別會議と動亂

支那關稅會議詳史

支那關稅會議側面觀

關稅會議と奉直戰

支那關稅會議批評

支那關稅と我綿業

銀行―支那を見よ

金融―支那を見よ

支那兵備考

新内閣と裁兵計畫

清國新軍可用乎論

宋代に於ける兵制と社會政策

支那に於ける軍隊整理問題

支那の財政窮迫と裁兵問題

支那の軍備縮小問題

支那裁兵問題の將來

支那の土匪兵士に對する基礎智識

明代の軍屯

支那に於ける銀價低落の物

速水 一孔〔外時〕六二四四

知誠 眞治〔外時〕六二四四

外交時報社〔外時〕六二四四

米山 義夫〔外時〕六二四四

稻原 勝治〔外時〕六二四四

木村増太郎〔外時〕六二四四

神戶 正雄〔時經〕六二四五

銀行―支那を見よ

金融―支那を見よ

河合 利安〔統集〕四二七

清水 泰助〔外時〕六八三〇

青柳 篤恒〔外時〕四四一〇

松井 等〔亞經〕六九四

善生 永助〔財經〕六一九

吉田 虎雄〔亞經〕六二七

清水 泰次〔國際〕六二二

稻葉 君山〔外時〕六二二

後藤朝太郎〔外時〕六二二

清水 泰次〔亞經〕六二二

價に及ぼす結果

清國盛京省支那形船

支那に於ける保險思想に就て

新疆省に於ける通貨の現状

制字以前の支那民族の社會と經濟

支那古代の社會史經濟史と其研究補助學としての說文學

經濟上より見たる支那

歐亞の交通と支那

山東省の經濟事情

支那上古の經濟思想

山東省經濟事情

支那經濟概觀

美之華僑

支那經濟事情一斑

支那現時の金融事情

日米兩國の對支投資に就て

支那の生産力と交通機關の關係

支那經濟思想の出發點

支那最近經濟事情と外國貿易

多久米三郎〔統集〕四二七

伊東 祐毅〔統集〕四二七

栗津 清亮〔保雜〕四四一

日野 強〔日經〕四四一

田崎 仁義〔國經〕六二二四

田崎 仁義〔日經〕六二二四

三浦鐵太郎〔國圖〕六二二

瀧波 正勝〔日經〕六三二五

氣賀 勘重〔三學〕六三八

田島 錦治〔京法〕六四一〇

河合 利安〔統集〕六四一

鴛 堂 生〔財經〕六四一

一宮房次郎〔財經〕六四一

中山 龍次〔財經〕六四一

小島 祐馬〔經叢〕六四一

易の趨勢

秦代經濟史論
支那經濟漫錄
汪龍莊遺書を讀む
支那投資と新借款團問題
米支借款の成立と煙酒稅
經濟上より觀たる支那の禍

因

支那に於ける銀の問題
支那投資の方針
經濟上より支那近代思想變遷の原因を解釋す
資本主義と支那問題
最近の支那經濟觀
支那の經濟的特點
老子教の支那國民經濟に及ぼす影響
禹貢製作の時代
東三省に於ける防穀令に就て
大震災と支那防穀令の解釋
支那の彩票に就て
支那の建築材料に就て
支那動亂の真相と日支經濟

河合 利安	〔統集〕	大六	一	三
田中 忠夫	〔亞經〕	大七	二	三
稻葉 岩吉	〔亞經〕	大七	二	四
田中萃一郎	〔三學〕	大八	一	七
善生 永助	〔財經〕	大八	六	七
善生 永助	〔財經〕	大八	六	二
井上 翠	〔亞經〕	大九	四	三
善生 永助	〔財經〕	大九	七	五
内池 廉吉	〔外時〕	大九	三	三六四
長畑 桂藏	〔商濟〕	大二〇	一	一
作田 莊一	〔亞經〕	大二〇	五	四
小野英二郎	〔財經〕	大二〇	八	二
小野英二郎	〔東經〕	大二〇	八	二〇九五
益富 志郎	〔亞經〕	大二一	六	一
内藤虎次郎	〔亞經〕	大二一	六	一
松田 琢海	〔亞經〕	大二二	七	三
細谷 清	〔外時〕	大二三	八	四
田中 忠夫	〔銀研〕	大二三	七	三
西山 榮久	〔亞經〕	大二三	八	三

界の影響

稿本支那經濟史大系
支那の農業金融に就て
支那爲替の研究
支那に於ける物價變動
民國前途の社會的經濟的大難關

難關

支那國民經濟の特質
支那爲替相場變動の諸因
清韓兩國に於ける發明、意匠、商標及び著作權の保護に關する日米條約釋義
清國の工業政策
清國の鐵道と商工業
支那に於ける綿糸布競争
支那に於ける企業
青島に於ける製鐵業
最近に觀たる支那の商工業
漢治洋及び本溪湖の製鐵業
支那現時の紡績及び機械業
支那最近の鑛山業
支那電氣事業の現在及び將來

田代名兵衛	〔經商〕	大二三	三	一〇
福田 德三	〔商經〕	大二三	四	一〇
田中 忠夫	〔銀研〕	大二三	八	二
高山 武夫	〔銀叢〕	大二三	五	六七
パツク	〔統集〕	大二三	一	五三
田崎 仁義	〔外時〕	大二三	四	五〇〇
作田 莊一	〔亞經〕	大二三	一〇	一
高山 武雄	〔銀叢〕	大二三	六	四
菊池 駒次	〔國際〕	大二三	七	二
上野 貞正	〔國家〕	大二三	三	六
吉田 虎雄	〔日經〕	大二三	八	二
山本唯三郎	〔東經〕	大二三	六	二
米澤 清治	〔國家〕	大二三	二	一
鶴見左吉雄	〔財經〕	大二三	二	八
鷺堂 生	〔財經〕	大二三	三	三
鷺堂 生	〔財經〕	大二三	三	三
鷺堂 生	〔財經〕	大二三	三	三
鷺堂 生	〔財經〕	大二三	三	三
善生 鷺堂	〔財經〕	大二三	三	二

在支企業論

山東省濰縣中興炭礦
支那の鑛産に就て
支那の鑛業條例
支那産業革新論
有望なる石炭鑛
新式製造工業の物與
支那に於ける外國人の鑛業權について

支那セメント業

支那に於ける本邦人の工業經營に就きて

開採炭礦事情

佛國人の支那工業觀

我が製鐵事業と支那の鐵鑛政策

豊富なる支那の錫鑛

日支綿工業と支那の關稅

支那戰時商工業保護に關する意見

宣城縣炭鑛調査報告書

遼西地方産業の研究

支那に於ける紡績業の發展

山東に於ける卵粉製造業

木村増太郎〔亞經〕大六一
井上 翠〔亞經〕大六一
小川 琢治〔亞經〕大六一
只見 徹〔亞經〕大六一
德重 伍介〔亞經〕大六一
善生 永助〔財經〕大六一
善生 永助〔財經〕大六一
柏田 忠一〔國家〕大六三
〔資料〕大六三
稻山 始〔東經〕大六六
井上 翠〔亞經〕大七二
善生 永助〔財經〕大七五
善生 永助〔財經〕大七五
高柳松一郎〔國家〕大八三
井上 翠〔亞經〕大八三
井上 翠〔亞經〕大八三
石山 福治〔亞經〕大八三
善生 永助〔財經〕大八六
落合石之助〔亞經〕大九四

支那硝子工業
支那將來の企業と勞働問題
湖南省の硝子工業
支那紡績業の發展
日支合辦の山東三鑛山
山西省大同府雲崗石窟の解説
支那漆器の既往と現在
内地工業の支那移轉と其の障り
支那窯業史論
支那ガラス工業の既往と現在

支那工業の現狀に就て
營口の過爐銀
日支關係を中心として見たる支那企業並に勞働問題
上海紡績罷業と企業家への教訓
在支紡績罷業の一考察
内地人の經營にかゝる在支企業を撤退せよ
對支企業家のとるべき態度
上海邦人紡績罷業の顛末

前田幸太郎	〔亞經〕	大二〇	五	二
田中 忠夫	〔亞經〕	大二〇	五	三
善生 永助	〔財經〕	大二〇	八	二
澤村 幸夫	〔亞經〕	大二一	六	四
小村 俊夫	〔亞經〕	大二二	七	二
西山 榮久	〔亞經〕	大二二	七	一
澤村 幸夫	〔亞經〕	大二三	七	三
小村 俊夫	〔亞經〕	大二三	八	一
西山 榮久	〔亞經〕	大二三	八	二
及川 恒忠	〔三學〕	大二三	一八	二
〔資料〕	大二三	一〇	八	
前田幸太郎	〔亞經〕	大二三	九	三
深澤甲子男	〔金融〕	大二三	二	四
湊 不三男	〔財經〕	大二三	二	三
山本願彌太	〔エコ〕	大二三	三	一五
大倉喜八郎	〔エコ〕	大二三	三	一七
久留 弘三	〔社政〕	大二三	一	一

金元茶法史論	田中 忠夫〔亞經〕六八三
支那の組合制度	田中 保平〔亞經〕六八三
支那本部の鐵鑛及び製鐵業	〔資料〕六九六
支那に於ける甘蔗及び砂糖の起源に就いて	加藤 繁〔亞經〕六九四
支那に於ける棉業整理の情況	井上 翠〔亞經〕六九四
支那の銀に就いて	水田 淳亮〔亞經〕六九四
支那茶業と英國	柏田 忠一〔亞經〕六九四
支那茶業史論	田中 忠夫〔亞經〕六九四
支那の蠶業及機械業	中田 豊衛〔亞經〕六九四
支那及我邦に於ける穀倉の研究	小島 憲〔經商〕六一一
支那物産解説	吉田 虎雄〔財經〕六一一
支那の組合制度を論ず	木村増太郎〔亞經〕六一一
民國の鹽政	木村増太郎〔亞經〕六一一
支那棉と支那市場に於ける我棉業の將來	松尾 茂〔長業〕六一一
支那の産業に對する投資	戸田 海市〔經叢〕六一一
支那産羊毛に就いて	吉田新七郎〔亞經〕六一一
周代五家の組合	戸水 寛人〔國家〕六一一
支那の社會と革命亂	戸田 海市〔日經〕六一一

制字以前の支那民族の社會と經濟	田崎 仁義〔國經〕六二四
支那古代の社會史經濟史と其研究補助學としての說文學	田崎 仁義〔國經〕六二四
支那に關する社會學的觀察トオテミヅメの起源及び支那太古に於ける此制度の存否	有賀 長雄〔日社〕六三一
支那の鴉片禁止に關する上論及上奏文	田崎 仁義〔日社〕六四二
支那に於ける妾の制度	井上 翠〔亞經〕六六一
義莊の研究	東川 徳治〔法論〕六六一
支那浪人論	田中萃二郎〔三學〕六六一
支那の徒弟心得	矢野 仁一〔外時〕六六二
支那社會の變遷	大橋 末彦〔亞經〕六七二
支那家族制度に就きて	稻葉 岩吉〔亞經〕六七二
支那民族制度一般	東川 徳治〔志林〕六七二
支那民律と族制	稻葉 岩吉〔亞經〕六七二
現代支那に於ける社會上の一缺陷	東川 徳治〔志林〕六七二
宋代に於ける兵制と社會政策	小島 祐馬〔經叢〕六九二
中國社會統制史論	松井 等〔亞經〕六九四
	黃 鏞〔日社〕六九七

支那最近の思想問題	清水 安三〔我等〕六九二
支那に於けるボルシェビキ運動	清水 泰次〔國經〕六九一
支那の過激化問題	松井 等〔亞經〕六九五
明代の流民	清水 泰次〔亞經〕六九五
支那史上の相互扶助について	清水 泰次〔國經〕六九三
明代の救濟制度	清水 泰次〔經叢〕六九三
支那の古典に現はれたる社會政策	田島 錦治〔經叢〕六一一
支那婦人論	細井 芳平〔法研〕六一一
支那の家族制度	清水 泰次〔國家〕六一一
支那社會の本質及び作用	稻葉 岩吉〔亞經〕六一一
支那古代に於ける都市の起源を論ず	那波 利貞〔亞經〕六一一
乾隆帝と社會政策	東川 徳治〔志林〕六一一
支那の社會の固定性	矢野 仁一〔經叢〕六一一
支那の同郷團體	根岸 信〔商研〕六一一
民國前途の社會的經濟的大難關	田崎 仁義〔外時〕六一一
支那警察制度	三田 勝〔法曹〕六一一
支那の社會組織	〔資料〕六一一
支那の社會運動	〔資料〕六一一
支那無産階級運動の發展	劍村 平太〔マル〕六一一

支那は赤化するか	神田 正雄〔外時〕六五三
支那の左傾主義團體と赤化問題	佐藤 三郎〔外時〕六五三
支那の反共產運動	高山 謙介〔外時〕六五三
支那人民の排外的精神殊に基督教に對する嫌惡の情は竟に變移するの途なき乎	矢野 仁一〔外時〕六五五
經濟史より見たる支那佛教徒の地位	稻葉 岩吉〔亞經〕六六一
支那の國教問題と基督教徒支那に於ける米國宣教師の活動	桑原 隲藏〔外時〕六六二
道教に就いて	齋藤 良衛〔外時〕六六二
支那に於ける一神教	宍倉 保〔亞經〕六八三
支那の回教教徒	三田 了保〔亞經〕六八三
支那反基督教運動の一考察	清水 安三〔我等〕六一一
支那の宗教を現代的に理解せんには	後藤朝太郎〔法政〕六一一
支那の字義を論じて日本、支那、印度古代の手附に及ぶ	宮崎道三郎〔法協〕六一一

支那商人團體制度	根岸 信	〔國經〕四三	七	四五
清國商業繁榮策	稻田周之助	〔日經〕四四	一〇	四
清國の鐵道と商工業	吉田 虎雄	〔日經〕四四	八	二
支那に對する紙の販賣政策	河東田經清	〔東經〕四五	六五	一六三
中部支那の商業に就て	南 新吾	〔日經〕六二	二二	一〇
漢代の抑商主義	内田 銀藏	〔國圖〕六三	二	二
青島の商業		〔資料〕六四	一	一
北京の商況		〔資料〕六四	一	一
最近に觀たる支那の商工業	鶴見左吉雄	〔財經〕六四	二	八
在外商業會議所	江木 定男	〔志林〕六四	一七	八一
最近支那商業事情		〔資料〕六五	二	一
支那に於て設立する日本株式會社に就て	柏田 忠一	〔亞經〕六六	一	二
山西票號	黃 英 廣	〔國經〕六六	三	二三
支那の各種商務機關	善生 永助	〔財經〕六六	四	八
支那の外國紙需要	西 村 生	〔洋經〕六六	一	六八
輸出燐寸と支那市場	善生 永助	〔財經〕六七	五	一〇
中日兩國商品の販賣狀態調査	井上 翠	〔亞經〕六八	三	一
支那商人の心得	大橋 末彦	〔亞經〕六八	三	一二
支那戰時商工業保護に關する意見	井上 翠	〔亞經〕六八	三	三
上海に於ける Landing account に就て	大橋 一穂	〔亞經〕六九	四	一

天津市場に出廻る支那棉花に就て	田中 晴一	〔亞經〕六九	四	二三
北京の柏賣	板倉松太郎	〔志林〕六九	三	三
滿洲に於ける支那商店の帳簿	大森 研造	〔經叢〕六〇	三	五
在支日本商業會議所聯合會支那市場に於ける國際經濟戰	善生 永助	〔財經〕六〇	八	三
戰後の支那市場に於ける列國角逐	善生 永助	〔外時〕六〇	三	三九〇
支那取引所に關する最近の調査	松本 忠雄	〔外時〕六〇	三	三五九
支那に於ける日本人の取引所企業	谷 喬木	〔亞經〕六一	六	二
海商	丹羽 豐	〔洋經〕六一	一〇	三
中國押匯論	稻葉 岩吉	〔亞經〕六二	八	四
支那に於ける商號に就て	田中 忠夫	〔銀研〕六三	七	二
印子錢に就て	田中 忠夫	〔商事〕六三	四	三
人口統計	田中 忠夫	〔商事〕六四	五	三
支那帝王治年	人口統計	支那を見よ		
支那古代の譯會	莊司 精一	〔統集〕六一	八	四
孫逸仙事件	竹中 信次	〔國家〕六一	五	二
	高橋 作衛	〔國家〕六一	三〇	一一

支那革新論

支那革新論	有賀 長雄	〔外時〕三二	年	一〇
一九〇二年三月に至る清國政府内部の真相	巽 來治郎	〔外時〕三五	五	五四
清國政體の前途	有賀 長雄	〔外時〕三九	九	一〇五
清國立憲の真意義	青柳 篤恒	〔外時〕三九	九	一〇五
清國官制改革は名乎實乎	青柳 篤恒	〔外時〕三九	九	一〇八
袁總督の政體奉還	青柳 篤恒	〔外時〕三九	九	一〇九
清國立憲の前途を危む	中村 進午	〔外時〕三九	九	一〇九
康熙帝の教育勅語に就て	狩野 直喜	〔京法〕四一	三	四
清國立憲私議	青柳 篤恒	〔外時〕四一	二	五
清國の立憲制度	上野 貞正	〔國家〕四二	三	二
袁世凱を中心として觀たる清國近時の政變	吉野 作造	〔國家〕四二	三	二
清國の立憲準備	服部宇之吉	〔國家〕四二	三	六
清國大臣責任法論	青柳 篤恒	〔外時〕四二	二	三
北京其後の政局	青柳 篤恒	〔外時〕四二	二	三
清國內閣制度改造の機至る	有賀 長雄	〔外時〕四二	二	三
清國の憲政準備	服部宇之吉	〔國家〕四二	二	三
支那に於ける政治說	淺井 虎夫	〔京法〕四二	二	三
清國憲政施行問題に付て	岡田朝太郎	〔國際〕四三	八	六
支那の國體を論じて新憲法に及ぶ	副島 義一	〔志林〕四四	三	二
清國の内閣總理大臣	青柳 篤恒	〔外時〕四四	一	二

保甲制度の性質を論ず

保甲制度の性質を論ず	月 州	〔新聞〕四四	一	七一
清國憲政の前途	山本唯三郎	〔東經〕四四	六	一六二
支那は立憲君主國たるべきか、將た共和國體たるべきか、抑々或は分割に終らんか	伴 直之助	〔東經〕四四	六	一六二
支那人は共和政治に適せず	莊田 秋村	〔東經〕四四	六	一六二
民國政府承認の急務	山本唯三郎	〔東經〕四五	六	一六三
共和宣布後の支那	山本唯三郎	〔東經〕四五	六	一六三
支那國民會議に對する史的教訓	有賀 長雄	〔外時〕四五	一	一七三
支那政道の根本義	鶴澤 總明	〔國圖〕六一	一	九
支那政體論	植原悦二郎	〔國圖〕六一	一	九
支那は本來の民主國なり	上島 長久	〔國圖〕六一	一	九
清國憲政準備項中の統計	横山 雅男	〔統雜〕六一	一	三三八
袁世凱の將來	松平 康國	〔外時〕六一	一	一六九
民國憲法開議前の形勢	有賀 長雄	〔外時〕六一	一	一七〇
中華民國第一次國會開會	有賀 長雄	〔外時〕六一	一	一七〇
民國正式國會開會後二週間	有賀 長雄	〔外時〕六一	一	一七〇
民國政界現狀	有賀 長雄	〔外時〕六一	一	一七〇
支那亡命客問題	有賀 長雄	〔外時〕六一	一	一七〇
民國憲法制定上社會黨弊害の豫防	米田 實	〔外時〕六一	一	一七〇
國家精神より觀たる支那	有賀 長雄	〔外時〕六一	一	一七〇
	戴 天 仇	〔國圖〕六一	三	二

支那共和國大總統の陸軍軍
 統帥權
 支那帝制問題を論ず
 支那の帝政と米獨
 前清宗室の所領地禁賣
 支那帝政問題
 支那の主權擁護呼ばり
 帝政可なり
 支那政局の前途
 袁氏没後の支那
 袁氏の失敗より得べき教訓
 曹汝霖君の來朝に際して北
 京政界の近狀を想ふ
 支那に於ける政治學說の系
 統
 支那最近政局の變動
 最近支那政界の二大勢力
 支那の政治借款
 周の徳治國家より秦の法
 國家への變遷期の觀察
 支那の真相暴露
 支那上古の理想國觀
 古代支那人の政治思想
 支那の自治運動

有賀 長雄	(外時)	六三	一九	二二〇
内田 良平	(國國)	六四	三	二二
大庭 景秋	(外時)	六四	三	二六〇
稻葉 岩吉	(外時)	六四	三	二六四
吉野 作造	(外時)	六四	三	二六六
森 貞二郎	(東經)	六四	七	二七九
根津 一	(國國)	六五	四	一
山内 崑	(國國)	六五	四	七
松宮春一郎	(外時)	六五	四	一八〇
内藤虎次郎	(外時)	六五	四	二八一
吉野 作造	(外時)	六五	四	二九〇
稻田周之助	(新報)	六六	二七	八
牧野 義智	(國國)	六六	五	八
吉野 作造	(外時)	六六	五	二〇三
木村増太郎	(亞經)	六七	二	一一
田崎 仁義	(亞經)	六八	三	四
内藤虎次郎	(外時)	六八	三	三四
赤神 良徳	(日社)	六九	七	甲五
稻田周之助	(法政)	六九	七	五
清水 泰次	(外時)	七〇	三	四〇三

保甲と我自治制度の沿革
 支那國務總理論
 支那大總統論
 再び支那大總統に就て
 支那政局面の争闘と其將來
 清朝文官の任用について
 支那政局の光明
 支那の國會に就て
 吳佩孚氏訪問記
 張作霖將軍訪問記
 支那統一の歸趨
 支那をして國家又は超國家
 たらしむるの方策
 支那の帝政と支那の文化
 支那の共和政治の成立及び
 建設
 古代漢族の政治思想
 支那共和國の破壊
 段執政を中心に
 孫文氏勢力の一考察
 益々不安の支那政局
 成功せる段執政
 憂ふべき支那の時局
 中國國民黨と支那の赤化問

小島 憲	(國國)	六一	一〇	一
及川 恒忠	(法研)	六一	一	一
及川 恒忠	(法研)	六一	一	二
及川 恒忠	(法研)	六一	一	四
山口 二酉	(國知)	六一	三	八
清水 泰次	(國家)	六一	三	九
鷺尾正五郎	(外時)	六一	三	四三七
松本 鎗吉	(外時)	六一	三	四四〇
石川安次郎	(外時)	六一	三	四四四
石川安次郎	(外時)	六一	三	四四〇
青柳 篤恒	(外時)	六一	三	四四三
田崎 仁義	(亞經)	六一	三	八
矢野 仁一	(經叢)	六一	三	一
朝倉子規男	(臺法)	六一	三	一〇
米内山庸夫	(外時)	六一	三	四八二
松本 鎗吉	(外時)	六一	三	四八三
宇治田直義	(外時)	六一	三	四八五
小川 節	(外時)	六一	三	四八六
松本 鎗吉	(外時)	六一	三	四九一
小川 節	(外時)	六一	三	五〇四

題

支那軍閥と現代國家
 支那の共和政は帝政の遺物
 支那政局の解剖
 對 外 關 係
 春秋戰國の國際法を述べて
 支那の國際法に従はざる
 べからざる所以を論ず
 清國商船圖南號事件
 清國郵便電信事件
 清國の將來と列國との關係
 清國に於ける租借地の戰時
 關係
 列國と清國との間に於ける
 國際法上の地位を論ず
 歴史上及國際法上より觀察
 したる清國
 支那人民の排外的精神殊に
 基督教に對する嫌惡の情
 は竟に變移するの途なき
 乎
 清國に於ける列國租借地の
 國際法上の地位
 日露戰爭と清國の局外中立

佐藤 三郎	(外時)	六四	二	五〇四
長谷川萬次郎	(我等)	六五	八	五
矢野 仁一	(外時)	六五	四	五二二
速水 一孔	(外時)	六五	四	五二五
中村 進午	(國家)	六七	八	五九二
高橋 作衛	(法協)	六九	一四	一
フオーツェル	(外時)	六九	二	五九七
寺尾 亨	(志林)	六九	二	一三
有賀 長雄	(外時)	六九	三	三〇
寺尾 亨	(法協)	六九	三	八
高橋 榮三	(國家)	七〇	一五	一六八
矢野 仁一	(外時)	七〇	五	五五
有賀 長雄	(明法)	七〇	一	五三
蜷川 新	(新報)	七〇	一	一

日露開戦に於ける清國の國
 際法上の地位
 西洋列國に對する清國の新
 態度
 清國は國際法上の中に在り
 滿洲鐵道中立問題と清國
 外國か清國革命に乗せし實
 例
 清國領土の保全を研究して
 關東州租借地の法律上の
 性質に論及す
 清國領土保全の意義
 支那領土保全主義の危機
 日英兩帝國は如何なる場合
 を機として支那保全の實
 を擧げるべきか
 支那に於ける首級の懸賞と
 國際問題
 民國の現状と列強の態度
 上海租界か上海國か
 支那の中立
 支那と列國
 支那外交の失敗を悲む
 支那に於ける利權の競争

有賀 長雄	(外時)	七〇	七	七
ホーリユ	(志林)	七〇	七	二
千賀鶴太郎	(法政)	七〇	七	二
青柳 篤恒	(外時)	七〇	七	二
無名氏	(國際)	七〇	七	四
高橋 作衛	(國際)	七〇	七	七
高橋 作衛	(外時)	七〇	七	一七
青柳 篤恒	(外時)	七〇	七	一八
宮崎 駿兒	(東經)	七〇	七	一六
鹽谷恒太郎	(辯協)	七〇	七	一七
有賀 長雄	(外時)	七〇	七	二〇
今井 嘉幸	(國際)	七〇	七	二一
根來 源之	(國際)	七〇	七	二二
及川 恒忠	(外時)	七〇	七	二二
蜷川 新	(外時)	七〇	七	二二
根岸 倍	(國經)	七〇	七	二二

開平炭礦回收に關する英清外交
 在支英人勢力の消長と其將來
 日支英米の關係を論じて二重外交の弊に及ぶ
 英支關係の過去將來
 獨逸帝國保護領たる膠州灣制度の一二を説き我が關東州に及ぶ
 山東に於ける獨逸を見よ
 山東に於ける獨逸の活動
 支那に於ける獨逸の經營
 獨支間の膠州灣契約の効力
 獨逸の經濟的勢力
 佛蘭西
 佛清の折衝
 南清に於ける英佛の角逐
 佛國の對清要求
 佛清經濟關係に就て
 支那に於ける露佛同盟の勢力増進
 佛支金法爭議の解決

神田 正雄	〔外時〕	四五	三	五	二七
山本唯一郎	〔財經〕	四五	三	五	二七
副島 道正	〔外時〕	六一	三	五	二七
神山 正雄	〔外時〕	六一	三	五	二七
江木 翼	〔國家〕	五九	二〇	九	二七
黒田太久馬	〔國圖〕	六一	二	九	二七
東郷 安	〔國圖〕	六一	二	九	二七
山本美越乃	〔京法〕	六三	九	一	二七
津島 憲一	〔新聞〕	六四	一〇	六	二七
善生 永助	〔財經〕	六六	四	九	二七
宮本平九郎	〔外時〕	三三	三	二七	二七
宮本平九郎	〔外時〕	三三	三	二七	二七
有賀 長雄	〔外時〕	三三	三	二七	二七
有賀 長雄	〔外時〕	三三	三	二七	二七
鹽澤 昌貞	〔外時〕	四二	二	八	二七
有賀 長雄	〔外時〕	六三	一	九	二七
和田 喜八	〔外時〕	六四	二	八	二七

米
 合衆國と支那の門戶開放
 北米合衆國に於ける支那人排斥を論ず
 米國人の對清野心と其の告白
 米對清國野心の複雑
 清國革命に對する米國の潛勢力
 米清條約廢棄の内情
 日米支の提携可能なりや
 米國の對支政策
 米支關係の過現及將來
 注目すべき米國の對支經濟活動
 米國對支利權政策
 米國上院と山東問題
 米國の對日支政策を評す
 日支英米の關係を論じて二重外交の弊に及ぶ
 貿易の發達階段より見たる日米支の關係
 米國の日支條約默認
 米國の對支態度の變化

宮本平九郎	〔外時〕	四三	三	二八
内池 廉吉	〔國經〕	四〇	二	二四
川崎巳之太郎	〔國際〕	四四	九	九
川崎巳之太郎	〔國際〕	四四	九	九
失名氏	〔國際〕	四五	一〇	七
川崎巳之太郎	〔國際〕	四五	一〇	七
泉 哲	〔商經〕	六六	一	八
齋藤 良衛	〔外時〕	六六	二	六
牧野 義智	〔國圖〕	六八	七	四
善生 永助	〔財經〕	六八	六	九
稻原 勝治	〔外時〕	六八	三〇	三五
泉 哲	〔外時〕	六八	三〇	三五
副島 道正	〔外時〕	六〇	三三	三九
作田 莊一	〔亞經〕	六一	六	一
伊藤 正徳	〔財經〕	六一	一〇	二
神山 正雄	〔外時〕	六三	三九	二

露西亞

露支交渉小記
 第二の露清條約に對し取るへさ態度
 露清條約問題の落着
 露清新條約締結以後に於て日本の取る可き方針
 五十露里問題
 露清關係の前途
 支那に於ける露佛同盟の勢力増進
 露西亞及蒙支
 支那に於ける露國の利權と日本
 過激派東來より生ずる日露支の外交問題
 露支關係の第一期
 最近の露支關係
 蒙古に於ける露西亞と支那蒙古の獨立及獨立後の露支關係
 露支會議の暗礁
 露支協定調印と兩國の新聞係

森 鬼南	〔外時〕	三	一	卷	五
有賀 長雄	〔外時〕	三四	四	三	八
有賀 長雄	〔外時〕	三四	四	三	八
戸水 寛人	〔外時〕	三五	五	五	九
戸水 寛人	〔外時〕	三五	五	五	九
山本唯三郎	〔東經〕	四四	六	一	六〇
有賀 長雄	〔外時〕	六三	一	九	二
野村 徹	〔國際〕	六四	一	三	九
神田 正雄	〔外時〕	六六	二	三	〇
清水 泰次	〔國際〕	六八	一	三	〇
石田幹之助	〔外時〕	六八	二	九	〇
清水 泰次	〔國際〕	六八	二	九	〇
矢野 仁一	〔外時〕	六一	二	三	〇
矢野 仁一	〔外時〕	六一	二	三	〇
矢野 仁一	〔外時〕	六一	二	三	〇
細谷 清	〔外時〕	六三	三	九	六
米内山庸夫	〔外時〕	六三	四	〇	七

露支蒙三國の外交
 露支間に揉た東支鐵道の話
 日露支三國の關係
 露支の接近と新對支政策
 勞農露國の對支侵略に就て
 治外法權
 支那治外法權撤廢反駁論
 支那と法權回復
 南京條約以前の治外法權問題に就て
 支那の治外法權撤廢は可能性ありや
 關稅自主と治外法權の撤廢
 支那治外法權撤廢は斷じて不可
 法權會議の前途と支那の時局
 支那の治外法權撤廢問題
 支那の統計組織に就て
 支那の統計組織に就て
 支那の統計組織に就て

大村 欣一	〔外時〕	六四	四	四	八
長瀬 末男	〔國知〕	六五	六	三	五
植原悦二郎	〔國知〕	六五	六	三	五
植原悦二郎	〔外時〕	六五	六	三	五
三島 克己	〔外時〕	六五	六	三	五
西川 喜一	〔亞經〕	六〇	五	四	三
原 嘉道	〔法新〕	六三	一	二	三
矢野 仁一	〔經叢〕	六四	二	三	四
高木 信威	〔新報〕	六四	三	五	五
神田 正雄	〔外時〕	六四	四	五	〇
小野 實雄	〔新聞〕	六四	一	二	四
小川 節	〔外時〕	六五	四	三	〇
速水 一孔	〔外時〕	六五	四	三	〇
吳 文聰	〔統集〕	六七	一	三	二
阪谷 芳郎	〔統雜〕	四五	一	三	二
横山 雅男	〔統雜〕	四五	一	三	二